

第十週年紀念號

岳山

第十卷
第壹號

山岳

第十年第壹號

十週年紀念號

大正四年九月

目次

（大正四年九月十日發行）

表紙……茨木猪之吉氏筆

卷頭畫…淺間山ヨリ男體山マデ（東京近郊赤羽臺所望）…木暮理太郎氏筆

挿畫

頁

臺灣山川分布圖……（網目銅版）……野呂寧氏所藏……一六

臺灣中央山脈……（網目銅版）……杉本良氏所藏……三二

白頭山に登る……辻村伊助氏撮影……一二八

プリュームリスアルプ……上……一三六

ロッタールザッテルよりフィンシュテラールホルンを望む……同……一四四

ユンクフラウヨッホよりアレッチ氷河を望む……上……一六〇

ユンクフラウヨッホよりユンクフラウ（右）及びロッタールホルン（左）を望む……同……上……一七六

テルスカペルレより仰げるウルネルアルペン……同……上……一八四

ルガノ（サンロレンツォとモンテブレ）……同……上……一九二

ボンテトレーザ……同……上……三〇四

大阪市に於ける關西大會の景況……（網目銅版）……

地圖

新高山……野呂寧……二四〇

本欄

			頁
櫻島火山の話	理學士	佐藤傳藏	一
臺灣の山岳		野呂寧	一一
白頭山に登る	法學士	杉本良	三一
晩春の高原より（飛驒高原河畔）		大霜德次郎	四〇
雪の武石峠		別所梅之助	四九
武奈岳		水上森太郎	五七
近江國打見山と蓬萊山を極むるの記		中原繁之助	六六
わが鄉國の山々		古家實三	七四
日本山岳史料（一）		高頭式	八八
山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）		鹿子木員信	九六
スウィス日記	農學士	辻村伊助	一〇七

雜錄

○女學生と登山（竹下英一、朝鮮記文留）○甲斐駒山脈に就て（大槻禎郎）○赤城登山道案內（岡口奉）○奥仙丈岳に就いて（小

佐野迢々）○甲斐北國境山脈に就いて（小佐野迢々）○鹽見談山（木暮理太郎）○信州駒岳通信（河野齊藏）○比叡山より見たる白山と御岳（今村幸男）○新高山（野呂寧）○日本アルプス（短歌十九首）（大槻禎郎）○大正二年八月旅中の歌（田口虎之助）○四國山名の讀み方に就て（笠井愛水）○信州より甲州へ（松島八郎）○一萬尺を越ゆる靈嶽の高山（野呂寧）○六甲山の峽谷（柳直次郎）○山岳聯想（山本德次郎）○再び「東京より見ゆる山」の補遺（木暮理太郎）○新案の金カンヅキ（高野鷹藏）
各地の山岳會彙報（一）
踏雲會の發會及び碑式○一高旅行部創立○二高山岳會趣旨（大正三年六月發表）○二高山岳會大會記事○慶應義塾山岳會の設立○附中山岳會講演會○附中山岳會○神戸高等商業學校山岳會○第七高等學校内に山岳會を設立せんとする趣意書○大阪に於ける山岳講演會

雜報

火山の概○駒ヶ嶽の白骨○諸高山の初雪○日本一の高山發見されん○米國の大探檢家來る○大和アルプスの踏破○婦人の登山○登山圖○燒岳登山の流行○山嶽旅行顧問開始○霧島山噴火の慘報○百尺低し○霧島山の逆鉾又盜まる

會報

登山案内者改善の一方法○第八回大會の記○關西大會の記○各地の山岳會○幹事小島久太氏渡米○會員逝去○故加藤鐵之助君○會員登山熱○登山用具一式の製作販賣○會員諸君の爲め登山用具の割引○會員氏名、金子兩氏アイスアックスを贈んとす○會員名簿配布○新入會者

附錄

會員名簿

十週年紀念號發行の辭

五週年紀念號を發行しましたのは、つい間近な樣な氣が致しますが、既に再び五年の時日を經過しまして、今十週年紀念號を發行する事となりました。十年の時日は決して短い時間では御座いませんが、吾々が爲し了へた仕事は、希望の僅かに端の方に過ぎないので御座います。幸にして、會員諸君の援助と同情に由りまして、日本の山岳界の爲め、尙ほ更らに盡したいと思つて居ります。我が會の主旨も仕事も、世の認むる所となりましてか、本年の如きは登山趣味の勃興殊に甚しく、幸にして此機運に會しまして、益々努力奬勵致したいと思つて居ります。

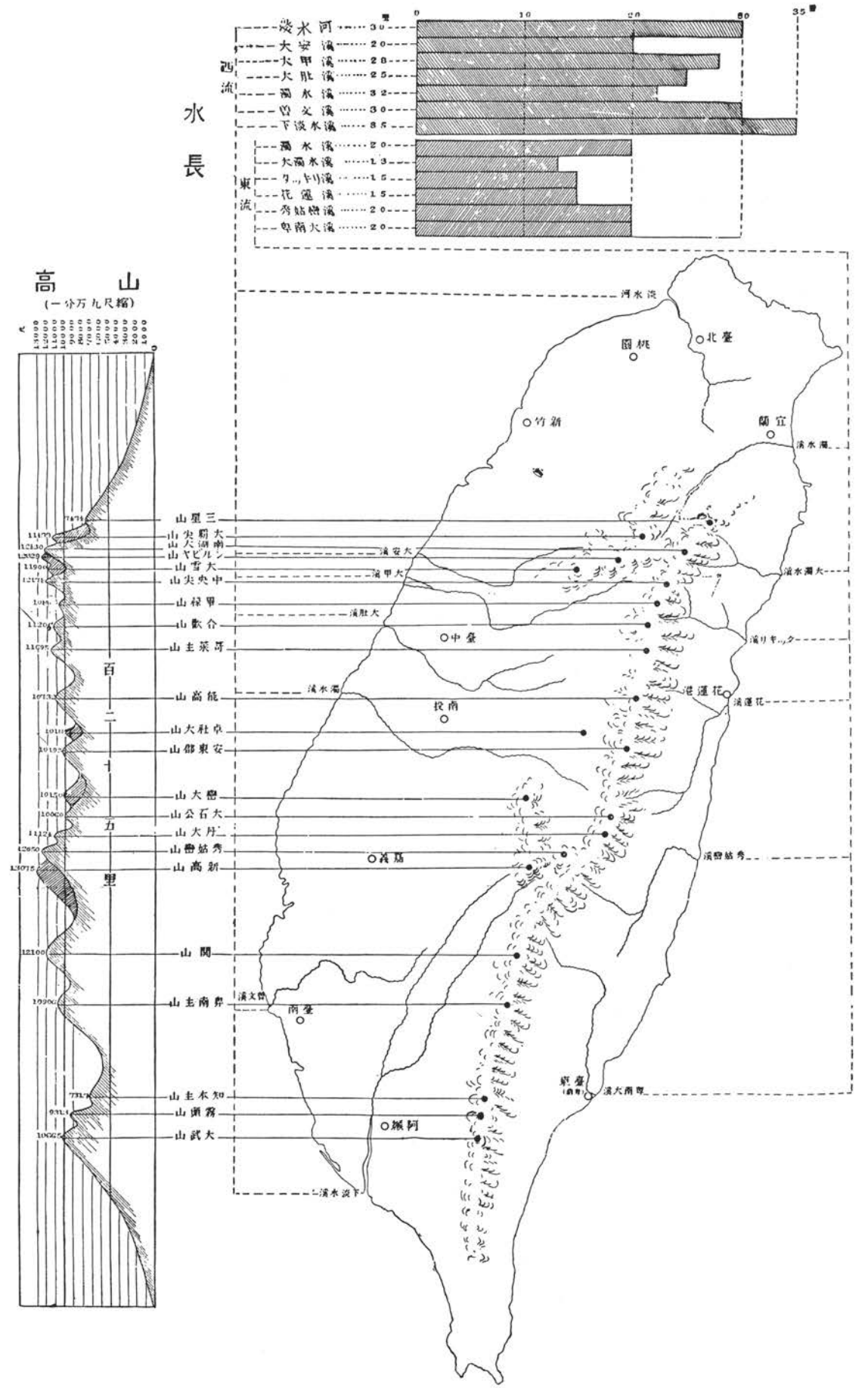
過去九年間の有形的の仕事は、僅かで御座いますが、山岳趣味の普及、登山趣味の勃興に就ては他少の自負なきにしもあらざる次第で御座います。今や十週年を紀念する爲めに頁を增し、繪を多く致しまして特別號として發行致しました。此れは當初の希望通りでは御座いませんが、內容外觀共に第五週年紀念號に比して多少の進步の蹟ある事と思つて居ります。

十週年紀念號を發行しまするに當り、將來共に會員及び同趣味者の本會の爲め日本の山岳界の爲め、同情と援助とを賜與されん事を希ふて止まざる次第で御座います。

大正四年八月

日本山岳會

臺灣山川分布圖



水長
西流
淡水河 30
大安溪 20
大甲溪 28
大肚溪 25
濁水溪 32
曾文溪 30
下淡水溪 35
東流
濁水溪 20
大濁水溪 13
タッキリ溪 15
花蓮溪 15
秀姑巒溪 20
卑南大溪 20
高山
(一分万九尺縮)
百二十五里
山星三
山尖翡大
山大湖南
山ヤビルン
山雪大
山尖央中
山禄甲
山歡合
山主茱哥
山高能
山大社卓
山郡東安
山大巒
山公石大
山大丹
山巒姑秀
山高新
山関
山主南卑
山主木知
山頭霧
山武大
河水淡
北臺
園桃
竹新
蘭宜
濁水濁
濁安大
濁甲大
濁水濁大
濁肚大
中臺
濁リキッタ
濁水濁
港蓮花
濁蓮花
投南
濁巒姑秀
義嘉
濁文曾
南臺
東臺
濁大南卑
濁水淡下

櫻島火山の話

佐藤傳藏

櫻島火山のことに付て御話を致しまする光榮を有します。

櫻島は御承知の如く、小さな火山島でありまして、高さから申しても、謂はゆる日本アルプスとか、富士とか云ふやうな、山の三分の一に達するか達せぬくらゐでございます、それから其火山の占めて居ります座席から申しましても、誠に狹いものでございまして、今まで他の方面から全く多くの注意を拂はれて居らなかつたのでございます、それが大正三年の一月十二日に破裂を致しまして、尙ほ今日まで多少の餘勢を續けて居りますので、其點で以て餘ほど近頃は有名になりまして、外國からもそれ〴〵斯の道の人達が態々櫻島火山の破裂を見、調べると云ふ爲に來朝せられた知名の學者が大分ございました、此櫻島火山の破裂いたしましたのは唯今申します通り大正三年一月十二日でございまして、今は餘ほど下火になつて居りますので、其後種々他の先生方、即ち大森とか山崎とか今村とか云ふ諸先生が、此櫻島火山の破裂のことに付ては、數回乃至十數回それ〴〵の所で御話をせられて居ります、それから不肖私も亦少くとも六回ぐらゐは櫻島火山の破裂のことに付て東京で御話を致しましたのでございます、さう云ふ古いので、セコンドハンド、否なサードハンド、フオスハンド……以上のことを堂々たる山岳會の大會にて御話を致しますのは多少山岳會を侮辱したやうな御考のある御方があるか知れませぬが、併し決してさうではございませぬ、固より種々御話を御聽きになりました方もございませう、又親ら進んで現地に御出になつて御覽になつた方もございませう、併し乍ら破裂當時の狀況を幻燈で御覽に入れると云ふことは此山岳會の大會が初めてございます、是は偏に山岳會

◎櫻島火山の話　佐藤

幹部の方の御盡力に依つたことでございます、又七月乃至八月の狀況を御話致すのは此山岳會の大會が初めでございます、尚ほ又此破裂のことは種々の點に於きまして、日本のみならず世界の近年の火山の大破裂と申して差支ございませぬので、それは唯今から御覽に入れまする幻燈に依つても其一斑を御承知になることゝ思ひますが、學術上又其他の普通の事柄に關しましても、今回の櫻島の破裂は誠に著しい種々の特性を有つて居るのでございます、それ故に、今日では櫻島は日本の櫻島でなく、世界の櫻島でございまして、世界の斯の道の人達には皆櫻島と云ふ名前が頭の中に入つて居るのでございます、時局が今日の如くでございませぬければ、尚ほ續々歐羅巴より亞米利加より其道の學者が櫻島火山の破裂を見に來られる豫報があつたのでございますが、時局の爲にそれが中止せられました、さう云ふ譯でございますから、其著しい破裂のことを幻燈で御覽に入れる事は、實に此山岳會の幹部諸君の御盡力に依ることゝ私は感謝する次第でございます、但し幻燈の元は一部分は私が寫眞を撮りました、一部分は同僚加藤鐵之助君が撮られた寫眞を拜借いたしました、其外に鹿兒島の寫眞屋、熊本の九州日々新聞の寫眞隊、さう云ふ方々の撮られた寫眞を貰ひまして、其中の幻燈として成績の宜しいのを選びましたのでございまして、中には幻燈として成績の甚だ惡いのがございますが、それは決して幻燈其のものが惡いのでなく、土臺の寫眞、即ち私共が撮りましたのが惡いのでございますから、其點は偏に御容赦を願ひます。

幻燈に就きまして御話を致しますに先ちまして、簡單に櫻島全體のことに付て御話いたして置きたいと思ひます、是は大部分御承知のことゝ思ひますし、又餘り時間もございませぬことでありますから、極簡單に御話の順序として申上げて置きたいと思ひます。

先刻も申しました通り櫻島火山は九州の南、鹿兒島灣内にあります所の一つの活火山でございまして、平生から南岳と申す火口からして少しづゝの烟を吐いて居つたのでございます、歷史を調べて見

ますと、度々此櫻島は破裂を致しましたので、殊に安永八年並文明八年の破裂が大破裂と申して宜いのでございます、今日でも行つて見ますと其時に流れ出ました所の熔岩が、櫻島の廣い面積を被覆して居ります、又其熔岩を吐き出しました所の噴火口の跡が、尚ほ今日も歴々として殘つて居ります、さう云ふ様に、櫻島は歴史の上で度々破裂を致しました、のみならず尚ほ其地質を調べて見ますと、歴史以前にも度々破裂なり噴火なりを致しましたので、從つて其構造と云ふものは決して單純な火山ではございませぬで、頗る複雑した地形を備へて居る所の火山でございます、鹿兒島から遠く櫻島を望んで見ますと、恰も鹿兒島灣内に富士山の様に突立つて居る山を見ますれば一つの單火山と認められるのでございますが、尚ほ詳しく調べて見ますと、決して單純な火山ではございませぬで、種々複雑な構造を有つて居る火山でございます、先づ此櫻島を構成して居る所の主もなる火山は三つございまして、南北に排列せられて居ります、此處に極粗雑な地圖がございますが、是が櫻島でございまして、南北の方に三つの火山が相接して列んで居るのでございます、其最も北にありますのを北岳と申して居ります、それから眞中にあるのを中岳、南にあるのを南岳と稱して居ります、此北岳・中岳・南岳の三つはそれ〴〵火口の跡を備へて居りますが、殊に此中岳の方は著しく其火口の狀態が壞されて居りまして、唯南岳は今日即ち大正三年一月十二日の破裂以前にも尚ほ烟を吐きつゝあつたのでございます、隨つて此火口が最も新しく保存されて居るのでございます、其外三つの火口から吐き出しました熔岩の被覆重疊して居る狀態から考へて見ましても、矢張り中岳が最も古く、其次に北岳が現はれ、最後に南岳が出來たものゝやうに思はれます、此櫻島の主もなる山體と云ふものは、此北岳・中岳・南岳の三つから成立つて居りますが、尚ほ其外に寄生火山或は側火山が櫻島には澤山ございます、第一に我々の眼を惹きますのは東側面方、即ち大隅半島の方に向つて鍋山と稱する山がございます、高さは餘り高くありませぬで、漸く三百二十八メートルでございますが、其高さの低い割合に大きな火

口を備へて居りまして、其火口が東の方に向つて開いて謂はゆる馬蹄形で、其形が鍋の恰好をして居りますから、それで之を鍋山と稱して居ります、全體が浮石の堆積から成立つて居る所のものでありまして、構造が如何にも脆弱なる一つの寄生火山でございます、尚ほそれと相接して東の方に俗に呼塚と稱する所があります、是は百メートルぐらゐの高さであつて構造は全く鍋山と同じ寄生火山でございます、其高さの割合に廣い噴火口を備へて居る點、全體が浮石のやうな極粗鬆なる噴出物から成立つて居る點、尚ほ又東の方に向つて噴火口が開いて居る點は全く鍋山に似て居ります、丁度鍋山の規模を數層小さくしたやうな狀態になつて居ります、それから尚ほ西の鹿兒島市の方に向ひまして俗に引の平と稱する寄生火山がございます、是は高さが鍋山よりずつと高くありまして、五百五十メートル以上になつて居ります、又山の構造も全く鍋山と違ひまして、丁度明治四十二年でありましたか、彼の北海道の樽前山の破裂の際に噴火口の中に下から熔岩が持ち上げられて其儘固まつた謂はゆる一つのドームでありまして、我々は之を圓頂丘と稱して居ります、恰好が圓くてマルで釣鐘を伏せたやうになつて居ります、それ故に全く噴火口はございませぬ、其外北の方に湯の平及び降旗（フリハタ）と云ふチョットした突起がございます、此邊の地形は複雜でありまして、普通の火山の山腹狀態と違つて餘ほど不規則な凹凸がありますのは矢張り歷史以前か或は歷史時代に噴火があつた跡の樣に認められます、併し最も著しい寄生火山として第一に眼に着きますのは此西の方面の引の平、東の方面の鍋山、それから呼塚、此三つが最も今日我々が注意を惹くのでございます、それから尚ほ丁度鹿兒島市に向ひました所に俗に袴腰と稱する所がございます、是は參謀本部の地圖抔では城山と書いてありまして、先年薩英戰爭の時分に此上に臺場を築いたと云ふ事であります、是は鹿兒島市の方から望みますと第一に眼に入るものでありまして、丁度袴の腰板のやうな恰好をして居る丘陵でございます、今日櫻島の山體は著しい谷を以て分たれて居ります、チョット見ると袴腰、即ち城山は寄生火山のやうに見えま

すが能く地質を調べて見ますと、是は寄生火山でございませぬで、九州本島の一つの殘物でございます、此鹿兒島灣が陷沒した時に此處だけ殘つて居つて、其處にアトから櫻島が出來て、さうして城山と櫻島とが一緒にくつ着いて今日見る樣な寄生火山の狀態を呈するに至つたものと思はれます、其外櫻島には澤山な屬島がございます、先づ東北の方には大凡七つほど島がございます、是は歷史に依りますと、安永年間の破裂の時に出來た所の島と稱せられて居ります、此中で燃島又は新島と云ふのが最も大きいのでございますが、此島に行つて見ますと、最も下の所には輕石質の熔岩がございますが、此上には海棲貝類を化石の狀態に於て含んで居る凝灰岩か又は礫岩が澤山ございまして、普通の火山島と看做すことが出來ませぬ、恐らく是は海底であつて其海底に種々の貝類が棲んで居りましたのが下から熔岩が持ち上げられた其結果、島となつたものと思はれます、歷史時代の噴火を調べて見ますと、安永年代の噴火の際に島が出來たと云ふことでございまして、如何にも海底火山が隆起したやうに書籍の上では思はれますが、實際行つて調べて見ますと、是は普通の海底火山が持ち上つたものではないと思はれます、其外に硫黃島とか中の島とか泥島とか猪の子島とか云ふ小さな島がございますが、是は皆輕石質の熔岩から成立つて居ります、其歷史時代に出來たと云ふことは確かなやうに思はれます、それから櫻島の西南の方に沖小島と稱する島がございまして、是は清い水が山腹の所から湧いて居ります、從つて此處に一軒の家があつて人が住んで居ります、是もチョット見ますと、矢張り歷史時代か或はそれ以前に海底火山が隆起して出來た所の島のやうに思はれますが、此熔岩の性質、それから其地質を調べて見ますと、此沖小島は櫻島の熔岩とは全く違ひまして、是は櫻島より遙か以前に九州の本島と同時に出來たものであつて、それが鹿兒島灣の陷沒から免かれて此處に殘つて居るのが丁度城山即ち袴腰と同じやうに思はれます、それ故に沖小島と櫻島とは、直接關係がある島でございませぬ、それから尙ほ神瀨（カンゼ）と云ふ島がございます、是は此平面圖で見ますと、如何にも馬蹄形の恰

好で、即ち東北に向つて口が開いて居る馬蹄形の火口であるかのやうに見えますが、此島は至つて低い島でございまして、滿潮の時などは殆ど皆潮水の下に隱れて仕舞つて、漸く干潮の時に其形が現はれるのでございます、從つて地盤が露出して居りませぬから、此島の出來方は確かにさうであると云ふことは申上げることが出來ませぬ、恐らく是は矢張り海底火山の爲に淺瀨が出來て、其上に火山砂及び火山礫が積つて居るやうに思はれます、其他鹿兒島と櫻島の間に、鳥島と云ふ小さな島がございます、此島は今度の破裂の話をするには、是非申上げなければならぬ島でございます、即ち今度の破裂の際に熔岩流の爲に全く島が埋沒されて、今日では痕跡すら認めることが出來ぬやうになりました、私が此處に參りましたのは本年の一月十六日でございまして、十二日に破裂を致しまして、十四日に東京を立つて、十六日に此處に參つたのでございますが、其時は熔岩がまだ海岸にまで達して居りませぬ、海岸を距る二三十間の所までゞございましたが、毎日毎日少しづゝ熔岩が海の中に押し出して參つて、遂に鳥島に達しました、初めは鳥島を除けて鳥島の北の方と南の方に向つて流れて居りましたが、遂に全く鳥島を埋沒して、今日では鳥島は何處にあつたか認めることが出來ないやうになりました、私は明治四十二年の十二月から翌年の一月に掛けまして、此方面を歩きました、其時鳥島に參つて鳥島の熔岩を採つて來て其一斑の地形も簡單に調べて見たことがございますが、其熔岩は櫻島本島の熔岩とマルで違ひます、是も舊記などに依りますと、如何にも歷史時代に出來たかのやうに書いてございますが、熔岩の性質を調べて見ますと、鳥島の熔岩はマルで櫻島の熔岩と違ひまして、寧ろ大隅半島に戶柱の鼻と云ふ岬がございますが、其處の熔岩に似て居ります、尙ほ鹿兒島の北の吉野村にある熔岩と似て居ります、それ故に鳥島は櫻島に關係した火山破裂でなく、其以前の大隅半島薩摩半島の生成と同時代に出來まして、沖小島或は城山と同樣に鹿兒島灣が陷沒した時に一つ取殘されたものではないかと考へて居ります。

其他櫻島には澤山に温泉がございます、先づ東の方から申しますと、黒神と申す所に温泉が湧いて居ります、丁度海岸でございまして、満潮の時には、潮が這入つて殆ど冷水同様になりまして、其儘此處に浴する譯に參りませぬ、其水を湧かして這入つて居ります、此黒神も今日は六尺以上も火山灰の下に埋沒されて、温泉宿も全く跡方も無い狀態になつて居ります、それから、南から少し東の方に寄りました所に有村と云ふ温泉場がございます、是は櫻島の温泉中では最も設備の完全した温泉場でございまして、今の天皇陛下が東宮殿下であらせられました時分に、此處に御駐輦になつたことがございます、今回の破裂の際には特に日野根侍從を御遣しになりまして、有村の狀態はどんな風になつて居るか特に視察せよと云ふ御沙汰でございましたさうでして、私も侍從と一緒に參りましたが、其時有村は熔岩の下に埋沒されて温泉宿の痕跡も認める事が出來ないやうな次第でございました、それから此處の湯の濱と云ふ所にも矢張り温泉が出て居ります、又古里にも温泉が出て居ります、是も黒神と同樣に海岸に湯壺がございますから、満潮の際水が這入つてマルで冷水同樣でございまして、干潮の時に當り普通の温泉の狀態を呈するのでございます、それから鹿兒島市に面した最も近い所に横山と申す所がございます、此處にも冷泉があつて其冷泉を湧かして澡浴に供して居つたのでございます、それから北の方の二俣と云ふ所にも矢張り冷鑛泉が出て居りました、是も矢張り湧かして温浴に供して居つたさうでございます、斯の如く櫻島には温泉が澤山ございます。

其外又湯の濱の村落を距る北方二町許の處に俗に毒谷と申して炭酸瓦斯を吐き出す所の孔がございます、即ち有馬でも鳥の地獄と云ひ、或は三瓶山でも鳥の地獄と云ひ、或は九重山では殺生石と云つて居りますが、それは火山活動の名殘りとして炭酸瓦斯を吐き出す一種の噴氣孔でございます、さう云ふのは湯の濱にもございます、是は大正二年七月十五日、此村の百姓の親子が草を刈りに行つてさうして知らず識らず谷に這入つて初め親父が落ちて窒息したさうであります、子供は大變に驚いて親父

を助けに行きましたら其子供も又同樣の狀態になつて、親子が枕を列べて毒谷に斃れたと云ふことがございますので、其當時鹿兒島市の新聞などは毒谷探驗談と云ふ記事で十數回盛んに書き立てたのでございます。

斯う云ふ温泉の排列或は寄生火山の排列などを考へて見ますと、此櫻島は略々南北の方向と東西の方向に弱點を有して居つたと云ふことが見えます、丁度安永の破裂の如きは南北の弱點に沿ふて起つたものゝやうでございまして、今日チヨツト見ますと此北岳・中岳・南岳が丁度南北の方向に排列されて居ります、其線を南の方に延長しました處に安永年間の噴火口が約五つほどございまして、深さが約二十メートル内外であつて、大きいのは直徑百五十メートルぐらゐ、小さいのは五十メートルぐらゐでございまして、其處から明かに熔岩を流し出した狀態が現はれて居ります、其熔岩が流れて海岸に出まして今日の辰崎附近の斷崖を形造つて居ります、又東岸の大燃崎、西南岸の燃崎は文明年間の破裂の際流れ出たる熔岩の爲に出來て居ります、丁度南北の線に安永年間の噴火口が排列されて居ります、其線を延長しますと丁度湯の濱と毒谷の炭酸孔、古里の温泉場に會します、此温泉が湧出しますのと炭酸孔がありますのとは、矢張り地殼の弱點であつてさう云ふ弱點に温泉が湧き、又炭酸瓦斯が噴出する次第でございます、其南北の線を北に延長しますと、海岸に高免と云ふ村がございまして、其上の方に安永年間に破裂した跡と稱するものがございます、行つて見ますと是は確かに噴火口の跡であつて熔岩の流れて居るもあり、或は熔岩を流さずして單に爆裂火口がポント殘つただけに過ぎないものもございます、尙ほ其線を北に延長しますと二俣の冷鑛泉の出る所に會します、即ち南北の方向に櫻島火山の弱點があつたのでございます、此南北の方向はヤガて鹿兒島灣の長い軸の方向、同樣に北の方は霧島火山、南の方は硫黄島口之永良部島、諏訪瀨島、鳥島等の火山の線に連つて居ります、それから尙ほ櫻島の畧々東西の方向に弱點があると申しますのは、先づ東の方から數へますと、

黒神温泉場でございます、此温泉が出るのが弱點の一つ、それから呼(ヨビ)塚及び鍋島の寄生火山を通じまして中岳を經、引の平の寄生火山、横山の冷鑛泉の出る所、それから鳥島の冷鑛泉の出て居る所で、硫化水素のやうな瓦斯が噴いて居る所に達します、是も略々東西方向の線に連つて居ります、斯う云ふやうに櫻島は略々南北の方向と略々東西の方向に弱點を有して居つたのでございます。

大正三年の今回の破裂は此の東西の方向の弱線に沿ふて起つたものでございまして、一月の十一日の午前三時頃から櫻島を中心として鹿兒島市附近に頻に地震がありました、それから十二日になりますと益々激くして、十一日の午前三時頃から十二日の午前十時頃までに總計約四百十七回と云ふ地震がありました、同時に又十二日の午前九時頃から有村の温泉が異狀を呈して來て三丈ほど噴き上りました、同時に其温泉附近の石垣の間から冷泉が湧き出したのでございます、さう云ふ前兆は昔の歴史時代の破裂の時にもございました、ですから櫻島の住民は今度も多分櫻島は破裂をしないかと云ふことで、十二日の本當の破裂をする前に島人は大部分或は鹿兒島市の方面或は大隅半島の垂水の方面の知己の所に向つて避難いたしました、其結果破裂しました時は幾らも人間は殘つて居りませぬ、それが破裂が大きかつた割合に死傷が割合に少かつたのは此の理由でございます、却つて鹿兒島市の方に死傷が多かつたのは、それは地震の爲に石垣が崖れ或は家が倒れ乃至塀が崩れまして、地の下又は石の下に埋められて死んだのでございます。

それで今度の破裂で最も異彩を放つて居りますのは、熔岩を流して居ることでございまして、此圖に赤く塗つてありますのが熔岩流であつて十二日に初めて破裂いたしたのでございますが、初は所謂爆裂作用でございまして單に火山灰、火山礫、火山彈等を水蒸氣其の他の瓦斯と共に拋出するに止まりましたのですが、十三日の午後八時頃に引の平の寄生火山の少し上の方から熔岩を流出したのでございます、それから段々流れて海に達して遂に十八日午後三時には鳥島附近に達し、二十一日には全く

◎櫻島火山の話　佐藤

鳥島を埋沒いたしまして全く其の影を見ることが出來ない樣になりました、此の一月二十六日に調べました所では眞赤に塗りました所までゞございましたが、此八月に行つて見まするど熔岩は更に進んで神瀨の方に近付いて海岸から約千六百米突の處迄達して居りました、同時に鍋山方面から熔岩を流しまして或は瀨戸海峽と云ふ大隅半島と櫻島との間の海峽に達しますし、尙ほ有村・脇の村落を埋沒して遠く海中に浸入しました。瀨戸海峽は其幅が約五丁ほどでありまして、日清戰爭の時に分捕り軍艦の鎭遠號が此處を通つたと云ふ經歷がございますが、初め熔岩が瀨戸海峽に入り込みまして、私共が參りました最後の日、即ち一月二十六日でございますが、此五丁計りある所の幅が漸く二十メートル即ち七間ぐらゐの狹まつて海底も淺くなつて居りました、即ち海圖に依りますと五十尋もありました所が漸く七尋ぐらゐになつたのでございます、此熔岩は益々進みまして一月三十日の午後二時には大隅半島の戸柱崎にくつ着きまして、さうして櫻島は最早島でなくして一つの半島となつたのでございます、其後此八月に行つて見まするど、もと此海岸に沿ふて廣い道がございまして、是が國道であつて馬車も通じて居りましたが、其國道も何も埋められて今は漸く人一人が通れるか通れぬくらゐの道が付いてマルで一變した狀態になつて居りますし、熔岩は海面上六十米突位の丘陵を爲して居ります。尙ほ南の方に流れましたる熔岩は有村の温泉場を埋沒しまして、遙か海上二キロメートル半の遠い所まで出て居りまして、此八月參りました時は尙ほまだ海中に段々熔岩が流れて向ふに進みつゝあつたのでございます、ですから今日行つて見れば尙ほ一層海の方に進んで居らうと思ひます、此の如く海中に浸入しましたる熔岩は海面上二三十米突乃至五六十米突の丘陵を爲して居りますが、尙ほ又海中には更に遠く迄進んで居るので御座ります。それは海圖に據りまして破裂以前の深さを調べましたのと、破裂以後海軍の水路部で調べた海の深さとを比較して見ますればドコまで熔岩が進んで居るかと云ふことが分ります、それは餘ほど南にまで進んで居りまして、垂水の沖の江の島近く迄達して居ります、

此熔岩の爲に埋沒いたしました部落は東及び南の海岸では瀨戸・脇及び有村で、西の方では赤水と横山と云ふ部落でございます、其外此附近は熔岩流ではありませぬが、輕石や火山灰が盛んに降りまして、初めは輕石が火の球のやうな狀態で降つて其火の球が家の上に落ち掛つて大概の家は燒けまして全く燒野原になつて居ります、又燒けませぬ處でも黒神の如きは家の軒まで輕石及び沙で埋つて居りまして、今日まで掘り出すことが出來ぬ狀態でございます、それと同樣な狀態が大隅半島の牛根村にも存在して居りまして、家の軒が漸く見えるか見えぬくらゐな狀態になつてマルで耕作地などは荒されて仕舞つたのでございます。

大體破裂の狀態はこんなものでございまして、餘り前口上に長く時を費しますのは恐縮でございますから、是から幻燈に就きまして一々簡單に御話を申上げたいと思ひます。(第七回本會大會講演速記)

臺灣の山岳

野呂寧

私は臺灣に參りまして、最初土地調査の事業に關係を致し、行政區域内の各地を跋涉致し、測量の事務を擔任致し、引續いて蕃務本署に行きまして、蕃地の測量を擔任致して今日に至りました。臺灣の山川と樂しむこと十六年の久しきに涉つて居ります。其の間高山絶壁を究め、少なくとも臺灣の地理のことは、其の大體を究め盡したと信じて居る者でございます。而して我が内地に於きましても、幼少の頃から山川を樂しみまして、又自分の職掌柄と致しまして、富士山其の他の高山峻嶺も跋涉致

しました、滿州及び山東の一角をも踏査し、楊子江を溯つて四川省に行つて、彼の天下に有名な蜀の三峽をも跋渉致しました。之に依つて東洋に於ける山岳の形勢を幾分か承知致しました積りで居りますが、此の觀察を持ちまして、我が臺灣の山岳を踏査視察致しまして、臺灣の山岳が如何に雄大であり、如何に壯觀であるかといふことも覺りまして、夫等の點に就きましても說き及ばしたいと思ひます。

御承知の通り、臺灣の土地は二分の一は蕃界でございまして、蕃界には多數の蕃人が之に占據して、吾人の濫りに入ることを許さない區域となつて居ります爲に、久しく蕃界の方は晦冥の間にあつて、所謂闇黑世界でありました、夫故に臺灣の地圖を說明しますることは誤りが多い。否誤りが多いのでなくして、寧ろ僞りを傳へて居るやうな狀態でございます。先輩の著述されました地誌に於きましても誤つて居ります。彼の吉田博士の編纂されました所の地名辭書に於きましても、臺灣の山脈を說かれる上に就いては、其の眞を失つて居ります。是れ併し已むを得ない情勢であります。而して私共は現總督佐久間閣下の御企劃の下に、理蕃事業の一端に身を委ねまして、段々地理を研究しました結果、今日に至りましては前も申しました通り、臺灣の地理も明に闡明せらるゝに至つたのでございます。故に私は個人としても、此の臺灣の地誌を先づ大成して之を天下に紹介しなければならないといふことを考へて居ります。それは曩に自分より一己の卑見として、地誌編纂の機關を設けられむことを其の筋にも建議し、今其の實行を希望しつゝ、又それに努めつゝある次第でございます。

偖て本題に這入りまして能く考へて見ますのに、臺灣は高砂といふ名稱がございまして、或人は其の高砂に、高山國といふ名稱を付けたのがございます。成程之は確かに島は小なりと雖も、山が高くて一つの高山國であります。而して一面之を日本內地に較べまするに、不思議に平坦なる平地の國であります。山は高く嶮岨にして、平地は廣く平かであります。我が內地の如く平地の割合に少なきに

比較して、我が臺灣は嘉義・臺南・臺中に渉る所の大平野を有して居ります。さうして山が全體の四分の三計りを占めて居りまして、殘り四分の一が平地、其の平地は殆んど坦々たる平地でございます。而して此の四分の三の面積を占めて居る所の山地の中央を、北から南の方に縱斷して、一つの大山脈が流れて居ります。即ち中央山脈が流れて居る。之が臺灣の脊髓を成して居るのであります。それで臺灣本島の全面積は、御承知の如く二千三百十八方里五一となつて居りまして、丁度南北百餘里に渉り、東西の幅は嘉義附近に於きまして、凡そ三十五里計りになつて居りまして此の中の二十二、三里計りの所が、丁度山になつて居りまして、跡の十二、三里の所が平地に屬して居ります。それで中央山脈は臺灣の東の方に偏して居りまして、恰も此の臺灣を縱に三等分致しまして、其の三等分しました東の海岸からして三分の一の邊位の所に、中央山脈が綿々として連亘致して居ります、さうして其の山脈が東から三分の一の所が、極めて最高頂の分水線で、漸次西に下つて三分の一の所で盡きて、跡の三分の一が平地になつて居る。斯ういふやうな情況でございます。それで中央山脈の頂は三分の一の所でありますが、其の中でも寧ろ東の方に片寄つて居りまして、東方が比較的嶮峻であつて、西方は稍緩徐の地勢を成して居ります。其の幅は東は七、八里の幅を有して居りまして、西の方は十里內外の幅を有して居ります。それで此の山地の大部分は、即ち生蕃の棲息する所の蕃地に屬しまして、最も峻嶮な高山を以て之を充して居ります。其の蕃地の面積が一千百七十九方里三二といふことになりまして、丁度總面積二千三百十八方里の半分より少し多いのであります。即ち行政區域と稍匹敵して居ります。而して此の蕃界は蕃人が跳梁跋扈してゐて、容易に人の入ることの出來ない區域でありまして、是迄に之を踏破する所の機會も無かつたのでございますが、今日に至つて漸く出入の機會を得ることに至つた。既に全島の土地の實測を了へました區域が二千百方里に達しまして、まだ測量が出來ませぬ區域は僅に二百方里强に止りました。即ち二百方里計りの土地と言ひまするど、此の

◎臺灣の山岳　野呂

中でシルビヤ山の一部と、南の新武路溪より內本鹿に至る地方でありまして、臺東廳里壠及び阿緱廳六龜里附近に出て來る、シブクン蕃の占據して居る一部分でございます、それで只今申上げました所の二千一百方里の區域は、之は殆んど私共が參りまして踏査をし、又視察を致しました區域でございます。之に依つて本島の地理は明にすることが出來たのでございますからして、之より其の地理的の說明を致さうと心得ます。即ち中央山脈の配列に就いて申上げたいと思ひます。

臺灣の中央山脈は此の北端に鼻頭角燈臺がございます。基隆の東に在る鼻頭角から起りまして、三貂嶺に行き三貂嶺は千八百六十五尺あります。それから續いて段々宜蘭の方の蕃地の方に接續致しまして、棲蘭山—檜のある有名なる所の棲蘭山が聳へて居る。棲蘭山は六千五百九十九尺。それからボンボン山を經まして、ピヤナン社の奥のピヤナン鞍部に達し、更に南に進んで南湖太山となる。南湖太山は一萬二千四百三十尺ございます。其の南湖太山から段々南に進みまして、中央尖山（一二、一七四尺）、畢祿山（一〇、八六三尺）、北合歡山（一一、二〇〇尺）、東合歡山（一一、二〇〇尺）、薙萊主山北峯（一一、八九五尺）、薙萊主山（一一、六二五尺）、薙萊主山南峯（一一、〇〇二尺）、能高山（一〇、七三二）、安東郡山（一〇、一九三尺）それから關門山（一〇、〇七三尺）、丹大山（一一、一二四尺）、秀姑巒山（一二、六五〇尺）、大水窟山（一二、六五〇尺）、關山（一二、一〇〇尺）、卑南主山（一〇、九〇六尺）、知本主山（七、三一四尺）、霧頭山（九、三一三尺）、大武山（一〇、六六五尺）から、遙に恒春の東南の鵝鑾鼻の尖に至つて止つて居ります。此の延長が大凡百二十五里ございまして、山は只今申しましたやうに、南湖太山が一萬二千四百三十尺ございまして、それに次で中央尖山其の他の山は、一萬一千尺乃至一萬二千尺といふ高さを有して居りまして、中に就いて秀姑巒山が一萬二千六百五十尺、一番南の端の大武山が一萬千六百六十五尺、之が臺灣の高い山一萬尺以上のもので、一番南にあるものでございます。中央山脈の中で一番高いのが南湖太山であつて、それが一萬二千四百

三十尺、大武山が南の端にあつて一萬六百六十五尺、斯ういふ譯になつて居る、中央山脈が此くの如く流れてをります。

それで此の中央山脈から東の方は、先刻申しました通り海岸の近くに接近して、近い所では五、六里或は七、八里の距離にありますので、さうして此の宜蘭の附近に僅の平地及び臺東の附近に、少し計りの平地がある計りで、殆んど他は山が海岸に接して、而かも斷崖絕壁で、此の部面には別に特に西海岸程の山脈の分派はございませぬ。之に反して西の方は地積も廣く、又土地も幾分緩徐でありまして、幾多の分派が出て居ります。之を北の方から順次に主なるものを申しますれば、棲蘭山からボンボン山を經まして、ピヤナン山に達し、ピヤナン山の北の方に岐れまして、大霸尖山の脈が出て居ります。大霸尖山は臺北及び桃園新竹附近から能く望むことが出來ます。岩の柱が屹立して居るのが見えます。此の大霸尖山は一萬一千四百九十九尺ございまして、此の大霸尖山が二つに岐れまして、一は北の方から西の方に進みまして、鹿場大山、假裡山、此の假裡山は苗栗の裏の方にあります。大霸尖山から南に岐れて行く所の脈、之は著しく高い山脈でありまして、其の上に第一本島に於て、第二の高さである所の一萬二千八百二十九尺のシルビヤ山が出て居ります。さうしてシルビヤ山から尙西の方に進みまして、一萬一千九百尺の大雪山が出て參り、更に延びて大尖山といふ山を成して、東勢角の方に流れて居ります。さうして此の脈が本島中で一番大きな支脈でございます。それからもう少し南に參りますと、東合歡山から岐れて尙、合歡山（一一、二〇〇尺）に出て、それから其の山が埔里社の方に延びまして、守城大山と又集集の裏の集集大山の脈に繋がつて居ります。尙合歡山から北の方に參りまして、北から少し西に奔つて、白姑大山（一一、〇五二尺）といふ山に繋がつて、北港溪と大甲溪の流域を分つて居ります。それから尙南に進みまして、此の秀姑巒山に參りまして、二つの山脈が岐れて居ります。一は北に奔りまして郡大山（一〇、八六五尺）となり、それから尙北に進ん

で巒大山（一〇、一三〇尺）に繋がつて、巒大山は檜を以て有名なる山であります。一つは西に延びまして、新高山といふ臺灣第一否日本第一の高山に繋がつて居る。新高山は一萬三千七十五尺、其の新高山から二つに分れ、一つは尚西に延びまして阿里山、其の下は嘉義に流れて居ります。一つは新高山から南に岐れまして、之が蕃薯寮に延びまして、彼の蕃薯寮の前の旗尾山に繋がつて居ります。先づ大體數ふべき所の主もなる山脈は之れ丈けでございます。

只今申しました如く、本島に於ける大きな山は、此の如く一萬尺以上の山が連列して居りまして、此の中央山脈一帶の山は、只今の北の南湖太山からして南の大武山に至ります間は、殆んど一萬尺以上の山を以て繋がつて居りまして、其の間は鞍部の低い處でも、大概八、九千尺の高さに聳えて居りまして、最も低い所は南の方の知本主山近くの方でございますが、それが五千七百尺ございますが、大體は八、九千尺の高さに聳えて居ります。此處で日本内地の高山の吾々が知る所のものを一寸申して見ますと、富士山が一萬二千三百八十七尺ございまして、一萬二千三百八十七尺と申しまするとこの新高山・シルピヤ山・秀姑巒山・大水窟山・南湖太山より低い。それが一番高くて、それに次いで赤石嶽が一萬二百十四尺、白根嶽が一萬二百十二尺、東俣山が一萬二百十二尺、鎗ヶ嶽が一萬二百四尺、御嶽が一萬百二十尺、乗鞍嶽が一萬尺、先づ以上の七つの山が一萬尺以上になるやうに聞いて居ります。然るに臺灣の山は、今日名の付けてあります山で、一萬尺以上のものは三十四の多きに上ります。さうしまして、富士山は臺灣の山を入れますと、丁度六番目に當ります。新高山が一番高い、シルピヤ山・秀姑巒山・大水窟山・南湖太山・其の次に富士山が這入るやうな有様でございます。此の如く本島の山は高いのでございます。即ち臺灣は高山國であると申します所以でございます。

それから山のことを申しましたから、序に川の分布のことも一寸申上げて置く必要があると思ひます。而して川の方の情況はどうであるかと申しまするとと、東の方の海岸は概して川が短くて急流でご



野呂豐氏所藏

台灣中央山脈

一、南湖太山　　二、東合歡山下の山相

三、大正三年一月元旦の新高山　　四、能高山頂より蓉峯主山方面を望む

ざいます。之は先に申しました地勢が嶮岨であるからでございます。それで北の方に行くと宜蘭の濁水溪がありまして、其の濁水溪の長さは大凡二十里ございます。其の次が大濁水溪、之が南澳蕃・太魯閣蕃の間を流れて居る川で十三里、それからタッキリ溪、之は太魯閣蕃を流れて居る川で十五里、花蓮溪、之は支流の木瓜溪で本流は、こちらの中央山脈の關門山から丹大山に達して居ります。それが十五里、それから秀姑巒溪之が二十里、卑南大溪、之が大凡二十里、中央山脈から流れました川が東海岸に於ては以上の六つでございます。それから西の方は最も臺北に接近して居ります淡水河、之が大嵙尖山附近から流れて居りまして隨分長い流れを成して居ります。それが長さが三十里ございます。次が新竹廳下苗栗の先にある大安溪、之が二十里、それから次に大甲溪、此の大甲溪がシルビヤ山からして南湖太山の方面から流れて來て居ります長い河で、之が二十八里。其の次が臺中と彰化の間を流れて居る大肚溪、之も合歡山方面から流れて來ます大きな河の一つで、上流は北港溪で二十五里、其の次が嘉義臺中兩廳の境を流れて居る所の濁水溪、之が臺灣での水が一番多い所の濁水溪、此の濁水溪は合歡山、雪萊主山方面の水を集めて居りますので、其の長さが三十二里、それから臺南廳下に這入りまして曾文溪といふのがございます。曾文溪は新高山から流れて來て居りまして、長さが三十里。次が下淡水溪、是れは淡水溪とも言つて居ります。淡水溪が分れて一は荖濃溪。一が楠梓仙溪となつて居る。楠梓仙溪は矢張り新高山の方から流れまして蕃薯寮に出てゐます。西の方のもう一つの荖濃溪は、秀姑巒山・關山等の中央山脈と、新高山の水を集めまして、此處に流れて居ります。此の如く致しまして此の河の流域の廣さを言ひますと、濁水溪・淡水溪は隨分廣いものであります。それに次いで大甲溪の流域もなか〳〵大きなものでございます。

それで此の臺灣に於て水害が非常に多いことは、吾々の始終苦痛とする所でございますが、御承知の通り山は一萬尺以上の高さに聳へて居つて、其の山は僅東海岸に於ては七八里位の所にありますし、

◎臺灣の山岳　野呂

西に於ても十一、二里位の所に綿亘して居りますから、之を平均勾配から數へて申しますと、七、八分の一乃至十二分の一位の急勾配を成して居りますのでございます。此の如き急勾配を流れるのでございますからして、恰も瀧のやうな情況を爲すのでございます。而して臺灣に於ける所の雨量は、平地に於ては一年に多い所で二千ミリ内外でございます。山に這入りますと其の分量は殊に多うございまして、雨量觀測の結果に依りますと、多い所になりますと、大正元年の雨量の數はボンボン山で調べましたのが五千百七十九ミリ八、大南澳で五千八百六十九ミリ五、櫻ヶ峯は大正二年の調で三千三百六十八ミリ五、それから宜蘭の天送埤といふ所で大正元年に調べましたのが三千百七十ミリ五、斯くの如き有様で多い所は五千ミリ、少ない所も三千ミリメートルを超へて居る。尚中央山脈附近に達しますれば、雨量は加はるとも減ずることはないのであります。屢々二千ミリ三千ミリといふやうな非常に大きな雨が一時に降ります。時としては二、三日の連續の降雨で二千ミリに達したことがあります。此の水が急傾斜の河を一度に打ち投げるやうに掻き廻はして下るのでありますから、洪水を逞しうすることは、自然の勢で已むを得ないではないかと思ひます。之に就いて日本内地の河は隨分大きなのもございます。流れの早いのも無論ございますが、併し山は一萬尺以上の山は先程申しました通り富士山、甲駿地方飛驒の近傍あの邊一帶に止りまして其の他は概して七、八千尺或はそれ以下でありまするし、土地の幅も臺灣よりは遙に廣く六七十里にも達して居ります。從つて傾斜は緩でありますし、雨量も少ないのでありますから、自然洪水の程度も、甚しくないのであると信じます。そこで内地に流れて居る河は、御承知の通り信濃川が九十四里、利根川が八十二里、木曾川が七十六里、北上川が六十二里、吉野川が六十里、最上川が五十五里、斯ういふやうな計數で、幾分か此の臺灣に較べまするとと、河が大きく流れが緩やかでございます。支那の楊子江のやうなものとは比較になりませぬが、餘程水害抔も少ない譯であると考へます。

併し此の如く山は高く水は多くあつて、水害の慘害は屢々起るといふ點はございまするが、又一方には此の水力を巧みに利用すれば、之がために起る所の水力電氣の力は、之は莫大なものでございます。工業者が巧みに利用すれば成功を得ることは非常なもので、其の力の無盡藏なることは驚くべきものであると思ひます。

それから此の山の高いのは所謂海拔の利用といふことになりまして、其の利用に依つて利益を受けることにすれば大きなものであります。我が臺灣は熱帶地であります。詰り嘉義附近が回歸線であります。熱帶地に次で温帶地に入つて居りますが、概して之は熱帶地であります。夫故に平地は酷熱に苦しんで、夏季抔は御互に其の暑さの爲めに懊惱するのでありますが、山地の低温度の所はよく調和して居ります。即ちボンボン山・櫻ヶ峯・阿里山等の高山に於て觀測を致しました結果に依りまして、之を平地に於ける所の温度に比較して、海拔が如何に温度を調和するかといふことを調べて見ましたのに、凡そ三百五十尺にて温度が華氏の一度を降る割合になつて居ります。三百五十尺で一度温度が降る割合になつて居ります。即ち一萬尺の高さに致しまするど、丁度二十八度六丈け温度が低くなる割合になります。それに依つて平地が九十五度、臺灣に於て九十五度は最も暑い時分でございます。其の九十五度の酷熱の時分に、一萬尺の中央山脈は僅に六十七度といふ温度になります。此の頃の如き寒氣即ち五十七八度の此の頃に於きましては、中央山脈の上は僅に三十度即ち氷點以下二度にも降つて居る。即ち寒氣凛冽といふ情況でございます。即ち臺灣に於ては、一方に於て暑さに苦しみますが、一方山に這入りますと寒むさに苦しむといふ情況でございます。それで熱帶地たる臺灣は此の高山あるが爲めに、此の温度の變化を生じて、狹い地方でありまするが此の狹い地方の中に寒帶も造り、温帶も造り熱帶も造るといふ情況になつて居ります。山頂は北海道の山地の寒氣と同樣である。山の中腹は日本内地の好風土の如く、而して平地は此の熱帶であります、それで植物が矢張りそ

れに誘はれまして、寒帶植物もあり、温帶植物もあり、熱帶植物迄も此處に現はれて居りまして、此の平地に於きましては椰子樹の類のやうな熱帶植物が非常な勢を以て繁茂して居りますが、段々山を登るに從ひまして、例へば六、七千尺に達しまするとヒの類即ち針葉樹が澤山に繁つて居りますし、それから進んで八千尺以上になりますと梅・樅の類があります。九千尺以上には樅松の類が生へて居る。斯ういふ有樣になつて居ります。此の植物變化の情況は臺灣全島殆んど一樣でありまして、樹の種類を見れば大凡山の高さが想像される位で、檜を見れば此の地方は七千尺内外であるといふことが直ぐ察せられる。さうして梅の樹が八千尺以上、樅松が九千尺以上と直ぐ感せられるやうに、植物の分布の情況が明かに現はれて居ります。

而して此の山上の景色に至りましては、更に雄大壯觀であります。之れより致しまして、少しく山中の風光を申上げまして、臺灣の山嶽を說きたいと思ひます。此處で私が蕃地の探險を致しました所の主なるものを一、二申上げまして、其の接觸しました所の情況を簡單に申述べようと思ひます。

私は蕃地に這入ります最初には、此の新高山が如何なる地位にあるかといふことを極めたいといふ考を第一に起しました。新高山は當時中央山脈に聳えて居る高山であるといふことを唱へて居りましたゝシルピヤ山と新高山は最も高い山である。最も高い山であるから中央山脈であるといふ聯想が起りまして、之が臺灣の中央山脈の脊髓であると一般に唱導されて居りました。併しそれが果して中央山脈か否かといふことは、私より前に新高山に登られた方もありますけれども、其の點に付ては一つも論及された方がありませぬ。先づ地理的に新高山の位置を極めたいといふ考を持ちまして、探險の歩を進めました。それは如何にして之を究めようかと思ひました。まだ此の頃は蕃地に隈なく這入る事が出來ないのでありまして、新高山へ行くには相當の手續をして行けば行けまするが、夫れ以上深く這入るといふことは幾らか考へなければならない情勢でありましたので、先づ之を究めるには、河

の下の方から視察を致しまして、其の河は何處から流れるかといふことを究めようといふ考を起しました。それで蕃薯寮へ參りまして、蕃薯寮には荖濃溪がある。即ち荖濃溪を溯つて六龜里の奥のガニ社といふ附近に參りました。さうして此の邊で新高山を觀測致しました。夫れ以上此の河を溯る事が出來ませぬからして、之れから此處にあります道無き山を西方に横斷致しまして、楠梓仙溪の上流甲仙埔の其の又奥に出ました。さうして楠梓仙溪を少し計り溯りまして、又一つの小さい山脈を横斷しまして、曾文溪の上流の後大埔の奥に出ました。さうして曾文溪を溯りまして、嘉義のずつと奥の達邦社といふ蕃社に達しました。さうして達邦社から阿里山に登りまして、阿里山から山脊を傳つて新高山に出ました。さうして新高山から更に東に進んで八通關に行きまして、さうして八通關から陳有蘭溪といふ溪を傳ひまして、濁水を下りて集集の方に出て戻りましたので、さうして新高山の風光を究はめました。さうして新高山は中央山脈でないといふことも確めまして、當時發表致しました、それから續きまして此の南の方の大武山に登りまして、それから中央山脈と離れました鹿場大山にも登りまして、シルピヤ山方面を觀測し、それから集集の裏の中央山脈關門山を横斷して、花蓮港廳下の拔仔庄に出て參りました。それから阿緱から出まして、阿里港支廳管內のトクズン社の方から卑南主山の南ずつと南の方で霧頭山より北の方の分水線を横斷致しまして卑南に拔けました。或は合歡山に登り、或は奇萊主山に登り、さうして最近は南湖太山の探險を遂げまして、尙太魯閣蕃討伐が始まりましたからして、埔里社から合歡山を越えまして、タツキリ溪の方へ拔けまして、大體臺灣の山脈は東から西、北より南と之を觀測致しました。さうしてシルピヤ山は中央山脈でないといふことを、南湖太山の探險に依つて之を確めることが出來ました。新高山は山高くして嶮岨であります。南湖太山も高くして嶮岨であります。何れも山は高くして嶮岨でございますが、山の最も雄大なることは南湖太山に如くものはありませぬ。

◎臺灣の山岳　野呂

◎臺灣の山岳　野呂

一體臺灣の山脈の地質は、殆んどスレートでございます。即ち粘板岩質から成立つて居ります。北より南に進んで殆んど粘板岩質で、少し東に下ると石灰岩層である。續いて結晶片岩の層がある。東海岸のドウム角附近からタッキリ方面に花崗片麻岩の最も古き地層がございますが、概して一番多いのは粘板岩層でございます。これには石灰岩が混じてゐます。臺灣の各河川が墨を流す如き濁流を漲らすのは、此の粘板岩の缺潰から起るのであります。それで其の粘板岩は始終雨水及び風霜の變化を受けまして崩壞しつゝあるので、山には非常な絶壁懸崖が多いのであります。臺灣は蕃地に這入りますれば、二千尺或は三千尺位の絶壁は到る所に見ることが出來ます、山の上から下を覗けば、目の眩むやうな所は屢々遭遇する所であります。それでありますから、此の山を攀ぢまするのはなか〳〵困難であります。危き嶮岨を這ひ登り漸く達するといふやうな情況でございまして、尋常一樣の覺悟を以て之を登るといふことはなか〳〵爲し得ないので、餘程の健脚と餘程の忍耐とを以て之に臨まなければなりませぬ。併しながら一朝山頂に達しますれば、其の風光の雄大なるに接しまして、覺えず疲勞を忘れるのであります。私の探險しました時には、色々の氣候及び天候に出會致しまして、或る時は清天明月の時にも會しまするし、或時には風雨晦冥の場合にも出會致しました。それで山の風光を說きますことは、文學上の趣味津々として、富膽なる文字を要します。なか〳〵私共の之を口にし、又筆にすることが出來ないのでありまするが、極く搔い摘まんで申上げまして、諸君の御想像に任せたいと思ひます。

新高山は山の上が鋸の齒の如く峙つて居りまして、其の斜面は削るが如き巖岸絶壁を成して居りまして、之を攀ぢまするには這つて上るやうな所でございます。而して其の絶頂は僅長さが二、三十間きりかありませず、幅は二、三間きりでございますが、斯くの如く狹い小さい山でございます。それが中央の主山頂で、私共は主山と名付けました。之は嘉義邊りから見ますと。新高山は斯ういふ形で

ございます。北の方から見ますと斯ういふ山が見えまして、それが繋がつて尖つた山、斯ういふ形の上が三つに分れて見える。之が一番高いので即ち一萬三千七十五尺ございます。之を主山と名付けました。北にあるのを北山と名付け、南にあるのを南山と斯う名付けまして、さうして尙此の外向ふの方に高い所があります。之を東山と言ひます。此の前に高い山がございます。之を西山或は前山と名付けました。斯ういふやうに、新高山は山頂が分れて居りまして、何れも鹼岨です。此の山を登りますると、東方には近く秀姑巒山が聳えて中央山脈が連列して居りますために、東海岸の情況は見えませぬ。西海岸の方は到る所見えます。若し眼が許すなれば澎湖島も見える譯で、澎湖島から新高山が見えますから、又新高山から澎湖島も見える譯であります。それで此の山から見ますると、北の方には遠くシルビヤ山を望み、南は大武山方面を見渡しまして、多くの山が恰も參朝する樣に見受けられます。さうして私の登りました時分は朝早く登りまして、丁度旭が出まして晴れて居りました。布袋嘴附近の海岸迄も之を見る事が出來ましたが、暫くして一片の雲が出て來ました。其の雲が見る間に四方の山々谷々に蔓りまして、其の蔓りました情況は、際涯のない廣い海のやうで、又綿を振りまいた樣であります。さうして其の海の中に高い山の巓が、あちらこちらに矗々と屹立して、恰も島の如く首を出しまして、諸方に點々して居る。其の景色の好い事は、なか〳〵吾々の口を以て云ふ事の出來ない處でありました。それから南湖太山に登りまして殊に感じましたのは、南湖太山は粘板岩から成つて居ります。それに硬質砂岩を混じて居りますが、之も山の上が東の峯と西の峯と南の峯とに分れて鼎足の勢をなして居ります。さうして東の峯は粘板岩が層面を現はして禿げて磨れ落ちる樣になつて、それが日光に映じて白く光つて居ります。さうしてどうしても攀ぢ登ることが出來ない絶壁になつて居ります。西の峯は一番高くして、之は兀々たる岩石を成して居つて非常な偉觀を呈して居る。南の峯は岩石の間に檜松が密生して居つて山巓が青く、而して此の三つの大きな山を連ねる所は高原

◎臺灣の山岳　野呂

の狀態を成して居ります。山は高く一萬二千餘尺に聳えて高原の情況を成して居る。一寸其處に行つて見ると大きな高臺であります。其の高臺の上に壯大な岩石の峯が屹立して居ります。其の高原狀の高臺は稍緩傾斜の平地でありまして、それから一段下りました所で急な崖のやうに成つて、さうして急轉直下の嶮岨を成して居る。其の高原には先にも申しましたやうに檜松が密生して居ります。其の檜松の幹が風雨に晒されて白くなつて、白骨のやうな情況を成して直立して居るのもありますし、それから又青々として植木屋が丹精を凝らして造つたやうな面白い形をして居るのも澤山ありますし、其の青い檜松の林、白い其の枯木が林立して、其の間々に色々不思議な形をしました所の岩石が峙ちまして、其の岩石の所々には石楠花が密生して、其の石楠花は當時恰も奇麗に花が開いて、桃色もあり白いものもあります、それが全山到る所に錦を織りなして居りまして、さうして遠く望みますれば、北にはシルピヤ山は雪が白く、新高山は南遙に雪を被つて、其の他の連山は突兀として連亘致して居ります。多くの河は白い布を晒した如くに、蜿蜒として溪谷を流れて居ります。さうして遙に東の海も西の海も、之を想像する事が出來ました。さうして南湖太山の上にも尚雪があり、氷があるといふやうな情況でございまして、餘り風景の宜いのに恍惚として去ることが出來ないやうな次第でございました。併し此の高山に登りまして吾々が非常に感じまする事は、氣壓の薄いため受ける所の苦痛でございます。殊に南湖大山に於きまして、吾々の一行は其の苦痛の一層甚しいのを感じました。氣壓は一萬尺位の所に行きますと餘程薄くなりまして、呼吸促迫を覺えます。或は鼻血を出す人もある。所謂高山病に罹る人も間々ありますが、尚進んで一萬千尺に登り、又一萬二千尺に登りまするとて、僅か千尺の違ひも氣壓の變化が身體に感じますことは一層甚しきを覺えます。南湖太山では一萬一千五百尺位の所に露營を張りましたが、其の場所に於きましては、第一に終日嶮岨を攀ぢ登りまして疲れて居りまして又腹も空つて居りましたに拘らず、飯を食ふことが甚だ苦しうございまして、殆んど咽

喉を通りませぬ。汁を掛けて僅に一杯か二杯の飯を漸く掻き込んだ位でありまして、どうしても胸が痞へて、壓迫を受けるやうな工合で飯を食ふことが出來なかつた。警察官の如き、巡査の如く人夫の如く勞働に慣れ、又劇働に慣れて居る人でも、同樣の情況で殆んど飮食も苦しい情況でありました。さうして眠に這入りましても、どうしても眠ることが出來ない。一寸眠ると夢に驚かされて、殆んど終夜昏々として安眠した者は一人もなかつた。さうして歩きます時分、坂も無い平地のやうな所でも非常に呼吸が迫りまして、ハア〳〵呼吸をする。斯ういふやうな情況でございます。勿論飯抔を焚きまするに普通の焚き方では、焚けませぬので、殆んど粥のやうな飯をこしらへましたが、兎に角高い所に登りました苦痛は尋常でありませぬ。從來一萬尺位の所で露營を致しましたことは度々ありましたが、一萬一千尺以上の地に露營をしましたのは其の時が始めてゞございました。僅に一萬尺位の差で非常な苦痛を感じました。内地に於て富士山の頂上に於て呼吸促迫はしましたが、一萬二千尺の富士山に於ける苦痛より南湖太山に於ける苦痛が遙に大きく、之は如何なる理由でありますか知りませぬが、さういふ情況に接しました。それで先づ尋常の天候に於きましてはさういふ好い天候に接しまするし、又寒さと申しましても大概零度位の所でございます。丁度南湖太山に登りましたのは本年の五月一日でございましたが、丁度零度に達しましたが、一番其の時が寒むい時でございました。併し一旦暴風雨に出會致しますと、其の慘絶なる有樣は是亦なか〳〵申上げることの難いことでございます。私は合歡山の上で風雨に遭遇しますし、鹿場大山に於きましても暴風雨に會ひました。平地に於きまする臺灣の暴風雨がなか〳〵甚しいものでありますが、山上の暴風雨は尙一層のものでございます。富士山に於ても暴風雨のために慘害を受けたといふ話は屢々聞いて居ります。成程富士山は直ぐ平地から屹立して四方が明け放れて居りますので、其の風雨の慘害は甚しいものであると察せられますが、臺灣に於ける高山の風雨も、恐らくは之れに讓らぬものであるまいかと思ひます。由來臺灣は

暴風雨の強烈なる所でありまして、其の強烈なるものが高山の上に打つ突かつて山を吹き荒すのでありますから、甚ごいことも固より其の所であらうと思ひます。固より風力計を持ちましたこともございませぬから、計數的に之を申上兼ねますが、平地に於て一時間に百哩の速力であつたといふやうなのは暴風雨に屬して居りますが、それより數層甚ごい情況であるといふことを感じました。それで雨は又殊に甚しうございます。細引を降すやうな有樣で、非常に甚ごい雨が降つて來ます。さうして其の量は非常なものでございます。前にも申しました通り、二日か三日で千ミリ以上も降らせるやうな勢を以て降るのでありますから、實に猛烈なるものであります。風は忽ちにして天幕其の他の假小屋のやうなものを皆吹き破つて仕舞ひまして、雨は猛烈に降りますし、而して大概雷鳴が伴ひます。其の雷鳴は富士山の場合にも聞きましたが、實際雷鳴が自分の脚下に起ります。天上からも起りますが、足元から聞える雨が上から降り下からも降る。左右前後から降ります。さうして斯ういふ時分には、大概氣温も降りまして零度以下に降ります。零度以下に降つても必ずしも雪といふ譯に行きませぬで、矢張り霙混りの雨が降ります。之が雪でありますと降つて居る間は暖かいのであります。又身體に觸はりますのが、眞ぐ凍つて居りますから飛んで仕舞ひまして、上に毛の物でも着て居りますれば肌に通るやうなことはございませぬ。然るに臺灣に於ては、山中に於て出會する風雨は凍らない雨でありますからして、着物を通しまして直ぐ肌に直接するのであります。それでありますから、寒むさの身に染みることは非常なものでありまして、昨年三月自分が遭遇しました如く、合歡山で四十餘名の凍死者を生じたのでございます。此の事は臺灣と致しまして、非常に不思議の出來事として內地にも傳へられました次第でございますが、當時山に居りまして、其の情況を目擊致しまして如何にしても此の慘劇を免れることの出來なかつたのを遺憾とし、其の後合歡山に登り、又今日に至りましても、常に之を追憶して哀心甚だ悲哀の情に堪へない次第でございます。當時の風は猛烈でありまして、忽

ち天幕は吹き破られ、雨は甚ごく降りまして凹地に水が溜り、終夜雨の中に氷の中に立往生して居りましたために、着物も何も凍つてしまふ。焚火をすることは出來ないといふやうな有樣から、其處に至りましたで、歩いて居る者も覺へず身體が固まつてしまつて夢路に入る如く、自然に自分の命を失つてしまつたやうな情況でございまして、只今の如き慘劇もありますし困難もございましたが、又前にも申しましたやうに、非常に雄大なる景色に會しまして、非常に愉快なこともございます。殊に月明の夜此の山中に露營を致しました時の愉快さは、又一通りでございませぬ。月は冴えまして空中には一點の雲影もございませぬ。それで非常に冴へ渡りました月の下に、其の靜かさといふものは想像の出來ない程です。非常な靜かさでございまして、私は之れは開闢以來の靜かさと申して居ります。實に森林の中に居りまして非常な靜の中で、月を眺めて愉快な夜を過したこともございました。又山の野原には色々の高山植物が、種々の形や色の奇麗な花を着けて、美しき毛氈を敷いて、美觀を添えて居ります。而して高山地帶は氣候佳良にして最も健康に適し、吾人の生活上多大の利益を與ふるものであります。

斯樣に臺灣の山・臺灣の土地は一千百餘方里に涉り、高山連亘して居るのでありますから、此の蕃地の中には平地に屬すべきものはございませぬ。全面積殆んど山を以て埋めまして、さうして其の山は懸崖絕壁を以て充たされて、夫故に耕すべき土地は少うございますが、又富源が無いのでもありませぬ。山には阿里山の如き其の外の宜蘭濁水溪の三里山及び棲蘭山の如き、或は臺中廳下の八仙山の如き其の他の檜の林の利用されべきものも少なくありませぬ。それから又鑛物も到る所之を採掘するの有利なるものがあるさうでございます。併し開墾すべき土地に至つては、蕃人の生活に充てる外餘り剩ますものは無いやうでございます。

臺灣の地勢は凡そさういふものでございますが、尙一つ最後に附加へて置きたいのは、此の臺灣の

山は前に申しました通り、一萬尺以上の中央山脈が北より南に縱斷を致して居りました。夫故に臺灣は此の狹い土地でありながら、此中央山脈の爲に東と西とに兩斷されて居りまして、此の東西の交通を甚だ不便ならしめて居ります。其のために西は開けても東は開けずに居る。少なくとも二百年計りの差があるやうに見えます。此天嶮は臺灣を開發する上に於て支障を來すこと著しいのであります。さうして臺灣の東西を連絡するには、どうしたならば宜いかといふことの研究すべき必要から其の研究を致しました。之が爲に前にも申しまする所の、東西の横斷探檢を行ひました所以であります。即ち此の東西の連絡線といふものは、南の方の阿緱の先の枋寮からリキリキ社を通つて、浸水營を越え巴塱衛に拔けるが便利で郵便線路を設けた。北は基隆から三貂嶺を越えて宜蘭に出る。之も郵便線路を設けられた。又人の交通も許されて居るのでございます。尤も南の枋寮線の方は蕃害のために中絶して居りますが、兎に角道が開けて居ります。其の外は之に通ずべき道がございませぬ。それで花蓮港なり臺東なりに參ります人は、今迄の所では若し陸路を通るとすれば、此の枋寮から巴塱衛に拔けまして、此の海岸を傳ひ、臺東に出てから、更に中央山脈と海岸山脈の間の平地を通りまして、花蓮港に行くといふ、斯ういふ非常に不便な迂遠な線路を取るのでございます。然らざれば海に依つて、船に依つて連絡しなければならぬ。所が東海岸は始終風波の高い所であつて、船の交通が容易でありませぬ。其の上船の往復が甚だ少ない爲に、郵便の往復に十日以上も費すといふ様な情況であります。それで海には港灣の設備が無い。浪は高い。艀に汐が冠ぶるといふ様な有様で、物貨の出入には非常の困難があり、從つて開化の度は大におくれて居る。どうしても中央山脈を横斷する方法を講じなければならない。之に就てどんな道があるか調べました所が、先づ阿緱から臺東の卑南に出る一つの阿卑線がございました。それから嘉義から阿里山・新高山を越えて璞石閣に出る嘉璞線がある。それから集集から陳有蘭溪を溯り、八通關を通つて、さうして璞石閣に出る集璞線があります。此の線は臺

灣に居りました吳光亮が、清國政府時代に開いた道ださうでございます。もう一つは集集からして丹大社を通りまして、關門を越えて拔仔庄に出る集拔線がございます。之も清國政府時代に開いた道であります。それからもう一つは埔里社から合歡山を經て、タッキリ溪の方に拔けまして、新庄へ出て花蓮港に行く埔新線がある。埔里社からハック蕃を過ぎ、ピヤナン鞍部を越えて、濁水溪を通つて宜蘭に拔ける埔宣線、此の六つの線がございます。もう一つの宜蘭の蘇澳から、海岸線を大南澳、大濁水、タッキリを通り、花蓮港に到る蘇花線がある。此等の線を調べたならば、何處か交通が出來る所があらうと思ふ。臺灣は高山に富んだ高山國で、高い山があるといふことを言つて威張つて見た所で、交通に障碍を及ぼす事が多いので、それは如何にしたならば良い道があるかといふ事に就いて調査する必要を感じまして、私は阿緱から卑南に拔ける線を調査をし、集集から拔仔庄に拔ける線を踏査致しましたが、今日迄の實驗に依りますれば、阿緱から卑南に拔けます阿卑線は地勢も割合宜しうございますし、山は中央山脈の鞍部が五千七百尺計りで、さう困難は無いやうであります。集集から仔拔庄に出ますには、一萬尺以上の所を越へなければなりませぬ。之は容易なことでは交通路を開くことが出來ないと思ひます。併し生蕃の轎に乘つて通り、僅か五六貫の荷物を運送する事は出來るやうにならうと思ふ。阿卑線の方は左程の困難でなく、又非常に經費も要しないといふ事を感じました。若し之に前に申しました河川の急流を利用しまして、水力電氣を起して電氣鐵道を架けましたならば、東西連絡の交通を容易にするのは空想でないと思ふ。私のみならず、土木の當局者も之を認めて居ります。併し經費が數百萬圓にも達するのであらう。之が經濟上甚だ困る所でありますが、兎に角連絡の道をつけることは出來るので、併しそれ丈けの費用を掛けて連絡の道を作つて東部を開發して、其の開發に依つて得る所が、其の費用を償ふか否やといふことに至りましては、遽に斷言することは出來ないのであります。併し此の鐵道を利用し、中央山脈附近に、雄大なる風光を前庭として一大旅館

◎臺灣の山岳　野出

を造り、避暑的遊覽場といたしましたならば、ごんなにか吾人を喜ばしめ、又少くも東洋の外客を吸收して、彼の瑞西に劣らぬ世界の勝地を紹介し得らるべきかと、私に希望を抱いて居る次第でございます。それから此の蘇澳・花蓮港間の海岸線は大濁水とタッキリ間に、清水山といふのがあります。其の清水山附近には、世界に有名な巉崖絶壁と傳へられて居る絶壁がある。二千尺三千尺の絶壁があります。併し先日民政長官閣下に從て、踏査致しました情況に依りますと、之を開發致しまして道路を作るといふことは、中央山脈を横斷するより遙に容易であります。さうして之に鐵道を布設することもさう困難ではないと思ひます。今日と致しましては、宜蘭の方から蘇澳を經て、海岸を花蓮港に至る輕便の鐵道を架けることが、東西連絡の一番良い方法ではないかといふことを感じました。

今日まで自分が見ました所のもの、旅行致しました概略を御話致しますと、以上の如き情況でございます。で願はくば我が教育家諸君の前に、甚だ趣味も無く又不順序なる御話を申上げて、御聽きを得た之を紀念と致しまして、諸君の協力一致を得て、此等のものが幾分か土臺となりまして、臺灣地誌を完成することが出來ましたならば、私の無上の光榮として、又本懷とする所であります。今夕は御多忙中清聽を忝うしまして、甚だ感謝する所であります。

（本稿は著者の講演速記にして其承諾を得て揭載せり）

白頭山に登る

杉本良

一、端言

高野兄足下

白頭山は御承知の如く鮮滿國境にあつて、圖們、鴨綠、松花三江の水源に當り、標高はまだ三角測量の結果を得ませんが大體二、六〇〇米内外と云はれて居ります。裾野の非常に廣い、噴火口の大きい、そして圓錐形の山容の能く整つた熄火山であります。噴火口は今は火口湖を爲し龍王潭又天地と云ひ、周圍目測約三里、所謂七星湖の一つであります。七星湖と云ふのは白頭山地方に在る七つの湖の意であるが、現在明瞭なのは、この龍王潭と三池淵と云ふ三つ續の湖とで、あとの三については或は圖們江上流の紅土水と、北胞胎山の北にあるのと、小白山上にも一つあると云ひ、或は又北胞胎山の噴火口を指したものだがこれは今は缺壞したのであるとも云ひ、又或は三池淵は三にあらずして四なりとも云ひ、紛々として決定して居ないのであります。裾野地方は火山砂の爲に浸透して雨後には溜のやうになつて少し旱すれば忽ち涸れてしまうと云ふ窪地が多く、川にしてもしばらく流れて砂の中に沒したり、砂の中より突然湧き出したり、流れをも一筋に辿る事が出來ないので國境定界上にいろ〳〵複雜な問題を生ずるのであります。白頭山頂上の附近には大小臙脂峯、太平峯、無頭峯、少し離れて赤岩、茂峯等の休火山があります、頂上の東南七里の小白山、其東南の北胞胎山、更に其の南の南胞胎山、將軍峯、蠶岩山等は白頭山と同一系流に屬するものとして其一家族と見られるやうに思

ひます。

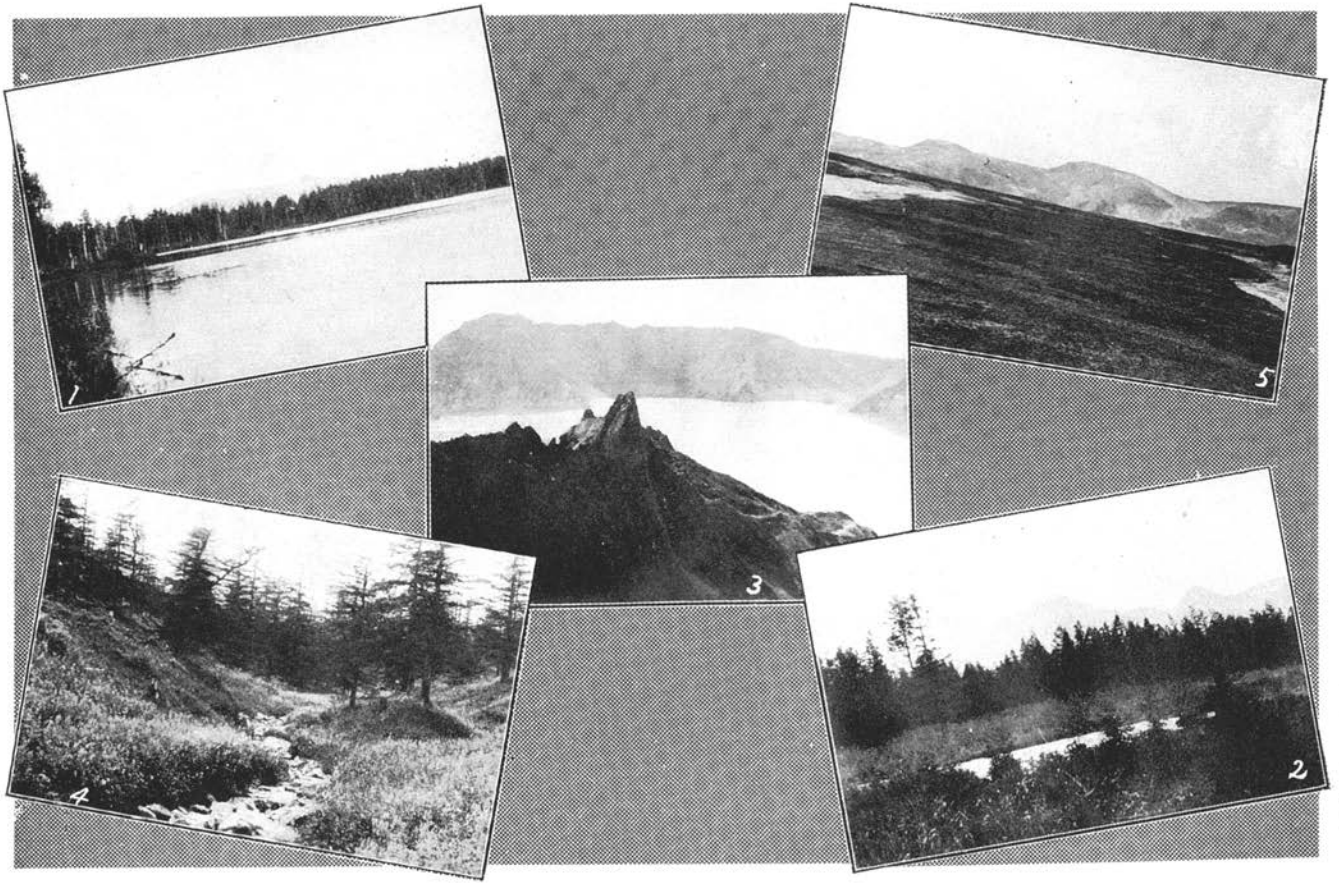
白頭山に就ては既に本誌第五卷に城、太田兩學士の記事が載せられてありますが、其の後多少事情の異つた點もあり、且私達一行とは道も異りますから、昨(三年)秋の登山の經過を記憶を辿りながら御報告いたさうと思ひます。

二、登　路

朝鮮側からの登路には圖們江方面からのと鴨綠江方面からのと二道あります。

一、圖們江方面よりの登路

これは前揭太田學士の取られた道路であります、同君は會寧からせられたのでありますが、內地からするとすれば先づ淸津から申上ぐるのが順序と思ひます。淸津會寧間は軍政時代からの輕便鐵道がありますから、それで、淸會の中央點武陵臺迄行き(約一日)武陵より車踰嶺を越へて茂山に出ます、淸津は十年程前は全くの濱邊に過ぎなかつたのが日露戰爭後、凱旋軍の歸還の爲に汽船の寄港を見たのを初とし次で有名なる羅南の兵營が建築せられ、北鮮地方も開發せられると共に淸津は日進月步の勢で發達し、今日では北鮮並に間島地方に對する貿易の咽喉を爲し、露領との關係も深く、人々も昨年末の調査では內鮮人合計約六千の內半數は內地人で、北鮮の釜山と云ふ格であります。武陵臺は一寸した部落に過ぎませんが、其川にヤマメが多いので有名であります。武陵臺、茂山間は一昨大正二年より新道開鑿に着手して大部分はもう竣成して居りました、新道は十五里ありますが舊道は十二里に過ぎません、四里行つて車踰嶺更に四里にして豐山間、更に四里にして茂山であります。車踰嶺附近は虎が多いと聞きました。例の吉會線の延長たる淸會線は目下大に進捗中でありました、茂山は此の地方の名邑で憲兵分隊もあり、雜貨店を兼營して居る旅店もあります。圖們江線をこればこゝを基



杉本眞氏所藏

白頭山に登る

一、三池淵ニノ池（白頭山遠望）　二、三池淵より北朓胎山を望む　三、白頭山頂の龍王潭
四、無頭峯宿舍地附近　五、白頭山全景

點としなければなりません。そして三下面、農事洞、茂峯（各一日里程）を經て神武場に出ます。三下面及農事洞は共に鮮人部落で憲兵隊があります。三下面は西頭水と圖們江との合流點にあります。西頭水の上流延岩地方は營林廠の採伐地域で、この三下面から筏を流すと云ふ話でした。夏の頃好都合に行けばこゝから以下圖們江を船で下れると云ひます。農事洞は今から百五十年前に開けたものですが、その時以來今にいたる迄此の地方最も奥の部落であります。茂峯には半永久的の小屋が三棟あります、小屋の前にカチルポン水と云ふのが流れて居ります、この小屋は神武場及無頭峯に比して最も完全であります。茂峯から半日にして神武場に出ます、神武場は新舊二つあつて舊神武場（新民屯）は新神武場の北の方約五六町であります。

二、鴨綠江方面よりの登路

これは咸鏡南道惠山鎭を起點とするもので、惠山鎭は恰も圖們江方面の茂山と相對するものでありますが、茂山よりも遙に繁昌して居ります。惠山鎭に行くのには鴨綠江を遡つてもよいが、鴨綠江沿岸には平地と云ふものは殆んどありません、巉岩、絶壁、險嶂、峭立して國境道路なるものは殆んど馬背による外通られず、處によつては人馬共に窮することすらあります。之を舟で遡るには中江鎭迄客船で三十日、惠山鎭までは五六十日を要し、急流である爲に石油發動機を用ふることは出來ません。今は咸鏡南道新浦から新道を開鑿中であります。これが完成すれば自動車を通しますから便利になります、今でも四五日かゝれば馬で行かれます。惠山鎭は營林廠設置以來非常に發達しました、殊に夏が盛であります。惠山鎭の對岸は長白府で、長白府には鴨綠江採木公司分局があります。此の兩部落の附近は切り開かれて畑もありますが、その他は凡て大森林で、何れから來ても山の上からこの峽谷の底に粉壁燦然たるを見てアット云はされます。惠山鎭から五里奥に普天堡、更に五里奥に寶泰洞があります。共に憲兵の出張所はありますが、內地人も居らず旅館もありません。寶泰洞の四里奥

◎白頭山に登る　杉本

◎白頭山に登る　杉本

に合水と云ふ部落があります。これが鴨綠江方面に於ける最奥の部落であります。更に三里にして靈頂岑には右に一軒支那式家屋があります、これから裾野を六里餘行けば神武塲で前の茂山からの道と合します。

以上二道の外に猶一つ長白府から鴨綠江に沿ひ白頭山の眞南に出るのがありますが、長白府の奥には支那人十餘戸鮮人約七百戸あるとの事であるが、二日程は全然野宿しなければならぬと云ひます。又北即ち間島方面から上るのもあるさうですが明でありません。

以上四道の中私は惠山鎭から登つて茂山に出ました、即ち半分は太田學士のと同じであります。そして私は鴨綠江を遡りましたから新浦線について申上げられないのは遺憾でありますが、鴨綠江を遡るには前申上げたやうに日數はかゝりますが、此の江岸の風景は如何にも愉快なものでありました、殊に私が中江鎭以上の上流地方を旅行した時は丁度九月の末で、此の地方は既に九月二十日頃から毎朝霜が降りますので毎日〳〵紅葉の中を行くのです、そしてその絶壁の紅葉が、名の如く眞綠をなした江水と相映發するその上に鴨の群が悠遊して居るのでした。鴨綠江は冬は十一月頃から翌年四月迄氷結します、その上を鮮人は牛橇を牽きます、平安北道も咸鏡北道も共に有名な牛の産地であります。中江鎭は昨年以來測候所が設けられたが、其報告によれば冬は殆ど零下三十度以下に降りづめで、圖們江方面よりも餘程寒いやうであります、鮮人は粟、玉蜀黍等の雜穀を常食として居ります、河岸には少しは田もありますが云ふに足らない少量であります。

三、交通機關

既に記した通りこの地方は山又山で道路も改修せられないものは僅に馬か牛が通ふのみであります、改修道路には行く行くは乘合自動車も出來ませう、義州等二三の地方にはロシア轎とロシア馬車

とがありますが、内地のやうに乘合馬車と云ふものは朝鮮には殆どありません、これは一つは馬が小さいからでせう。朝鮮の馬は驢でも騾でもないけれども非常に矮少で實に滑稽な程小さくあります、而しこれが進化せざる原始的の馬なんださうで、某西洋人は今日迄かく完全に太古の馬を保存し來たのを感嘆せられたさうであります。旅行者は上の馬の背の兩側に荷物をつけてその上に乘り馬夫が手綱をとります、鐙（あぶみ）がないので不安全に感じますが慣れゝばそれ程でもありません。こんなのを十頭も並べて旅行しますと異樣の趣で隊商のやうな氣分を想像せられます。

四、登山の準備

近頃登山せられたのは大正二年夏、帆足道長官及和田博士一行四十餘名の大部隊で茂山道口より登山せられましたが此時はまだ茂峯、神武塲、無頭峯共に小屋なく露宿せられたさうです。次に中井博士一行は昨年夏惠山鎭から登山せられたが雨になやまされたさうです。一行も時期を失しましたのでもう草木悉く凋落し植物の壯觀を見る事は出來ませんでした。登山の準備としては惠山鎭で馬を雇ひ之に人の食糧を積みました、寶泰洞及農事洞は憲兵隊を煩す事とし、その中間を靈頂峯、無頭峯、茂峯に合計四泊、一泊の餘裕を見て五泊分と寢具としての毛布、防寒具、及馬糧は之を寶泰洞で借り入れました、寒からうと思つて凍傷膏迄用意すると非常に駄馬を澤山要します。

五、登山の經過

第一日、惠山鎭—寶胎洞

第一日は惠山鎭から寶泰洞迄行きました、約十里、惠山鎭は町らしい部落である事前に記した通りで、守備隊も居り憲兵隊もあり殊に營林廠で有名であります。上流地方では落葉松と紅杉とが多く營

◎白頭山に登る　杉本

林廠も採木公司も毎年秋から冬にかけて伐採し氷の上を牛に曳かせて谷に出し、春の雪解を俟つて小川を流し一定の地點に集中して編筏し、夏の增水時に鴨綠江を下すのであります、惠山鎭はこの伐採事業の爲に立つて居ると云つてもよいでせう、筏乘の歌にもこんなのがあります。

惠山鎭で一番名所は八幡山よ
　むかうに見ゆるは營林廠ヨイショ
　　はるかに見ゆるはヨアリヤ支那の國
　なかをまたチョイ〳〵流る丶鴨綠江チョーイ〳〵

これは或は內地からの輸入物であるかも知れませんが、國境地方で聞きますと如何にも虛子の云ふ第一線の人々と云ふ氣持がします。

惠山鎭からその八幡山の麓をまはつて鴨綠江を離れ四里程來て相德岺と云ふ小さな岺を越します、その上から北の方に白頭山や小白山が白く見へました。それから五溪水川を少し上れば普天堡であります、これからいつ上るともなく上つて五溪水川の上流に出て夕刻に寶泰洞につき憲兵隊を煩しました。寶泰洞は胞胎洞とも書きます、南胞胎山の麓にあるからかく云ふのでせう、胞胎山を鮮人はポテサンと云ひます。

第二日は雨の爲に休止しました、裾野は雨が降ればぬかつて歩かれません、ひどい處は馬の脚がつかりぬかります。

第三日寶泰洞—靈頂岺

寶泰洞から少し（五分程）上り落葉松の幾百年來密生して居る中をなだらかに下る事三時間にして合水に出ます、惠山鎭、農事洞間には一の相德岺を外にしては幾十里の間殆んど山と云ふものはなく道は段々に上つて段々に下るのであります。合水には六十五六戶の部落があります。住民は森林の

中で火田を作り燕麥と馬鈴薯とを栽培し豚と馬か牛を飼つて、殆ど之と雜居するばかりの生活をして居ります。恐らく冬は唯おんどるに火をたくのみで冬眠の狀態をして居るのだらうと思はれます。合水からまた落葉松の密林の中を行きます。もう大抵落葉して道は眞黃であります。落葉松の芽の出る時はよいが、この秋の樣子は如何にもなさけないものであります。時々森の中で熊の聲がきこへました。夕方靈頂峯につきました、峯と云つても高くもありません、唯森林を少し切りひらいて一戶を建てたのみです、以前は支那人が居つたが賊害が多いので逃げ出し、今は五十餘歲の朝鮮人がたつた一人居りました、賊と云ふのは馬賊の一種であります、幾十里の無人境であるから時々剽盜が出るのです。小白山に登るのはこの家の十町程手前から左にわかれます、又神武塲に出ないで農事洞に出る道もこゝから行きます（十三里程あります）。

第四日　靈頂峯—無頭峯

神武塲を經てこの日の行程は十二里近いと云ふので早くから起きて四時半に出立しました、白樺の皮を燈明として行きますと眞暗な林の中で鹿がけたゝましく啼いたりします。三池淵は靈頂峯から半里程行つた處にあります、第一の湖は暗の中でわかりませんでしたが、第二の湖に出た頃漸く夜があけはなれました。この第二のが三つの中で一番大きいので周回一里餘、中央に島もあります、附近一帶落葉松で且つ方に黃葉した白樺が處々に點在して居ります、それが靜かなそして麗かな水の上に靜にその影を映して居ります、如何にも莊嚴な神秘な光景でありました、御送した寫眞は御覽下さいましたか。あれは惠山鎭の寫眞屋が前年に撮つたものでした。第三のはそんなに大きくありません、此邊から神武塲までは唯もう坦々たる平原で、且高原であつて林の木も大きくありませんが非常に密生して道に馬の越しかねるやうな倒木が澤山にあります、そして又處々には山火に燒かれた枯木が幾里となくつゞいて居る處もありますが、そんな燒野には躑躅に似たトリツキ（鮮語）と云ふ灌木が葡萄

◎白頭山に登る　杉本

◎白頭山に登る　杉本

のやうな實を結んで居りました、これが熊の此頃即ち秋の食料ださうです。

神武塲は小川のほとりの三棟の假屋で大人數でも宿泊せられ中には簡單ながら板も敷いてあります。これから方向を西にとつて落葉松や唐檜やの混淆林の中を四里程行けば左に小さい道が分れます、これは小白山の西の西大岑と云ふ鮮人部落に通ずるのです、又朝鮮を經ずして間島から長白府に行く支那人もこれを通ります、こゝから右に一里程行けば澤邊に無頭峯の小屋があります、無頭峯は小さい山でありますト(ロッポン)、東の一面に木がないから無頭峯と云ふのでせう、無毛峯の意味ださうです。この小屋は一番不完全なもので、落葉松の皮を以て葺き土をかぶせてあります、三角形をなし中を二つに分ち約十人位は入れます、中にも落葉松の皮を敷いてありよす、山中の宿舍としては申分ありません、一行は手斧を出して大きな木を切つて焚火をし谷川の水で炊事をしました、十月九日の此の日の晩が零下三度から四度でしたが、雪の上を吹いて來る風は身にしみて冷でした、夜は時々何ともわからぬ猛獸の聲がきこへます、その度毎に馬が驚いて嘶きます、と馬夫が心配して飛び出しました。

第五日　頂上登山

五時に起きて七時に出ました。小屋から三十分程行つた時全く木はなくなりました、この無木帶に出る前小屋の前後二里程の間、それは〳〵地衣類が美しく毛氈をしきつめたよりも奇麗に花ならば咲きみだれて居つたと云ふ處であります、無木帶に出ると同時に雪が積んで居ります、そして右に太平峯、左に大小臙脂峯の中間を登ります、小白山が遙に左の方に見へます。小臙脂から一時間程行くと國境碑があります、塲所は白頭山と大臙脂峯の間であります、これは間島協約以來大層有名になりましたが、詳しく太田學士の紀行に見へて居りますからは省畧いたします。

この定界碑から先は富士山で云へば胸突八丁と云ふ塲所で、急に峻しくなりそして雪も深く風も強く時々、雪と砂とを一緒に吹きつけられて閉口しましたが、一時間足らずで烏頭峯と云ふ外輪山の一

角に出ました、十時十分でした、朝から白頭山は雲に蔽はれて居つたが、此處に登つた時も殆ど辨じない程で、時々風が雲をはらつて鉛のやうな龍王潭の水の面が忽ちあらはれ忽ちかくれたりしました、それから二十分程雲の中を登つた時頂上だと云ふ處につきました。暫くして居るうちに幸に雲も晴れ出して、一度は零下八度に下つたのが日が出ると共に風も止み氣温も上り次で龍王潭の全面もあらはれて、小波の立つ上に正午の日がかゞやきました、潭は云はゞ凹字形をなして居つて北の一方が火口瀬を爲し松花江の水源であります、火口壁は非常な絶壁であるが辿れば水面まで下る事も出來、黒曜石の大なる岩壁もあるとき〻ましたが遂に下りませんでした。頂上からは四方約二十里は見渡されました、即ち南は鴨綠江の峽谷から南北胞胎山、小白山等の白頭山彙、三池淵、東には平原の彼方に遠く農事洞附近の蘆穉山、甑山、北から西はもう一帶渺茫として雲につらなる迄の平原で、その中の赤く見ゆるは落葉松林、蒼く見ゆるは唐檜の樹林であります、晴れた時には松花江の流れが銀絲のやうに見えるさうです。十二時に山頂を立つて道を三時に無頭峯に歸りました。

第六日　無頭峯―茂峯

無頭峯を七時四十分に出立し、神武場に十時四十分につき更に午後一時十分に立つて六時二十分に茂峯につきました、唯々平原で何の變化もありません、處々に水流があり、獵師小屋も二つ程見ました、ふりかへつて見ると眞白な白頭山が端然として澄みきつた秋の空にかゝつて居ります、登るのにそんなに骨の折れなかつたのに、遠かれば遠かる程愈その高さを增すのでした。

第七日　茂峯―農事洞

此の日の行程も一日には容易であります、處々通行し難ねる程の泥濘がありましたが、正午に甑山の麓をまはつて夕方に農事洞につきました、農事洞以下は別に必要でありませんから省略します。之を要するに何れの方面から登るにしても、現在ではまだ殆ど憲兵隊の援助を俟たねばなりません、

且つ單に頂上にまで行つて來るだけでも、山中に四五日假泊しなければなりません、而し相當に準備をすれば道路も平夷であり大なる危險もありませんから、どうぞ登山せられてこの雄渾壯大なる國境の風物に接せられ、地質上植物上の御研究を御願いたし度い次第であります。

晩春の高原より（飛驒高原河畔）

大霜德治郎

小島先生

時々の御音信によつて、都の春のさまを知りました、もう都の春は大部分花の色褪せて、葉櫻の下に、なき花の跡を慕ふ頃でございませう。

當地は御承知の如く、日本アルプスの峻峯を背景として、山又山の別天地をなし、海抜二千餘尺の標高を有する高原だけあつて、流石に都よりは、春の訪れが一ヶ月餘りおくれてゐる事と思ひます。花の三月とは只だ名のみにて、其頃はまだ四圍の風景がヒッソリして殺風景極まるものでした。而已ならず當時の餘寒は殊に嚴しく、家の軒には氷柱さへ下りて、地方の人は焚火をたよりに圍爐裡を圍みてヤッと餘寒を凌ぐといふ有樣でございました。私は初冬より三月にかけて双六谷の自然は如何計り荒涼たるものであつたかを思はずには居られませんでした。思ひ出してさへゾットする大嵐が海嘯の起る樣な音をたてゝ囂々と山の平を襲ひ、氷雪を吹きまくつて谷間を埋める光景は定めて物凄いものであつたでございませう。彼の可憐な生物は寒い嵐にあつて、ひとたまりもなく岩窟や土中に逃げ

こんで、ちゞみ上つた事でございませう。それでも氣候の變遷は爭はれぬものにて、此頃では遙かに谷の峰々を望むと最早蕭殺たる冬の景はなくして、何所ともなく平和な春の面影を見せてゐます。

三冬の間北風飄々として寒林を鳴らし、山體あらはに霜白く、枯梢慄然として春尚淺き三月の自然は四月となつて、漸く水ぬるみ、風和ぎて、生物は追々長き冬眠より起き出るといふ有樣にて稍、春の氣分が身に感ぜらるゝ樣になります。二十日頃となつては急轉直下の勢にて、梅桃櫻等の花が一時に滿開して、高原特有の春を飾ります。五月となつて春はいよ〳〵酣となり、空林は化して若葉薰り、枯野は若草萠えて千紫萬紅の花開き、生物は多く復活して單調荒寥の景は正に陽春駘蕩の天地となります。

私はかくの如く自然の神が一視同仁にして、都鄙を別たず、平地と深山幽谷とを問はず、周ねく行き渉つて其惠を垂れて居るのを深く感謝するものであります。玉の宮居の園生にも、いぶせき賤が伏屋にも、春の女神は莞爾として訪れる事と思ひます。また天を摩する巨樹も、人馬の脚底に踏みにじられた路傍の小草も、等しく惠の露に浴して時を得顏に微笑んでゐるのを見受けます。秋の、霜の一夜に草枯れて、また尋ねん花もなく、しばしの生を托せんと、冷たき草葉の蔭にねむつた彼の蝴蝶も、時こそ來れと東に飛び西に奔りて甘き蜜に飽き、芬烈の酒の香に醉ひて跟蹌として舞へば、鳴鳥はこれに和しふし面白く歌ひ出でゝ、萬物は皆春の歡樂を祝福してゐます。

高原の春は正にこの歡樂の巷となりました。綠草の中にありて百花繚亂の景は、まるで大畫工の描いた油繪を見る樣であります。目下は山吹、躑躅、藤、椿などの花盛りにて芳烈の香が天地にみちて、流るゝ水さへ薫るかとあやしまれ、煙靄糢糊として天地をこめ、暮色蒼然として世は花の幔に包まるるの時、乙女姿の花耻しさうな春の夜の月が霞を隔てゝボンヤリと下界を照す風情は實に何とも形容することが出來ませんゝ彼の蘇東坡の詩に『春宵一刻價千金、花有二清香一月有レ陰』とあるのは正に此

◎晩春の高原より　大霜

時の感想を詠まれたのであらうと、私は引き付けられる様に此の詩人の風懐の情を偲びました。情緒をそゝる様な春の雨が霽れ上つて、花の色も一層鮮明となり、若葉に止まつた露の玉がキラ〳〵と日光に輝く風景も捨てがたい趣があります。私は高原にあつて只一人、此の麗はしい春の大景を領して飽くことを知らないのです。

都會の人は春が來ると、ヤレ花見だとか、遊山だとか、いつて隨分三春の行樂にさわぐさうですが、高原に住んで居る人はそんな事には一向無頓着で、春が來ようが、花が咲かうが我敢て關せずといつた面持にて頗るすましたものであります。凡てかういふ土地の人は花より團子主義で雪が消えるのを待つて、田圃へ行き、一生懸命に働くといふ事と、若し餘分の金と暇さへあれば一杯の酒に陶然微醉して、無邪氣に笑ひ興ずるといふ以外には、何等の慾望もないのであります、最も彼等には自分の立つて居るすぐ足下（あしもと）や眼前には既に、野趣に富んだ花が滿開して、自ら求めずして其眼を樂ましめ、超俗せる山姿水態に接しては之に感化されて居るから、別に郊外へ杖を曳いてまでも俗臭い花を求むる必要がないのではあるまいかと思はれます。彼等は路傍や野原に美しく、咲き誇つてゐる草花を、何の惜氣もなく鞋底に踏みにじつたり、これを鍬先にかけて平氣で畑の肥料とするのであります。尙春先薪をとる爲に、枝の重きまで蕾を附けた櫻などを伐るのに更に意に介しないのであります。現に私の居るところには何十年か年を經た櫻の名木が二本もあつて、毎年春の天地に一異彩を放ちて居ましたが、それが此の春僅かに畑地のかげをするといふので、私共が停むるのも聞かず、遂に根元から伐り取られてしまひました。若し此の有樣を都會の人に見せたなら、無慘な事をするとか、風景破壞者だとかいつて罵倒するでせうが、これが輒ち地方の人の、花よりも團子を好む所以であつて、深くこれを咎むるのも大人げない業だと思ひます。若しも強ひて詰問せば、アベコベに『花は到る處にあり、豈水中に在りて渴を叫ぶの要あらんや』と大喝するのみ。

先生、私の申上ようと思つた事の中心は外れて、思はず横道へ筆をすべらしました。しばらく筆を取り直して、高原の春の遷り行くさまを書きたいと思ひます。前にも申上げた如く、高原の春は遅く來る代りに、一瀉千里の勢で山野を粧飾するのでございます。春の女神は自然の大なる彩筆を振つて、殆んど一夜の中に美しく彩色して、一大畫幅とするのであります。然しながら春の自然はいつまでも吾人を、此の大畫幅中の人とする事を許しません。一通りの粧飾を終へると徐々に、麓より峰へ、入口より奥へ奥へと、恰度候鳥が氣候を追ふて移り行く様に、だんだん進行するのでございます。そして麓より峰へ向つて縦に走るものは、恰も土地の同高線を劃する様に、綠の線を描いて登つていきますから、甲の峰と、乙の峰との高さを比較する目標とする事が出來ます。また入口より奥へと横に走るものは土地の同温線を示す様に、谷々の寒暖を語つてゐます。それで同じ高原の春といつても、麓と峰には自ら遅速があつて峰々はまた褐色の空林であるのに、麓の方は最早春の峠をそろ〳〵下りかけました。今一雨を過したなら、恐らく春の色褪せて、紅紫の花野は只だ、草蓬々の原となり、鳴禽嘻々として枝より枝に飛んだ花林は、木蔭涼しき綠葉を以て被はるゝ事と思ひます。

それにしても双六谷の春景は如何であらうと、私は一度これを探る考でしたが遺憾ながら、まだ其の機會を得ません。只だ一昨日、船津町へ出る際に、どうしても双六谷の落合を素通りにすることが出來なんだので、半時間餘もアノ橋上に立つて、入口の春色や、美しい水の色を眺めて來ました。私は一たび此の懐しい境にふれると探檢當時の記憶が、恰も糸を繰る様に次から次へと繰り出されて、彼の森閑として太古の靜寂をつゝみし森林のさまや、底氣味惡きまで美しく澄んだ深潭の水、サテハ羽化登仙の客となつて天國に來たのかと思はれし廣野の景等が、あり〳〵と眼前に浮ぶのであります、私は双六谷の自然が僅か一週間にも足らぬ日子に於て、斯くまで深刻なる印象を與へやうとは豫期する事が出來ませんでした。目下谷の兩岸には黄金を撒布した様な山吹の花、眞紅にして燃ゆるが如き

◎晩春の高原より　大霜

◎晩春の高原より　大霜

躑躅の花、天の瑤玉を懸垂した様な藤の花等が谷狹きまで咲きみちてゐます。此の間を水晶の如く透徹して微塵をも止めぬ谷の水は、上流山岳の雪解の爲に水量增加して、悠々と流れてゐます。同じ双六谷の水でも若葉の下をくゞつて流れる春の景色はまた格別だと思ひました。水痩せて石出づる秋の、スベ〳〵した水垢は綺麗に洗ひ落されて、兩岸の岩や、河床の石は手をふれるとギク〳〵と鳴る様に白く磨かれてゐます。白い石、青い水、紅い花などが面白く調和して、岩に碎けては無數の珠玉を散らし、よどみては青藍の碧潭となり、細波瀲灩として麗かな春光に照さるゝ水の美觀は、恐らく天下何物もこれに匹敵するものはあるまいと思ひます。入口は斯くの如く盛粧されてゐるのに、上流の峰々にまだ褐色の山體を青空に横たへてゐました。春は今頃漸く廣河原の邊りまで足を運んで居るのでありませう。昨年我々一行が、雨になやまされ、岩壁に進路を斷たれ、食糧缺乏の不安より幾多の辛酸を嘗めた憂き目はなくとも、輕い春の脚足を以て、岩を攀ぢ、谷をつたひ、峰を趣えて岳の頂上まで達するには、恐らく一ヶ月の後でありませう。

もう當地でも道行く人の頭上には、チラホラ夏帽の載つてゐるのを見受けますが、鎗、穗高、笠、乘鞍等の諸岳はまだ冬の綿帽を冠つてゐます。然し日一日と色がうすれて此の頃では餘程剝脫しました。其の殘雪の光が夕日をあびて、淡く反映するさまは、聖化された白髮老人の威貌に似て、何となく崇高の感が起るのであります。其の軀幹の雄偉にして天に冲し、泰然として動かざる雄姿は、四季を通じて少しも變りはありませんが、其青空遙かに白雲が南へ南へと緩く流れてゆくさまは如何にも、深山幽谷の春の氣分が現れて、うれしく思はれます。

先生

彼是してゐる中に、高原の春も餘程老けて來ました。川端柳は最早色こきまでに青葉が茂つて、翠綠の糸を水に垂れてゐます。川の兩岸に沿ふた山の平も若葉の枝が茂り合つて、清爽の氣がみち〳〵

してゐます。此の晩春にあたつて最も目立つものは、躑躅の花にて、あの緋の様な色を遠くから見ると、まるでゆら〳〵と燃え擴がる野火の様でございます。また谷の兩岸にきり立つ岩壁の割目などには、自然に生えた、面白い枝ぶりの躑躅が咲いて、流るゝ水に其影をうつしてゐます。其の水と、岩と、花とがよく釣合つてゐる所は、恰も大家の筆に成つた山水の掛軸を見る様でございます。私はかういふ恰好の壽題に接する毎に、かくまで、意匠と、配合と、風致との三者を遺憾なく調和せしめた、自然の造詣には今更ながら驚嘆せずには居られません。谷を少し奥まで這入ると、水の岩を滑り落ちるあたりに　石楠花の花が咲いて、溪流の風景に床しい趣をそへてゐます。其淡紅色にして色彩の鮮明な、スッキリとして瀟洒たる花には、眞に清楚愛すべき氣品があつて、馥郁たる香を水にこぼしてゐる風情は、如何にも幽邃の溪流には相應しい花だと思ひます。此の邊の籔かげでは、まだ鶯の頻りに美音を吐いてゐるのを聞きました。私は高原の溪谷を、造物主の創造した古美術品や、自然の思索と技巧とによつて出來た彫刻品、又は自然の音樂等を包藏した地球上の一大倉庫にたとへたいのであります。そして晩春の溪谷は正に此倉庫を公開して、是等の作品を公衆に觀覽せしむべき美術展覽會だと思ひます。然してかの双六谷の谿谷に於て最も痛切に、此感をいだくのであります。今や高原の春は將に逝かんとして、鳴鳥は花なき枝に巢ひ、春水落花をのせてゆくあたり、村童嘻々として水に戲むれ、農馬高く嘶きて、晩春の詩趣は更に深くなるのであります。かくして花は散り春は逝て初夏の頃となれば、追々暑さの加はるに隨つて、青葉の山は一層さわやかな翠巒となるのであります。初夏の強い明るい日光が翠巒を照して、これにぼかされる光線の色は、青くとろけた液體を見るやうな感覺は、まるで水中にでも居る様な心持がするのでございます。

先生

もう都會はソロ〳〵暑苦しい時に向つて、葉櫻の下蔭が大分賑はしくなつたでありませう。彼の赫

◎晩春の高原より　大霜

◎晩春の高原より　大霜

灼たる炎帝が猛威を振つて、ジリ〳〵と屋上の瓦石をさかし、イラ〳〵として大道の土をこがす盛夏の有様が想像されます。併しながら我高原にありては、如何に炎熱の烈しい盛夏の頃でも、太陽の光熱はかの萬年雪に吸收せらるゝのと、山野の翠綠や、流るゝ清水に緩和されますから、さほど炎熱に苦しむやうなことはありません。綠葉の上を渡る清風は、夏日田野に出でゝ一心に働く、農夫の汗を吹き拂つて、彼等の奮闘努力に對する勞を慰めるのであります。夏の夕、そよふく風に浴衣を翻らせながら、清泉の苔を踏んで、綠蔭の間を逍遙する時の、清凉の感は黃塵の都會に於ては、容易にこれを味ふ事が出來まいと思ひます。

私はこんなにキビ〳〵した綠葉の色や、美しい山水に富んだ我高原は、常に煤煙と塵埃の中に住んで居る都會の人には、此の上もない慰安の場所であらうと思つて居ます。と同時に私は高原の自然美や、これを友として生を送る自分たちの境遇を、（たとへ物質的快樂や、名譽等の滿足がなくとも）一種の誇りとして居るのであります。

現在私の住んで居る所は、水の美しい高原川に沿ふて、船津町より上り三里半、平湯温泉より下り五里半の一小村落にて、僅か掌大なる段丘の上に數戸の人家が極めて無造作に建てられてゐるのであります。春を祝福する高原川の水は、各戸の門前を訪れて蓼々と太平の皷（つゞみ）をうち鳴らしながら、面白さうに流れてゐます、屋後には美しい峰巒が重り合つて、春の生を歡喜する鳥の聲が讃美歌のやうに聞へます。かやうに山と川との懷合（ふところあひ）に抱かれて居る自分たちの耳は年中、鳥の鳴く聲と、蓼々たる水聲とを聞かぬ日とては一日も無いのであります。

私共の樂しき一日は全くこれら自然の音樂によつて明け、またこれによつて暮れるので、春夜枕頭に響きくる水の音に、幾度かまぎかなる夢を破られて聞き馴れた耳にも、雨かとさへ疑はれるのであります。或は高く、低く、或は遠くなり、近くなりて音樂的リズムをおびた水聲が、うとうとゝしてい

夢幻の境を辿りつゝある吾々の耳朶に響く時、何者かゞ天外にあつて、ひそひそと何事をか囁くやうに思はれます。

先生

高原川の沿岸にはかなり多くの村落や、耕地があるために、水の美しさは双六谷の水に比して、幾分の遜色はありますが、流域の風景に至つては、何れともいひ兼ねるので、さしたる徑庭はあるまいと思ひます。只兩者の性質から云ふと、双六谷の沈靜的なるに比して、高原川は暢達の氣があつて如何にもノンビリとした感じを與へます。また彼の森嚴なるに對して、是は開放的であります。風景の勝地としては、平湯大瀧を始めとして、白谷、寶橋々畔、杖石、簑石などの佳境が數多くあるのでございます。就中平湯大瀧は日本アルプスの大屏風を張り廻はした眞只中にあつて、海拔四千五百尺の雲表より落ち來る壯觀は、如何にも男性的な高原川の權威を代表してゐるのです。懸崖數丈の絶壁より落ち來る水の威力や、岩に激して咆哮する反響のこだまは、千軍萬馬を驅つて、これを叱咤する如く、嘲る如く、或は霧の如きしぶきが濛々とたちのぼつて虹霓を吐くさまは、深奥を閃めかす暗示の如く、或は吾人を呪ふ惡魔の毒舌にも似て、其壯嚴の態、深奥の閃きは、弱小無力なる吾人をして殆んど絶望的の感を抱かしむるのであります。ペンの力も茲に到つては、只木偶の如く、唖者の如く、吾々は凡ゆる武器を拋棄し、赤裸々となつて大自然の前にヒレ伏すより外はないのであります。大言壯語といふも、獅子吼といふも、そはこれら大自然の威力に對して何等の權威も反響もないことを悟るのであります。私は自然の神が、斯かる大威力の裡にも、あらゆる藝術美の配合と調和を無意味に終らしめなかつた妙術に對して、深く敬意を表するものであります。夏の青葉や、秋の紅葉は、悽絶なる瀧の眺めをして、最も美化せしむべき衣裳だと思ひます。壯嚴な冬の瀧も、目下若葉や床しい花の色に包まれて、輕いレースをかけたるが如く、秀麗な姿となつてゐます。

◎晩春の高原より　大霜

◎晩春の高原より　大霜

これより潺湲たる水聲を聞きながら、溪流の美と、山岳の美とを恣にして道を下るに隨ひ、境は移り、景は變りて、船津町に到る行程八里の間、行人をして草鞋の紐を結ぶ遑さへ、與へないのであります。この中に最も行人の眼を惹くものは、杖石の風景にて、巨人の如き奇巖怪石が何千年の昔より、風雨の浸蝕を排し、水の消磨作用に反抗して、嚴として高原川の河中に屹立する態度は、如何に無常の魔力も、運命の呪ひも、我に對して、何等の反響もなき事を喞けるやうであります。其の川に面する側は鋭利なる刀物を以て截斷されたる如く、何者と雖も此處より攀登するを許さずといふやうに、殆んど垂直をなして高原川の激突に反抗してゐます。然し背面には松檜等の常緑木が繁茂して纔に頂上まで攀登することが出來ます。頂上には辨財天を祀つた小祠が鎭座されて、數流の紅白の幟が春風に繞られてゆら〳〵としてゐます。そして一方には水田開け、一方は白い河床となり、此の間に青い松並木があつて、其絶佳なる風景は、詩人墨客をして俯仰徙倚せしめずにはおきません。

高原川の一偉觀たる硫黄ヶ岳の噴煙は、春の青空に濛々として立ちあがつてゐます。此の外乃木大將の筆になつた『皇威輝八紘』の五大文字を彫刻した字書岩など、吾人の周圍には幾多の誇るべき詩材やローマンスが圍繞してゐるのであります。此の間、純朴にして人情に、風俗に、ありのまゝに、ローカルカラを現した村落が點綴して、平和な春は前後左右より、ニコヤカに彼等の茅屋を訪れてゐます。桃の花咲く里の光や、陽炎ゆらぐ野のひゞきは、吾々の靈肉と同化し共鳴して、絶えず新陳代謝する四季の眺めは、幸にも此の高原をして終世の樂園地と定め、浮華な都會生活を慕ふ隙を與へないのであります。

雪の武石峠

別所梅之助

信濃町から

一時間たつかたゝぬに、もう大晦日といふ冬の夜ふけの停車場、金剛杖に草鞋ばきの私たちを、登山客よと認めて、學生々活をすましたばかりの青年紳士が、M君に何かと話しかける。『はじめて武石峠へゆくのです』とのM君の答に、青年紳士は、自分の經驗からいろ〳〵注意をして下された。『武石峠は今零度ほどの寒さでせう。松本で眞綿を買つて、頸に捲いておいでなさい。懐爐をもつてお出でなさい。腰と足とを冷さねば大丈夫です。金剛杖はよい物をもつてお出でなされた。あぶない時には、それをナイフで削つて、白樺の皮をむいて火をおつけなさい、きつと焚火がもえつきます、下手をやるとあの邊でも死にますからな。猿などが出ていたづらをしますから、新聞紙を澤山もつていつてマッチでそれを燃しておふりなさい。あいつはあの臭をいやがりますからな。』

氣のいゝM君は、『死にますからな』が、氣になつたらしい。紳士に別れてからも、それをきいてゐた。『危い』それは東京にゐたつてだ。天の下のいづちに、人を流さぬ川があらうぞ。またいづちに人を呑まぬ地があらうぞM君よりは、はるかに要愼深い扮裝ながら、私はいつもの心で答へた。

甲斐の山々

小佛こえて、はや私たちは雪の國にはいつてゐた。闇にもしるき白雪の上に、光が時に投げられる。

◎雪の武石峠　別所

◎譽の武石峠　別所

ぎつしり詰つた三等車に眠られぬまゝ、スチームに曇るガラス窓から、見えぬ外の面を窺つたり、乘合と一二の言を交しなどする。靑島がへりの砲兵たち、甲斐出身の豫後備らしきが、意氣あがつての手柄話、英兵の弱さつたらお話にならないまで、聲高に談るに、私もすこしくうけ答へした。

甲府を過ぎて、わが來し方の東の空うすく禿げゆき、薄靄、紫に、紅にたゞよふかたへに、富士はをぐらく、柔かく浮いてゐた。高き金峯山は定かならねど、茅が嶽、金が嶽一帶の近山は、釜無川の低地をまへに、仙女いますらん島にも似たる姿、薄紫の色、わが夢の色。ゆくてに高きは、曾遊の八ヶ嶽——その赤嶽、横嶽、硫黄嶽以下、銀甲つけて、そゝり立つ。空は次第に晴れて山々も鮮かに現れる。左の窓からは、地藏、鳳凰、駒の三山、あれよ、これよと、M君がさす。あゝ駒か。そのいかつい肩は、旭日をうけて、矢のやうな光を放つ。銀、さういふ底ぐもつた色でない。白金の線もて編んだあのよろひ、あの光、あの目を射る光の中に、私は包まれたいのだ。

かの光、われをさゝんH日ほゝゑみて見ざりし國にうつりゆかまし。

眼ざといM君がさす方に、深い雪の山、甲斐の白峯——北岳だらうだ。この國しらす峻嶺は、嚴として群山の後にそびえてゐるのだ。

車室のうちは大部すいた。私たちは寛いでこの大景に接してゐた。八ヶ岳をあとにして、諏訪湖に添ひゆくころから、空はどんよりこして來た。白いものがちら〳〵落ちそめた。きけば隔日ぐらゐに降るとの事、すこし氣が沈む。天龍川の川べをゆけば、畑に桑の枝は束ねられ、田の面の薄氷れるに子どもはスケートをしてゐる。藁鞋はいてゆく里人を車窓より見まもり。ゆくうちに鉢伏山右手に現れ、桔梗が原に落葉松寒げに立つてゐた。

松本で小さい馬車に乘りかへた私たちは、曇つた空の下を淺間へ、十二時ごろ西石川の二階に通り、一風呂浴びて休むうちに雨、それが雪に變つて、高原の寒さが身にこたへる。信州にはじめて入つた

M君は、炬燵櫓の上に廣盆しいて、焜爐のせての鳥鍋をめづらしがつてゐた。

一たび武石峠へ

雪もよひの空、それに元日のお雜煮おそく、十一時すぎにやつと宿を出た。一路たゞ東へと。案内者は去年の雪の多かつた事、腰まであつて、あがきがとれず、美術學校の人の供をして、朝の十時に宿をたつたが武石峠へいつたら、とつぷり日がくれ、小屋に一泊したといふやうな事など話す。宿でも八九時間の道程といつたれど、險なりとも思はれぬ往復六里弱の道、何程の事かあらんと足をあげる。澤をいつて、淺間のものゝ水汲むといふあたりに外套をぬぎ、雪ふみしめてのぼりゆく。尾根に出ても陰鬱な空、近山のほかは見えず、溪間の黑松は雪をいたゞいて、足下ちかくならんでゐる。M君がお正月らしいといふ。足あとさして、『誰か登つた人があるね』といへば『この上で、いま木を切つてゐるから、その柮でせう』と、案内者が答へる。セイシン坂すぎ、山邊みちに會する事二度、尾根をわたり、谷間に網はつて、小鳥とる男にあつた。すつぽりと頰かぶり、腕ぐみして、つくねんと立つてゐたその男が、私をみて『藁をかけねえでは、つめたからう』といふ。M君も、私も、草鞋のほかに、足に藁をつけてゐなかつたのだ。案内者がもう半分道きたらうかと尋ねると、まだだと答へる。おしかぶさるやうな空を、私たちは望もなく進んでいつた。雪の山。一時もすぎた、二時も過ぎた。夜に入つては、これまでの路に少し危くおもはれる所もあつた。案内者は峠の小舍にたしかに泊れるといひ、M君もとまつてよささうだつたが、見わたす空に明日のよき兆しめすものは、露ないので、私はかへる方がよいと言ひ出した。三時、私たちはもと來し方へと引きかへした。賽の河原で蜜柑をたべて、降り路をぐん〳〵おりた。いつか落葉松おふるあたりまできた。ドイツあたりのクリスマスの書みたやうなとM君とかたるに、梢の雪がさら〳〵と落ちて顏にかゝる。西山は二三ヶ所、今

◎雪の武石峠　別所

◎雪の武石峠　別所

し雪をふらしてゐるのか、西北の天には黒い幕が垂れかゝつて、裾がふわりと山々を包んでゐた。明日も大抵だめだねと言ひながら、幾うねりして、物靜かな山邊温泉。それから乾いた田をよこぎつて淺間へ。六時すこしまはつてゐた。

二　たび武石峠へ

『きのふよりはよいね』と、宿から常念岳の鋭いピラミツト形なせる姿をながめて、私はM君にいつた。『ようござんす』『出かけるかね』『出かけませう』。九時十五分、私たちはまた草鞋をつけた。九時半、澤をのがれて尾根にいづれば早や佳境。土地の人のいふ西山は、あらかた現れてゐた。『槍はまだ見えないか』。『もつと登ると見えます』と案内者は答へた。里の天候は、『晴、北風弱』とあるが、尾根はかなりの強い風。

私は默々として、後れがちな歩を運んだ。樵夫にもあふた。きのふの小鳥とる男は、すこし低いところにをつた。ふりつんだ雪のおもてには、白金の粉が宿つてゐた。十一時澁池、十二時大曲。ふりかへる毎に、山々が數をます。並んでゐるのが穗高の三峯、かなたが御嶽。雪は次第々々に深くなつた。もう人の足跡はない。兎の足あとらしい三つ指ついたのが、かなたの谷へ、長く長く引いてゐる。足の甲だけが雪に埋まつたのは、とうの前。雪は脛に及び、膝におよび、あらぬ所に足ふみこめば、腰にすら及ばんとする。M君がさす金剛杖の手許わづかに殘る所もあつた。夏ならば何なるまじき境、しかも冬の信濃の山は、一歩ごとに私の知らぬ世界であつた。私たちはたゞもう進む。案内者は、いつか先へいつてしまつた。足の弱い私をまもりつゝ、後からM君が氣づかはしさうに辿る。足は滑る、金剛杖は流れる。雪の上ならで、雪の中を滑るのだから、きはめて緩かに、左手の谷へとおちてゆく。おちるな〳〵と思つても足がとまらぬ。それが滑稽でもあり、無念でもある。もう

五千尺以上の高み、それに尾根ゆゑ、これといふ樹も育たぬ。灌木は雪にうもれて、手がゝりにならぬ。それでも、どうやら踏止まつた。私たちは袴越山（五千七百八十尺）の胸のあたりをとほつてゐたのだ。前面とほくに、ちらとした雪の山、あとで、それを赤石だときいた。踏みこめば、づぶりと穴のあく、ばさ〳〵の雪、その雪の穴から足を抜いては、またまへの銀世界に穴をあけて、膝をするやうにしてゆく。疲れたと見える。幾度か轉んで、M君をひや〳〵させた。かくして三時ちかく峠の小舎にたどりついた。海抜六千尺。小舎は富士などの室のやうに、山かげに風をさけた細長い一つ家だつた。荷をおいて迎へに來た案内者につれられてはいつたが、榾火のめら〳〵と燃えあがるのを見るだけで、あたりが暗い。白雪の中から來た私たちの眼は、屋内の幽かな光になれるまで、何をも識別し得なかつた。

M君が、『あゝあすこに人がゐる』といふ。それが、こゝで蠶の種紙をまもつてゐる番人の爺さんだつた。柴をくべ、もつて來た餅を燒いてたべる。『お爺さん、何か食べるものがあるかね』。『何もありましねえ』。それでも、たまりをお小皿についでくれた。マタゝビの實をも出してくれた。『猫になるかな』と言ひながら、私は手のひらに受けた。私たちは幾杯となく、わりによいお茶をのんだ。もう午後の三時である。私たちは急いで下りねばならぬ。小舎の前に立つて、おぢいさんに山々を敎へて貰ふ。中村清太郎氏が、こゝで寫した畵の複寫をもつてきたので、大部わかる。白馬や、立山や、越路の方の峯には、雲が迷つてゐたけれど、有明山、燕岳、大天井、花崗石の常念坊、そのそばから抜き出た槍、なだらかな南岳、低くなつた蝶ヶ岳、高い穗高、乘鞍、御嶽、木曾駒と、雪をまとうた群嶺は、備をなして天の一方を限つてゐる。右手は越後、越中、正面は信濃、飛驒、左手は甲斐、駿河。見わたす山々は、やゝ遠い距離を保つて、へりくだつてゐた。しかも彼らは、雪もて、風もて、おのれを守り、おのれの境をまもつてゐた。知らず、あの澤は何を收め、あの峯は何をといてゐるのだら

◎雪の武石峠　別所

う。山は答へず、笑みもしない。私の足は冷えてゆく。

おそくなるのを恐れて、私は早々にもと來し方へとおりていつた。わがゆく方には、まへと同じ景、刻々にひらかれる。下りとて、さすがに來た時ほど惱まぬ。それに、さきに自分たちのつけた足あともある。たゞこの大觀をたのしむほどのゆとりに乏しい。滑らじと足ふみしめて、杖を大事につきたてる。

袴腰をも脫した。道はます〳〵樂になつた。うちむかふ連峯の白と紫とは、薄墨色にかはつてゆく。日が春つく。山の端かけて空があからむ。その紅もうすく、よどんでしまふ。風が私の頰をなぶる。春の風なら柔かになでるのだけれど、これは先陣が、つと頰を切つてゆくと、後陣がまた、すいと刺してゆく。夏なら人をもゆるしてやる。然し今この冬の王の宮居ちかく、生物とてはこゝの世界の草木も、蟲も、眠る時を、なせ、そなたは踏み込んだのだと責めるやうに吹く。私は轉がるやうに降りた。くらくなつた空を仰いで、M君は、あれが北斗だらうといふ。わらがとれてから、草鞋と足袋との間にはさまる雪の珠になやまされる。ついに足袋の紐がづれる。草鞋をはきなほさうと、雪の上に足なげ出しての手まさぐり、ゲートルも、足袋も氷つて、たやすく解けぬ。

いつか月が後から出てきた。山々がまた浮ぶ。私たちは月と雪とにてらされて、おりてゆく。松本の市街が脚下にかゞやく。人のいふなる死は爰に、人のいふなる生は彼處に、しかも壯と嚴と、美と麗と、人が自らせばめた社會の思ひおよばぬものは、わが立つ所ならずして、いづれにあるのだらう、七時すぎ、淺間の宿についた。雪中十時間。私はかなり疲れてゐた。

差切新道、山清路

木曾路に入らうといふ計畫をよして、けふは西條へとむかふ。

松本平から見あげられる連山に分れて、正午西條についた。停車場の出口に見張をしてゐる巡査に、ごこの宿がよからうかときいて、古松屋といふのに荷をおろす。山清路への案内を求むれば、『善さんと聞いて、來い、音さんごうだ』の末、ないといふ。さらばと二人は身支度して泥路をふむ。ゆく事しばし案内者を求めえて、雪斑なる聖山をのぞみつゝ、縣道を進む事二十町ほど、左、郡道、差切新道と、石のみちしるべあるところより折れて、すた〳〵仁熊、細田、赤松と、麻績川にそうて、やや降り道。

洗つた足袋がつまるとて、M君は頻りに足をいたがる。草鞋も二度切つた。一時五十分差切についた。岩は聳え、瀧は氷つてゐた。進みゆけば小トンチルいくつか。岩は奇、されど惜しいかな、景が狹い。水の色もわるい。水上に炭山があると案内者がいふ。私は來た路の田舍家に、『天下の絶勝、差切新道繪葉書』とあつた看板をおもひ出して、笑壺に入りながら、第三紀層の礫岩らしいのを叩いて通つた。

またいくつか里をこえてゆくと、橋普請の材木のみ徒らに道を塞いで、橋桁すらない所がある。小さい川ながら頗ぶる足場がわるい。道からわりに深い川床へとおりて、すぐまた上る。込地となればいくほどもなく、麻績川は犀川に流れ入る。山清路の景は、こゝにひらける。川を流す材木とむる爲口が雪の途上によこたはつてゐた。さすがに差切新道よりは廣い景、水の色も彼よりすぐれてをる。主すむといふ淵の上、必ず冠り物をとるといふ船頭もをらず、時ならねば躑躅船もない、水は青く、しづかに流れてゐた。岩は冬とて膚を露はしてゐた。岩のかげには雪と氷とが住ひ、岩のおもてには灌木が赭らんでゐた。橋をわたつて、しばらくいつて引きかへす。もう三時すこし廻つた。差切新道をゆくをりも、この度は俯向きがち、あたりはを暗くなりそめた。泥濘が足をすふ。

くらい中を大聲あげてくる男の群五六人、何者ぞとすれちがふをり、彼此互に見やれば、肩には白

◎雪の武石峠　別所

◎雪の武石峠　別所

いもの、何匹かの兎が闇に浮ぶ。獵師だつたのだ。漢詩のやうなと私は思つた。案内は、さつきから頻りに腹がへつたと訴へる、まだ食物店のある所へは出ないのだ。暇をくれといふのを、暗くつてあしもあげられないよと、すかし〳〵氷砂糖などやつて、縣道との追分までつれてきた。七時、そこで分れて、闇の中を、びしや〳〵西條へ。

長野へゆく汽車はあれどもおそくなる。まあ泊らうと、前の宿屋に草鞋をぬいた。西石川の贅澤は望むでなけれど、夜の物などの淺ましさ、湯も立たぬ。

信越線を

昨夜もすこし雪が降つたのだ。凍れる朝を長野にいつて、Kを驚かし、やまやといふ感心もせぬ旅宿に晝餐したゝめ、白馬山におくられ、犀川よぎり、小諸のあたり淺間山を飽かず眺め、八ヶ岳、立科山をそれよと指し、落葉松の赤きに興じ、碓氷もこゆれば、曾遊の榛名、赤城の山々は、夕の空に褪赭色ににじんでゐた。

武石峠へゆかうといふ心を起させたのは中村清太郎氏の畵、途を中央線にさせたのは小島烏水氏の文のおかげです。こゝでお禮を申しあげておきたうございます。

武奈ヶ岳

水上森太郎

（比良連峯の盟主）高頭氏の山岳誌を引くと樗岳（武奈岳）近江國滋賀高島の二郡に跨る登路未詳標高四千八尺とある、陸地測量部の五萬分の地形圖では武奈ヶ岳（一三四、四）とある、伊吹に次ぐ近江第二の高峯の譯だ、北比良の村から安曇川の谷へ越す細徑が此山の肩の邊りを通じてるのが記されてある、矢張北比良から登るらしいが登路を書いた本がない樣だ、佐藤山崎兩教授の編まれた大日本地誌の近江の地形部に『比叡山脈は琵琶湖の西岸にありて高野川安曇川を其界とし南は追分驛附近につき北は安曇川の東折する所に終る、山脈の方向は湖岸及び高野安曇二川の方向と一致し西南南より東北方に走り其南部は近江山城の界をなし北部は本國内（近江）に屬す、所謂丹波地方の東緣をなすものにして、古生層及び之を貫く花崗岩によりて構成せらる。（中略）比良山（一二三二）武奈ヶ岳（一、三〇〇餘米）に於て最も高峻を極め蛇谷峯となり遂に阿彌陀峯に終る。』とある、北川靜里氏の近江名跡案內記によると西近江路の條に『比良山一に比聯山といふ云々其山脈は高島郡樗嶺に連り云云』とあり夫から、白髭神社の後が明神岳で、南小松の西が釋迦ヶ岳で、其他堂滿岳とか此連峯中の主な名を大分擧げてある。武奈又樗と書くらしい同書の同じ西近江路の部に『樗ヶ嶽は八池山の西二十餘町にあり此山は高嶺にして比良山と並べり絕頂に上れば若狹一國及び江州北郡皆眼下に見るべし』とある。

卅日に雄松へ上陸したのが午後三時頃だつた、船の甲板から比良連山を見ると花崗の白く崩れた所が所々に見えて丁度白銀の鎧でも着けた武者の樣で頗る痛快だ。上陸すると早速一人の人を捕まへて

◎武奈ヶ岳　水上

『武奈ってどれですか』と聞いたが分らない、一番右手に見える大きな塊状の奴が釋迦ヶ岳、比良川の押し出しの見える正面の大きな薙を右肩に持つた雄松から眞正面に眞西に見える、槍ヶ岳から見た常念の様な偉を具えたのが蓬雪岳だと（地圖六一〇五六にある）と云ふた、ズット左手に背が圓く蓬萊山が見える一般に比良山と云ふのは此と南の打見山とを云つてる様だ。

花さそう比良の嵐や寒からん
まのゝ浦人衣打つなり　（新古今）

等の歌はれてるのは之等の山だらう。つまり武奈は釋迦の影になつて見えないらしい。之では大に瞹昧だからもつと明確な知識を得たいものだと思つて、北比良の湖水近くの石の細工場で小學校がないかと聞いた所が南小松にあるといふ。で右北國街道に至るとある道をとつて北國街道を北行する事半里小松村の小學校を見附けて、職員室に案内された校長は親切な若い人だつた、武奈の話を持出すと登路の事はよく知らないと云ふ、近所に大塚といふ獵師が居るからとて呼んで來て下すつた。聞いて見ると『こゝから武奈は見えない。中々山が深くて未だ雪も澤山ある、石楠が咲いてるだらう。釋迦の後になつてるんだから北比良川を上つて釋迦を半周して登る。こゝから約三里だといふ。頂上からは京の三條から南はズット一目に見えるし若狹の海の白帆が勘定出來る、今は世が開けたから他にも高い山が出來たさうだが何でも日本で七つ目の高山だ』といつた。大方之は近江名所圖繪から出たのだらう、圖書には比良山（小松山ともいふ俗に比良がだけ）日本記齊明天皇記に『平山と書たるは即之なり、上に樹木なし本朝七高山の內。雪は常磐にありと』してある、亦先刻の北川氏の名跡案內にも『周回十五里廿九町日本七高山の一なり』とあつた。兎に角明日七時迄に來てもらふ事として校長に禮を述べて歸つた。

五月一日　案內は親父が差支があるといふので息子の久喜が來た。始は親父かと思つたが親父が都

合が悪いので私が來ましたと云つたのでよく見ると少し若い、隨分似た親子だ、空を見るといゝ天氣だ、湖水には小波一つ立たない對岸の長命寺の方が少し霞んでる位のもの伊吹も見える、明神崎となつて突き出してる釋迦の續きの赤味がゝつた花崗岩の露出が日を受けて輝いてる、湖水で手水を使ふ存外冷い、朝飯を濟まして天幕を茶屋に預け出立したのが八時少し過ぎ。松林を拔けて比良川を渡る、此川もこゝ湖水に注ぐ所は水が地下を大分拔けると見えて水が殆んどない。押し出された花崗の砂が美しくぶちまけられて居る、道には五月の日を受けて菫やぼけの小さいのがごつさり花をつけて居る。牛がもう田に出て鋤を引張つてる、一體西近江の牛は大きいそして尻に鈴がついてる、こいつの鳴るのがいかにも好い感を與へる。札幌でロシヤ式の馬車につけられた馬が胸の所に鈴をつけたのが有名なアカシヤ並木を駈ける時響かしたのが何となく北の新開の國に旅をしてるといつた風な旅愁をそそつたが、之は長閑な景色と和して持主の顏面にいよ〳〵春の日の夫の如くのんびりした又間の拔けた超世間的な表情を起さした。苗代に下された籾は未だ芽が出掛けた位のもの湖水を後にしつゝ北國街道を北比良の村に出た、柳屋といふのに立寄つて草鞋だの細かな物を買つた、家の後の小ぢんまりとした庭には石楠が花盛りである、琵琶湖は相變らず鏡の樣だ何かと愚圖々々して出かけたのは九時、柳屋の少し南迄來て右に林區署の制札のある道をとつて美しく手入さした赤松林に入り込む、所々に猪垣の跡が殘つてる、Y君は元來長州の人間だ昨日小學校を訪ねた時に『あの細まい石の垣の樣に久しう續いちよるのは何ですか』と尋ねた距離の形容に久しいも變な話だが俺も實は何だかしらと思つて居たが其が猪垣だつたのだ、併し今は猪も餘り出ないから只昔のゝが殘つてる丈だ相な。道は坦々と花崗の分解した砂の上についてる、德本を下りた上高地の林道を思ひ出さしめた。松は背が高くて中々に眞直で漢語で云へば亭々とか蘢々として天を磨すとか云はれる所だらう。下には『いわかゞみ』がうんとあつて今を盛りと咲いてる美い香がする。餘り淸楚な裝なので一行の無風流連迄も、一つづ

◎武奈ヶ岳　水上

◎武奈ヶ岳　水上

つ摘んでは口につけて見た。右手に比良川の音が聞える、案内者の半纏の背中の眞中に若鳴と染め抜いてあるのに氣がつく『おつさん角力でもとるのかね』と聞くと、若い時よく取つた相だ南小松の邊は今頃は若鮎がとれる——昨夜月明の下に網を引いて居たのは之だといふ——で若い衆が網を引く際に角力を取るから流行る相である。十二三町もかくして輕く登りつゝ來たと思ふ頃比良川に出て之を右岸に渡る、ふり返ると此川の押し出した砂が眞白く湖水迄うねり乍ら續くのが所々黒き迄松林に蔽はれて居る。こゝで水を飲む思つたよりも冷くて馬鹿に甘い。暫らくして今度は左岸に渡る九時四十分に暮雪岳がぬつと見え出した、大きな石を切り出したのを西近江路特有の木々切といふ丸木の大きなのを切つて車輪とした車に乘せて素敵な勢で降りて來るのに出會す。中々立派な大きな石がある。少し行くと石切場に來た、一體關西は一般にさうだが特に西近江のどの村も御影石は贅澤に使つてあるがこゝの石は立派ないゝ色の石だ、今一度丸木橋を渡つて電光形の中々急な道を登り出す。下らない雜木林しかない。日は遠慮なく照つて汗がだく〳〵出る、例の木々切の車を分解して十六、七、位の男の兒が車臺を御母さんらしいのが車輪を頭にのつけて持つて上るのに追付く、男の兒は始め見た時は女かと思つた、一所に休んで一所に話し乍ら登る。山に切り出した薪をとりに行くのだ相で一日四五回許りすると云つた。こういふ人々は自然といふ何の用捨もない奴と面と向つて生活の爲に戰つてるのだ、俺はこんなナイーフな人々が好きだ、彼等の無智は都の人の猾智より勝つてる、フアンド、シユクルの風が吹き荒ぶ世には正直と親切といふ美徳は彼等によつてのみ示される。もつと上ると暮雪岳に手が屆き相になる右の肩から下が花崗岩が露出しているのに烈しく日が照つて目が眩しくなる、N君が暮雪の寫眞をとる、やがて二人の人の仕事場に來た薪が切り出してある、こゝで別れを云つて登るが道は段々急になるし日は愈々暑くなる、兩側に石楠があるが花がまだ咲かない、十時十分に尾根へ出る上りは大分樂になつたが武奈はまだ見えない。駄辯を弄しつゝ「イワウチワ」『イワナシ』が可憐の花をつけ

てるのが見え出して右手は釋迦ヶ岳の懐なる谷、覗き込むと眞白くなつた薙が物凄い、小舍のある所から少し下り氣味に行くと始めて武奈が全容を見せて呉れた。帽子をとつて大きな聲を出して呼んで見た何だか嬉しかつた、大體馬鞍に似た形をして居て前山とも云ふべきに可成り澤山殘雪が見える、足下には「イツパオウレン」や「イワナシ」『ミヤマカダバミ』『イワウチワ」の花盛り近江の山には餘程低いのに「イワウチワ」が生えて居る。一體高山植物位美しい可憐のものが又と有らうか之こそ最も天に近く、輝く天日が其帝座を移して夜の帳が音なく下りて、やがて御空の無數の星宿に此大きな帳を止める金の鋲の様に數多の星が輝き初める時此星と語らう者は高山植物の他はなからう、天界の精氣と靈氣とを受けて大くなつた此花は比ふるに物なき優しき姿を罪深き地上の人には容易に見せないで、汚れし人の世を漸時なりとも見捨てゝ高山の頂を訪ふ巡禮にのみ見せると定められたに違ひない。夫でなくば何故にこんなに美しくあり得やう。こゝで漸時休んで十一時五分に出た。右は叢林であるがやがて道にちよろ〳〵と水が流れる、之が琵琶湖に注ぐ加茂川の水上である。始めは足の濡れるのを恐れたのではない。水を汚すを恐れて跨いでは歩いたけれども後には水も増したので蹤迄浸り乍ら歩く。少つと下ると流は道と離れた。左手に廣つぱがあつて鬱に曲りくねつた木が奇怪な様をなして茂つて所々水溜がある、下を流れる水もおつとりと淀んだ様に見えるが夫で可成の速さで流れて行くと見えて、見てると空氣の波動が水面から生じる。魔女の黒髪とも見ゆる水草が水に梳らるゝまゝ其身を任せて其先が動く度に眞白な花崗の砂の川床が露はれる。「サンショウオ」でも住んで居相だ、此んな曲つた黒ずんだ叢の木と水草と水面の起す波動とは俺れの心に鏡花の小説を思ひ出させた。彼の小説にあるといふのではない、何だか出さうだといふのである、此ミステイクな場所を包んでる眞晝の靜寂は誰もの心を捕へねば已まなかつた。川と別れると、先は少し上りになつて十一時二十五分に道が二つ分れた所に來た流が道を横切つて下に向つて去るのがある。ミヅゴケの白く赤ッ茶けたがまじつてるのがあ

◎武奈ヶ岳　水上

◎武奈ヶ岳　水上

る、右は山越に安曇川の谷へ、左は武奈に至る道である路傍の一本杉の下に不用の物品を預けて左をとつて川床の美しい澤に沿つて上る、水はいかにもリズミカルに流れて活き〳〵してる。所々道はすつかり雪に埋められて居る。雪の上を歩いて行く事しばし此澤をはなれてうね〳〵と上る「エンレイソウ」がアラビヤ夜話にでも出る妖女の様な、それでも何處か楚々たる花をつけて頂垂れて居る。林は何の木か知らないが餘り大きな木はない。葉もなければ未だ芽さへ出ないが立並ぶ其白い肌を見ると御伽噺に出る森の精靈の白髪と、三角になつた尖んがつた帽子とが今にも目の前に現はれ相だ、落葉の下には蘚苔類がしぼみ切つた様になつて居る。今登つてる所が始めて武奈を見た時の前山だ。振り返れば加茂川の流れる平野へ菜の花美しく紺碧色の太湖が木立を通して窺はれる。今迄の内で一等大きな二町位の殘雪を渡る木は皆雪に押さへられて居た故だらう妙に傾いて曲つてる。これを過ぎると武奈の直下に來た山前と彼との中間の凹地を越す道も分らない、全山禿山で短い笹が生えてる様だ、北の彼を鞍にたとへ最高點を前壺と見て南の端に見える立木を目當にひた登りに登つた。背へ出ると安曇川が眞白く流れるのが最先に目に入る、北の最高點を目指して一散に走つて十二時十分に三角點に着いた櫓は跡方も見えない。

安曇川が水の飛沫迄見え相だ。此方面の斜面は如何にも急である一寸流に沿ふ川合の村の人家が數へられ相だ。夫から先は丹波の山又山が無數に重なり合つて少し南にかけて愛岩山がこゝからは例の特長ある頂も著しく其特色は滅びた。比良連山の暮雪は見えない。蓬萊山が圓い背面を見せる、雪が少し見える。先刻の登路は田原藤太の退治た三上山の百疋もかくやと許りにうね〳〵と見える。昨日の話に京の三條から下は一目に見えるといつたが合憎や今日は春霞ゆるく引いて古都の姿は見られない。東の方は眼下に湖水を見る、野洲川の平野に菜の花と覺しく夢の様な平野に黄色く四邊形をいくつも限つた。伊吹に連り北北東と見た所に白銀の條嚴めしく越前の山が連る、案内は中にも高いのを

七十ヶ岳だと云つた、湖水の中の竹生島多景島は手にとる如く、此山脈のつきる加茂川の流域には菜花が美しい、湖面は鏡の様だと云ふには輪廓が夢の様だ、餘りに非現實的である、無心に去來する白雲は魔者の如くに其影を投じた。野洲川の附近に聳ゆる三上山を初め湖面一帶に薄く弱く春の日が此花崗岩の國に映ずる所近江の國は唯傳說の國ロマンテイクの國として見えた、北に若狹の海が我面に觸れん許りに橫はる、海の微風は我頰を撫でんずる様だ、あの暗綠の海こそは神代近き古い時代に我大和民族が三韓諸國と往來した航路だ遠き昔の勇武なりし我等が祖先は此怪奇な海を通して我等が心に浮んだ。近江の國が平安朝的の背景を有つたサーヶの國たる可く適當するならば此海は北歐の神話的傳說やノルマン人の勇を象徵して居る。俺は何だかエーテルの香をかひだ様に感覺が銳く惑亂する、眼下に觀た自然から起る波動的衝擊を感ずる様な五感以外の第六感的の感覺が一即奏をなして頭の中に騷亂する迄の快感を與へる。山上の俺は偉大である。そして幸福である。俺は俺の身內を流動するエランヴイタルを感ずる。足下の世界には探偵なんて十蛇より醜い者が居るし黃色い顏に「トルブの筒」をのつけて、曲つた足に世界の流行後れのズボンをつけた、紳士だの、此頃の溫氣に手袋とショールで武裝した令孃や頭を眞中から分けた「改良貴夫人」等が、僞善の競爭をやつてるのだ。

頂上で飯を食ふ、フーワリと浮いた白雲がいかにも呑氣の相だ、風がそんなに無いので少し暑い位だ。下りかけたのは一時、丹波の山に山火事の煙が上るのを見た。逆落しに下りて凹地の立木の下に休んでると後の連中が下りて來るI君が滑つた一間許り滑走をやつた、殘雪の上で武奈を後にN君が撮影する。先刻荷物をおいた分れ道迄來て今度は右の方をとつて鹿ヶ瀨指して下る、少し行くと安曇川へ越す道と分れ道になつてる、右をとると、ゆるやかな降りとなるミヤマカタバミが多い、イワウチワも劣らずある、大した林もない、道の兩側は武藏野によく見る雜木林位のものだ、俺れは降りが嫌ひだ、槍を蒲田へ降た時には耳がガアンとしたのを覺えてる。一里許り下つた所に、今迄の流がすつ

◎武奈ヶ岳　水上

◎武奈ヶ岳　水上　六四

かり集つて仕舞つて可成りの澤をなしてるのが前を横切る。こゝが此山の名所だ相だ、花崗の大きな直徑一、二、間位の石が轉つてる。石楠が下の谷の方へヌッとさし出て眞盛に咲いてる、立木の枝に第三番といふ札がブラ下つてる。此の名所は皆んで（一）魚止＝鮎鱒等凡て魚類はこれ以上泳ぎ上れないと云ふので。（二）障子ヶ淵、（三）空戸淵、（四）大擂鉢、（五）小擂鉢、（六）屏風淵、（七）貴船淵、（八）七返廻瀧である。八ッある相だ、下から數へてつまり段々に瀧となり其淵が流れて瀧となつてるのだ。何しろ一見しようと云ふので身輕にして上流へ向けて登る、次が大擂鉢此兩者の間は日光の瀧頭の瀧つた風だ、其から上の屏風淵は大きな岩が屏風の如く突立つてる工合昇仙峽の仙峨の瀧の邊を極めて小規模にしたと見る、何して道が險しいのと見る場所が狹いから、感心は出來ない。でも大溝町の邊からは爰より來るといふ。一番御仕舞にあるのが、七返廻瀧で對岸の洞の樣な所に天然に出來た不動樣がある、案内にヒントを與へられて見ると成程よく出來てる。

引返して山の端を廻り乍ら降る所々山櫻が咲いてる、人通の稀な通りに美人に出會つた樣な氣がする、又躑躅が美しい。松林を通りて鹿の瀨の村はづれに來たのは四時、山から里へ出ると一種がつかりした樣なホットした樣な人懷つこい樣な氣がする所詮は、矢張人の子はソシャルピーイングなんだらう。田圃は鋤かれてないのが多い、村へは入らず、小白谷より右折して釋迦ヶ岳の北の北腹なる寒風峠にかゝる赤土山で松林の下は笹原になつてる道が惡い、小流をしば〳〵渡る、皆空腹となつたので、大分疲れて來た、此峠を越すと湖水が見えると思てたのに上に來ても覗えない、上は平が大分續いて笹原の中の道に所々石が隱れて谷を歩き惡い、夫に川があのでびしよ〳〵してる、續いて行くと今度は凉峠だと云ふ湖水が見える、道がスッカリ崩れて居るが、急いで降りる、つまり歸路は釋迦ヶ岳を北に半周してる事になる。

案内が風穴を見せると云つて探して居だがそうだと云つたのを見ると手首の這入る位の穴だつた成程

浮し相な風が出る、御定りの電光形の石ころ道を下りるのも大分難義だ、此峠を半分許り下りた所に楊梅（やまもゝ）の瀧が見える、日はスッカリ西山の端に入つた、寒風峠と涼峠の間の平を流れて居た水が集つてこれへ落ちるのだ、二段に折れて落ちてる、之は船で湖上を通る時見える瀧だ、最早六時近くだ、湖上を大湖汽船の船が通る汽笛が聞える。釋迦も中々頑固な肌をしてる急ぎ氣味に下りる、松の可成大きいのがボツ〳〵生えてる、降り終つて北國街道へ出たのは六時過、空腹は鐘聲を張り上げて歌ひつつ空元氣をつけて、楊梅瀧の下流に架した瀧川（たきかは）橋を渡り南小松を抜ける、案内をかへしY君とN君は、こゝから直ぐ雄松へ行つて天幕を張る事とし後三人は北比良に廻つて預けて置いた物をとりに行く。うすれ行く湖面から來る風もうすら寒い。全く腹が空いた。北比良を出ると日もトップリ暮れた、雄松崎の天幕に歸つたのは八時近く、湖上に小波一つ起らない。仰げば樹間より大熊座の王光、開陽と尾を引いた先にアルクチユルスが一際光つて見えた、月は未だ出ない。

「結尾」武奈ヶ岳は京都邊を中心として土曜の午後から日曜へかけての登山に丁度いゝ山だと思ふ、高さも京都の近くでは一等高いし眺望もいゝし、登山其者の興味も山らしい點も、同じ京都附近にある金剛山等よりは遙に勝れて居る。登路は安曇川の方から即ち裏面からも登れる相だが、大體次の様なものと見て差支なからう。

○雄松崎の汽船發着所より半里にして北比良——武奈ヶ岳〔約三里、三時間半あれば充分ならん。即ち比良川を登り釋迦岳を南に半週して加茂川の水上を登る路〕

○雄松崎より半里にして南小松——涼峠——寒風峠——鹿ヶ瀬——武奈ヶ岳〔涼峠と寒風峠とは還路なり南小松より鹿ヶ瀬迄約二里、こゝより頂上迄同じく二里、大溝より鹿ヶ瀬迄亦二里といふ〕

○大溝……

雄松へは大津から汽船が毎日定時に出る、時間は約二時間かゝる、景色は中々いゝ、昔は比良川の三角州だつたのだから、花崗の崩れた砂地で、松林に覆はれた少つと舞子に似た様な所で水の美しい事無類だ、汽船の棧橋の近くに茶店が一軒あるきりだが泊まる事は出來る、小鮎

◎武奈ヶ岳　水上

のとれる所で此頃は夜地引の様な網を引いてる、若鮎のあめだきは大概こゝから供給する相だ、今は北海道から臺灣へも販路を有すると云つて居た、鱒もとれるし、ウゴイ等も多くて甘い。池は縣の養魚場だ相で之を隔てゝ比良の連峯が連つてるのを望む、所謂比良山の登り口たる木戸へは南一里半、北に二里行けば明神崎に日髙神社あり又湖西の一勝地だ、更に北半里強で大溝町だ、こゝも汽船が着く、町はづれの瑞雪院といふ彈寺に近藤重藏翁の墓がある、北一里の加茂河畔の小川村には藤樹先生の遺趾藤樹書院があり先生遺愛の藤は巨大なる老樹となつて居る、すぐ近所の玉林寺に墓がある。

涼峠の中腹の楊梅の瀑は、天文十二年足利義輝、比良小松に遊び關白二條晴良と共に此瀑を見て名づくと名所圖繪には出てる。南小松にも北比良にも宿屋はある、比良のは柳屋と云ひ割に美麗らしい。一體西近江は人氣がいゝ、皆顏の表情でも分るが親切で氣持がいゝ、一向近江泥棒だの、關西の贅六風の所はない。案内は北比良南小松に得られる、七、八十錢位だ、無くてもいゝが迷ひ易い道がないでもない。（終）

近江國打見山と蓬萊山を極むるの記

中原繁之助

「山岳」の目次を一瞥すると、決つたやうに歷々たる高山の記事のみに限られてゐる、日本アルプスならでは、山でないと云ふ風に見える、其中に近畿地方の低い山。日本アルプスには、足下へもよりつけないやうな山、寧ろ丘の記事を、仰々しく書きならべるのは、いさゝか出つ張りすぎた感がない

でもないやうに覺はれるが、山は必ずしも高きを以て尊しとせず、其内容の豐富にして、其得る所の大なるを以て尊しとするのであると、自ら滿足して、こゝに近江の比良山を、展開しやうとするのである。

五月の一日、三高山岳會の連中五人が、比良の最高峯武奈ヶ岳に登つた（前題記事參照）翌二日の事である、他の四人は、湖岸を北に進んで、藤樹先生等のお墓參りをすると云ふ、我輩山猿は、古の人のお墓參り等は以ての外の贅澤にすぎる、猿は只猿の職分として、山をかき登ればよいのだと思はれたので、猿はこゝ雄松で四人を殘して、打見山蓬萊山を極めやうと決心したのであつた、武奈の記事は既に記されたから、重複するは面白くない、只其後の行動を日記の内より拔き取る事とする。

* * * * * *

天幕の夜の明けるのは、一層早いものだ、明るくなつた東の湖をうけた雄松の濱、猿の起き出でたのは、まだ他の四人の、夜中の五時頃であつた。

夢の樣に淡い東の山の中に、先づ目についた山が一つ、廣い裾を曳いて、其頭が四つに別れてゐるのが、何とも云ひしれぬ好い感じを先づ與へた、猿は直覺的に、御嶽だと叫んだ、日が其勢力範圍を刻々に擴張して來るに從つて、山の輪廓が浮き上つて來て、其後から、後からと、高い山が顏を出して來る、遂に彼の一萬尺を越した御嶽が、關ヶ原の難所よりも、尙西に在り、且僅か千米突餘の靈仙山に見違へられたのは、少しあはれに過ぎた感がある。

七時半頃、此村の小學校の先生で同行希望の爲め、案內者久太郎と合せて三人は天幕を出發した、三十日の夜、雄松に來る途中、船の中から大雪溪を見誤つて、小躍した、あの白い花崗岩のザラを右に見ながら、途を南へ〳〵と約一里半、木戸村のはづれから、いよ〳〵山に入るのである。

稍もすれば、悪くなりさうな天候を、それでも晴れるだらう、晴れてくれゝばよい等、考へながら、初めから可成急な、ヂックザックを登つて行く。枯れ枝のクシャ〳〵したのを、大きい束にして、小さい脊の上から兩翼を張らせながら、輕さうにスタ〳〵と下つて來る可愛い小娘がある。早や朝から一と仕事をかせいで來たのだらう、久太郎が『早いなア、どこまで上つて來たのか』と聲をかけると、小娘も仲々慣れたもので『〇〇まで』と簡單に答へながら、そのまゝ、スタ〳〵と過ぎ去つてしまつた。久太郎も、其〇〇が何處だかわからなかつたくせに、わかつたやうな顏付きをしてゐたのが、おかしかつた。

ヂックザックの一端に出る度毎に、太湖の模型が少しづゝ、遠ざかつて行くやうに見え、又ウンと仰天して見た山が、一つ一つ湖面の下に、壓へつけられて來る、あゝ又あの高い天邊も、湖の下になつてしまふのかなアと、思ひながら、初めから同じやうな急斜を登つて行く、空の曇つてゐたお蔭か、あまり汗の出る苦を嘗めなかつたのが、まだ幸であつた。やつと尾根に出たと思ふと、今までふさがつてゐた北方面が、スラリと見える、少し進んで今度は、山の北中腹を、一とうねり廻ると、花崗岩の崩壞した絶壁が、足元から延びて、對岸の大物山の方にまで、つゞいてゐる。丁度鑿で切り取つたやうに、大きい擂鉢形を作つて、其一脈が大物山から、暮雪岳、それから二泊した雄松のつい西に聳えてゐた釋迦岳へと、翼を延ばして、遂に湖に落ち込んでゐる、大物山と暮雪岳との間に、僅か頭を出してゐる高い峯が見える、初めは何だらうと思つてゐたが、すぐ其後、それが前日の武奈ヶ岳であると知れた時は、一種妙な懷しみが浮んで來るのを覺えた。禿だらけの山の彼方に、一寸綠濃き武奈の姿、あゝ何とおくゆかしく、映つた事であらう、どうかして暗箱に收めたいと、種々位置を求めたが、どうも思はしくないので、一と休みの後、この鑿の跡をのこして進んでゆく、すぐ其道の曲つた凹みの所から、一層細まつた路が、左の山の間に登つてゐる、此れをたどつてゆくのである、少し登ると、

左側に湖がパッと開ける、太湖汽船が、南からも、ほら北からも、油のやうな湖面を、蟻のはふよりも、尚のろく落付きはらつて、今しもすれちがはうとしてゐる。船の中央あたりから、白い一條が立ち登つた、他の船からも出た、そしてやつとした後に、かすかな汽笛が一つ、又一つと遅れ走せる、山を越えて、猿の耳に這入つた、何とまあ暖い景色なんだらう、山の春は俗地の春の比でない、よく『山に登つて何が面白い？體のつかれるばかりぢやないか』と、尋ねる人があつて、其度毎に猿は山の面白さ愉快さの説明に困るのであつたが、この邊の低い山で、この山の春を見せただけでも、以上の質問者に『なーる程』と、開いた口を閉ぢさせずにをる事が出來るだらうと思はれるのだ、まして高山深谷に於てをやだ。これを思ふと、登山を嘲笑するもの、登山に反對する者等は、寧ろあはれまずには居られない。

こんな考が終るか了らぬに、細い道を石切場のやうな絶壁の内に突入して、もうこれ以上、如何な猿も登り得ないと思はれた、止むを得ず、少し退却して、傾斜の鈍さうな所を、無暗矢鱈にかき登つて、いよ〳〵猿の本領を發揮する、雜木の身長を過ゆる事二倍、横にヌッと手を擴げた枝の間に足を入れてみたり、これではたまらんと又ひつこめてみたり、茨にポケットを裂かれ、手を掻かれ、クマザヽの株を足の血に染め、猿もこゝに至つて久太郎に遅れる事甚しく、二三町の奮闘に三十分の餘を費して、やつときりぬけた所が、蓬萊山の頂になつてゐるのだ、やれ〳〵と思つた刹那、今までの困難は、全く忘れてしまつて『あゝ痛快な道だ』と頭にひらめいた。

ごく手近に一本の傾いた棒が立つてゐる、打見山を見る事が出來る、ポツリ〳〵と三箇所に大きい雪の塊をはりつけて、東半面が恐しくけづり取られたやうに落ち込んでゐるのが、目覺しい光景である、只だ其頂上が、鈍いカーヴで、空と界して、少しも峨々とした形のないのが、打見山にとつて可哀さうに感ずる點である。丸で大きい鍋を而も眞青な苔の生えた鍋を下向けたやうな形をしてゐる、

◎近江國打見山と蓬萊山を極むるの記　中原

眼を右にまはすと、あの瘤のやうな森のある愛宕の山から鬼の住つてゐた大江山、丹波の海の淡い色から北の方にはなつかしい武奈の峯、湖は多景色から辨天さんに名高い竹生島等が田舍の古い芦の生えた溜池の浮草のやうにたゞやうてゐる、白山が見えぬかと求めた末にどうもそれらしいと思はれるぼんやりした形が見えるやうでもあつた、若し誰かゞ『いやあれは白山ぢやない』と云ふ人があつたらば猿ゝ白山ではないと賛成したかも知れない程沓然たるものであつた、伊吹山に例の靈仙山は確かに見えたが本當の御嶽は確かに見えなかつた、久太郎の云ふ所によると御嶽は伊吹の右肩に白山は左に秋冬によく見えるさうだ。

湖水の上にウラ〳〵と白い雲の塊が湧き初めた、いよ〳〵變な天氣になつて來た、とに角眺望の利く間に打見の頂上に行かうとあせつた、蓬萊山から打見へは少し下つて其倍程登ればよい程に蓬萊山はつまらぬ峯であつた、けれども打見山の全景を見るには蓬萊山に越した場所はない。

尾根をつたつて行けばよいのに、雪を踏んで登りたさに少し尾根から入り込んだ爲めに、又雜木のひどい間を進まねばならなかつた、丁度蓬萊山の登り口のやうに、それでも半町ばかりつゞいてゐた雪の上を登つた時は、アルプスの雪溪をたどつてゐるやうな心持ちであつた。

去年の十一月、雪降る日に登つた八屋戸からの道に出た頃から、灌木が無くなつて一二尺、高くて三尺位のクマザゝばかりとなつたので餘程歩み易くなる、打見山（一一七四、三米）頂上に着いたのは十二時半頃であつた、眺望は蓬萊山のそれに大差はない、只南方面に比叡山から琵琶湖の瀨田川となつて細まつて行く處迄が手に取るやうに見える『大阪の天神橋から此山が見えると云ふが見た事があるか』との久太郎の質問には少なからず弱らされてしまつた。京の街が碁盤目のやうに見えるのは事實だと云ふが此日はそれさへ出來なかつた。天候は益々險惡になつて今にも雲に包まれさうに思はれたので、先づ武奈方面の撮影を了へてから晝飯を使つた、見る〳〵内に足元から雲が湧いて早や四方

何一つ見えなくなり、飯の了る頃から雨さへ降り出して來た。

一體比良には雲は付きものであるかの如く打見に登つて三度共雨に出逢つたと云ふ事も聞いてゐる。

一體比良には雲は付きものであるかの如く打見に登つて三度共雨に出逢つたと云ふ事も聞いてゐる。

參謀本部の地圖によると一一七四、三米突の最高を打見山と命名してゐる、しかし此土地の者に打見山なる名稱を試みに尋ねてみるに殆んど誰も知らない、勿論あまり多くの人に尋ねてみたわけでもないから不幸にして打見山なる者を知らない者に限つて質問を發した爲であるかも知れないが、猿が質問を發したのはそれでも七八人に上つてゐる、其人等が皆打見山の存在を認めてゐないと云ふ事から考へてみると。して又其つい下の谷を打見谷と云つてゐる事からして考へてみると、或は參謀本部の測量者が打見谷を聞き誤つて打見山と記したのではなからうかとも思はれる、此邊の土地の者は皆地圖にある打見山に蓬萊山なる名稱を與へ蓬萊山に對しては別に名を與へてゐない、又考へてみると地圖にある蓬萊山は打見山から獨立して聳えてゐると云ふわけでもなく、打見よりはずつと下つてはゐるが、尾根づたひに殆んど登る事なく達し得る程のもので寧ろ一つの肩の如き有樣であるから、或はこれに對して名が無いのが本當であるかも知れないと考へられない事もない、而し折角打見山蓬萊山と命名されてゐるものを破壞しやうと考へてゐるわけではない、唯打見への登山の際に打見山なるものが、彼等の所謂蓬萊山であると云ふ事を、念頭に置いてゐる事が必要であると云ふ事を明かにしておきたいばかりである。

扨一體比良山なるものは何れの山を云ふかと調べてみると、北より

武奈ヶ岳	一二一四、四米突
釋迦岳	一〇六〇、六
暮雪岳	一〇五六、〇

◎近江國打見山と蓬萊山を極むるの記　中原

大物山（道滿山）　一〇七六、七
蓬萊山　一一〇三、〇
打見山（土人は蓬萊山と云ふ）　一一七四、三
權現山　九九五、〇

先づ此れ等を總稱して比良山と云ふのである、而し此内、武奈ヶ岳打見山の外には登るだけの價値がないと云はねばならぬのは少々殘念である。

雨のためにびしよぬれとなつた猿は尙南へと途を進めた、權現山と打見山との間にある孝女郎ヶ池を極めやうとしたからである、雲のかゝらなかつた前に一寸見當をつけておいたので、兎に角其の方へと歩を進めた、前方二三十間程廣い下り坂の外何一つ見えない中で池をさがし當てやうと云ふのだから甚だ心細い次第である、一寸した高みへ出た時にそれからの尾根を右に取つた、やゝしてから誰からの口から『池の方角はこんな方ぢやない』と云ひ出した、もつと右だらうとか左だらうとか意見まち〳〵となつて來た、久太郎もあまりはつきりした答をせないので益々心細さは感ずるやうになつて來た、尾根の端へと出て下をのぞいてみやうとしたが、右に行つても左に行つても仲々下の方が見える所に出て來ない、假令下をのぞき得る場所に來た所で、この雲の爲めに池の所在を見定めると云ふ事の到底不可能は知れ切つた事であつたのに、しかし迷つた時の常として不可能の内から何かを求めたらとあせつたのであつた。

周圍は依然として暗い『池から飛んでもない方に下つてしまつて池へ出るには又元へうんと登らねばならぬだらう』とか『いや〳〵池へはまだ半分道も來てゐないのだ』とか色々の議論が百出して案内者もこゝに至つて迷つてしまつた體である。さあ事だ。猿は思つた此山はさう深い山ではないから、左へ〳〵と取つて行けば湖の方に出るべき者であつて、又決して生命に關する山ではないとは知つて

ゐたが只比良の西方面に下る事を恐れた、若し西に下つたとすれば京都の町に至るに六七里。まあ一寸一日の行程であるから、さもなくば再び比良を横斷して湖の方角に出る必要がある、何れにしても大變だから兎に角池に達すると否とに拘はらず湖水の方面に道を見付け次第下る事としやうと弱腰に出かけた、然るに久太郎はどこまでも池に出やうと主張する、出來なければ打見の頂上に戻つて改めて方向を定めて下りなほさうと云ふ、隨分亂暴に聞えたものだ、僕等は案内者が此山に對しては全く登つた經驗の無いにも拘らず、案内と云ふ名のために無理な冒險を犯してゐるのであるとしか考へられなかつた、何れにしても少し逆行をしやうと云ふ事になつて一町程も登つたと思ふ頃、ありがたい事には雲が一時に晴れ渡つた事であつた、ほつと地獄の底から助けられたやうな氣持ちに立ち歸つてやつと胸をかき下したのは、後になつて大笑の種となつたのであつた。

池は見えた、而かもまだズーッと向ふに見えてゐる、尾根も確かに知り得たのでもう大丈夫と又三度同じ道を下り始めた、二三分も過ぎたか過ぎぬに又元の暗となつてしまつた。

しかし確かめた道は再び疑を入れる事なしに驀進して遂に孝女郎ヶ池に達する事を得た、此池については面白い傳説がある、ざつと書いてみると、昔此つい下の南船路村に久右衛門お孝と云ふ夫婦があつた、或日のこと此村でも稀な程美しいお孝がふとした事から、此池の主に魅入られて以來、毎夜毎夜夫の寢入るのを見濟ませてそつと二里に近い山路を通ひ出した、其後久右衛門が此事を知つて何うかして元に返したいと小供を背に負ひながら妻の跡をつけて行つた、所がお孝も跡をつけられてゐるのを知つて、谷の彼方から自身の片眼をえぐり取つて夫へのかたみとして與へ遂に池の中に身を躍らせたと云ふ、池の邊りにある白い二つの石がお孝の使つたものであるとして夫れ夫れ鏡石、枕石等と稱けられてゐる、又眼をえぐつてかたみとした以來、此池に住む蛙と蠑螈（いもり）とは片眼しかないと云ふので、案内者は一つためしてやらうなんて云ひながら、一疋の蠑螈を捕へて檢査に及んだ所が、立派

に兩眼を供へて居つたのに一同苦笑せざるを得なかつた。

池は可成り大きいもので面積二町歩もあるかと思はれた、後に低い山をひかへて青い上に青い影を落してどことなくすごいやうな感じを與へる、久太郎は『冬に西洋人をつれて來た時此池の氷上を、「お孝女、この下にゐるお孝女」等思ひ〳〵に叫びながら走りあるき踏みまはしたのだ』と大に得意滿面の體であつた。

雨は絶えず降りつゞいてゐた、三時半頃此池から左へと下つた、杉、檜の多いのは此道の特長である、雨の爲めに雲のために杉のボーッとぼかされた所は、丁度日本畫のそれの通り、靜かな匂ひと涼しい色合とを送つて來る。

四時四十分南船路の村に一と休みと、茶屋の主さんと話等してゐる內に例の池の傳說を又聞かされた、片眼の件に至つて久太郎爺が得意になつていもりの兩眼を證明した事の主の答が振つてゐた、『さあ〳〵〳〵昔は片眼であつたのだけれどもが、御維新からはもうそんな事もなやうになりまして……』これには一同『ぐう』の音も出なかつた。

こゝで西村氏と久太郎とに北と南に別れて、和進から汽船で家にと急いだ。一五—五—二二

わが郷國の山々

古家實三

私は貴重な紙面を借りて、郷國播磨の山々を少しく紹介したいと思ふ。その前に少しく播磨の地勢

に就て說明して置く必要がある、遠い國の人々は播磨といへば米を澤山産する平原ばかりの土地だと想像するであらう、而し其實播磨は比較的複雜な地形を成したそして可成り山の少くない土地なのである。

海岸には平野が横たはつて稻田や鹽田が連つて居る。米は隨分澤山産するが近頃はだん〳〵工業地に變化しやうとして居る。工場の煙突が二三年毎に一本程づゝふえて麗しい空に石炭瓦斯殖民地を造らうとしてゐる。『春といへば霞みにけりな昨日まで波間に見えし淡路島山』(古今集)といひ『有明の月は波間に影見えて浦風遠し淡路島山』(新千歲集)といひ、古い歌人のなつかしげに眺めた淡路島の優しい姿も黑い煙にいたく眺望を傷けられて、海岸地方特有の風致が失はれて、文明の恩惠が今更怨めしくなることもあるのだ。

東播地方は高原的の地形を成して飯盛野、靑野ヶ原廣野、淨土寺野などいふ可成り廣い原野が平地から一段高く、並行的に斷續してゐる。高原と高原との間にはゆるやかな流れを中心とした田畑村落が錯雜してゐる。是等高原は大抵松林を以て蔽はれてゐて稀に一軒二軒若しくは二三軒の小さい藁屋が淋しい部落を作つてゐる。そしてこの高原の地質が赤土に角のとれた丸い小石を多く混じて居る點から考へて見ると、比較的新らしい時代に地殼の變動があつて河底又は低海の隆起したものかと思はれる。斷つて置くが私は地質學者ではないから間違つてゐるかも知れぬ。

中央部は山と稱へるには少し憚るやうな小丘(二三百尺乃至一千尺位)が不規律に連亘して多くは秩父古成層らしい岩山や赤土白土の肌が美しく顯れた禿山である。そして赤松氏の一族の築いた城や砦の跡が山頂に殘つて城山の字名(あざな)を有するものが少くない。城山は大抵頂が偏平に成つてゐるから平地から眺めてもよく知れるのが多い。是等は少しく心あるものにゞれ程鄉土史的趣味を起させるか知れない。

◎わが鄉國の山々　古家

西播地方は中國山脈から支脈が並行的に南走して殆んど海岸に達してゐる。其中には黑尾山、船越山、七種山、雪彦山、洞ヶ嶽、書寫山等千五六百尺乃至二千五六百尺の名山がある。(播磨での)北方は中國山脈が東西に連つて少しづゝ南方へ支脈を延してゐる。かやうな地勢であるから海岸地方、中央部及び東播地方からは、中國山脈や西播の小山脈が恰も屛風を立て廻らしたやうによく見えるのである。

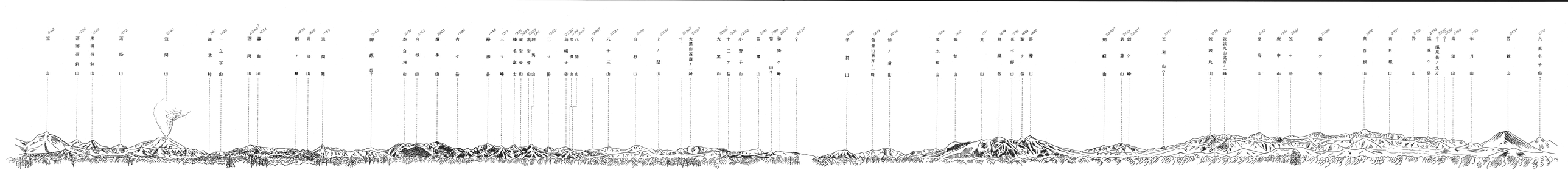
地勢の說明は此位に止めて置いて、もういゝ加減に山の話に移らなければ讀者に對して相濟まぬ。さて播磨には隅から隅まで探しても四千尺以上の山嶽は殆んどない(日本風景論に海拔一千六百五十米の菅野山を但馬播磨因幡の境上のやうに書いてあるが、菅野山は但馬因幡の境に在つて播磨は全く外れてゐる)

若し是を本誌に現はれた歷々の諸高山に比較したならばまるで角力にもならないが、山は低いからと云つて必ずしも捨てたものではない。木有るを以て貴しとすと古人も云つて居るのではないか。

中國山脈の幹線を成して居る主要な山々は、何れも三千尺以上の高さを有して居るが、別段取り立てゝ書く程のものもない。私は主として森林を有する山々を紹介したい考へであるが、悲しいかな太初以來斧鉞不入の大森林にして近年伐採し盡されたるもの多く、現今では老木大樹を以て誇り得る山は笠形山一名播磨富士を殘すばかりになつてしまつた。私は主としてこの山の事を書いて見やうと思ふのである。

笠形山(一名播磨富士)

笠形山は播磨の中央から少しく北に偏した位置にあつて神崎、多可、加西の三郡に誇つてゐる、海拔は三千餘尺に過ぎないが高山の少い播磨に在つては割合に高く感せられる、私の住つて居るのは加


642 笠 山
1286 西 穂 高 岳 山
1245 東 穂 高 岳 山
1012 霊 仙 山
1342 浅 間 山
940 横 岳 鉾 1423 一 之 字 山
1340 2340 西 穂 高 岳 山 1354 蝶 ケ 岳 山
1430 槍 ノ 穂 高 峠 1396 北 穂 高 山 1787 涸 沢 岳
1440 御 嶽 山 ?
1178 本 白 根 山 1562 白 根 山 2305 燧 ケ 手 山 1282 杏 ノ 吉 ケ 岳
1445 越 後 駒 ケ 岳 1377 三 ツ 岳 1360 1380 1320 1340 1401 1329 1341 1342 二 ッ 岳 1342 2220 2234 2217 2207 2227 2217 2207 鳥 帽 子 岳 2407 ? 2034 八 ヶ 岳 連 峰 2040 白 砂 山 2153 上 ノ 間 山
2030? 2030? ? 2030? 大 黒 山 西 肩 ノ 頭 2033 ?
2060? 2021 2018 大 黒 山 十 二 ヶ 岳 小 野 子 山
2345 2330 雷 鳥 ? 2030 槍 ヶ 岳 山 ? 2030 槍 ヶ 岳
2346 子 持 山
2043 仙 ノ 倉 山 2016 仙 ノ 倉 山
1854 1830 1771 1779 1489 1828 1779 1489 1828 黒 檜 山 1779 1489 1828 鷹 ノ 巣 山 1779 1489 1828 駒 ケ 岳 1779 1489 1828 越 後 ? 駒 ケ 岳 1779 1489 1828 荒 沢 岳 1771 1779 1489 1828 巻 機 山 1779 1489 1828 越 後 ? 駒 ケ 岳 1779 1489 1828 越 後 ? 駒 ケ 岳 1779 1489 1828 越 後 ? 駒 ケ 岳

西郡の南端であつて笠形山の麓までは六里ばかりの距離がある、方角は眞北に當つてゐる。宅からは善坊山（赤松氏の城趾）といふ岩山に隔てられて見えないが、半里ばかり行つて善坊山の尾を廻ると笠形山はなつかしい姿を見せてゐる。初めて笠形の姿の見える處は池の畔りで、そのあたりには可愛らしい松林が連つてゐて、村の小學校がテカ〳〵と光る瓦の屋根と白壁とを半ば現して居る、その後方に愛宕山、普光寺山其他一千尺内外の群山を踏へて一段高く聳えた秀麗な峯がそれである、笠形山は線の和らかな女性的な山で頂邊の形が檜笠に似てゐる。

眼の働きといふものは妙なもので、實際自分がまだ立山や信飛境の諸高山の姿に接しなかつた頃は、この播磨富士はよほど崇高にも雄大にも見えたものだが、今はたゞ優しい山とのみ見えるのである。

小學校に通つてゐた頃は毎日その姿を仰がぬ日はなかつたので深い印象を止めてゐる、今でも山といふ詞を聞いたり山といふ文字を見たりすると不知不識の間に播磨富士の姿が頭の中に浮んでゐる。竹柏園集の中に誰やらが『山といへば先づ故郷の赤城山山の姿の目に浮ぶかな』と詠んだ歌があつたが、誰しも山とか川とかいへば幼い時から印象の深い故郷の山や川の姿が思ひ出されるものだ。尋常小學校時代に年長の友から笠形山には大きな森のある事や、絶頂から北海道の見える事や珍しい草木のある事や、猪の居る事や冬雪の澤山降る事や眞偽混淆に聞かされて少なからず好奇心を動がして居た。二十歳の頃或る事情で學校の傍に二年ばかり居つた事がある。その頃は天然美に憧憬れて特に山嶽を絶愛してゐたものだから——勿論今もその心は變らぬけれども——播磨富士の景色は毎日熱心に眺めた。

冬の間時々降り積つた雪もすつかり消えてしまつて背後の中國山脈の頂邊に小さく白い斑點を殘すばかりになると、春霞は得たり顔に笠形を包んでしまつて恰も煙を結晶させた様な淡い色にしてしまふ。新緑の頃になると天氣の模様に因てぽつと夢のやうに霞んだり或は薄墨色にはつきりと輪廓を描

◎わが鄕國の山々　古家

いたり（雨降り前の曇つた日などに多い）又は森林帶の暗綠色と草木帶雜木林帶の新しい青色とを劃然（くつきり）と染めわけて糸のやうな白い細い殘雲を二筋三筋漂はせたり（雨の霽れた翌日などに多い）などする。梅雨期に入ると氣象の變化が多くて雲の運動が烈しいから山の姿は實に千變萬化するといつてもよい。雲が笠形の半腹を傳つて東の方丹波境の山をめがけて流れて行けばもう梅雨は霽れてしまふ、若し反對に東から來る雲が半腹をかすめて西へ西へと行くと、雨はいくらでも止めどなく降るのである。

梅雨が上つて黃金色の麥畑が一樣に青田に化してしまふ頃になると比較的山色の鮮かな日が多い。夏の眞盛りになると定つたやうに早朝暫くの間よくはれて紫色を美しく彩り、程なく雲が麓の谷からむら〳〵と昇上して半身を包んでしまふ。そして十時頃には再び晴れてしまふ。日盛りには薄藍色に見えてゐるが、午後二三時頃になると山の背後から光を帶びた白い雲が、むら〳〵と危峯を擡げて崩れたり湧いて出たり、廣がつたり、延び上つたりさま〴〵の變化を盡すのも面白い、日が沒して殘照をあびせかけ華やかに雲が彩られたのは心ゆくばかり麗しいものだ。その薄紅の彩雲が青みがゝつた山々の色と配合するから、一層審美的の價値を增すのだ。小山に挾まれた小平野が黃金の波を漂はせて、ック〳〵ボーシの聲が淋しいとも賑やかともわからぬ響を傳へる頃になると、笠形山は一日一日と鮮やかさを加へて來る。秋も半ばを過ぎると左方半面の雜木林帶が次第に色付いて遠くからは鳶色に見え、常磐木から成る大森林帶も幾らかは色調を更める。この頃は距離が半分になつたかと思はれる程鮮やかになつて、一しほなつかしい心地がする。

十一月の末になつて人々がお寒うございますなアと挨拶をする頃になると、笠形山背後の中國山脈は頂上に冷さうなものを白く光らせて、寒國の遠征軍の急先鋒か何ぞのやうに人間を威しに來る、中國の雪は極めて現金な降り方をする、山一重南と北とでは其分量がよほど違つてゐる。中國山脈から纔か四五里南の笠形山は同じ高さでも降雪の量はずつと少い。中國山脈各峯の頂上が稍重々しげになな

つて吾々の村里で『昨夜は霙が降つた』といふやうにならなければ笠形山は雪を戴かない。鉛色の寒さうな雲が北の空から押し寄せて次第に天を蔽ひ、晩方から寒風が吹き頻つて粉雪がちら〳〵と降つて來る、『昨夜はどうも寒ふて辛抱が出來なんだぢやないか』なんどといつて出かけて見ると、笠形は初めて雪の洗禮を受けて全身眞つ白になつてゐる、そんな時は初めて播磨富士といふ名稱に意義を生じたやうな氣持がする。それでも三日も照れば雪はもう頂邊に引揚げてしまふ、冬の半ばに天氣が續いて笠形の雪はもう全く消えてしまつたと思つても、登つて見ると熊笹の中に隨分雪が隱れてゐて、足の支度が充分でなければとても登れない。

私は播磨富士の四季に於ける眺望の變化を概畧書いて見たが、同じ季節にでも日々にその眺めは多少の變化があり、一日の中にも朝暾夕暉の作用や、雲の去來に隨つて形容色彩に變化のあるのは勿論の事で、何も此山に限つたわけでないから拙い筆を弄するにも及ぶまい、兎に角播磨の大部分は笠形山を中心として天然が活動し、生命を有せる大畫幅を展覽させてゐる。

笠形山の森林

私は今日までに前後五回笠形に登つた春一回、夏一回、秋一回、冬二回——各季節に於ける山中の特色を味はゝむが爲に——その中一回は村の青年會員七八名を伴ひ、一回は小學校の生徒六名を伴ひ、他の三回は單身であつた。

初めて登つた時には森林帶の樹木の偉大にして莊嚴なのに驚いた。杉、檜、栂、樅はこの大森林を作せる主な樹木であるが殊に杉には驚くべき大木がある。周圍三丈六尺を有する一本杉と名づくる名木を筆頭として二丈五六尺廻りのものは少くない。二丈內外のものに至つては頗る多い。而して驚くべきは、單に太いといふ點ではなくて長く延びて居る事である。高さ二百尺以上のものが隨分多い。下

から見上げたならば梢が遙々と見える位である。神聖な老木を換算的に評することはあまり好ましくないが、土地の人々の語る所に據ると五本杉と呼ばれてゐる中の特に優れたのは二本で一萬圓の價は慥かにあるさうだ。一本二千圓以上のものは決して珍らしくないといふ。

私は全國の山林を悉く跋渉したわけでないから獨斷的な事は云へないけれども、臺灣は別として內地の深山幽谷中にもこの位見事な大木を有する森林はさう澤山はあるまいと思ふ。奈良の春日野や、伊勢の神苑や、高野山の奥の院や、日光抔には古い杉、太い杉は、隨分あるけれどもあんなに長いのはない。但馬の妙見山は杉の大木を以て聞えてゐるが笠形のには及ばぬといふ事である。木曾の山中はいざ知らず私の狹い經驗では劍山、石槌山、立山、岩木山、霧島山、大峯山脈、熊野の諸山、彦山、大山等の山林に於ても笠形の森林程莊嚴なのは見た事がない。美觀といふ點からいへば立山の五葉坂あたりの美林には或は一步を讓るかも知れないけれども……

林中に一名木の栂（つが）の大木がある。里稱千本栂と呼んで地上五六間のところから幹が三十本ばかりに別れて、それが何れも略同じ太さに發達して居る。隨分奇觀である。里人の話には、あの栂一本で普通の家一軒を建てる材料には餘る程であるさうだ。

笠形の森林は麓から半腹まで續いて居る。大木のあるのは比較的上の方である。そして山麓附近が却てさほどに大きくない。森林中に神崎郡牛尾村の鄕社八幡神社がある。數棟の社殿が何れも古雅で頗る樣式の異つた建方である。自分のやうな素人ではわからぬが頗る捨て難い趣味のある建方であると思つていつでもつく〳〵と眺めるのである。笠形の森林は福永氏の所有に係る一部の植林帶を除いて他は悉く國有林である、國有林の面積は十三町ばかりで殆んど古代のまゝの天然林である。

先年笠形の國有林を下戻しやうとして行政訴訟を起したものがあつた。原告は牛尾村の素封家牛尾氏の老主人で、下戻しの理由とする所は祖先某が牛尾一帶の土地を支配して居つた頃今の森林地に植

林をしたもので、爾來牛尾家の所有になつてゐた筈のものが維新改革の際、國有林に編入されてしまつたものであると。

この牛尾氏といふのは現今零落して居るが、宏大な邸宅だけが昔の面影を止めて居るさうである。

處が此行政訴訟たるや實は或る山師連が同人を種に使つて陰謀を企てたものである。其頃全國に山林に關する行政訴訟が多かつたのは諸君も御存知の事と思ふ。

然るに證據として提出した古文書が僞造であるといふ事が發覺して、共謀者は何れも刑罰を受けることになつた。氣の毒なのは牛尾の老人である。惡人どもに誘はれたばかりに遂に七十有餘の老軀を鐵窓の中に苦しむるの悲境に陷つた。この訴訟には牛尾四百戸の氏子が極力反對したさうで、それが爲めに危い處を救はれたのである、もし下戻しになつてゐたならば、今頃は痛ましくもあの大森林は伐採の慘禍を蒙つて居るであらう。

私は平素さう思ふのである、あのやうな貴重な大森林は國家の所有として永久に保護されたいものであると、何となれば民間の所有に移せば早晩賣物となつてしまふからである、大森林や美しい鎭守の森を澤山有するのは日本の大なる誇りではないか、天惠を有する熱帶の降雨地は別として、現今世界の文明國、否半開國でも大抵は美しい森林を失つて風景はいたく荒廢してゐるさうではないか、將來大森林若しくは美林が人工の美術品以上に尊重せられる樣になる事は預言して敢て憚らないのである。森や林は目を樂しましめ人の心を優美にするといふやうな單純なものではないのだ。思想を啓發せしめるものは大森林ではないか。靈性を觸發せしめるものは大森林ではないか。煩雜な文明世界の生活に疲れ、人間の虛僞に厭きた者が親の里へ還るやうな心持で自然の懷へ歸つて行く。其懷かしい自然の懷の最も具體的なのは森林ではなからうか。

笠形山の登路

最も便利なのは姫路から播但線に乘り換へて福崎驛に下車し、徒歩若しくは人力車で東北に向ふのである、山麓上牛尾の字ジケ迄は約三里、此間路は一條の溪流に沿ひ愛すべき風光である。山麓の農家に請ふて一泊し、翌早朝登るのが便利である、森林の入口に立てる白い大きな石の鳥居をくゞり、苔道を踏んで、森の中を登つて行くと二三町にして道の左に笠形寺といふのがある。尙も莊嚴な老林の間を登ること約三十町にして八幡神社に至る、社殿の横手から道を右に取つて少しく行き福永氏の植林を斜に登ること五六町、それから上は熊笹と灌木とばかりである。即ち登ること十五六町で絶頂に達する。播州鐵道龍野驛から大和村に向ひ上牛尾に踰ゆるのもいゝ。龍野驛から山麓まで約四里半。あまり人力車の便はない。又北條町から山麓までは三里半である。

笠形山絶頂の眺望

北方には中國山脈の群嶺が大波のやうに連つて、その間へ細長い溪谷が深く喰ひ入り、古風な山村が溪流を挾んで、向ひ合つて居るのが眼の下に見える、川端の小さい平地に鎭守の森が黒く茂つて居るのなどを見ると、飛び下りて行きたい程なつかしい氣がする、雞の鳴聲が聞えて來たりすると尙更である。

東及南には眼を遮る程の山がないから絶頂の眺望は隨分廣濶である。播磨平原の大部分、播磨灘、淡路島、小豆島、家島など瀨戸內海の一部分を眺め、東南は高原地を隔てゝ摩耶六甲の諸山を望み、晴れた日には河泉の山々をも雲烟の間に望み得られる、市川加古川は右と左に流れ、姫路の五層城廓もよく見えてゐる。

けれども是丈では別段特筆する程の事もないのだけれども、特に興味のあるのは冬に於ける絶頂の眺望である。西比利亞の寒風が日本海を吹き捲つて波濤を荒立たせ多量の水蒸氣を齎して山陰諸國の空を壓し、雪を下し雨を降らして中國山脈以北の天地を凄い程陰暗ならしめる、そして其間から頭の眞白い山が隱見する、是に反して南方播摩灘一帶の天地は晴れ晴れとしてゐる。こんな景色を眺めては播摩は地味氣候共に優れた如何にも上々國であるとの感が一層強くなる、而し冬登るには前にも云つたやうに雪の成るだけ少い日を選まねばならぬ。

最後に書き加へて置きたいのは、山陽線土山加古川實殿の附近から遙か北方に群を拔いてゐる笠のやうな形の山が即ち我播摩富士なのである、播摩灘からも天氣のよい日はよく見える筈だ。

諸君機會があつたら是非一度登つて見給へ、纔か三千尺位の小山では張合がないなどと輕蔑をせずに、どうか莊嚴な森林に逍遙して或る幽玄な感想に熱い涙を落して來給へ。

悲慘極まる山林衰亡史

一、清水山

私は古來保護されて來た古い森林が伐り拂はれる程悲しい事はない、それも收益をのみ目的として伐つたり植ゑたりする普通の山林ならば致し方もないが、有名な社寺を有し一國又は一地方の名勝として知られた山々で、風致に大影響を及ぼすやうな森林が、俗僧や山師連の毒手に係つて惜しげもなく坊主にされてしまふ程殘念な事はない。我鄉國の一名山御嶽山（清水山とも稱す）の如きは、この悲しむべき運命に遭遇したのである。

この山は丹波との境に在つて海拔二千尺ばかりの低い山ではあるが、山中に西國二十五番の札所な

る清水寺があるので有名である、谷文晁の日本名山圖會にも載せられて居る。

全山杉林を以て蔽はれ遠くから見ると黒々とした山であつたが、今日は見る影もなき無慘な姿に化してしまつた。

今其絶滅史をざつと書いて見ると、同山は元國有林であつたのが、去る明治三十九年頃前清水寺住職清水谷善慧氏の時代に淺野宗一郎なる者が、清水谷氏及び同山運善院住職廣友覺雄等と謀つて古文書を證據として山林下戻しの行政訴訟を起した。元來淺野は清水寺には何等の關係もないのであるが、此訴訟に奔走して若し運よく勝訴になつたならば山林を賣却し、其代價の九割を己れの所得にし殘りの一割と地面とを寺院の所有に歸せしめ、若し敗訴になつたならば費用の全部を自分で負擔しやうとの密約を結んだのである、この訴訟はどう〳〵清水寺の勝訴になつてしまつた。そこで山林は七十萬圓を以て河内富田林の越井某に賣却せらるゝことゝなつた。初め清水寺の方ではとても勝訴は覺束ないから若し敗訴に了つて多額の運動費だけを負擔せねばならぬやうな事になつては困るといふので、運よく勝訴になつたならば地面丈け其所有に歸しても莫大の利益であると思ふたから、無分別の約束を結んだのであつたが、如何に愚かな僧侶でも參謀淺野に山林賣却代價の九割も取られては折角の勝訴が何の役にも立たぬやうになるので、さう澤山はやられないといふ事になつたけれども淺野はなか〳〵承知しない。そこで清水寺は砂川某といふ代議士を仲裁に賴み、寺院の所得を四十萬圓とし淺野には三十萬圓をやることになつた。そして四十萬圓の內砂川代議士に報酬として十萬圓を贈り、植林費及び堂宇の修繕費として二十萬圓を充て殘りの十萬圓を基本財産として積立ることになつた。

かくて音に聞えた大森林は境內の一部を殘して殆んど全部を伐採されることになつた。明治四十年頃から着手して昨年漸く伐つたやうな次第であるが、その間數名の死傷者を出した。

然るに悲しむべきは啻に山林がこの慘禍に逢ふて風致を全く破壞し了つたばかりでなく、昨年八月

木挽小屋から出火して旱魃に乾き切つた木屑に燃え移り吹き上る烈風に火は焔々として燃え上り、火の手は早くも堂宇附近に押し寄せた。水に乏しい山頂の事ではあり、殊に旱り續きに乾き切つた際ではあり、如何ともすること能はず、只寶物や重要な書類器具などを取り出して地上に積み上げ、せめてそれ丈けなりとも火の難を免れしめやうとつとめた、見る〳〵火は堂宇に燃え移り火の粉は飛び散つて名に負ふ大伽藍も悉く烏有に歸した。燒失した建物の中には池二位の建立に係る藥師堂、聖武天皇建立に係る大講堂、推古天皇建立に係る根本堂、源賴朝建立に係る阿彌陀堂等貴重なる古建築物鐘樓講法堂に至るまで殘らず燒き拂ひ、尙厭かずして地上に積み上げて火を避けやうした寶物古文書器具をも燒いてしまつた。噫何たる慘禍であらう。

世人は罵つて木を伐つた罰だといつた。まさか自分の木を伐られた腹癒せに自分の家を燒くやうな愚かな佛樣もおはさぬであらうが、何にしても殘念な事ではないか。

境內に殘してあつた杉の大木も生ながら火をあびて、今では立枯れのあはれな姿となり滿山殺風景の極をつくしてゐる。

二、七種山衰亡史

七種山は神崎郡に在る危峯である、山中に七種の瀑があるので播磨では譬きわたつた名勝になつて居た。

七種の瀑は水量が少いのが缺點であるけれども高さは那智にも劣らぬ程高い。平素は玉の碎けて散るやうに落ちてゐるが雨後には轟轟たる一大瀑布と化するのである。全山樹木鬱蒼として茂り遠方からは黑々と見えてゐる先の鋭く尖つた山である。あの山には天狗が棲んでゐるのだといはれても子供ならば直ぐに信じてしまふ程凄さうな山であつた、それが數年前山麓の作門寺から行政訴訟を起して

◎わが鄉國の山々　古家

下戻になつた、結果樹木は半ば以上伐り盡されて昔の面影はなくなつた。瀑布も水源を荒されて益々見すぼらしくなつてしまつた。

行政訴訟に勝つたといふて下戻になるや否や直ぐに伐つてしまふ坊主のやり方もよくないが、如何はしい古文書を證據に國家の寶を俗僧なんかに戻してしまふ裁判官が不見識ではあるまいか、全體山林訴訟の證據品となつた古文書などは、南方熊楠先生も論せられたやうに極めて理由の薄弱なものなのだ。即ち戰國時代の武將などが寺院の衆徒の歡心を買ふために、何々山林を寄進する者也とか何々寺院の所領たるべきもの也とか都合のいゝ文句を書いて與へた反古同然のものが多いのだ。而も其武將なるものゝ中には戰國の世身を容るゝ所なくして一時寺院等に寄食し、或は大寺の庇護を受けて僅かに一身を保つて居たやうなものもあるのだ。

三、悲しむべき普光寺山の運命

普光寺山は加西郡の北部に在る千五百尺ばかりの小山に過ぎないが、其森林美と山中の古刹普光寺とを以て誇るに足るべき一勝區であつた。その山林は元國有林であつたのが、近年農商務省が力めて國有林を關係村又は所屬の社寺等に拂ひ下ぐる方針をとつたために、住職及び信徒檀中の者等が相謀つて拂下げを受けた。

そして森林の殆ど全部は賣却せられ本年の一月頃から愈々伐採に着手せられた。私は伐採せられる前心安い一僧侶に向つて其不可を說いたが、最早時機が後れた爲に如何ともする事が出來なかつた。

近頃播磨では電燈熱が非常に高く山の谷の農家に至るまで競ふて點燈してゐる、普光寺の僧侶たちも此熱に浸されて二里半を隔つる北條町の電氣會社から電氣を引いて、山門本堂坊內までも文明の光に輝き亘つてゐる。

私のやうな頭の古い男は山寺に電燈などはどうしてもよく調和してゐるとは思へない。鬱蒼とした森林中に奥深く見えてゐた古刹も今暫くすると荒涼たる禿山の半腹に星の夜にも尚電燈の光まばゆき不夜城となるであらう。伐採が初つてから木挽が澤山入り込んで來た。一日の清遊を樂まむとして杖を曳く詩人高士の影は消えて白粉臭い怪しい女が入つて來た。

獨り森林の伐採を悲しんで詩書に親しみつゝ慰藉を求めやうとしてゐられる、山中蓮花院の東谷素山師こそ氣の毒の至りである。

同山の森林賣却價格は十萬圓である、本願寺の光琳筆扉風より安いのだ、果して何れが審美的價値に於て優れてゐるであらうか。

四、其他の諸山

まだ播磨には以上の外に有名な書寫山、法花山、五峯山光明寺、增位山、周遍寺山、船越山、柳山寺等、古刹と森林とを兼ねた名山が少くないが、船越山は伐採され柳山寺の運命も危くなつてゐる、其他の諸山は今の處先づ安神であるが、法花山の如きも下戻し後訴訟費の支辨として一部分を伐採したので多少風致を損つたが、それでも現今では笠形山書寫山と共に播磨での古森林である。且つ本年からは地方の識者が相圖つて法花山保勝會を組織し風致の保護に盡さうとしてゐる。

日本山岳史料（一）

高頭式

我が邦の歴史に現はれたる山岳の記事を一束して見る意にて此稿を起せり、成るべく正史に近き材料に採る筈なれども、史眼なき余のこと故、取材を誤ることも多かるべし、但し出所は必ず明記せり。

我が邦の正史と稱するものは、過半は漢文に成れり、いま便宜上假名交りに改めたれども、平易にして原文の意を失はざるを期し、嚴格なる譯文を避けたり、素より無學の余がなせしことなれば、誤解の點も頗る多からむ、然れども事實は客、山名は主、要は如何なる書の、如何なる處に、如何なる山名の記載されあるやを明にするにあり、讀者の增訂を經て、山史の編輯に裨益する處あらば、望外の大幸なりとす。

神代及び上代の記事は、往々にして荒唐無稽の傾きあり、此等を批議するは識者の事に屬す、余は只其傳を傳ふるに努むるのみ。本部より原稿を督促さるゝこと酷だ急なり、余に登山紀行の記憶もなく、他より原稿を受くる當てもなく、貧弱なる腦力を搾りて漸く此稿をなし、纔に已れが責任を塞ぐ、讀者の寄稿を乞ふこと切なる所以なり。

神代（紀元前、年代不明）

○伊弉册尊（いざなみのみこと）、山神、大山祇神（おほやまつみのかみ）を生む。

《古事記》上、「次に山の神、御名は、大山津見の神を生みます」。《日本書記》卷一、「次に山を生む。」同上一書、「山の神等を、山祇と號す。」同上一書、「一段は是れ大山祇の神となる。」同上一書、「伊弉諾の尊、軻遇突智（火の神なり）の命を斬りて、五段となす、此れ各各五の山祇と化成す、一は則ち首、大山祇と化爲す、二は則ち身中、中山祇と化爲す、三は則ち手、麓山祇と化爲す、四は則ち腰、正勝山祇と化爲す、五は則ち足、雜山祇と化爲す、是の時、斬血、激灑して石礫、樹草を染む、此れ草木沙石の自ら火を含むの緣なり、雜、由足が麓と曰ふ、此れはヤマと云ふ、正勝、此れはマサカツと云ふ、雜、此れはシギと云ふ。」

○伊弉册尊、薨ず、出雲と伯耆の堺なる比婆山（神代の地名は不明なるものとすべし、故に強て現今の地名に當てず）に葬る。

（古事記）「かれここに伊邪那岐の命、宣り給はく、愛しき我が汝妹の命や、子の一人に易へつるかもと、宣り給ひて、御枕べに匍匐ひて哭きたまふ時に、御涙になりませる神は、香山の畝尾の本にます、御名は泣澤女の神、かれ其の神さりましゝ伊邪那美神は、出雲國のと伯耆の國の堺、比婆の山にかくしまつりき」、書紀の本文には、伊弉册尊の薨去を缺く、其の一書に曰く、「紀伊の國の熊野の有馬村に葬る」とあり。

（古事記傳）巻五「澤の眞風、寛政六年四月に、柞築の大社に詣でける路次に、比婆の山を、委く尋れ來て、語りけらく、出雲の國、能義の郡にて、同郡なる母理より、一里餘り許り西南の方なり、伯耆の國の堺にも遠からず、山は高き山にて、北の海など、よく見渡さるゝ處なり、かくて、山の上の、やゝ平なる地に、徑四五丈許りと見ゆる程、冢の如く小高き處の有て、石の齋垣を造り周らしたり、是れなむ伊邪那美の命の御陵と云り、前には拜殿もあり、近き郷々より、詣づる者、常に多し、さて其の御冢には、松の木も幾株も生たり、小竹透間もなく、高く生茂れり、凡て此のあたりは、近き里より、牛を多く野飼に放ちおく處なるを、此の御冢の篠をば、其の牛どもいさゝかも喰ことなく、又蟒蛇の此れをいたく怖るゝ事など、傳に記されたるが如し、されば詣でたる者、蟒蛇を防がむ料に、此の篠を賜はりて、持還るぞ、たわの内と云は、此山の麓なる村の名にて、峠内と書り、此の國にては、いはゆる峠を、凡て多和と云なり、又風土記の抄に、日波村と云ふ、それも此の山の麓にて、吾れ此の度、其の里より登たり、さぞ語りける、又内山の眞龍が云く、出雲風土記仁多の郡に、備後の國惠宗の郡の堺、比布山云々とある、比布山は、比羽山にて、備後に屬るか、此れ御坂山の麓山なるべし、御坂山の南は、惠宗の郡湯川なり、そこに比羽村あり、上代に御坂山を、比波山と云ひしなるべし、御坂山には、神の御門ありと、風土記に云へれば、なみならぬ山なり、國の堺は、古今變ひあることなければ、上代には此のあたりも、伯耆の堺にぞありけむと云り、これもなほよく尋れ考ふべき處なり」。

○伊弉諾尊、伊弉册尊と、出雲國泉津平坂に於て、絶縁の誓ひをなす。

（古事記）「ここに其のいも伊邪那美の命を相ひ見まく思ほして、黄泉國に追ひいでましき、乃ち殿ごより出で向へます時に、伊邪那岐の命、かたらひたまはく、愛しき我が汝妹の命、吾れ汝と作れりし國、いまだ作りをへずあれば、還へりまされと宣り給ひき、ここに伊邪那美の命の白し給はく、悔しきかも、さく來ますまでに、吾はよもつへぐひしつ（黄泉の竈にて煮炊たる物を食べる意）然れども愛しき我がなせの命、入り來ませる事かしこければ、還へりなむを、まづ具に黄泉の神と相議つらはむ、我をな視たまひそ、か

く白して、其の殿の内に還へり入りませるほど、いと久しくて待ちかね給ひき、かれ左の御角髪に插させる、ゆつゝま櫛の男柱ひとつ取り闕きて、ひとつ火ともして、入り見ます時に、蛆たかれとろゝきて、御頭には大雷なり、御胸には火雷なり、御腹には黒雷なり、御陰には折雷なり、左の御手には若雷なり、右の御手には土雷なり、左の御足には鳴雷なり、右の御足には伏雷なり、併せて八の雷神なり居りき、こゝに伊邪那岐の命、見かしこみて逃げ還りへます時に、其のいも伊邪那美の命、吾に辱ぢ見せ給ひつと白し給ひて、やがて黄泉醜女を遣して、追はしき、かれ伊邪那岐命、黒御鬘を取りて投げ給ひしかば、乃ち葡萄の實なりき、こを拾ひ食むの間に逃げいでますを、猶ほ追ひしかば、また其の右の御角髪に插させる、ゆつま櫛を引き闕きて投げうち給へば、乃ち筍なりき、こを抜き食む間に逃げいでましき、また後には、かの八の雷神に千五百の黄泉軍を副へて追はしめき、かれ御佩せる十拳劍を抜きて、後手に振りつゝ逃げ來ませるを、猶ほ追ひて黄泉平坂の坂本に到る時に、其の坂本なる桃の實を三つ取りて、待ち擊ち給ひしかば、悉に逃げ返へりき、こゝに伊邪那岐の命、桃に宣り給はく、いまし吾を助けしが如、葦原の中つ國にあらゆる青ひと草の、苦瀕に落ちて苦しまむ時に、助けてよと宣り給ひて、意富加牟豆美の命と云ふ名を賜ひき、最後に其のいも伊邪那美の命、身みづから追ひ來ましき、乃ち千引の石を其の黄泉平坂に引き塞へて、其の石を中に置きて、各々對立して事戸をわたすの時に、伊邪那美の命の白し給はく、愛しき我がなせの命、かくし給はゞ、汝の國の人草ひと日に千頭くびり殺さむと白し給ひき、こゝに伊邪那岐の命の宣り給はく、愛しき我が汝妹の命、汝しかし給はゞ、吾はや一日に千五百産屋たてゝなと宣り給ひき、是を以て一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人なも生るゝ、かれ其の伊邪那美の命を黄泉津大神と白す、亦かの追ひし及しによりて、道敷の大神と白すとも云へり、また其の黄泉坂に塞れりし石は、道反の大神とも白し、寒坐黄泉戸の大神とも白す、かれ其の所謂、黄泉平坂は、いま出雲の國のイフヤ坂なりと書紀の本文には、此事を載せず、其の一書に曰く、「然る後、伊弉諾の尊、伊弉冊の尊を追ひて、黄泉に入りて、而して之に及ぶ、共に語るの時、伊弉冊の尊の曰く、吾が夫君の尊、何ぞ來るの晩きや、吾は已に黄泉の竈を湌ひ矣、然りと雖も、吾まさに寢息せむ、請ふ之を視ること勿れと、伊弉諾の尊きかず、陰に湯津爪櫛を取りて、其の雄柱を牽折して、以て乘炬となして、而して之を見れば、則ち膿わき、虫ながる、今世の人、よる一片の火を忌み、また夜に擲げ櫛を忌む、此れ其の緣なり、時に伊弉諾の尊、大に之れ驚て曰く、吾おもはずいなしこめ汚穢の國に到る矣、乃ち急に走りて廻り歸へる、時に伊弉冊の尊、恨みて曰く、何ぞ要言を用ひずして、吾をして恥辱せしむと、乃ち泉津醜女八人を遣して、追ふて之を留めしむ、故に伊弉諾の尊、劍を抜きて背に揮ひ以て逃ぐ矣、因て黒鬘を投す、此れ即ち蒲萄と化成す、醜女みて而して採りて之を噉む、噉み了りて則ち更に追ふ、伊弉諾の尊、また湯津爪櫛を投す、此れ即ち筍と化成す、醜女また抜きて之を噉む、噉み了りて則ち更に追ふ、後に則ち伊弉冊の尊、また自ら來り追ふ、是の時、伊弉諾の尊、已に泉津平坂に到る、一に云ふ、伊弉諾の尊、乃ち大樹に向ひて放屎す、此れ即ち巨川と化成す、泉津日狭女、將

に其の水を渡らんとするの間に、伊弉諾の尊、已に泉津平坂に至り、故に便ち千人にて引く所の磐石を以て、其の坂路を塞ぎて、伊弉冊の尊と相ひ向ひて而して立ち、遂に縛要の誓（或は妻に作る）を建つ、時に伊弉冊の尊の曰く、愛なり吾夫の君、此の如く言はば、吾れ當に汝の治むる所の國民を、將に日に千頭を縊殺すべしと、伊弉諾の尊、乃ち之に報じて曰く、愛なり吾が姊、此の如く言はゞ、吾も則ち當に日に將に千五百頭を産生すべしと、因て曰く、此より過ぐること莫れと、即ち其の杖を投ず、是を岐の神と謂ふ、また其の帶を投ず、是を長道磐の神と謂ふ、また其の衣を投ず、是を煩の神と謂ふ、また其の褌を投ず、是を開囓の神と謂ふ、また其の履を投ず、是を千數の神と謂ふ、其の泉津平坂に、（普通本此下漢字二十五字あり、衍文なるが如し、故に取らず）塞ぐ所の磐石は、是を泉門塞大神と謂ふなり、またの名、道返の大神なり矣。」

（古事記傳）　巻六「伊賦夜坂は、神名帳に、出雲の國、意宇の郡、揖夜の神の社あり、此處なり、齊明紀に、五年云々、是の歲、出雲の國の造に命じて、厳神の宮を修めしむ云々、狗、死人の手臂を言屋の社に噛み置けり、とありて、分注に、言屋、此を伊浮琉と云ふ、天子の崩ずる、とあり、此の社にしも闘の兆の有けむこと、此の段と思ひ合すべし、さて此の文に二の義あり、一つには、黄泉平坂と云處は、即ち出雲の伊布夜坂のことなりと、今の人の云ふとなり、今一つには、此の黄泉平坂のことを、今は出雲の伊布夜坂と名くることなり、さて此の伊賦夜坂の、黄泉平坂なることは、當時、伊邪那岐の神の、黄泉より還り給ふ時、此の地にぞ出で給ひけむ、また出雲の國の風土記、出雲の郡、宇賀の郷の下に云く、北海の濱に磯あり、磯より西の方に窟戸あり、高さ廣さ各々六尺ばかり、窟の内に穴あり、人、得て入らず、深淺を知らざるなり、夢に此の磯の窟の邊に至るものは、必ず死す、故に俗に人、古へより今に至りて、土黄泉の坂、黄泉の穴々號するなり、とあり、此は伊賦夜坂とは、遙に隔りて、別なれど、是れも黄泉に通ふ一つの道なるべし。」（大日本地名辭書）　一〇二五頁、「按にこの坂は、伯耆の夜見島より本國に至らんには、其間に當る峻險とす、黄泉津と云ふも夜見島へ渡る津頭の義に通ず、然れども此黄泉津平坂の一語は、本來神代の所談に屬し、解釋自ら人間歷史と其趣向を異にす、今必しも究むることなし（中略）人の死して靈魂の行く處をも想像して、黄泉とは云へること明白也、凡如是の談、強て理解を求むるは、痴人の夢を語るとも一般のみ（中略）其大要を擴りて可なり。」

△青山は山岳の名にあらざれば詳記せず、素戔嗚尊の哭泣の條に、記は「其の泣き給ふ狀は、青山を枯山なす」とあり、紀には「また青山をして枯に變せしむ」とあり、同尊、昇天の條に、記には「乃ち天に參上りまします時に、山川悉に動み」とあり、紀には「天に昇るの時、溟渤これを以て鼓盪し、山岳これが爲に鳴吼す」とあり。

○天照大神、素戔嗚尊の驕暴を愠り、天石窟（あまのいはと）に幽居す、群臣、會議して神前に歌舞す、此の時、鐵を

天金山（紀には天香山に作る）に取り、鹿、及び草木を天香山（あまのかぐやま）に取りて、其の用途に充つ。

（古事記）「かれここに天照大御神、見かしこみて、天の石屋戸を閉てて、さし籠りましゝき、乃ち高天の原みな暗く、葦原の中つ國、悉に暗し、此に因りて常夜ゆく、ここに萬の神の聲は、さばへなす皆わき、萬の妖び悉に發りき、是を以て八百萬の神、天の安の河原に神つどひ集ひて、高御産巣日の神の御子に、思金の神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集へて鳴かしめて、天の安の河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛人、天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣の命に科せて、鏡を作らしめ、玉の祖の命に科せて八尺の勾璁の五百津の御すまるの珠を作らしめて、天の兒屋の命、布刀玉の命を召びて、天の香山の眞男鹿の肩を内抜きて、天の香山の天の波波迦（木の名）を取りて、占へまかなはしめて、天の香山の五百津眞賢木を根こじにこじて、上枝に八尺の勾璁の五百津の御すまるの玉を取り着け、中枝に八尺鏡を取り繋け、下枝に白和幣、青和幣を取り垂て、此の種々の物は、布刀玉の命、ふと御幣と取り持たして、天の兒屋の命、ふと祝詞ごと禱ぎ白して、天の手力男の神、御戸のわきに隱り立たして、天の宇受賣の命、天の香山の日蔭蔓を襷にかけて、天の眞折蔓を鬘として、天の香山の小竹葉を手草に結ひて、天の石屋戸に桶伏せて、蹈み轟かし、神懸りして、胷乳を掻き出で、裳緒を陰におし垂れき、かれ高天原、動きて八百萬の神ともに笑ひき、ここに天照大御神、怪しと思ほして、天の石屋戸を細目に開きて、内より宣り給へるは、吾が隱りますに因りて、天の原おのづから闇く、葦原の中つ國もみな闇けむと想ふを、なにて天の宇受賣は樂びし、また八百萬の神もろ〳〵笑ふぞと宣り給ひき、すなはち天の宇受賣、汝が命に勝りて貴き神いますが故に、唉樂樂き遊ぶと白しき、かく白す間に、天の兒屋の命、布刀玉の命、かの鏡を指し出でゝ、天照大御神に見せましつる時に、天照大御神いよ〳〵奇しと思ほして、やゝ戸より出でゝ臨みます時に、かの隱り立てる、天の手力男の神、其の御手を取りて引き出しまつりき、即ち布刀玉の命、しりくめ縄を其の御後方に引き亘して、ここより内になかへり入りましぞと白しき、かれ天照大御神いでませるの時に、高天の原も葦原の中つ國も、自ら照り明りき。」（書紀）「是の時に、天照大神、驚動して、梭を以て身を傷む、是に由て憤りを發し、乃ち天の石窟に入り、磐戸を閉して而して幽居す焉、故に六合の内、常に闇く、而して晝夜の相ひ代るを知らず、時に八百萬神、天の安の河邊に會合して、其の禱るべきの方を計る、故に思兼の神、深く謀り遠く慮りて、遂に常世の長鳴鳥を聚めて、互に長く鳴かしめ、また手力雄の神を以て、磐戸の側に立ため、而して中臣の連の遠祖、天の兒屋の命、忌部の遠祖、太玉の命、天の香山の五百箇の眞坂樹を掘りて、而して上枝に八坂瓊の五百箇の御統を懸け、中枝に八咫鏡を懸け、下枝に青和幣、白和幣を懸けて、相ひ與に其の祈禱を致す焉、また猿女の君の遠祖、天の鈿女の命、則ち手に茅纏の矛を持ち、天の石窟の前に立ち、巧に俳優を作す、また天の香山の眞坂樹を以て鬘となし、蘿なを以て手繦となし、而して火を處々に燒き、覆槽を置き、神明の憑り談るか顯はす、是の時に、天照大神、之を聞きて而して曰く、吾れこのごろ石窟に閉居す、謂ふに當に豐葦原の中國は、必ず長夜となり

しなるべし、云々何ぞ天の鈿女の命の、此の如く嘻樂するものかと、乃ち御手を以て磐戸を細く開きて之を窺ふ、時に手力雄の神、則ち天照大神の手を承け奉りて、引きて而して出し奉る、是に於て、中臣の神、忌部の神、則ち界するに端出の縄を以てし、乃ち請ふて曰く、また還幸することなかれと。」同一書に曰く、「天の香山の金を採りて、以て日矛を作り。」同一書に曰く、「是に於て、天の兒屋の命、天の香山の眞坂木を掘りて」云々。《古語拾遺》「時に、天照大神、赫怒して天の石窟に入り、磐戸を閉して、而して幽居す焉、爾して乃ち六合つねに闇くして、晝夜を分たず、群神、愁ひ迷ひて手足の措くところなし、凡そ厥の庶の事、燭を燎して而して辨す、高皇産靈の神、八十萬神を天の八湍河原に會し、謝し奉るの方を議す、爰に思兼の神、深く思ひ遠く慮りて議して曰く、宜しく太玉の神をして、諸の部の神を率ゐ、和幣を造り、仍て石凝姥の命をして、天の香山の銅を取りて、以て日像の鏡を鑄らしめ、長白羽の神をして、廠を種して以て青和幣を倭さしめ、天の日鷲の神、津咋見の神をして、穀木の種、之を殖ゑて以て白和幣を作らしめ、天の羽槌雄の命をして、文布を織らしめ、謂はゆる和衣、櫛明玉の神をして、八坂瓊の五百箇御統の玉を作らしめ、手置帆負、彦狹知の二神をして、天の御量を以て、大峽、小峽の材を伐ちて、瑞の殿を造り、兼ねて御笠、及び矛盾を作らしめ、天の目一箇の神をして、雜刀、斧、及び鐵鐸を作らしめ、其の物、既に備はらば、天の香山の五百箇眞賢木を掘にして、而して上枝には玉を懸け、中枝には鏡を懸け、下枝には青和幣、白青幣を懸け、太玉の命をして、捧持して稱讃せしめ、また天の兒屋の命をして、相ひ副へて祈禱せしめ、また天の鈿女の命をして、眞辟の葛を以て鬘となし、蘿葛を以て手襁となし、竹の葉、飫憩の木の葉を以て、手草となし、手に着鐸の矛を持たし、而して石窟戸の前に於て、覆誓槽（ウケフセテと訓む、中の空虛ある槽の上にて、立ち舞ひて、蹈み響かすにて、古語拾遺の約誓の意とあるは、誤謬のよし、古事記傳に見ゆ）、庭燎を擧げて、巧に俳優を作さしめて、相ひ與に歌舞せしむべしと、是に於て、思兼の神の議に從ひ、石凝姥の神をして、日像の鏡を鑄せしむ、初度に鑄るところ少しく意に合はず、次度に鑄るところ其の狀、美麗なり、儲備すでに畢りて、具に謀る所の如くにす、爾して乃ち太玉の命、廣く厚き稱詞を以て誓して曰く、吾の捧る所の寶鏡は、明麗にして恰も汝命の如し、乞ふ戸を開きて而して御覽せよ焉と、仍て太玉の命、天の兒屋の命、共に其の祈禱を致す焉、時に天照大神、中心ひとり謂ふ、此頃われ幽居し、天の下こと〴〵く闇し、群神、何の故に此の如くに歌樂するやと、聊か戸を開きて而して之を窺ふ、爰に天の手力雄の神をして、其の扉を引き啓け、新殿に遷座せしめ、則ち天の兒屋の命、太玉の命、日の御綱を以て、其の殿に廻し懸け、大宮賣の神をして、御前に侍し、豐磐間戸の命、櫛磐間戸の命、二神をして、殿門を守衛せしむ、此の時に當りて、上天はじめて晴れ、衆々俱に相見て、面みな明白なり、手を伸べて歌舞す、相ひ與に稱へて曰く、あはれ、あな面白、あな樂し、あなさやけ、飫憩と、爾して乃ち二の神、俱に請ふて曰く、また還幸することなかれと。」

（神代物語）六四頁に、「天手力雄命、窟戸に手を掛け、力を籠めて引き開けば、烈しき力の勢ひ餘りて、窟戸は下界にぞ飛んだりけ

る、即ち信濃の國の戸隱山は、その岩窟の戸の墮ちし也、されば、其の山の戸隱神社は、手力雄命を齋き祀れり」とあり、川柳にも、信濃へは地響きがして日が當り、などありて著名なれども、未だ古記の徵すべきを見ず、故に取らず。

○祖神尊（天照太神を云ふか）、駿河國、富士山に宿せんと欲す、富士の神、應せず、乃ち常陸國、筑波山に到る、筑波の神、歡び迎ふ。

（常陸國風土記）「古老の曰く、むかし祖神尊、諸神の處を巡行して、駿河の國、福慈岳に到る、辛に日の暮るゝに遇ふ、請ふて寓宿せんと欲す、此の時、福慈の神、答へて曰く、新嘗はじめて嘗し、家内諱忌す、今日の間、冀くば堪へざるを許せと、祖神尊、恨み泣き、置りて曰く、即ち汝の親、何ぞ宿を欲せざる、汝の居る所の山は、生涯の極、冬夏とも雪霜し、冷寒かされ體へ、人民のぼらず、飲食を奠するものなけんと、更に筑波岳に登り、また寄止を請ふ、此の時、筑波の神、答へて曰く、栗甚すと雖、敢て尊旨を奉ぜずんばあらず矣と、飲食を設け、敬拜して祇承す、是に於て祖神尊、歡然として語りて曰く、愛乎我が胤、巍なるかな神宮、天地と竝び齊しく、日月と共に同じく、人民集ひ賀し、飲食富み豐ひ、代々絕ゆるなく、日々彌々榮え、千秋萬歲、遊樂きはまらざるものなりと、是を以て福慈岳は、常に雪ふりて登臨することを得ず、其の筑波岳は往き集り、歌舞し飲喫し、今に至りて絕えざるなり。

○素盞嗚尊（或は素盞嗚尊の五世孫、淚美豆奴之神（おみづぬのかみ）とも云ふ）諸洲を出雲に引き縫ふ、此の時、戕牁（船を繫ぐ杙）變じて、三瓶山、及び伯耆國の、大山となる。

（出雲風土記）「意宇と號くる所以は、國引きませる、八束水臣津野命、詔り給はく、八雲たつ出雲の國は、狹布の稚き國なるかも、初國小さく作れり、かれ作り縫はむと詔り給ひて、栲ぶすま志羅紀の三埼を、國の餘り有りやと見れば、國の餘り有りと詔り給ひて、童女の胸鉏ごらして、大魚のきだ衝き別けて、旗すゝき穗、振り別けて、三身の綱うち掛けて、霜つゞら闇耶闇耶に、河船の毛曾呂毛曾呂に、國來國來と、引き來て縫へる國は、去豆の打ち絕えよりして、八穗支豆支の御埼なり、かくて堅め立てし戕牁は、石見の國と、出雲の國との堺なる、名は、佐比賣山これなり、また持ち引ける綱は、薗の長濱これなり、また北門佐岐の國を、國の除り有りやと見れば、國の餘り有りと詔り給ひて、童女の胸鉏ごらして、大魚の支多つき別けて、はた薄は、振り別けて、三身の綱うち掛けて、しも黑葛くるやくに、河船のもそろくに、くにこくにと、引き來て縫へる國は、多久の打ち絕えよりして狹田の國これなり、また北門意岐の國を、國の餘り有りやと見れば、國の餘り有りと詔り給ひて、童女の胸鉏ごらして、大魚のきだ衝き別けて、旗すゝき穗、振り別けて、三身の綱うち掛けて、霜つゞら闇耶くるやに、河船の毛曾呂もそろに、くにこ國來と、引き來て縫へる國は、手染の打ち絕えよりして、闇見の國これなり、また高志の都々の三埼を、國の餘り有りやと見れば、國の餘り有りと詔り給ひて、童

女の胸組こらして、大魚の支太つき別けて、はた薄ほ、振り別けて、三身の綱うち掛けて、しも黒葛くるや闇耶に、河船のもそろ毛曾呂に國來くにこと、引き來て縫へる國は、三穂の三埼なり、持ち引ける綱は、夜見島これなり、固め堅てし栽柄は、伯耆の國なる大神の岳これなり、今は國引き訖へわと詔り給ひて、意宇の杜に御杖つき立てゝ、チェと詔り給ひき、かれチッと云ふ」飯田孝治氏の（神代物語）の譯文に據る、故に文化三年刻の訂正出雲風土記と少しく異れる處あり、文の大意は、出雲の國は狹き國なれば、我が力もて他の餘れる國を引き來て、出雲の國に縫ひ合せて、大なる國にせんとて、新羅の國の岬を、鋤を衝き入れて別け取れり、是れ即ち今の簸河郡小津の浦より、杵築までの間にて、御埼山の一帶の地なり、この地の海に流れざるが爲めにとて、石見と出雲の國境に、船を繋ぐ杭栅を衝き立てゝ、それに國を引き來たる綱を固く結びしが、變じて三瓶山となり、其の綱は、陸地と化して、杵築の南なる一帶の沙濱となれり、また出雲の北方、隱岐國海士郡の崎村の地を、鋤にて別け取れり、是れ即ち今の多久の里より佐太川までの地なり、また隱岐國を別け取れり、今の八束郡本庄村の邊なり、また能登の珠洲の岬を別け取れり、今の御大御所また地藏崎とも云ふ、美保灣西角の地なり、引き來りし綱は、夜見ケ濱となり、綱を結び固めし處は、大山となれりと云ふ、猶ほ詳細を知らんと欲する人は、神代物語一〇九頁以下を見るべし、同書、國引の神を素盞嗚尊となす、其の說、創見に屬するを以て、全文を載す、一一七頁「國引き坐る神、八束水臣津野命の御名を、先習みな八束水云々と訓じ、此の神は素盞嗚尊の四世の御孫、深淵水夜禮花神の御子、淤美豆奴神の御事とせり、されど是は其の訓より始めて、凡て甚しき僻言なり、八束の束は即ち握にて、髮、髮、劍、矢、稻穗などの如く、細く長き物を握り摑みて、其の長さを示す言葉なり、彼の水の如き長さもなく幅もなき物に冠らする詞にあらず、是にて八束水と訓むの謂れなき事を曉るべし、抑も八束水臣津野命と申すは、即ち八束髮臣津野命にて、素盞嗚尊の別の御號なり、日本書紀に「この時、素盞嗚尊、年已に長ず矣、また八握の鬚生たり」云々とあるを以て、御名を負せ參らせしにて、出雲國日崎御記に、「上社、八束水神、八握髮尊は、素盞嗚尊の別稱なり、蓋し八握の鬚おふるの緣なり矣」とあり、此の事、名神記にも日御碕兩本記にも見え、和漢三才圖會にも引けり、また簸河記に、素盞嗚尊の別の御號を「八束髮速佐須良命」とも見え、神社啓蒙には「八束髮速佐須良命」ともあれば、髮とも鬚とも申せりしなり、さて八束髮佐須良命と申すは、其の御鬚御髮を長く生榮させ給ふより、然名づけ參らせし御名と知られたるが、按ずるに此の八束水臣津野命と申すも、八束之髮、生津主之尊と云ふ御名義なるべし、夫は兎にもあれ角にもあれ、御名の八束水は主なる稱にて、臣津野は是れ附隨の號なり、即ち臣津野と云へる三字は單に八束水命とのみ云ふべきを、聊か其の下に附加へたる尊號に他ならず、彼の深淵之水夜禮花神の御子、淤美豆奴神とは全然異なり、即ち一は八束水臣津野命にて、一は只の淤美豆奴命なり、是に依りて、更に其の紛れ無き事を思ふべく、また彼の出雲の國に八束郡と云ふ鄉あるも、其の建國の神、素盞嗚尊の別號、即ち八束水尊の御名より起因れるをも合せ知るべし、加旃、風土記の文には、「また此の神、八雲たつ

◎日本山岳史料（一）　高頭

◎山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）　鹿子木

の語（八雲たつ出雲八重垣の御歌を云ふ）を詔ひし故に、八雲立つ出雲と云ふ」と記されたるを見るも、八束水臣津野命、即ち素盞嗚尊なる事の證とすべし、まして新羅の國、古志の國など、遠き國々を切り割きて、綱を以て引き寄せ給ふが如き、空前絶後の神業は、彼の珍御子の隨一の神、勇猛天の下に並ぶものなき、素尊にして始めて能くし給ひるにて、他神の企て及ばざる所なるをや。」

山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）

鹿子木員信

諸君——

私は今日、高野氏の御請求に依り、此處に諸君の前に立ちて『哲學上より見たる山岳の印象』と申す六ヶ敷い題の下に何か御話し申上ぐる事となつたのであります。——が正直に申しまするとと實は私にその資格は無いのであります。山岳に關して殆んど云ふに足る知識と經驗無き私が日本唯一の山岳會の、それも大會の席に臨んで、山岳の爲めには既に幾年の久しきに亘つて浮き身を窶し給ふた先輩諸君を前にして、山岳の印象に就いて彼れ此れ申すと云ふ事は、實に我ながら烏滸の至り、片腹痛き次第でありまして、恐らく何處かそのあたりで山の神が例の大口開いて笑つてゐるだらうと思ふのであります。

止せば好いのに、引き込んで居れば好いのに、御苦勞千萬にも私は此處に顏を紅らめながら立つに至つたのであります。恰かも朝日、夕日の光を受けてその岩角の肌を染むる高山々巓の朝日、夕日の榮の如くに唯だ諸君の前に顏を紅むる事が私の唯一の能事であり、私の双頰にアルペンの榮（Alpen glühn）を現はして、以て諸君にその實物敎示を爲す事が私の唯一の目的であるかの如く、私

は此處に立つに至つたのであります。

私は實に我ながら自分の爲す所が解らないのであります。何故、高野氏より御依頼のあつた時、直ちに御斷しなかつたのであらう。何故慾じ、安請合をして此苦痛を見るに至つたのであらうとは——恥を知る私の心の嘆言であります。

纏つて此の私の心を分析致しまするに、そは明かに戀する人の心であります。明らさまに我が欲する所を我と我が心に告白するの勇氣なく、併かも水の如く淡く、之れより離れ得ざる心、所謂、即かず、離れぬ心——之れ實に凡て戀する人の心の常であります。——山を戀ふ心、之れ即ち私の心の態であります。而して此の心實に私を驅つて此の壇上に屠所の羊たらしめたものであります。

かくして山に對して、高き山に對して抱く、強く深き愛——此の愛を外にして私に絶對的に此の席に臨みて諸君に語る資格は無いのであります。かくて私は此の山に對する憧憬の心を唯一の頼として少しく日頃思ふ所を諸君に語り度く思ふのであります。——從つて私の語る所が果して『哲學上より見たる山岳の印象』であるや否やは私の保證し兼ぬる所であります。序までに申し添えまするが、此の題は高野氏の命名に依るものでありまして私の創意に成るものではありませぬ。凡て題の名はその題の表はす所である思想内容の譬へば沈澱結晶せるもので無ければなりませぬ。從つて正しき題の名は私共之れを思想完結の後に待たねばならぬものであります。——併かも、私が我が精神の最も深き熱情を哲學的精神の闡明に捧ぐる者であります限り、此の精神の態度は、やがてまた私の山岳に對する態度にも影響する所無き能はざるものでありまするが故に『哲學上より見たる山岳の印象』と云ふ題は、少くも私の思想の出發點を表はすものとして餘りに掛け離れたる題でないと信じまして、高野氏の命名の儘に暫らく拜借致した次第であります。

* * * * * * *

◎山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）　鹿子木　九八

抑も、私共の思想の流は或る意味に於て之れを川の流に譬ふる事の出來るものであります。即ち川の流がその時々に常に一定の川床に沿ふて一定の岸を沿ひ、一定の岩角に觸れつゝ一定の方向に流るゝが如く、私共の心の流もまた常にその時々の傾向、趣味、目的に從つて流るゝものであります。言葉を換えて申しますれば、私共の思想、之れに伴ふ感情、努力、意志は必ずその時々に一定の興味を中心とし、之れを繞つて流れつゝあるものであります。從つて此の興味のある所、此の思想の傾向と異れる方向に、私共の思想の流を轉ずると云ふ事は實は容易ならぬ業でありまして、多くの場合失敗に終るのであります。

然るに近頃私の興味の中心を形ち作るものは何であるかと申しますれば、そは申すまでも無く先づ私の職務の課する義務であります。而して次に哲學を修むる者としての私に最も深く且つ最も重大なる意義を孕む、歷史の出來事、民族興亡の大事實。即ち歷史、國家の問題であります。此等の事實、而して事實の課する問題は、實に目下殆んど私の全心を領してゐる興味の中心點であります。

從つて此等の問題より心を側に轉ずると云ふ事は——假令私の心の背景に依然として嘗て語りし古き戀死せずして、未練の絆を投げ掛くるものありとするも——決して容易でないのであります。かくして私の正に語り出さんとする所は、今私が心行くまでに三鞭酒の如く淡きアルペン高原の空氣を吸ひ、その氷原の風に晒され、その鮮やかに躍るが如きアルペンの日光に燒かれて、背嚢背に、アルペン杖手に諸君の前に立ちて語るとは、自らその趣を異にするは洵に已むを得ない所であります。かくして私の語る所は後刻の辻村氏の生き生きせる『瑞西の旅』の序論に過ぎないものであります。

* * * * * * *

富士の麓を繞つてその莊麗なる姿を仰ぐ時、私共は屢々崇高の感に堪へず、時に涙の下るを禁じ得

ないのであります。嚴冬白雪皚々の富士の頂を望んでは、胸に悶えを持つ者は、彼處氷雪の鎖す所に我が悶々の情を消さん事を願ふも屢々であります。……

瑞西、フランス國境のユラ山麓の瑞西西北の高原より、東遙かに曇れる空を透ふしてオーバー・ベルナー・アルペンの一群その魁偉異形の輪廓を天に劃し、宛がら鬼神の一群戰を天に挑むで狂踏亂舞するが如きを望む時、生の壓迫に惱む私共の心は自らに、生の投ぐる羈絆桎梏を打ち破つて共に解脫自由の凱歌の聲を擧ぐるのであります。……

若しくは信州四つ谷の里に、今迄懸りし雲晴れて『白馬』の岩壁朝日に紅なるを見ては我が心に主觀雜多の雲霽れて我が心また高山岩壁の堅硬、不拔の力を得たるが如く感ずるのであります。……

若しくは、また、グリンデルワルド・ローゼンラウイの氷河の岸に劍を束ねし如くなる氷河の罅裂、遠く延びて永遠の黑き岩壁の間に遠く遠く連り行いて、その頂に氷の海を湛ふるを望む時、私共は寥寂、孤獨、沈默の偉大のうちより實に永遠、そのものゝ我等の心の耳に囁くあるを思ふのであります。……

遠く之れを望んでは我等の心に崇高の念、雄渾の情、泉の如く湧くを禁ずる能はざらしめ、近く之れを眺めては朗らなる心、爽けき心、雄々しき心、恰かも高山の頂、岩壁の横面を跳ぶ羚羊の如からしめ、親しくその險を踏み、その頂を究めては、一切の煩ひ、一切の繫縛、然り一切の生命の壓迫より解脫、解放して、私共を永遠の高き國に引き上ぐるもの——實に之れ高山の我等に語る不思議なる言葉であります。

昔の人は此の偉大にして不思議なる山岳の威力の前に一種の深き畏怖の情、畏敬の念を感せざるを得なかつたのであります。從つて山岳に對する一般の人心は唯だ恐ろしきもの、不可思議なるものとの一念に制せられて、生存の實際的必要に迫られざる限り、成る可く之れとの接觸を避けて、敬して

◎山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）　鹿子木

之れを遠ざけたのであります。從つて山に關する詩歌、文學も殆んど皆無と云ふ可きでありまして、假令ありとするも、そは我が萬葉集の山部赤人の『不二の歌』の如く、秀麗卓拔して何人の眼にも著しき山を――而かも外的にその雪の白きを歌へるに過ぎないのでありまして、若し不二の山そのものの威力を歌へるものありとすれば、そは高橋蟲麻呂の

不二の根は　たかみかしこみ　天雲も
いゆき　はゞかり、たなびくものを

と申す歌に表はれて居りまするが如く、その恐ろしき偉力を歌つたものに過ぎませぬ。人は未だ偉大なる山岳と友情の交を結び、若しくは之れが克服を企つるに至らなかつたのであります。碧梧桐の言葉を藉りて曰へば、辛ふじて仰角的に山岳を見るを知りて對等に若しくは俯角的に山岳を瞰下するを知らなかつたのであります。

此の高山に對する畏怖畏敬の情は獨り日本に於てのみではありませぬ。ヨーロッパに於ても民族の生存に缺く可からざる通路、例へばサン・ベルナーの峠、サン・ゼニュープル・モン・セニーの峠等を除いては久しき間、幾世紀の長きに亘りて此の一種恐怖畏敬の情は厚き帷の如く人類の眼より大アルペンの秘密、崇高莊嚴の美を蔽ひ匿くしてゐたのであります。瑞西のアルペン案内者が恐れ無く氷河を渡るに至つたのは實に漸く近年の事であつて、近年に至つてすら尙ほ眞に氷河渡りの案内者は比較的少數であると云ふ事を聞いて居ります。而して日本の地方の人は今日尙ほ全然此の恐怖の念より免かれ得ざる有樣でありまして、上高地附近の人々は『上高地の主』嘉門次が嚴冬の頃を唯だ一人同地に通ずるを見て一種驚嘆の眼を睜つてゐるのであります。

かく自らの裏に此大なる威壓に對抗するだけの力の自覺を有しなかつた人類にして若し多少ながら高山と接觸せる事ありとすれば、そは必ず宗教的信仰との同盟に依つて成されてゐるのであります。

日本の殆んど凡ての名ある山が、山伏、神官、僧侶に依つて開かれてゐる事は、諸君既知の事實であります。而して現に私共は殆んど凡ての山巓に小さき祠と、寺の祀らるゝを發見するのであります。而して之れまた日本に特有の事實ではありませぬ。近世以前、中世紀の間に爲されたるアルペン山巓の征服は、それ自身既に極めて寥々たるものでありまするが、若し企てられし事ありとすれば、そは悉く宗教と關聯してゐあつたのであります。例へば中世紀の頃既に人間の努力に屈服せざるを得なかつたロシェメロン（一萬一千餘尺）、モン・タボル（一萬尺）モン・エグィーユ等は悉くその頂に古き十字架、禮拜堂の遺跡を示めして、その嘗て宗教的祈誓、宗教的信仰と關聯せる事を物語つてゐるのであります。

然るに近世――特に第十九世紀に入りまして人類は洋の東西を通じて偉大なる心の革命を經驗したのであります。偉大なる革命とは一方宗教的思想の桎梏束縛よりの解放であります。而して他方人類の力の自覺、力の意志の覺醒であります。如何に人の心、中世紀を通じて宗教的思想の咒文に縛られありしかは伊太利の詩人ペトラルカの逸話之れを例證して餘りあります。ペトラルカ嘗て北伊太利のアルプ・モン・ヴェントゥーの峯を攀ぢ、アルペン層重、雄大の景を望み見て、柔く、感じ鋭き詩人の常としてその莊嚴崇高の美に打たれ轉々神魂飛ぶを感じたのであります。然るに此の時突如、一團疑惑の雲は彼の心を領したのであります。曰く、かく山岳――自然――造られたる物の美に感じ、之れに歡喜崇敬の思を致すは之れ實に獨り神にのみ捧ぐ可き欣仰讃美の心を私し神を穢し、神を蔑みする惡逆無道の罪にあらざるかと。……彼はその宗教的情緒の不安に堪え兼ねて匆々山を下りてその敎父の許に至りその罪を懺悔したと云ふ事であります。

私共は今日實に昔の人に比べては殆んど譬へ様も無き程に自由なる心、無礙なる心、純粹なる心を以て偉大なる山岳に對し、その語る沈默の言葉に耳傾くる事が出來るのであります。

◎山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）　鹿子木

◎山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）　鹿子木

然らば山岳の我等に嚮く無言の言葉は何でありませう。私共は暫らくその意味のある所、その言葉の最後の意義を探らねばなりませぬ。

私共は此の思案の初めに、私共が山岳より受くる感じの崇高の念、勇健の心、自由の思ひ、永遠の感じのある事を見たのであります。

今靜かに思を凝らしまする時に、私共は此等諸々の感じを一貫して譬へばその根本的基本の調を爲すものが實に『高めらゝるの感』『引き上げらるゝの心』にある事を發見するのであります。『解脫高邁の心』――之れ實に私共が山岳より受くる一切の情緒の根底に流るゝ根本的特調であります。

偉大なる山岳は凡て之れを望む者に或は秀麗比ひ無き富士の如く崇敬渴仰の情を鼓吹して以て我等の心を高め、或は穗高、槍、劒の如く我等の意氣軒昂の精神に對立して我等の胸に登向、健鬪、征服の雄志を喚起し、或はヨーロッパ・アルペンの氷の河、氷の海の如く、一切我等の主觀煩惱の生命を斷絕じて我等を永遠の常住、絕對、眞如の國に到らしむるのであります。かくして山岳の私共に與ふる根本的印象、根本的感化は實に『高むる事』であります。――人間主觀の現實より高むる事であります。而してその私共を『高むる所』はヨーロッパ・アルペン若しくはヒマラヤ連峯等眞乎、アルペンの大を爲す山岳にありましては一切下界人寰との交涉を斷絕し、一切生命の流轉を絕し、一切生の壓迫、生の偶然より超脫し、上あつて、下なく、唯だ鋼鐵の如き永遠の大空に、鋭く、冷かにその頭を擡ぐる永遠の雪、永遠の氷、永遠の岩の支配する所、絕對超越の國であります。

併かも、私共の心が山岳に『高めらるゝ事』は苟くもそが內的であり、精神的である限り實は『自ら高むる事』であります。

自ら努力して高くなる事であります。私共は手を拱いて精神的に高めらるゝを望んではなりませぬ。『高めらるゝ事』は自らの努力向上の結果に外ありませぬ。かくして此の『高めらるゝ』は、そのう

ちに幾多の困難と努力と、危險と、勇敢とを豫想するものであります。萬難を排し、身に迫る危險を冒すの堅忍と勇氣を缺いで私共は『高き』を望む事は出來ませぬ。

* * * * * * *

私共の脚下の兩側にその底も知れぬ千仞の谷を張り、私共の前面に削るが如き斷崖を掲げて私共の行く手を塞ぎ、その鬼哭啾々の雲霧を飛ばして我等の心を威壓し、慴伏せんと企つる時、私共は實に無限の精神の勇氣と努力を以て此の威嚇と危險とに打ち勝つて行かねばならないのであります。私共の未だ柔かき心は身に迫る危險に圍繞せられて時に恐怖に震ふのであります。此の時私共はまた實に衷に此の恐怖の念と戰ひ、之れを克服して行かねばならないのであります。……かくして登高行——アルペン行は千仞の谷と、雲霧と、暗黑と、斷崖と岩壁と氷雪を突破してその目的に向つて努力向上する事であります。登山の精神は實に雄健なる向上、克己の精神であつて、その指す所は最高の絶巓、仰げば永遠の空、呼べば應へんが如くその無限の翼を張る所、願ればこの一切の生命を超越せる永遠の氷雪蒼白く光る所——永遠超越の國であります。

然るに人間最高の精神の最も深く且つ強き憧憬、要求、熱愛は實に此處に至つて——生命を超越せる眞理永遠の國に到つて始めてその所、その憩を見出すのであります『北の彼方、氷と死の彼方——我等の生命と我等の幸福はあり』（"Jenseits des Nordeus des Eises, des Todes—unser Leben unser Glück." —Nietzsche）とは此の間の消息を漏らせるニイチエの意味深き言葉であります。かくして私共の登山の精神はその最も高き形に於て實に此の我等の胸の奥底に生くる、高貴、甚深の心、永遠を願ふの心の發現、權化に外ならぬものであります。

而して實に此の故に、——高山々巓は即ち克己、超越の境なるが故にニイチエの句を藉りて曰へば

◎山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）　鹿子木

『最高の山に登る者は一切の悲劇と悲痛を超越して之れを笑ふ』（" Wer auf den höchsten Bergen steigt, der lacht über alle Trauer-Spiele und Trauer-Ernste. "）事が出來るのであります。而してニイチエはその『高山より』のうちに此の向上、克服、超越の境を歌つて申しまするには——

Ein anderer ward ich ? Und mir selbst fremd ?
　Mirs selbst entsprungen ?
Ein Ringer, der zu oft sich selbst bezwungen ?
Zu oft sich gegen eigne Kraft gestemmt,
Durch eignen Sieg verwundet und gehemmt ?

Ich suchte, wo der Wind am schärfsten weht ?
　Ich Crute wohnen,
Wo niemand wohnt in öden Eisbär-Zonen,
Verlernte mensch und Gott, fluce und Gebet ?
Ward zum Gespenst, das über Gletscher geht ?

　… … … … … … …

Hier zwischen fernstem Eis und Felsenreich—
Hier muss man Jäger sein und geiergleich.

我は別人となりぬ、自らに對して他人となりぬ。
　我は自身より飛び出せる者。
餘りに屢々自らに克てる格鬪者。
餘りに自らの力と抗爭せる者。
自らの勝利に依りて傷き痛める者也。

我は吹く風最も強き所を求めぬ。
人無き所、氷熊住む荒寥の境に住むを學びぬ。
人と神と、呪と祈を忘れぬ。
我は氷河を彷徨ふ幽靈となりぬ。
……
此處遠く遙けき氷と岩の王國の間に。
人は獵越にして羚羊の如くならざる可からず。（意譯）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

高山、山岳の此の特殊の印象は、私共之れを海の印象と比較する時愈々鮮かなるを得るのであります。久しく海と離れて、圖らず太洋の波線なるを望む時、若しくは地上の生活より出でし海上の人となる時、私共は鎖ぢたる胸の自らに廣がりて天空海濶、自由活達の思ひに滿されざるを得ないのであります。即ち私共は此處にも一種の自由、一種の解放一種の解脫を感ずるのであります。『海は我を廣ふす』とは幾多の詩人の歌つた言葉であります。

併かも飜つて山の與ふる自由と海の與ふる自由とを比べまする時、私共はその間、深き相違の存するを認めざるを得ないのであります。蓋し、海は實に變化と運動と而してそが表はす豐富なる生命との無盡藏であります。私共は或は海の嘯き、或はその轟き、怒り、狂ひ、若しくはその波平らかに靜かなる態を見て私共自らの秘め事を聞き、我等自らの心の怒り、悲しみ、憂ひ、喜び、憩ひ、平和を見るのであります。即ち私共は直接に、直ちに、私共內心の生のさゞめきを海に托して、之れと語り

◎山岳と哲學的精神（哲學上より見たる山岳の印象）　唐子木

得るものであります。然るに之れに反して山岳はその峻麗なる永遠崇高の頭を昂げて私共の弱さ、私共の訴へ、嘆きに對して耳をだに藉さ無いのであります。

海は實に無限に豐富なる生命の象徴であります。生命主觀の一切の生の葛藤を荷ひ、從つてそのうちに幾多の煩悶と煩惱を包む大いなる心であります。それにも拘らず私共が之れに接して一種自由、解放の思を得るは實にその無限の大に依るのであります。海はその無限、限り無き擴がりに依りて、私共の限られたる、狹き心を解放し、自由ならしむるのであります。かくして海は私共の心をその本體に於て洗鍊陶冶し、その根底に於て打ち變へるものではありませぬ。唯だ我等の心の有るが儘に横に無限に、その限界を撤して以て私共を解放するものであります。此の點に於て海は實に文藝の象徴であります。文藝が主觀的生命の一切の望み、恐れ、悲しみ、嘆き、憂ひ、喜びを描き、かく描く事に依りて之れを個性生存の狹隘なる束縛、限界より解放し以て人生に一種の解脫を與ふるが如く、海も亦その無限の生命に依りて私共の主觀に一時的の自由を與ふるものであります。

然るに山岳の私共に與ふる解脫は全然之れと反して、私共の心を上に引き上ぐる事に依りて私共を生の惱みより解放する者であります。而して引き上ぐると同時に一切の罪、汚れ、弱さの斷絶を要求して止まないのであります。罪と穢れと、弱さとを持つて私共に登高行を企つる事は出來ませぬ。強力なる自己征服の猛志の熾なるありて始めて我等は『高き』に至るを得るのであります。『精進』は實にその外的措寫の順序に於てのみならず、また實にその意味に於て『向上』の先件であります。精進なくして私共は向上する事を得ないのであります。

然るに此の一切の主觀、一切の生命を克服超越して彼方、永遠の價値、永遠の意義、永遠の國に生きんとするもの之れ實に凡て眞ある哲學的精神を一貫せる不屈の心、永遠向上の精神、人類最高の奮鬪的精神に外ありませぬ。かくして若し海を以て文藝の象徴と爲し得るならば、山岳は實に哲學の象

徹であります。之れ實に、私共がプラトン、スピノザ、ニイチエ等の哲人に接して崇高なる山岳の靈に接するの思ひある所以であると信ずるのであります。

* * * * * * *

如此高貴、崇高なる精神を湛ふる個性は貴く、如此徹底せる健闘向上の精神を宿す國民は、永遠に不滅であります。

私は如此精神の爲めに努力し來られた山岳會の意義大なるを思ひ、將來の奮勵を祈つて止まないのであります。（終）

（本篇は、第八回本會大會に於ける著者講演の大畧なり、著者の執筆を得て掲載せり。）

スウィス日記

辻村伊助

リヨン——シェネーフ（ジュネーヴ）(LYON-GÉNÉVE)

ローンを右に見る汽車の窓に、むら消えの雪の間に、霜げたがさすが若草か綠の牧も見えて、丘は赤瓦の百姓屋、川やなぎ、ポプラ、背戸に積んだ刈り草の、空はやわらかにうすら霞んで、南歐らしい氣分は、急行の汽車の中までたゞようてゐる。ふりかへるとリヨンの街は、どんよりともう立ちこ

◎スウィス日記　辻村

めた烟の中に陰れて、今となれば、さすがもの悲しいフールヴィエの丘の雪も、岸のポプラのむら立ちも、あわたゞしく別れては來たがこの都も、

別れ路にまた降りそめし川岸のポプラの群のかをる朝雨。

それもよし、今宵は雪のスウィスである。室にかけたシャモニーの廣告もうれしかつた。

私は窓ぎわのテーブルに、スウィスの地圖を擴げる、もう一人の御客さんは、入口の方に倚りかゝつてこくり〳〵やつて御座つたが、やがて、アヴァランシュのやうな大鼾をかき初めた。汽車は鼾を物ともせず、同じやうな響をたてゝ、丘の間を走つてゆく。折り〳〵テレースの上に小さな村が表はれる、南表は雪解けの赤屋根であつた。

川をはなれると、雪はだん〳〵深くなつて、露はなポプラの木立、遠い丘の、これも眞白ろに包まれた上に、尖塔の夕日に閃くのが、何とも云へず美しかつた。が、それも暫し、日の沈む頃には、やや谷合ひの雪が深くなつたと思へば、さら〳〵と窓に散る、汽車は粉雪に包まれてゆく。アヴァランシュはそのうちふと眼を覺まして、しばらくもじ〳〵してゐたが、烟むさうな顏をして出てしまつた。あとは一人で氣樂である。

とある停車場でガルソンを呼んで、御茶を運ばせる。空はいつの間にやら暗くなつて、雪明りか、うつすらと谷水の見えると思つたのは、あらずそは夕月の光りであつた。窓の露をふいて外をのぞくと、狹い谷の空に、アクアマリンの夕星を見る、粉雪はやんで、谷の雪は尺をたしかに超えてゐたらう。又一人の男がやつて來て、同じ入り口の席によりかゝつた、こいつもアヴァランシュかなと横目で見ると、聲も立てず、ぐつすりと、彼れは穴籠りの熊のやうに眠むつてゐる、元より赤髭の荒くれ男で。

食堂へ出るまでもない、八時には湖に沿うた街の灯がちら〳〵して、汽車はシェネーフの停車場に

着いた。税關の檢査も一寸聞くだけで、荷物を自働車にのせて宿に行く、通りの名はリュー、ドゥ、モンブロン (Rue de Mt. Blanc) ホテル、ドゥ、ジュネーヴ、と云ふ家の名も氣に入つた。何も自働車を雇ふまでもない、停車場からは五分ばかり。

シェネーフ (GENEVE)

私が水を見たのは。たゞ水と云つて置かう、湖やら朝靄が立ちこめて、ローエングリンを送り届けた歸り途の、道草は可笑しいが、もとより浮き草もない小波の上に、靄の色の羽づくろひして白鳥が一羽、おつに澄して游いでゐたばかり、レマンの岸に人もなく、空も、波も、たゞ一色にぼかされた八日の朝の八時頃、朝飯を待ちかねて——敢えて空腹のためではないが、何となく胸さわぎがして、落ち〳〵眠れなかつた床をはなれると、山が見えるかと、覺束ない心頼みに、街をつきぬけて橋のたもとに來たのである。橋の名はモン、ブロン。ローンの水の落ち口である。

橋をへだてゝ、南にはブロムナードからサボイの岸のクェイ、ドゥゾウ、ヴィヴ (Quai des Eaux Vives) 北岸はモンブロンの湖岸から、クェイ、ドゥ、レマン (Quai du Léman) につゞいていかめしい宮殿作り、一口に云へば、一寸入り惡くさうなホテルがづらと並んでゐて、中から出て來た自働車に、雪のとばつちりをしたゝか浴せられたのもいま〳〵しい。彼奴はアメリカ者に相違ない、レマンの岸の朝ぼらけを、自働車で、しかも變てこな女づれで、ぶち壞はす奴は外にあるまい、がその宿のドウ、モンブロンは氣に入つた。

何にしても、スウィスの雪を踏むだけで、胸のうれしさは隱くしきれない。デジューネーの、銀の壺に盛られた琥珀の蜜も、煙草の名のハイライフも、紅のやうに頰を染めたあの北風も、今はなか〳〵忘れられない。かうして、八日は湖水のふちをうろ〳〵して、水を見て、橋を見て、また眞白ろな霧を

◎スヰス日記　辻村

見て、たゞにこ〳〵してゐる中に暮れてしまつた。午後は柔かに日はさしたが、湖の靄は、夜明けの窓のとばりのやうに、夢をつゝんで靜かに眠むつた、水鳥の鳴く音をさびしくつたへて。

次の日も靄が深く、小雨まじりにしつとりして、水の都は名を知られたと云ふ、紀元の空をそのまに、雪路なれば足音も響かず、靜かに明けてまた暮れてゆく。

ミュゼーにさすが山の書は多い、小路のそこゝゝに、噴水の雪に埋れてゐるのもうれしかつた。何だかしんみりして、月夜ではないかと橋まで出たが、雪明りのぼんやりとうつすらして、ローンの落ち口の水底は、晝よりかへつて白く光つてゐる。杭かと見えたのは河波の上に、あはれ浮寢の小鴨である。

湖ごしに雪の連山を、遠くとも一目見たら引きかへさうと、シェネーフの滯在四日に及んだが、次の日も小雨で、路の雪は解けもやらずそのまゝ凍つて、湖の靄からネーベル、ホルンが、かすかに響くばかり、モンサレーブの雪の岡はちらつと見たが、その上に表はれると云ふ、モンブロンは影も形も見せなかつた。

このまゝでは義理にも歸れなくなつた午後十二時二十分(西歐標準時)、街はづれの停車場(Gare des Eaux Vives)から、思ひ切つて汽車に乘つた、これからシャモニーへ行くのである。

ボンヴィユ(Bonneville)までは平らな路で、堤に紅いウメモドキとも思はれるのが、雪をかづいて美しかつた。次第に山に近く、右は切つ立ての岩壁に、直下のアルヴ(Arve)の溪も深く、タンヂの林に鵲の飛ぶのも山らしい。が、電車に乘りかへるサン、ジェルヴェ(St. Gervais)から、初めてアルヴの美しさが眺められる。

乘りかへて待つ間もなく發車する、シーをかついだ連中が、一所になつたのも賴もしい。溪は深く、樅の梢がすく〳〵と屹えてゐるだけで、高い〳〵崖の雪路までは見えたが、上は同じく眞白ろな雲にかくれて、日暮れに近い溪合ひに、花やかなのは電車の明りばかりで、ボッソンの氷河も知らずに、シ

ヤモニーの停車場に着いたのは午後五時。日は暮れて、表に出ると、冷やつとする山の夕靄を震はせて雪車（ソリ）につけたシュネー、ロルレンの、あはれ響のなつかしさ、アルヴは何處、雪の中に埋れて、溪川の響はその夜の夢に通はなかつた。

シャモニー　(CHAMONIX)

雪車（ソリ）に曳かれて着いた宿は、停車場から程遠からぬ カルトン、ホテル (Carlton Hôtel) で、まだ新築の奇麗な家であつた。北向きのヴェランダからは、右にエギュイユが溪の東を東北へ走つて、そのはづれモンタンヴェル (Montanver) の蔭から、メヤ、ドゥ、グラス (Mer de Glace) がのぞまれる。日あたりの南は、モン、ブロンの頂よりも、エギュイユ、ドゥ、グオテ (Aiguille du Goûter) とドーム (Dôme du Goûter) の氷が眉にせまる。が、着いたのは黄昏過ぎ、次の日は曇り、その翌けの日は大雪で、シャモニーの溪をまのあたり見たのは正月十三日の、それも晝まぢかになつてのこと、此宵はサロンのピヤノと、二重窓をあけては、かすかに響くアルヴの水音に耳をかたむけたのである。

さて翌けの日、山村の日曜を想像して見たまへ。眠むつてゐるやうな小村の靄に、鳴りわたる會堂の鐘の音、アルヴの水も夢からさめたか、雪をもれて、かすかにそれとうなづかれる朝まだき。あすこに、この雪の下に、彼のウヰムパーが眠むつてゐると、朝飯もそこ〳〵に、杖一つぶら下げた身輕にぶらり、その鐘の鳴る方へ雪路を分けてゆく、教會は停車場前、私の室のヴェランダからは、斜めに見える尖塔がそれで、墓は雪の中ながら、誰のわざかしほらしい花束も、雪をかづいて美しかつた。どんよりと曇り日の空には、そこ〳〵と晴れ〴〵しい朝空が仰がれたが、山は深い雲の中で、只ほの白い溪の中に、鐘のねばかり鳴りわたる。朝空の雲の窓は、その鐘にさそはれて、南に動き西に搖れて、ある時は、その陰鬱な扉の奥に、あゝボッソンの蒼白い氷河をさへ仰ぐことができた！たゞ思ひがけ

ない雲の眞中に、これが私の初めて見た氷河であつた。

たまらなくなつて、深い雪の中をあたふたと、たとへば一尺でも山に近づかうとするやうに、ホテルの前は素通りにして、アルヴの橋を、水には眼をくれる暇もなく、つき當りを左に曲つてボッソンの方へかけつけた、村の奴等は變な顔をして見送つてゐる。漸やく村はづれに來た頃は、もういつの間にか見えなくなつて、恨めしさうに、ふり仰ぐ空は、おなじ灰色の密雲である。

村はづれにも教會がある、女まじりにぞろ〳〵坂道を下りて來るのは、野良着をつけた屈強な大男、夏はガイド、陽氣はづれの寒空には、杣か、大工の手つだひもして、かうした日曜には、やさしくも神の御前にぬかづくと見える。山の名は、後の日この手合ひに聞いて知つた。

山は見えず、それでも雲の上には、薄日でもほんのりとさしてゐるやうなのに我慢がならず、アルヴをさしはさむ二筋の山脈の、西はフレジェー(Flégère)、東にはメヤ、ドゥ、グラスの南なるモンタンヴェル(Montanvert)と、二千米に足らぬ山ながら、夏場には開けるとあるホテルも見えて、せめてあすこまでと、例の屈強に伺へば、それはシャモニー村の御百姓、かんら〳〵と打ち笑ひ、旦那、あにヨ云ふだよ、この大雪のあとだつてにねッと、たゞ一言に打ち消された。フランスだけに、田舍ながら言葉づかひはおとなしい、旦那はモッシュールの譯と知るべし。こゝに述ぶ、フランスなれどサヴォイに稅關は置てない、無稅とは云へロンドンから、遙る〳〵携へたシガーは、曇り日でもカサ〳〵に乾き切つて、葉の破れを兩手に、尺八を吹くやうな始末でなければ、煙はなか〳〵口には來ない。

午後は氷雨、ウェランダからやゝ右よりに、メヤ、ドゥ、グラスの雲に見えかくれするのを眺めて、ぼんやりしながら暮らしてしまつた。山里なれば日の暮れやすく、夜は薄月に小雨して、サロンのピヤノは今宵も枕にひゞいて來る。

夜の小雨は、いつのまにやら今朝の粉雪に變つてゐた、私が二度目に眼をさました、それは八時半

頃であつたらう、窓をあげてヴェランダに出ると、山脚の樹氷、縦、白樺の小枝小枝は、美しくも飾られて、しん〳〵と、なほ降りつもる雪の中に、朝出されたサヴォイの蜜は凍つてゐた。

時々ピヤノが聞える、風淀ながらヴェランダに、雪はたちまち、寸を超えてしまつた。路をへだてゝ、此の四月に開業と云ふシャモニー、パラスで、大工がとん〳〵やつてるのが、風につれて響いて來る。私のホテルは、その建物に邪魔されて、溪の正面はかくれてしまふ、從つて向ふからは、モンブロンは見えるにしても、少からずさえぎられることゝ思ふ。シャモニーに多い宿の中でも、リュー、ナショナール (Rue Nationale) の西側、ル、ブレヴァン (le Brévent) の麓に、アルヴを前に見下ろすサヴォイ、パラスか、ホテル、ドゥ、ラ、メヤル、ドゥ、グラスあたりでなければ、思ふやうな景色は眺められない、然しこれは無精者の、日がな一日、ホテルの窓にかぢりついてる連中で、何れにもせよ、人口八百の山村と云へば、一足出れば、溪の景色は思ふがまゝに眺められる、谷は東西半哩、長さ十四哩、隅から隅までうろついたところが、足の疲れるおそれはあるまい、雪の日の外、室に拘禁されぬかぎり、展望のきく高い一位置ばかりではない—ホテルに入り込むのは、馬鹿か、貴族か。亞米利加人で、なみの人間は、まづ便利な安宿に落ちつくを以て、分を知れりと云ふべきだ。

扨て正午、雪は小やみなく降りしきる山村に、今日は鐘の音もひゞかず、給仕はのこらず女中だから、どことなくしとやかで、御客も十四五人、しんみりして、誰れの業か、晝間からサロンのピヤノが聞えなければ、かへつて寂しすぎたかも知れない、食堂の庭は、南表に落葉松の、枝はあらはながら雪に飾られて、背景は雲のたえまに、山腹のボッソンの氷河が美しくも物凄い。

晝過ぎは、雪も小降りになつたので、買物がてら村をうろついて見た。通りと云ふのは丁字形の二筋で、停車場からホテルの前を西に、アルヴにかけた小さな橋を渡るアヴェニウ、ドゥ、ラ、ガル (Avenue de la Gare) がリュー、ナショナールにつき當る、これは、アルヴの西側を、南北に延びた街道で、左す

◎スヰイス日記　辻村

れば、私の來た鐵道の線路に沿うて、彼の氷河の麓、レ、ボッソン(Les Bossons)やタコンナ(Taconnaz)の村をぬけて、西にルズーシェ(Les Houches)につゞいてゐる。右すればブレヴァンの直下を、アルヴを右に、上流に向つてエギュイユを溪の向ふにして、レプラ(Las Praz de chamonix)、レボア(Les Bois)、エギュイユ、ヴェヤルト(Aiguille verte)の北に、グラシエ、ダルジェンティエ(Glacier d'Argentiere)のそゝぐ所、同じ名のアルジェンティエから路は二筋に、いづれもマルティニ(Martigny)へつゞくのである。

ホテルに近く、アルヴの橋の少し手前を左に曲ると、モンブロンの登山者ソウシュール(H. B. de Saussure)の像がある、モンブロンの頂を——今日は見えなかつたが——望遠鏡片手に見上げてる、下にはガイドバルマー(Balmat)が、これも山頂を望んで、花崗岩の臺の上に立つてゐる。

村はづれにはスケート場やシーフェルトがあつて、此の天氣にも、氣樂な奴等が、中には覺束ないのも混つて騒いでゐたが、ジャムブなどは、後の日ノルウェイで見たものにくらべれば、いさゝか小供だましの感がある。

かくて日は暮れた。シヨムピニヨンとフロマージュの味は今に忘れられない。ヴェランダに出ると、アヴェニウに灯された燈火の蔭には人影もなく、なほ降りつもる雪の中に、遠い遠い谷の奥から、折り折りかすかに、しかし底力のあるアヴァランシュを聞くばかりであつた、村は、此の大雪に、埋れ盡したと思はれて。

正月十三日、今朝も靄は深かつた。何氣なく姿見にむかふと、その深い靄が晴れかゝつて、樹氷に飾られたブレヴァンの山が、くつきりと表はれた、大急ぎで櫛を放り出してヴェランダへ出る、靄はまだ思ひ切り惡るく、溪にねばついてゐるが、大空は澄んで、山の、低きは雪に、高きは氷に、そして木と云ふ木、枝と云ふ枝、溪を包むすべては眞白ろに飾られてゐた。デジュネーネーをはこばせて、二重窓を開けひろげてたべる、咽喉にはろくに通らなかつた、飛び出すとすぐ、レプラの方まで撮影に

出かけた。

エギュイユはまだ雲に包まれて、たゞその上に、靄の中をつきぬけてゐるのは、牙のやうなドリュー(Aiguille du Dru)であつた。昔から御なじみの山岳が、今そのまゝに眼の前にそびえてゐるのだから、羚羊のやうに雪の上を飛びはねて、夢中になつてうれしがつたのは云ふまでもない。メヤ、ドゥ、グラスの落ち口も、今日は朝靄の上にはつきりと、クレヴァースのぎざ〳〵に降り置く雪の、上なるは白く、氷は水色に輝いてゐる。

十時、朝日はモンブロンの一角から表はれた、それまでも、南の山はまぶしくつて、白熱にさえかへつた朝空よりもなほ白ろく、雪の輪劃を僅かに認めえたばかりである。

畫近くなつても、溪間には朝をそのまゝの靄がたなびいて、ドゥリューの外のエギュイユは、とう〳〵姿を表はさなかつた。宿に着いてものぼせ上つて、食事も咽喉へ入らない、ガイドでなくても、山が飯のたしになるとは、さつぱり氣がつかなかつたが、傳へ聞く寶丹滿腹も、此の場合には不用と覺えた。

さて晝過ぎ、日はうらゝかにブレヴァンの空に輝いて、瀑のごとく絶崖を這ひ上る淡い靄の上には彼のモンブロンから東北へ、シャモニーの溪を限るエギュイユのミディ(Aiguille du Midi)、プラン(Aig. du plan)ブレイシェ(Aig. du Blaitiere)、殊にグラン、シャルモー(Grands-charmoz)の背ろから、錐のやうなエギュイユ、ドゥ、ラ、レピュブリック(Aig. de la Républiqe)が物凄ごかつた。その直下にメヤ、ドゥ、グラスが落ちて、更らに北には、ドゥリューと、千八百六十五年に初めて、ウヰーンパーが登つたと云ふ、エギュイユ、ヴェルト(Aig du dru et Aig. Verte)が聳えてゐる。此の氷河のうしろには、モン、マレー(Mt. Mallet)から北につゞく、レ、グラン、ジョラッス(Les Grandes Jorasses)と、モアン(Aig. du Moine)が頭を出してゐた。此等の三千五百米を超えた、ギザ〳〵の西側に比して、溪の東側は餘程

劣つてゐる、ル、プレヴァンからエギュイユ、ルージュ(Aiguilles Rouges)の山脈は三千米を超えず、それでも氷河はあるけれど、溪からは、ラ、フレジェの連脈が近く、タンネやフィヒテの密林に覆はれて、三一〇九米突と稱するモン、ピュエー(Mont Buet)も、村からは見えなかつた。

溪は平坦で、屏風のやうに切つ立てのエギュイユまで、餘り高低は見られない、そしてアルヴの水も勿論今は少い冬の最中ではあるが、淺く小く、此の柔かな溪の景色にのしかゝる山岳の、餘りに凄く恐ろしいのに、胸はふるへたのである。

前に述べた絶崖の間から、たれ下る大小の氷河の、最も盛んなのは、モンブロンの頂上から眞北に落ちる二條の、近いボッソンとタコンナの氷河であつた。

村はづれに、危險の信號が方々に立つてるので、踏みかためた街道の外は歩るけないし、新しい雪でふみ込むから、通路の外に立ち入る事は不可能である、雪の深さは往來でも一米を超えてると思ふ。私は小さな寫眞機をぶら下げて街道を南へ行つた、村をはづれると、何と云つても、肩のはるほど、溪にのしかゝつてゐるのは、彼の四千八百米突、アルプスの帝王たるモンブロンと、右にエギュイユ、ドゥ、グォテ(Aiguille du Goûter)、ドーム、ドゥ、グォテ(Dôme du Goûter)、左にはエギュイユ、ドゥ、ミディ(Aig. du Midi)の大山岳である。これから更らに左に走るエギュイユは、もう美しいのは通りこして、恐ろしいと云ふ方が適當であると思ふ、然し登山に縁なき衆生には、はゝァ中々急ね位で、一寸びつくりして濟むことだらう、が、氣を沈めて見れば見るほど、先登の登山をやつた人達の、度膽のほどが偲ばれる。大抵の山は登り易さうな絶壁が、どこともなく見當がつくものだが、殊にエギュイユ、ドゥラ、レピュブリック(Aig. de la République)に至つては、見たところ全く硝子の破片で、觸つたら手が切れさうに屹えてゐる。大抵の山は、十九世紀に登山のレコードは殘されてゐるのに、この山だけは、千九百四年になつてやつと片づけられたのでも、登山の困難なのが想像されやう。

アルヴに沿うてレヴラの村へ行く。彼のエギュイユ、ドゥ、ドゥリューの直下から左に切れて、ラ、フレジェの眞下まで撮影に出かけた。もう四時に近く、日はエギュイユの蔭に沈んで、やゝ風立つと、寒くて寒くてたまつたものではない。歸りに、スプレンディッド、ホテルに飛び込んで御茶を飲む、山の景色や村の樣子は、かへつてシャモニーよりもいゝと思はれる、南の窓からは、谷にもうたなびき初めた夕靄の上に、モンブロンが屹えてゐる。

Power dwells apart in its tranquility
Remote, serene, and inaccessible:

日の沈みかけて夕空の、灰色に、すつきりぬけ出た氷の山を仰いで、ぼんやり村へ歸つて來た。

Mont Blanc yet gleams on high: the power is there,
The still and solemn power of many sights,
and many sounds, and much of life and death.

* * * * * * *

正月十四日は曇つてしまつた、ブレヴァンは靄の上に見えたが、折り〳〵粉雪が散つて、名殘惜しさに村をうろついても、昨日の壯觀は得られない。私は最初、マルティニーへ出るつもりであつたが、冬の間は電車が通はないので、已むを得ず、またシェネーフへ逆もどりすることになつた。午後三時五分シャモニー發、サン、ジェルヴェイの乘りかへが四時十分、もう暗くなつて來て窓には、息が凍りついて、スティンド、グラスのやうになつてゐる。

眞つ黑な夜を、汽車にゆられて、再びシェネーフに着いたのは八時過ぎ、湖の濕り氣が多いせいか、シャモニーよりもかへつて寒く感ぜられた、馬車を雇つて例のホテルに入る、主人夫婦に喜んで迎

へられた。

レマンの湖岸

山を出たせいでもあるまいが、此の間と同じ角の座敷に、昨夜は落ちついてゆつくり休んだ。眼のさめたのが朝の十時、靄は依然として晴れず、クェイ、ドュ、モンブロンをうろついても、ネーベルホルンがかすかに響くばかりで、眞白ろな靄と小波と、そこに浮く幾群の水鳥を見て、あきらめなければならなかつた。ローンの落ち口の碧い水に、ポプラの茂つた小さな中の島がある、所在なさに橋を渡つて、そこにあるルーソーの像などを見た、島は名によつてイル、ルーソー (Ile Rousseau) と呼ばれる。流れをさしはさんだ商店や、名物の時計の工場は、山を見た後では、何の興をもひかなかつた。

午後二時十分發車、モントルーへ向ふ。右の窓から湖水を見下ろすと、テレースは一面の葡萄畑である。スウィスの酒で第一にあげられるのは、無論ニューシャテル (Neuchâtel) の赤酒であるが、このレマンの湖邊のも、決して惡るい方ではない、ヴィルニューヴ (Villeneuve)、イヴォルン (Yvorne) なども、ヴァレイの酒に比して、劣つてゐるとは思はない。東スウィス、殊にツューリッヒ附近のは、彼のライン酒のやうな酸味があつて、決して上等とは云はれない。汽車はベルン行の急行で、私達はロサンヌ (Lausanne) で乘りかへなければならなかつた、停車場のビュフェーで休む。

天氣は餘り思はしくないが、西の空はほんのりと夕映がして、乘りかへの汽車に入つた頃は、もう薄ぐらくなつてゐた。右はだん〳〵の丘が例の葡萄畑で、小奇麗なシャレーや、冬枯れのポプラのはづれは、廣々とした湖のむかうに、サヴォイの山を仰ぐ等だが、今は太洋かとも思はれる湖をたゞ見渡すばかり。そして、それもいつの間にか、汽車の燈火に消されてしまつて、二度、三度窓をのぞいても、もう私の旅姿が影つるばかりであつた。私は地圖をひろげて旅程を考へはじめた。

氣まぐれにリヨンを出てシェネーフに來たが、旅行の目的は南歐の海岸を廻つて、スペインからアフリカに渡るつもりである、ラック、レマンからモンブロンが見えなかつたので、シャモニーへ行つたのは、そのまゝマルティニーから、ブリーク、シンプロンを越えて、イタリヤへ入る豫定であつた、とかく迷ひがちな旅烏で、今はローンのヴァレイ（Valais）を溯つて、ブリークからミラノへ行くつもりになつた。然し幸か不幸か、今年はレヨッチベルクの鐵道（Lötschberg Bahn）が、冬も通つてゐると聞いて、昔から想像ばかりして居たラウテルブルンネンの冬景色、今は午前十一時過ぎなければ、日の光を仰ぎ得ないと云ふ、深い〳〵谷底のことを考へると、矢も楯もたまらなくなつて、ロサンヌからの汽車の中で、急にイタリヤ行をのばしてしまつた。旅程變更の大原因はシェネーフで買つた地圖である、殊に水色に畫かれた氷河である。スヰスの地圖の中で一番いゝのは、測量部出版五萬分ノ一（平地は二萬五千分ノ一）地形圖、トポグラフィッシェル、アトラス（Topographischer Atlas der Schweiz）で、一般にはジークフリート、アトラス（Siegfried Atlas）と呼ばれてゐる、全國で五百九十三枚、各葉一フランづゝであるが、折り本にしたのや、布の裏うちをしたのもある、殊に此のシートの數葉をつゞけて、特種の登山用に便利なのがある、たとへば、フィンシュテラールホルン附近の如きは、約九枚を合せて折本としてあるし、ユングフラウの如きは、此の折本中に含まれてゐるが、その外、シャイデック（Scheidegg）、又はインテルラーケン、ミュルレン、マイリンゲン（Interlaken Mürren Meiringen）等の折本にものせられてある、山岳黨にはこれ等の地圖が便利で、山岳湖水などの有名な所はほゞまとまつてゐる。

ベルネル、オーベルラントでは、此等のほかにフライで出版されたレリーフ、カルテがある、これは千九百十三年の出版で、その當時、スヰス山岳會の年報に附錄となつてゐたのを、諸君も記憶せられてゐる事と思ふ、七萬五千分ノ一で、ローン、ヴァレイ以北、トゥーン、ブリエンツ以南の山岳の大部

分を含んでゐる、然し實用上の價値は、前者の精密なのに劣つてゐるのは勿論である、地圖の名は Übersichts-karte der Berner-alpenbahn. 又は Relief-karte des Berner Oberlandes und Oberwallis と稱せられる、これには特にシーの通路を示したウヰンタースポート用のもあつた。

又二十萬分ノ一、ベルネル、オーベルラントの地形圖 (Leuzinger und Kutter:— Karte des Berner-oberlandes) は、等高線のかわりに鬚線を用ゐたので、餘りいゝとは思はれない。

十萬分ノ一スウィス地形圖に、ドゥフール、カルテ (Dufour karte) と云ふのがあるが、私は好まない。シャモニー附近のはフレイ出版の十五萬分で、オー、サボォイ (J. Frey:— Haute-Savoie)。北イタリヤのは同じ樣なレリーフ、マップ (J. Frey:—Relief-karte der oberitalianischen—Seen) があるが、餘りいゝ地圖ではないが、外には見當らない。次にスウィス全國のでは、キュンメルリーの四十萬分ノ一 Künmerly:—Gesamt-karte der Schweiz) がある、これには別冊の索引もついてゐた。

此等のうち、單に地圖としては、無論ジークフリート、カルテが一番であるが、登山用には、シュペック、ヨストで出版されたシュネーフーン、カルテ (G. Speck-Jost:—Schneehuhnkarte) といふ小冊である、これは、一つ一つの山を主にしたむしろ案内記で、その山の地圖 (ジークフリート、カルテの一部分に登路に赤線を付したるものをそへ、且つ山のスケッチに登路を示し、又簡單な解說を付けてある) 全部で六十餘冊 (千九百十四年夏)、ワリーゼル、アルペン、及びベルネル、アルペン (Walliser alpen und Berner alpen) の三十七冊は佛文で出版されたものもある、各冊一法半であつた。

扨て、くらやみの間を走つて、モントルー (Montreux) へ着いたのは午後六時、ホテル、ドゥ、ラ、ペイ (Hotel de la paix) と云ふ停車場近くの宿についた、餘り奇麗な家ではないが居心地はよかつた。荷物を置くとすぐに街に出て、七時の晩餐まで散步して來た、靄の深い闇の中でも、湖邊と云ふ感じは充分に味はれた。

モントルー（MONTREUX）

南の窓に、ほか〳〵と朝日がさし込んで、綠いろのカーテンをあけると、や、寢すごした、南は廣々と、レマンの湖の朝もやのたなびいた上に、高く〳〵グラモン（Grammont）の雪が仰がれる。

モントルーのホテルから、南表の湖につゞく、だら〳〵路の左には、花園とそのプロムナードに、ひた〳〵と寄るちいさい波の向ふには、彼のグラモンの山々や、ローンの溪の西につゞく、グン、ドゥ、ミディ（Dent du Midi, 3260 m.）の雪が望まれる。この丘のテレースに飾られた家が、恰も南歐のニスやカンを想はせるやう、その廣い窓からは、小波の寄る湖と、かう晴れた朝は、ひろ〳〵と東へ廻るうみ岸のウィルニューヴ、シーヨンのシャトウも、あれあそこにと指さゝれる。

私はシャモニーで撮したフィルムを現象にやつたが、それはツァイスのベベーでこつたので、あまりちいさくつて物たりないから、ついでに、ピー、テッサーのついた、カード形の寫眞機を買つて、そこの娘に敎へられた路を東へ、ほか〳〵さす朝日に、また眠むくなつて來たレマンの湖を右に見ながら、うすらがすんだなか空にぬけいでゝ、霞よりはやゝ白い雪の峯の、眉にせまるテリテーの岸をぶらぶらと、ヴェイトウの麓、シィヨンの城跡にやつて來た。

水は碧玉の、岬の上に聳えてゐる塔の枯蔦には、折りから、そよとの風も吹かぬ。七百年の永い間の物語りは、私達の知るところではない、ツシーの宿で書いたと云ふ、彼のバイロンの一節と、湖の空にグラモンの雪を仰げば、歷史は私にとつては、何の感興をも與へない。

Lake Leman lies by chillon's walls:
A thousand feet in depth below
Its massy waters meet and flow;

Thus much the fathom-line was sent
From Chillon's snow-white battlement,
　Which round about the wave inthrals:
A double dungeon wall and wave
Have made and like a living grave.

古き香とでも云ふのかも知れない、かび臭い廣間をいくつも通りぬけて、高塔の石の窓から湖にのぞむ。晴れも晴れた、大空をそのまゝのレマンの水に眠むるバルクの、あらずそはシィヨンの冲遠く

A small green isle, it seem'd no more,
Scarce broader than my dungeon floor,
But in it there were three tall trees,
And o'er it blew the mountain breeze,
And by it there were waters flowing,
And on it there were young flowers growing,
　of gentle breath and hue.

と、イル、ドゥ、ペイ（Ile de paix）の小島である。この倚りかゝつた小さな窓の、空はサヴォイの雪の山、なつかしくふりかへる右手の丘の、それも雪の中なる樅の林の麓には、朝日をまともに受けた家つゞきがきら〳〵して、湖に近い幾村の、そこは小波と鷗の寄るスヰス、リヴィエラ、西から數へてクラヽン（clarens）、シェルネー（chernex）、ヴェルネー（Vernex）、グリヨン（Glion）コロン（Colonges）、テリテー（Territet）、ヴェイドウ（Veytaux）の七つを合せてモントルーと呼ぶ、私の泊つてゐるのは、モントルー、ヴェルネー（Montreux-Vernex）である。

畫過ぎは、湖水のふちのプロムナードを、クラヽンの方へ歩いて行つた。岸には鷗が群れ騒いでゐ

る。夕日がグラモンの峯つゞきに沈んで、ヴェイトゥの街の燈がキラ〳〵光り初めるまで、船つきの太い杭に腰を下ろして、何を思ふともなく、ぼんやりしてゐた、夕暮はさすがに寒い。

ローンの谷（RHONE TAL.）

十七日、朝の中は街をぶらついて、十二時四十六分、ブリークへ向ふ、汽車はやはり湖水に沿ふて行く、今日は曇つて、山はまるで見えなかつた。シィヨンの城を右に、ポプラの間からちらつとながめて、ヴィルニューヴ（Villeneuve）、エイグル（Aigle）。それからローンの流れを渡ると、だん〳〵谷らしくなつて、右の高い切り岸の下に、小さな村が表はれた、こゝはサン、モリス（St. Maurice）、レマンの南岸に沿ふ鐵道の分岐點で、ローンの谷の入口である。

谷は、地圖で想像したより意外に廣く、ところ〴〵に葡萄畑がある。その兩側は直立の絶壁で、垂れ下つた無數の氷柱が、何とも云へぬ壯觀であつた。そしてやはり平坦な、むしろ柔かな谷底に、崩れのこる城跡や石屋根の小村小村を、のしかゝるやうに見下ろしてゐる雪の山々は、たゞさへうすら寒い汽車の窓に、旅人の胸を冷やさずには置かなかつた。

ローンの水は淺く濁つて、進むにつれて、湖水のふちに少なかつた雪はます〳〵深く、ポプラの並木、白樺の樹氷が美しい。鋭い絶崖の右左に開いた谷の、南には、グラン、サン、ベルナール（Grand St. Bernard）への岐れ路マルティニ（Martigny）、更らにヴィルツトゥルーベル（Wildstrubel）の直下、ロイケルバートの分岐點ロイク（Leuk）。ガムペル（Gampel）、ラロン（Ruron）を經て、彼のツェルマット（Zermat）の支點ヴィスプ（Visp）に着く。行けたらこゝから乘りかへて、マッターホルンを見て來るつもりであつたが、矢張り冬の間は不通であつた。ヴィスプは西スウィスではヴィエージュ（Viège）と呼んでゐる。

氣温は餘程低くなつたと見えて、窓の内側が凍りはじめた、平らな谷底から、絶えず急な山岳を仰いで、ブリークへ着いたのは日暮れに間もない頃で、停車場前のホテル、ヴィクトリヤに入り込んだ。

ブリーク (BRIG)

イタリヤ風に建てられた石屋根の、山ふところに吹きためられた一かたまりの、ブリークは寥しい村である。北はローンの溪の源遠く、フルカの峯は屹えずやと、のび上る空は雪もよひの重く濁つて、フィーシュ、ベルワルトと流れに沿ふて、グリムゼルの尼寺へも、まだ二日路はあると云ふ。南にはながながと、イタリヤへ通ふ街道も、今は雪に埋れて、ドモドソラへの旅人も、シムプロンの舊街道は通らない。

私はこの街道をたつた一人、南の丘の上にぶら〳〵登つて行つた。村路は狭く、スヰィスとは思はれぬくらゐうすきたない松薪の、山のやうに積んであつた上に並んで、もとより日暮れ近い殘り惜しさと云つた調子で、がや〳〵岳烏のやうにはしやいでゐた餓鬼共が、人の顔を見ると神妙に、帽子をぬいて御辭儀をした。私はその下を、あほのきながら通りぬけて南へ出る。夕ぐれは黒衣の袖に宿ると見えて尼僧一人、しよんぼりと立つてゐた會堂の石の戸には、千七百二十八年とおぼろげながら記されてある、目下になつた村からは、犬の聲も響かず、寂として、谷よりせまる夕闇は、「死のさとし」と物悲しい。

シンプロンの路はやはり雲につゞいてゐた。人氣の無い丘からブリークへ、雪路に漏れた小屋の灯の間に下りて來たのは、日が暮れて二時間もたつた後である。宿には私と、山ヶ人らしい夫婦づればかり、シムプロン、エキスプレッスの汽笛も、遠い國から響くやうで心細い。

レッチベルク (LÖTSCHBERG)

正月も十八日となつた。今日は日曜である、霧の深いローネ、タールに鳴り渡る鐘の音に別れて、シュピーツ行の電車は徐かに動きはじめた。空はどことなく薄明るく、谷を限るベルアルプは、雲の上と思はれる、が溪は夜明けをそのまゝで、線路に近い積雪に、石をのせた百姓家と、霧の絶え間に、これも眞白ろな、溪底を左に見下ろすばかり、電車は昨日通つたローンの崖の上をだん〳〵登りながら、谷にはなれて北に向ふ。ヴィスプを見下ろしてから全くローンは見えなくなつて、ます〳〵深い崖の間に入つてゆく、この邊から、ヴィスプ、タールのミシャーベル (Mischabel 4554 m.) が見える筈であるが、今日はてんで見當もつかなかつた。九哩のレッチベルク隧道 (Lötschberg Tunnel) に入る頃は、雲の上に出てしまつて、積雪に反射する日光の强さは、話しにならぬ程であつた。このゴッペンシュタイン (Goppenstein) の停車場は、ウィラーホルン (Wilerhorn 3311 m) の登路キッペル (Kippel)、又はビーチホルン (Bietschhorn 3953) の登り口のリート (Ried) への分れ路で、この、ローンから東北に深く〳〵入り込んだレッチェンタール (Lötschental) は、數年前スヰス山岳會の年報の附圖で、深く印象をのこされた谷である、殊に、その源、同じ名の氷河を溯つて、アーネン、グラート (Anen-Grat) を左にして、エゴン、フォン、シュタイゲルの小屋 (Egon von Steiger Hütte) から望む、彼のベルネル、アルペンの第二高峯、アレッチホルン (Aletschhorn 4182 m.) は、巴里の旅でも夢に見たくらゐであつた。晴れてはゐたが、車窓からは深い溪と、ロンツェの流れを見たばかりで、汽笛一聲また暗やみに入り込んでしまつた。

癪にさはるのはこのトンネルである、カンデルシュテークからフェルデン (Kandersteg im Kandertal; Ferden im Lötschental) にこえるレッチンパスの、東はシルトホルンからチンゲルホルンへつゞくベ

テルス、グラート (Schilthorn, 3297 m.; Tschingelhorn, 3581 m., Peters Grat)、西はアルテルス、バルムホルン (Altels, 3630 m.; Balmhorn, 5711 m.)、の山々は、いつの間にやら頭の上を通りぬけて、やれうれしやと車窓を開けて、キラ〳〵光る雪の上に首を出した時は、ゲンミパッスの岐れ路、すでにカンデルタールに入つてしまつた。隧道を出ること間もない、カンデルシュテークに着いたのは十一時半。

カンデルシュテーク (KANDERSTEG)

ベルネル、オーベルラントからローンのオーベル、ヴァリスへ通ふ峠路は多くあるが、いづれもトゥーンの湖畔シュピーツをたつて、シンメンタールをレンクへ出るか、或はこのカンデルタールを溯つて、レヨッチェンパッス又はゲンミパッスをこえてゆく。そして旅人の身に泌みるのは、ウィルツトゥルーベル (Wildtrubel, 3253 m.) の麓、このゲンミパッスをこえて、ヴァリスの山を谷の彼方に望む時であらう。が、それも真夏のことで、山巡りの天狗か知らず、旅烏には峠口へも近けなかつた。カンデルシュテークにも、雪は四尺をこえてゐるくらゐである。

私は決して失望はしなかつた。停車場についた時は、こゝはまた霧でひや〳〵するばかり、兩側の絶壁に、氷柱が瀧のやうに垂れ下つて、カンデルの小さい流れを包む白樺には、枝にも、實にも、まつしろに樹氷が咲いてゐる。荷物を雪車につけてヴィクトリヤ、ホテルに行く。

サロンや食堂の廣いのも氣持ちがいゝ、晝飯の間に、霧は次第に晴れて、二階の室に戻つた時、第一に、眼についたのは、ヴェランダの正面にのしかゝつた、ビルレン、シュトック (Birrenstock, 2511 m.) の鋭い絶壁であつた。その右に谷の開いてゐるのはまだ雲の中で、そこに大きく、ブリュームリス、アルプの表はれたのは次の朝で、午後はさすがに薄ぐらいカンデル、タールを溯つて、飛び〳〵に建てられた百姓家の間をぬけて、深い雪の上を、ゲンミパッスの登り口まで行つて來た。カンデルに臨ん

だホテル、アルペンローゼで御茶を飲む、その間に厚くもない雲は破れて、時々冷しい瞳のやうな蒼空が仰がれる、そして飛んでもない頭の上に、マッシーフな氷の峯が東に北に表はれた、それはタトリスや、リンデルホルン (Tatlishorn 2966 m. Rinderhorn, 3457 m.) の連脈であつたらう。この雲の暗い峠路は、夏の旅にゆづつて、今日は山麓の撮影に日をくらしてしまつた。時々寺の鐘の音が、靜かな溪底から響いて來る。

ホテルはいゝが亞米利加者が多いから、ディナー、ジャケットこそ着けてはゐるが實に厭味だ、女は女で、流行かも知れないが、三段くらゐひだのとつたスカートで、おつに澄してねり込んで來るのが、亞米利加面がダイヤのブローチよりも鼻につく、並べて見ると、ウェイトレスの方がよほど上品であるが、いづれにしても、女房ではないから差しつかへは更らに無い。兎に角、食堂のやかましいのは事實であつて、ニューシャテルもすつかり頭へ上つた。いゝ加減に切りあげて、スモーキングでカフェーを飲んでると、プロプライターの御馳走とあつて、村の人達が合唱を始めた。若い女はやつぱり耻しさうに唱つてゐる、そして最後にスウィスの國歌を歌つたが、同じメロディーでも、英國のよりはるかに感じがいゝと思つた。その中サロンもだん〳〵賑かになつて、女まじりに三四人、ピアノのそばにやつて來たから、御免を蒙つて寢室に逃げ出してしまつた、庭のアーク燈は晝間のやうで、氣樂な連中はまだスケートをやつてゐる。

例によつて眠れない。手紙や日記に暇をつぶしても、頭はます〳〵さえて來て、カンデルの瀧の音の聞えなくなつたのは、もう二時に近かつたらう。

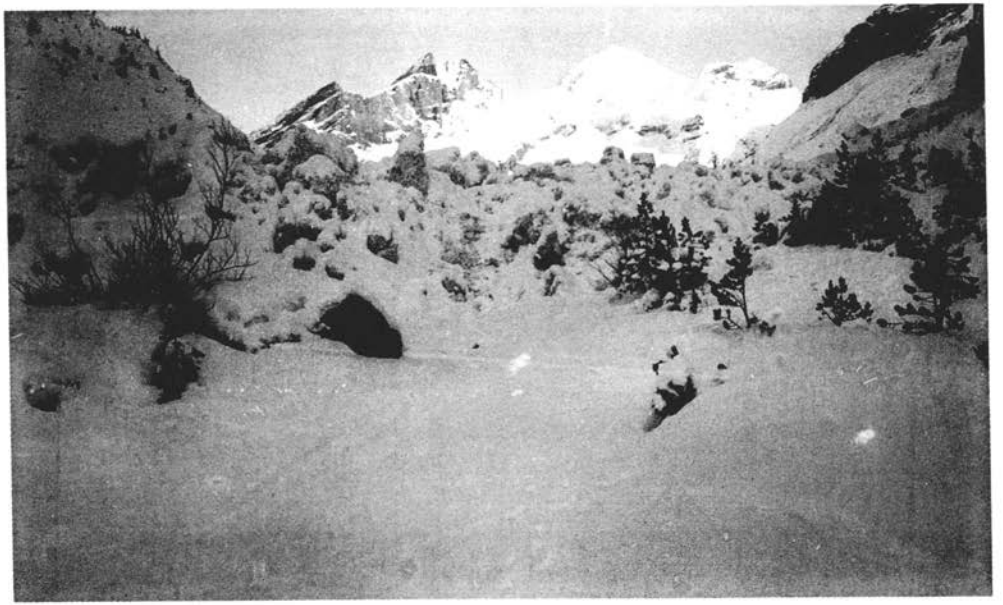
次の日は晴れも晴れた、デジューネーは室にはこばせて、ウェランダで山を見ながらカフェーを飲む。室は東むきで、カンデルタールと丁字に向き合つたエッシネン、バッハ (Oschinen Bach) の正面に、プリュームリスアルプの山塊が、手に取るやうに表はれる。最高峯は三千六百六十九米のプリュームリス

アルプ、ホルン (Blümlisalphorn)、左に雪の尾根でつゞいたロートホルン (Blümlisrothorn, 3300 m.)、此の間にワイセ、フラウ (Weisse Frau, 3661 m.) の雪の山稜が見える。すぐ左はブリュームリス、アルプシュトックのギザ〳〵な絶崖で、それにつゞいて、ウィルデ、フラウが表はれた (Blümlisalpstock, 3219 m.; Wilde Frau 3259 m.) そしてこれ等の麓は白雪の間に、氷色の光る、同じ名の氷河が、懸崖の途中までたれ下つてゐる。

カンデルの谷は、これと直角に、南へ深く入りこんで、こゝから見えるつき當り、タトリスの峯つづきで、三つ叉に枝分れして、右に入るのがユシネンタール (Üschinental)、左はガステルン (Gasterntal) そしてゲンミパッスは眞中の、シュウルツバッハ (Schwurzbach) に沿うて、南をやゝ右へ登つてゆく。そしてこれ等を合せたカンデルは、ビルレとフィルシュト (Birre und First.) の間を北に流れて、フルッティゲンにエンクストリゲン、タール (Engstligental) を合せ、レルヘンバッハにキーン、タール (Kiental) を合せ、シュピーツの片ほとりに彼のシンメンタールと合して、トゥーンの湖の南にそゝぐ。

ヴィクトリヤ、ホテルの横に、サイン、ポーストがあつて、エッシネンゼーまで四キロと記してある。例の機械をぶら下げて、その雪路の踏みかためた上を東へ登つて行つた。村と云つても通りをはづれると、こゝには小屋が二軒、積雪の間に見えたばかり、たちまちタンネの林に入つて、路は次第に細く、つま先あがりになつてくる、ふりかへると朝の鐘の鳴る教會の尖塔も、ホテルの窓も小さくなつて、その村の上にのしかゝるフィルストの連脈が、折りからの朝日を斜めにうけて美しい。

が、谷の雪にキラ〳〵と日のさしたのは、十一時を少し過ぎてのことである。林はどこまでもつゞいて、その後ろの絶壁に、遠くから見えたまつしろな氷柱が、タンネの枝ごしに仰がれる、左にはビルレの麓が小さな流れにせまつて、その斜面の森の中に、獵師小屋がほそ〳〵と烟の立つのが物さびしい。地は一面に純白に、これを覆ふ狹い空は、蒼空とよりはむしろ黑く思はれた、もう晝に近いし、



プルアスリムーユリプ

影撮氏助伊村辻

フィルムもすつかり撮しきつたので、一先づ宿に歸つて來た、食堂の廣い窓からは今の林の眞上に、ブリュームリスアルプが正面をきつて並んでをる。

同じ路を、またぶら〳〵登つて來たのは午後一時、もうカンデルタールに日が一面にさし込んで、透明な空氣の中にブリュームリスアルプは眼の前にあるけれど、いくら登つても、距離は依然として變らない。タンネの森を東にはづれると、路はだん〳〵急に、雪は次第に深くなつて、たび〳〵雪崩の跡を登つてゆく、雪路は中々難澁で、一里ばかりのエッシネンゼーまで、二時間もかゝつてしまつた。

樅はだん〳〵まばらになつて、兩側の絶壁は覆ひかぶさるやうに近づいて、やゝ小高い丘に立つと、ブリュームリスアルプはもう頭の上である、その直下、だら〳〵道を四五町下りると、湖水のふちに出る。今は云ふまでもなく雪に覆はれた氷の下で、その三方を取りかこむ斷崖の氷柱は、ブリュームリス、グレッチャーと見わけ難いくらゐ壯觀を極めてゐる。湖のふちにその名をとつたホテル、——と云ふよりもエッシネンゼー、ヒュッテと呼ぶ方が、眞面目な態度だと思はれる、——宿屋がある。寒くてたまらないから、飛び込んで御茶にありついた。

湖は窓から眼の下で、ブリュームリス、アルプホルンは湖べりの樅の梢よりも、更らに高く屹えてゐる、日を半面にうけた、ロートホルンの牙のやうな山稜は、氷河の雪に陰をうつして、こゝはもう、深い日蔭になつてしまつた、宿の主婦だか下女だか分らない女に、夏時分の樣子を聞いたりして、一時間ばかりストーヴのそばにかぢりついてゐた、そしてカンデルシュテークに戻つたのは五時過ぎで、歸りは一時間しかかゝらなかつた。

ヴェランダに出る。夕闇はもう溪を包んで、しーんとした森の上に、アルペン、グリューンの美しさ！。さすがに高いブリュームリス、アルプホルンや、ワイセ、フラウの頂は、最後まで薔薇色に輝いてゐる。そしてどこからとも知らず、次第々々に薄らいで、灰色の空に消えてしまふと、たゞ雪明

りにくつきりと見える樅の梢に、ピカリ〳〵夕星が光りはじめる。

夜またヴェランダに立つ、山はうす蒼く、物の精でもあるやうに、薄ぐらい溪の彼方に蹲えてゐた、そしてその最高峯の右の肩には、星が一つピカッとエメラルドをちりばめたやうに光つてゐる。山ふところの小村には、柚の焚く火が赤く見えて、死灰の闇に、風の響さへかすかなのが心細い。

シュピーツ (SPIEZ) よりインテルラーケン (INTERLAKEN) へ

天氣は非常にいゝ。朝は村の間を散歩して、十一時十三分の電車でシュピーツへ向ふ。これからも左側の窓が景色がいゝ。

線路は、まもなく大きな曲線を書いて、絶壁の側面をカンデルグルント (Kandergrund) の谷底に下りる、すぐ左に高い岩山の上に、取りのこされたフェルゼン、ブルク (Felsenburg) の塔の上に、數本のタンネが聳えて、こゝを曲る時、やはり左の谷奥に、アルテルスとバルムホルンが表はれた。フルッティゲン (Frutigen) から、なほカンデルの流れにそうて、ニーセン (Niesen, 2366 m.) の登山鐵道を左に仰いで、山の東の裾をぐるつと廻ると、こゝにはもう靄がたなびいて、どんよりと暗い雲の底に、トゥーンの湖が鉛色に表はれる。シュピーツは靜かな町である、トゥーンの南ニーセンの直下にあるから、あほぬくと、ピラミッドの雪の山は湖水をのぞき込むやうに屹えて居る、對岸のベアテンベルクには、重たく雲がたれ下つて、フィヒテの森が雪をかづいて美しかつた。十二時に乘りかへて、湖水の南ぎしを、水はすぐ左り手に、右には、冬枯れの牧場と板屋根の百姓家と、その上にのしかゝる雪の、アーベントベルクの麓を廻つて、半時間でインテルラーケンに着く。こゝもやつぱり冬だ、ホテルと云ふホテル、少し氣のきいた大通りの店は八分通り閉つて、停車場前の雪路は人氣もなく靜まりか

へつてゐる、私は荷をトレーガーにかつがせて、すぐ角のベルネルホーフ (Bernerhof) に入つた。

宿は例によつて私一人で、主人夫婦に女中が二人、氣のぬけたやうなポルティエと、いつも空腹と見うけられるバレーが一人、かう靜かでも少々心細い。空は灰色で、シンニゲプラッテ (Schynigeplatte. 2060 m.) やハイムウェー、フルー (Heimwehfluh) も雲の中。山が見えますと入れてくれた、表二階のソーファによりかゝつても、正面のラウテルブルンネンは、兩側の山脚に、黑木の梢の外は眞白ろな霧の海で。

ランチが終るとすぐ街に行つた、ニクレスと云ふ寫眞屋で、現象を賴みがてら、禿頭のおやぢに、散々油を賣つて來た。カフェーをのみながら新聞を讀んでると、主人がやつて來て、山が見えますよと云ふ、玄關に出ると、ルーゲン (Rugen) のすぐ上に、ラウテルブルンネンの霧の間に、彼のユングフラウの一角が表はれ始めた、それはシルベル、ホルン (Silberhorn, 3705 m.) とギーセン、グレッチャー (Giessen-Gletscher) の一部であつた。時々雲の間に、ユングフラウとメンヒの頂上が見えた、然し今迄、寫眞や地圖で想像したよりは、思つたより遠い。冬の今は、インテルラーケンを取りかこむ山々の、夏から秋にかけての展望臺も、深い雪に覆はれて、とても登ることは出來ないが、せめて少しでも近くまでと、例の寫眞機に杖一本、停車場前の通りを南にぬけて、ルーゲンの樅の山に登つて行つた。ルーゲンは二つに分れてゐて、その間の低い路が、ウィルデルスウィル (Wilderswil) の小村をぬけて、南の溪をリュチーネ (Lütschine) の流れに沿うて、ユングフラウの直下、ラウテルブルンネンにつゞいてゐる。私はこの街道から左にきれて、ルーゲンバルクの森の中を、日暮れまでぶらついて歸つて來た。

トゥーンとブリエンツ (Thunersee und Brienzersee) をつなぐアーレの南に、北はハルデル (Harder) の山つゞき、前には左にシンニゲプラッテ、右にルーゲン (Kl. und. Gr. Rugen) からアーベントベル

ク(Abendberg)の山脈にかこまれた、インテルラーケンの平地は、土地の人達にボェーデリ(Bödeli)と呼ばれてをる。インテルラーケンは云ふまでもない二つの湖水の中間で、ボェーデリはシュウィーツェル、ドイッチの小さな平野を意味してゐる。この平野は、ブリエンッからトゥーンにそゝぐアーレの流れに兩分されて、南はインテルラーケンとマッテン(Interlaken, Matten)、北岸とトゥーンの湖水とにはさまれたウンテルゼーエン(Unterseen)とに分れてをる。そしてインテルラーケンブロバアは、やはりアーレに並行したホヨーエウェーク(Höheweg)の大通りで二つに分れて、主なホテルや商店の大部分は、こゝに、軒を並べてをるわけであるが、今は何にしてもシーズンはづれで、街は軒先の氷柱と共に靜まりかへつてゐる。

ラウテルブルンネン　(LAUTERBRUNNEN)

ラウテルブルンネンはその文字の示めす如く、「泉ばかり」の谷であつて、リュチーネの流れをはさむタンネ、フィヒテの林の裏は、すぐ直立の絶壁になつてゐる。インテルラーケンから見る此の溪のつき當りは、云ふまでもないユンクフラウの大山塊ではあるが、ワイセ、リュチーネは西に折れてチングルグレッチャーにつゞいてゐる。此の兩側の斷崖は無數の氷柱で、直立の岩壁は九百八十呎、歐洲第一の大瀑布、シュタウブバッハ(Staubbach)は、この兩側にかゝつて居る。スヰィスを旅した人で、この谷に遊ばないものは殆んどあるまい、かつて、ゲーテはこゝに遊んで上層の雲は破れて蒼空を見る、されど雲はなほ斷崖にたゞよへり、仰げば、彼のシュタウブバッハのかゝれるあたりは、薄き霧にぞ覆はれたる、をゝ！　ein sehr erhabener Gegenstand.

Es ist vor ihm wie bei allem Grossen ; solang es Bild ist, so weiss man doch nicht recht, was man will.....

と書きかけたのは、千七百七十九年十月九日の午後六時半、彼れがトゥーンの湖を渡り、ウンテルゼーエンに舟をすてゝ、この大瀑布の下についたのは、同じ日の午後四時三十分であつたと云ふ。

私は今、雪に埋れた白樺や、トウヒの密林を、汽車の窓から見あげながら、薄ぐらい谷底をのたくる、蒼白いリュチーネの流に沿うて、溯つた時、空は晴れてゐたか、今は頭に殘らぬくらゐ、たゞ暗らい暗らい感じより外は、何物もなかつた、そして、やゝ開いたラウテルブルンネンの村で下りて、かちかちに凍りついた村道を、その瀧の直下、同じ名の宿に着いたのは午後三時、谷はもう片蔭げになつて、見上げる瀑布の絶壁をかざる、一面のつらゝを仰いで、その紀行を思ひだした時、溪の空は濃く深く澄みきつて、かすれ雲の一つ二つ、ミュルレンの空にたなびいてゐたのを覺えてゐる。

ホテル、シュタウプバッハは洒灑た宿である。然し本館は九月の末から閉ぢてしまつて、リュチーネに向つたシャレーに、小さな室をあてがはれた、板敷の、低い天井も旅らしくて面白ろい。すぐ側は會堂で、塔の頂はシュワルツ、メンヒに對してゐる、下はすぐ墓原につゞいて、冬なれば瀑の音はひゞかず、暮れてゆく溪合に鳴りわたる瀬の音が寥しかつた。折り〳〵瀑のつらゝが碎け落ちて、三四度兩側の絶壁に木魂する。十八ばかりの女中が、ピアノを彈いてたくらゐだから、御客は無論私一人、今のは何だいと聞いて見たら、オーベルラントの民謠ですつて笑つてゐた、夜は村の仲間が集まつて、トリオをやるんですなんて中々得意だつた、伴奏かいつて聞いて見ると、案外かな、アルトださうな、それはいゝ處へやつて來たねと御世辭を並べたら、咽喉が痛いから唱はないんださうだ、道理で小さな咳ばかりしてゐる、小供だから大方煙草がきらひなんだらうと思つて、平氣でゐたがこれは少々可愛想な。

日はとつぷりと暮れてしまふ。二重窓に冬の夜をさえぎつて、瀬の音の響くサロンのストーヴの、眞紅な火を見つめながら、夜は靜かに更けて行く。

◎スヰイス日記　辻村

旅とは云へ實に急がしい、夜になつても通信やら日記やら、案内記の下調べだけでも、隨分樂ではないが、扨てそれも大して苦にもならない、寢床に入つてからはじめて本を讀み初めるが、今夜は枕下の燈がないので、早く灯を消して床に入る、中には湯タンポが入れてあつた。

ウェンゲシ(WENGEN)よりミュルレン(MÜRREN)

夜明けは中々寒むかつた。教會の鐘が鳴りだしたので、窓をあけて見ると、溪はまだ寢が足りないやうに薄ぐらいけれど、あほのくと、空は蒼く晴れてゐる。室につゞいたサロンの窓からは、溪の上流が遠く眺められる。シュワルツ、メヨンヒとミュルレンの懸崖でたち切られたつき當りには、グロース、ホルンから北になだれ落ちる、シュマートリ、グレッチャー(Schmadri-Gletscher)が水色に光つてゐた。

食事がすむと、少さなスッートケイスを停車場へあづけさせて、雪の深い崖路を、ウェンゲンの方へ登つて行つた。リュチーネの橋を渡るとすぐ登りになつて、ラウテルブルンネンの村は、もう眼の下になつてしまふ。そして兩側の切り岸は、額縁(フレム)のやうに偉大な山岳をめぐつて、その中心はブライトホルン、さうして左にはシュワルツ、メヨンヒの、惡魔のやうな岩の上に、ユングフラウの斜めに朝日を浴びたシルベル、ホルンが白銀よりも美しかつた。ラウテルブルネンの溪底は、無論純白であるが、その兩側にきつたての斷崖には、雪もかゝらず、まだ日をうけぬまつ黒な岩壁に、無數の氷柱がたれ下つてゐる。ウェンゲンはすぐ頭の上にあるけれど、此の溪底との高さの差は、千六百呎に及んでゐる。千鳥がけの雪路は、辿つて〳〵閉口してしまふ、風こそないがこの寒さに、全身に汗を流して登つてゆくのも、隨分物ずきな話しで、電車に乘れば半時間で達せられる。然し景色は非常にいい。私は今、東側の絶壁の中段に達した、テウテルブルンネンタールのつきあたりには、ブライトホル

ン（Lauterbrunnen-Breithorn, 3779 m.）とチンゲルホルン（Tschingel-Horn, 3579 m.）が屹えてゐる、この山稜を東北につゞく、ミッタークホルン（Mittaghorn, 3895 m.）や、エーベネフルー（Ebeneflub, 3964 m.）は見えないが、これ等の前にのつしとかまへたユンクフラウは、實にすばらしい、山の名前とは似てもつかないがん張り方だが、それも無理はない、ユンクフラウは山の姿を表はした名ではなくて、十三世紀の頃に、インテルラーケンの尼達が、あの山の麓に庵をむすんでをつた爲めで、初めて見えたのは、ユンクフラウベルクと云ふ名であつた、それが果して、この山頂を意味したものかは分らないが、尼達の住んで居つた山には、ワインゲレン、アルプ（Weingeren-Alp）の名が見えてをる、それは今のウェンゲルン、アルプ（Wengern-alp）と想像せられる、いづれにしてもユンクフラウが、明かに今の山岳を表はしたと思はれるのは、十六世紀の頃であつて、初めは Junckfraw, 或は Junkfraw と記されてある。とにかく Augustinerinnen. 即ち jungfrauen から起つた名前であつて、山の形容からはじまつた名では決してない。

ウェンゲンに着いたのは、一時間半もたつた後で、無論、人つ子一人に逢はなかつた。朝日はユンクフラウの一角に輝きはじめて、その雪は白熱にさえかへつて居る、そして直下、ラウテルブルンネンはまだうす暗く、淡い靄がたちこめてゐた。崖の上に立つと、溪をへだてたミュルレンの臺地に、朝の日をまともにうけたシルトホルンの連脈は實に壯觀である。

私はウェンゲンの村を歩き廻つたあげく、ホテル、アイガーと云ふのに入りこんで晝食を命じた。村はラウテルブルンネンの頭の上を、やはり南北にのびた臺地にあつて、そのはづれはユンクフラウが、縦に覆れた小山の上に半空を領してをる。村の後ろはやはり急な斜面で、雪を浴びた縦の梢が、折りからの朝日に美しい。

下りは電車に乗つた。二時十分にウェンゲンをたつて、半時間ばかりで、ラウテルブルンネンに歸

◎スヰス日記　辻村

つて來た。ステーションにあづけた荷物を受け取つて、すぐケーブルカーに乘りかへて、崖の上のグリュッチ（Grütsch）にゆく、ユンクフラウとメンヒ、アイガーは、登れば登るほど高く大きく見えて來る。グリュッチで電車にのりかへると、二哩半ばかりでミュルレンに着く。停車場に迎ひに來てゐたボルティエに荷物を賴んで、もうすこし寒い日暮の雪路をアルペンルーエ（Hotel Alpenruhe）に行つた、私の泊つたのは、ラウテルブルンネンに臨んだシャレーで、ストュディオのデサインにでもありさうな、小ぢんまりした感じのいゝ建物である。室のテレースは東むきで、ユンクフラウは庇の上にそびえてゐる、それから南へ曳いた山稜は、エーベネフルー（Ebenefluh, 3964 m.）、ミッタークホルン（Mittaghorn 3895 m.）グロースホルン（Grosshorn, 3765 m.）、溪のつき當りはブライトホルンで、その氷河の半面は、チンゲルトリット（Tschingel-tritt）の山稜にさへぎられてゐる。ユンクフラウの左はメンヒ、アイガーで、その北に切つたての、鋭いアイガーワント（Eiger-wand）の左りには、ウェッターホルンの三山（Wetterhörner）が見える。晩餐にはまだ間があるので、本館に行つてカフェーを飲みながら、その窓から、またしみ〴〵と氷の山を見つめた。見れば見るほど恐ろしいのはユンクフラウの絶壁である。此のラウテルブルンネンに面したロッタールヒュッテ（Rottal-Hütte）から登るのは、最も危險な登路の一つであつて、絶壁の雪がすつかり解けて、岩の乾いてゐる間でなければ、不可能であると稱せられてをる。

シャレーに歸つて、煙草をくゆらせながらテレースに出ると、驚ろいたのは、今宵のアルペン、グリューンである、今述べた山々の頂は、まるで火のやうに眞紅である、そして雪の陰のコバルトを帶びた、その對照が實に美しい。眼下になだれ落ちるユンクフラウの絶壁の、裾は靄がたなびいて、マッテンか知らず、溪底の小村には、小さい灯火が動きはじめた。アルペン、グリューンはたちまち淡くなつて、最後までほんのりと赤く見えたメンヒが消えてしまふと、もう山は暗くなつて、三つ星が、ユン



ロツタールザツテルよりインユテラールホルンを望む

辻村伊助氏撮影

クフラウの右の肩に光りはじめた。アイガーの左にちら〳〵灯の見えるのは、ウェンゲルン、アルプである。

ニューシャテルの醉に乘じてそゝろあるく。オリオンはすでに高く登つて、今、ユンクフラウの雪をはなれんとするのは、大空の星のなかに、私の好きなシリゥスであつた。夜は靜かに更けて、千八百尺の溪底から、瀬の音がかすかに響いて來る。

次の日アルメントゥーベル(Allmendhubel, 1938 m.)に登る。朝起きてカーテンをあけると、昨日のやうな上天氣、空は水のやうに澄み渡つて、アイガーの半面に強い朝日がさしてゐた。朝食をすませると、すぐその足で、村の眞中にある停車場から、ケーブルカーでアルメントゥーベルの頂上まで來た。さうして七尺を超えた雪の上に立つた。これをとりまく山々は、——私は形容する言葉を知らない、——諸君の想像にまかせるとしよう、たゞその景色を想ふ時、東面の山は日の陰に暗く、南の山脈は、斜めに朝日をうけた無數の氷河に飾られて、西を取りかこむシルトホルンの連峯は、まともに強い光を浴びて、眼もあけぬくらゐであつたことをそへて置かう。さうして時のたつにつれて、ユンクフラウの右、グレッチェルホルン(Gletschorn 3982 m.)につゞくエーベネフルーの、カミソリのやうな氷のアレトに、朝の日が登りはじめたと、つけ加へて置かう。

私は、かち〳〵に凍りついた雪の上に、腰を下ろして茫然としてゐた。この時、地の底が崩れ落ちたやうなすさまじい雪崩(アヴァランシュ)が、アルメントの斜面に起つた、なだれ落ちる雪は、瀑のやうなしぶきをあげて、風もない山の急斜に渦まいてゐる。かう云ふ晴れた日には、一時間に三四回のアヴァランシュは必ずある、そしてそれは、まともに日を浴びたチングルグラートと、ブュットラッセン(Büttlassen, 3197 m.)の方面、及び低い雪田について、西から北へ此の山を取りかこむ、ビルク(Birg, 2678 m.)とムットホルン(Mutthorn, 2426 m.)の斜面にしば〳〵見うけられた。ラウテルブルンネンタールの對岸には、

◎スヰイス日記　辻村

昨日行つたウェンゲンのホテルが雪の間に散らばつて、その背にはチュッゲン(Tschuggen, 2523 m.)からメンリッヘン(Mannlichen, 2345 m.)につゞく低い山稜の彼方に、ファウルホルン(Faulhorn, 2683 m.)シュワルツホルン(Schwarzhorn, 2930 m.)などバッハアルプ(Bachalp.)の山々が望まれた、そして山懐と云つたやうなアルメントの村は、直下の雪の中に、細そ〳〵と煙の糸のやうに紫なのが、純白な斜面に美しい。

私はまだスヰスの山は知らない、おかしまだ日本にゐて、毎日〳〵ベデカーの案内記や、ボールの山岳案内記(Ball:—The Alpine Guide Book)にうつゝをぬかしてゐた頃から、このアルメントッーベルの臺地と、ッェルマットの山寄りリッフェルベルク(Riffelberg)シュワルツゼー(Schwarzsee)はどんなことがあつても、必ず行かうと決心してゐた、バッハアルプのファウルホルンも望みの一つではあつたけれど、今朝、食堂にぶら下げてあつた、ユングフラウの登山鐵道が、クリスマスから二月まで開いてあると云ふ廣告を見てからは、山に離れた展望だけでは、腹の虫が治まらなくなつてしまつた。おかしミュルレンの眺望に、充分な滿足を得たのは事實である。

アルメントッーベルの雪の上を、四時間ばかりうろついて、又ケーブルカーでホテルに歸つたのは午後一時である、切符は登り一フラン半、下り一フラン、往復は二フランであつた。

食堂に出ても上の空で、カフェーも飲まずに飛び出してしまつた。そして例の絶壁の上を、ラッルブルンネンタールに沿うて北へ、深い雪路をグリュッチに行つた。實を云ふとミュルレンから仰ぐユングフラウは餘り大きすぎて、メンヒ、アイガーはその偉大な山容に壓されて、あれども無きが如しと、云つた程ではないにしても、あまり釣り合はとれてゐない。グリュッチに近くほど、此の三山がほゞ等距離に並んで來て、谷の絶崖にすく〳〵と梢をならべた、樅やフィヒテのなか空に屹えてゐるのは、セガンティニでも、ラスキンでも、もう壽や筆の問題ではなくなつてしまふ。殊に眼ざましいのは三つの氷

河、右なるはギーセン (Giessen-Gletscher)、中央はグッギー (Guggi-Gletscher)、そして左、アイカー、グレッチャー (Eiger-Gletscher) の、斜めに日を浴びた、澄みわたつた冬の午後であらう。この三つの氷河の裾は、シュワルッメョンヒの直下に、深い〳〵ゴージを刻んで、トゥリュムメルバッハ (Trümmel-Bach) の瀑布となる。今、私は昨日の朝、咽喉をつりあげて岩壁の氷柱をあほのいた、あのシュタウブバッハの上流にたつて居る。冬の日の風は死して、寂としてはや黄昏れる渓間に、棚びきそめた灰色の靄をゆるがせて、二千呎の深い底から瀬の音が響いて来た。ユングフラウは斜めに、まだ入日を浴びて、シュネーホルン (Schneehorn) がカミソリのやうに光つてゐる。

ホテルに歸る夕ぐれの路は、風こそなかつたが、随分寒むかつた。室に入ると、窓にぱつとうつるアルペングリューンは、昨夕に變らず美しい。ソーファに倚りかゝつて、シガーをふかしながら、暮れてゆく空をぼんやり眺めてゐる。村のそこ〳〵に灯が入いつて、渓底のマッテンにも、小さいあかりが搖ぎはじめる、ツェートレッスが食事の迎へにやつて来た。

登山鐵道 (JUNGFRAUBAHN)

此の頃は夜もろくに眠むれない。眼がさめたのは八時五分前で、電車の出るのが二十分だから、顔もろくに洗ふ暇もなかつた。朝飯などは論外で、荷物をまとめる、ポーターを呼ぶ、それ會計、それ出發と、足下から鳥のたつやうなあわて方で、ポーターと驅けつこをしながら、せい〳〵呼吸をきつて停車場に着くと、乘る間もない位きわどく、それでもやつと間にあつた。室におちつくとけろりとして、先づ同乘の御連中を見まわした、御客は五人、ネイルドブーツの足ごしらへ極めて嚴重に、それぞれシーを携へ、ガイド二人までつれてゐる樣子が、たゞならず見うけられたから、參考の爲めに聞いて見たら、何のこつたグリンデルワルトに行くんださうな、大袈裟なゝどこへ行くんだと云ふから、

ユングフラウヨッホへと答へて置いた、何しろ對手はヤンキーだからやり切れない、I guess, と云ふやうな、耳ざわりな言葉を前置きにして、鼻にぬけた胴間聲で、しやべるは〳〵、而も山岳に對しては、Mönch の發音さへ覺束ないしろ者なんだからあきれかへる。私はガイドの間にわりこんで話しはじめた、が、これにもしたゝか凹まされた、スヰイス語は文字に表はせばいかにも獨逸語だけれど、山人の發音と來たら純粹のシュヴィツェル、ドイッチで、や、どうも少なからず閉口してしまふ。

電車はグリュッチと、ラウテルブルンネンで乘りかへて、一昨日來たウェンゲンを過ぎると、溪をへだてたミュルレンの對岸をだん〳〵南へ登つてゆく、こゝは一面に雪をかぶつた樅、唐檜の密林で、その上に、ユングフラウが屹えてゐるのは云ふまでもない。ウェンゲルンアルプを過ぎて、やゝなだらかな山の斜面をぐるつと廻つて、クライネ、シャイデック (Kleine Scheidegg) に着いた。すぐ前はアイガー、グレッチャーで、すつかり雪に覆はれた此の高原は、朝日をまともにうけて、眼もあけられぬくらゐ光つてゐる。今迄の電車はベルネル、オーベルラント、バーン (Berner Oberland Bahn) で、更らにグリンデルワルトについて行く線路であるが、今は雪が深いので、冬の間は、こゝが此の線の終點になつてゐる。ユングフラウの登山鐵道は、こゝからアイガーグレッチャーに沿うて登つてゆく、客は私を入れて、五人しかゐなかつた。

十時半に發車、こゝからユングフラウ、ヨッホまで往復二十九フラン、夏の三十二フランよりは、客が少いだけに割引きしてあるが、五哩四分ノ三の往復に十二圓の電車賃は一寸驚ろく。もつとも工事の大仕事であつたのは認められる、工事費の總額は一千萬フランに及んで、一哩の平均が約十七萬四千フランに上つてゐると云ふ話だ。そして目下の終點は、千九百十二年に開通になつたユングフラウ、ヨッホで、丁度ユングフラウとメンヒの間の鞍部まで達してゐる。こゝから頂上迄はリフトを作る計畫だけれど、今の所は全然手をつけて無い。冬の間は勿論のこと、夏の登山でも、この鐵道を利用す

れば、餘程、樂になるわけで、千九百十年の夏、本會々員の加賀正太郎君が、ユンクフラウの絶頂に立たれた時は、アイスメーヤ (Eismeer) が終點であつた爲め、ベルグリの小屋 (Bergli-Hütte) に一夜をあかして、次の日、ウンテレス、メッンヒ、ヨッホからオーベレス、メッンヒ、ヨッホを越え、ユンクフラウ、ヨッホに出てフィルンを横ぎり、これから初めて、ユンクフラウの急斜にかゝらなければならなかつたのだ。私は渡歐前の數日を加賀君の邸で送つた。今こゝに來ると、停車場の待合から、君の華奢な旅姿が、ひよつくりと表はれさうでならなかつた。私は知りつゝも氣になつて、たび〳〵首を出してのぞいて見た、そこには驛長さんがぽつねんと日向ぼくりをして御座る、これも何かの緣だらうと、邪魔になるスーツケースをあづかつて貰つた。電車は靜かに動き出す。

ファルボーデンフーベル (Fallbodenhubel) を廻ると、アイガー、グレッチャーの停車場で、すぐ左はアイガーのグラートになつてゐる、これからはトンネルで、次のアイガー、ワントには停車せずに、標高一萬三百七十呎のアイスメーヤで乘りかへになる、こゝも停車場はトンネルの中で、私はすぐ飛び出して、岩壁に穿つた窓から頭を出した。

初めは眩しくてなんにも見えなかつた。無理に眼を見ひらくと、第一に氣がついたのはアイスメーヤのキザ〳〵に割れた氷河の向ふについたシュレックホルンの連脈で (Schreckhörner)、殊にオーベルラント第一の嶮山、急な岩角が雪も氷もはじきかへして、眞つくろに尖つてゐるグロースシュレックホルン (Gross-Schreckhorn, 4080 m.) であつた。その左は一段低く、グリンデルワルトのウェッテルホルン (Wetterhorner) で、よく昔から寫眞で見うけるハスリ、ユンクフラウ (Hasli-jungfrau, od. Vorderes Wetterhorn, 3703 m.) よりも、まんなかのミッテルホルン (Mittelhorn, 3708 m.) が立派である、その後はこれも三山の一つなるローゼンホルン (Rosenhorn, 3691 m.) で、此等の山塊とシュレックホルンの中間に、ベルグリシュトック (Berglistock, 3657 m.) がひかへてゐる。ベルグリはドイツ語の Berglein で、

◎スカイス日記　辻村

「小さい山」を意味してをる、何故にベルグリなのかは、その立派な山容に對して解釋に苦しむ次第である。ベルグリの小屋はこの停車場から行くのであるから、位置は全然その山とは別の方向で、ずつと右手にあたつてをる、これらの間、即ち今立つて居るトンネルの眼下には、アイスメーヤとグリンデルワルトの氷河（Unter-u. ober-Grinderwalder Gletscher）がはさまつてゐるから、その小屋は山と同じ名ながら、すぐ右手に近く、ベルグリシュトックはこの氷河を越え、クライン、シュレックホルンをこえて、二日路に餘つてをる。私は岩にくりぬいた窓に登つて、めちや〳〵に撮影した。車掌にせきたてられて乘換への電車に乘る、これからトンネルはメンヒの地中を穿つて行くので、硬い石灰岩の洞は、電燈に照らされて光つてゐる。クライネ、シャイデックから一時間二十分ばかりで、終點のユンクフラウ、ヨッホに着いた。

停車場につゐいた、トンネルの中にレストラントがある、名づけてホテル、ユンクフラウヨッホは少々大袈裟な名前で、寢室は二室しかない、寢臺が三つづゝ、先づ小屋が正直な命名であるが、海拔一萬一千三百餘呎、しかも冬の眞中のことであるから、高くて（標高ではない）まづくとも、あへて食事に不足を云ふべきではない。ビュフェーを兼ねた食堂の正面は、ユンクフラウフィルンに臨んだテレースで、それをへだてゝや、右に、久戀のユンクフラウが屹えてゐる、が、まづ何よりも眼につくのは、頂上から東に曳く山稜の氷を削つて磨きをかけた、ピックマティルデ（Pic Mathilde）の一峯であつた。左には歐洲一の氷河グローセル、アレッチ、グレッチャー（Grosser Aletsch Gletscher）がなそひに低く、そのつき當りは三角形のエッギスホルン（Eggishorn）から、なほ右に曲り込んで、ローンの谷はこゝからは見えない。

テレースにはツァイスの望遠鏡がそなへてある。氷河の左には、カンム（Kamm, 3870 m.）の稜に二つの小屋が認められたる、そこはコンコルディヤ、ブラッツ（Konkordia platz）であつた。こゝから見る

ユングフラウは、決して雄壮とは云へない、たゞ頂上から南へひくアレトの、ロッタール、ザッテル(Rottalsattel)、ロッタール、ホルン(Rottalhorn)、そしてその背後に崩れかけたやうなグレッチェル、ホルン(Gletscherhorn)と、いづれも四千米に近い山岳の直下に、雪の中から口を開いてゐるベルクシュルントはさすがに恐しく思はれた。

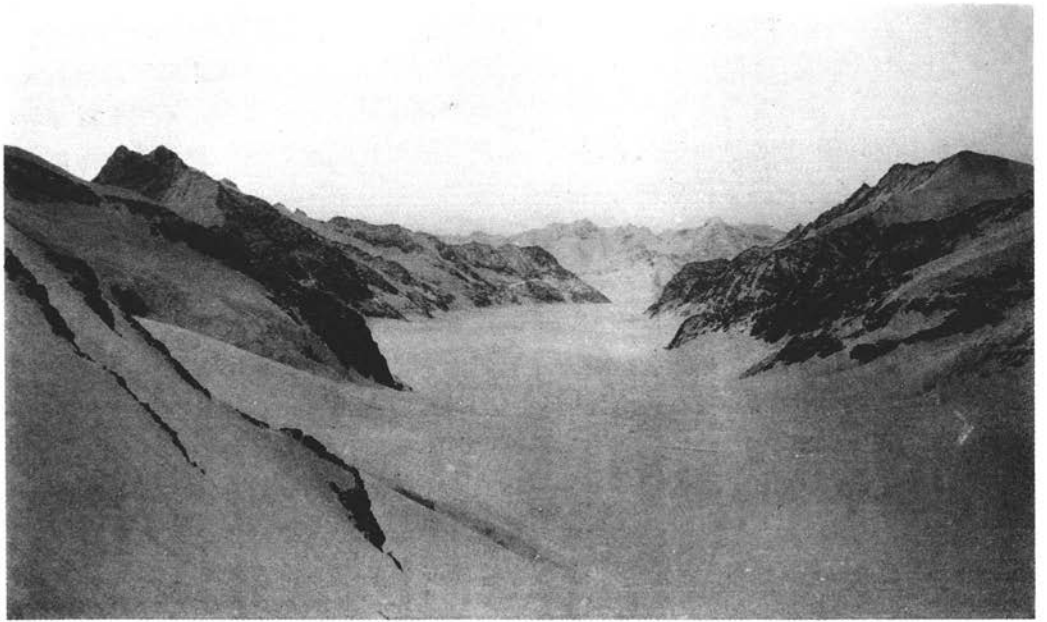
トンネルで更らに小屋から北口にぬけると、所謂ユングフラウ、ヨッホに出る、こゝは平らな雪田で、左は例のピック、マティルデ、右に見上げるやうにつゞ立つたのは四千百〇四米のメンヒである。北は斷崖からグッギイ、グレッチャーになつて、石を投げればとゞきさうな足下に、さつき發つたクライネ、シャイデックの停車場が見える。この方面には高い山は少い、然しラウテルブルンネンの背後に、シルトホルンの峯つゞき、彼のブリュームリス、アルプの群峯は、透明な冬の日に彫刻のやうに望まれた。溪川の雪に埋れた北のはづれはインテルラーケンで、ブリエンツ、トゥーンの湖が、半分霧の中に見下ろされた。ファウルホルン、シュワルツホルンの如きは、何と云つても三千米突に足らぬ山で、かうして見下ろした目には何等の趣もない。

チョコレート、ソルディアーみたいな電車の車掌さんが、呼子の笛を勳章まがいに胸高に帶びて、ちよこ〳〵やつて來ていろ〳〵世話をやいてくれた、なんでも私が果してどこの人間なのか餘程興味をもつてゐると見える、あれがアィガーでこれがメンヒ、その後ろに見えますのがトゥルークベルクと、人をつけ子供でも知つてるやうな山の名前を並べやがる、時にあの山はなんだいつて知つてゐさうもない、小つぽけな山を指さしたら、左樣、あれは、さう、ミュルレンのうしろの山ですがなと考へてた、篦棒奴、ミュルレンの西にあればミュルレンの背ろの山に極つてゐらあ。小屋に歸つて晝飯にした。

食後のカフェーはテレースにはこばせて、そして廣ろ〳〵とした氷河を見下ろした、すぐ前のユングフラウ、フィルンには、雪車を曳いた北極犬が休んでゐる、これは電車でつれて來たんださうな、小屋

の前の雪の上に、シュネーフーン(Schneehuhn)が舞つてゐた、私はこれを見下ろす椅子によりかゝつてつく〳〵とユンクフラウを眺めてゐる。『登るんですか貴下も』と、輕く肩をたゝいた英人があつたが、耻しながら『登る？何處へ』と聞きかへさゞるを得なかつた、彼は私の姿をとみかうみしながら、『いや私達はユンクフラウへ登るんですよ、明日の朝』、『はう、登れますか……』は間がぬけた質問だつたが、此の場合どうも已むを得なかつた。彼れはグリンデルワルトからガイドを二人つれて來てゐる、身ごしらへは一寸の透き間もなく、頬の紅い若やいだ姿もうれしかつた。私は急に登りたくなつた、然しスヰートにウルスター、寫眞機に杖一本と云つた自分のからだをかへりみては、私も登りますよはあんまり推しが强よくつて、この際、口に出せなかつた、大いに考へ込んでゐると、例のチヨコレート、ソルディアーがやつて來た、膝とも談合と聞いて見ると、案外かな、私のやうな風來坊も少なくないと見えて、フロイラインに相談したらどうかなるでしようと答へた、フロイラインは赤面の女である、早速、頼んで見たらこれも萬事心得て、ガイドさへ承知しますれば仕度はどうにでも致しますと云つた、さあ心がゝりはガイドである、三人ゐた中の一人はさつきグリンデルワルトに歸つてしまつた、あとの二人は今、ユンクフラウに登つてゐて、午後二時過ぎには歸つて來るさうだ、聞いて見れば今日も一組、明日も一人、とにかく山登りの御客があるんだから、いくら苦しくても知れたものだらう、氣がかりなのはそのガイドである。

私はテレースに出たまゝで、フィルンの上を眺めてゐた。アレッチ、グレッチャーにはもう片蔭が出來て、クレヴァスが黑く見えはじめた、二時半頃にその雪のはづれ、ロッタール、ザッテルの直下、ユンクフラウ、フィルンの上に黑點があらはれて、望遠鏡でのぞくと、三人の男がシーをつけて、フィルンの雪をけつてまつしぐらに下りて來る、此の連中は半時間もたゝない中、白いミュッツェに、グレッチェル、グラスをかけて、潛水器みたいな頭をして小屋の直下に到着した、來る間も遲しと待ちかまへて、明日



ユンフラウヨツホヨリアレツチ氷河を望む
（正月二十五日早朝）

辻村伊助氏撮影

の計畫を話すとすぐ承知したので、私はもう登山がすんだやうに安心してしまつた。

さてこれからが支度である。何にしてもスウートに重いウルスターではどうしやうもないから、少々汗臭くはあつたが、ガイドのスウェターを拜借することにした、白のミュッツと卷ギートルはいゝが、小屋で借りたネイルド、ブーツは大き過ぎて、いくら靴下を重ねてもバク〳〵してゐる始末、アルペンシュトックの方は餘り短かすぎて、本當に突いてると腰が二重になりさうだつた。が、何を云ふにも借物だからあまり贅澤を並べる場合ではない、反射よけのグレッチェル、グラスは小屋で三フラン半で買つた。まづためしにこんな道具に身をかためて、小屋の前を下りてフィルンの上に出た、グレッチェル、グラスをかけると、雪の陰影が蒼く見えて、まるで世界がちがつたやうに物凄い。午後の雪はさすがに柔くて、カンジキ無しではとても歩けないくらゐだ、フィルンにつゞくアレッチ、グレッチャーには、西側の山の陰がギザ〳〵に影つて、その陰影は刻々に氷河を横ぎつて、東の山脈、トゥルーク、ベルクからカンムにつゞく雪の山に片かげがさし始めた。見上げると小屋は、忘れられたやうに雪の中に寂として、見渡す南の方、十里にわたる氷河は、人の生れなかつた世をそのまゝにしんとして、彼方の空、ワリーゼル、アルペンにアーベント、グリューンが望まれる。日が入ると急に寒むい、雪の斜面を登つて小屋に歸る、ためしに步數を勘定したが、樂に登れるのが先づ二十步、五十步ではとても休まずにはゐられない、無理に登つたら、百步にして眼が廻つた。

小屋のテレースに着くと、例のガイドがやつて來た、一人はフリッツ、シュトイリ (Fritz Steuri)、赤つ面の四十男で氣輕な奴で面白い、もう一人はフリッツ、カウフマン (Fritz Kaufmann)、これはだんまりで年は三十位だと思つたら、僕よりも若いんださうな。

もう外は暗らくなつてしまつた。日が落ちると、氣温は急に低くなつて、今日の晝、丁度零度を示してゐたのが、もう零下十二度に下がつてゐる。

◎スウイス日記　辻村

◎スヰス日記　辻村

室に入ると、さつきの英人がアドレッス、ブックを持つて來て、日本人がありましたよと敎へてくれた、それには片假名でかう書いてあつた。

日本帝國　東京　大關久五郎　地理學を修むる者、此宿ノ人ノ話ニ據レバ、コレ迄吾日本帝國民ニシテコヽニ泊ツテ Jungfrau ニ發ツタ人ハ無イトノコトデス、本當カウソハ私ハ知リマセンガ、兎ニ角コヽニ吾邦人ニシテコノ後コヽニ來リ宿ル方ニ對シ、御免ヲ蒙ツテ私ノ名ヲ日本語デ書イテ置キマス。

九月二十四日

これは千九百十二年のことであつた。成る程かう云へば、『この小屋から登つた日本人』のファースト、アッセントである。

英人名はリチャード、カリッシュ(Mr. Richard Kalisch)、マンチェスターの住人で、獨逸語、佛蘭西語、伊多利語に、シュウィーツェル、ドイッチまで樂に話すのに感心してしまつた、全體、英國人の外國語と來たら多くはなつてをらん、獨逸語が話せるのわかるのなんて、大きな面をする奴でも、發音と來たらなさけない、第一、同じ國のくせに、スコットランドの地名さへろくにしやべれない位だが、同君の發音に至つては例のガイド連に、旦那は英語よりシュウヰーツェル、ドイッチの方が餘つぽどうまいやなんて、感心されてた位である、カリッシュは獨逸の地名にもあるし、つゐりから見ても、或は獨逸種なのかも知れない。日本には新婚旅行で來たんださうな、例によつて不二山のはなしが出たが、新婚旅行だけに果して登つてはゐなかつた。ハーバート、ポンティング氏 (Mr. Herbert. G. Ponting) の親友で、氏がスコット大佐と同行した南極探檢の話しやら、不二山寫眞帖の話しやら、廣重、北齋から京の舞妓の話しまで脫線したのは少々面白ろかつた。

晩餐はウィスキー、ソーダで平らげた、ネールド、ブーツの底ではないかと思つたステークも、丸呑

みにすれば決して硬くはない。

飯がすむとガイドをつれて、例のトンネルをぬけて再びユンクフラウ、ヨッホの雪の上に立つた。ピック、マティルデは星あかりで蒼白く光つてゐる、そして大空は梨地の星で、メョンヒ、アイガーの巨人のやうに屹えた左に高く、北斗七星がかゝつてゐる。氣温は零下十三度、思つたよりは温かい。雪田のはづれに立つて、下界を見下ろした、そこには半點の靄もない、足もとにぴか〳〵光つてるのは、クライネ、シャイデックの停車場で、少し左にはグリュッチュとウェングン、眞ン中に二つ並んでるのはインテルラーケンとウィルデルスウィルであつた。トゥーンの街の灯はずつと左に望まれる、そして更らに〳〵遠くぼーつとうす赤くにぢんでゐるのは、首府ベルンの燈火であつた。夜は寂として物の音も聲かぬ、而し私にはこのまわりに集まつた三山が、ひそ〳〵耳こすりでもしてゐるやうに思はれてならなかつた、ヨッホの雪の上に半時間ばかり立つてたら、ウィスキーの元氣もなくなつて、ぶる〳〵胴振るひが止まない、室に歸ると、山ウ人達がしやべつてる〳〵、何しろ篦棒な胴間聲で、初めの中はユンクフラウと喧嘩でもしてゐるのかと思つた、が、彼等は一揆の下相談でもなんでもない、いづこの山天狗にもありがちな、誠嘘とりませた自慢話をやつてるんだ。腰かけの下には電氣爐がある、空氣は乾燥してゐるし、リョウマチスには持つて來いの療養所である。

リキュールをひつかけて、また山人の仲間入りをした、十時過ぎに此の連中は、私達のガイドを殘して、みんな下りてしまつた、彼等はクライネ、シャイデックから遊びに來たんださうな。話もいゝ加減にきりあげて寢室に行く、私達二人とガイドの一人で一室を占領した、東の窓に白いカーテンがかゝつてると思つたが、氣がつくとそれは小屋を埋めた積雪であつた、室は少し暑すぎる位で、何だか落ちついて眠れない、明日の出發は午前八時である、夏ならば雪が柔かいので、午後氷河の上を通過するのは全然避けなければならない、無論、山によつては登りに八九時間を要し、下山にもほゞ同

樣、もしくはそれ以上もかゝるのがあるが、かう云ふ登山は最、危險に屬するので、いくら夜半に出發しても、午後の危險はまぬがれない、この點に於て冬の方が安全であるが、反對に雪に包まれたクレヴァースに注意しなければならない、そしてアヴァランシュも夏の新しい雪のあとより少ないには相違ないが、現に寢室に入つてからも、遠雷のやうにしば〳〵聞えたくらゐで、日の强い間は決して安全とは云ひ切れない。

眼を閉ぢてもます〳〵神經は過敏になるばかりで、昔から想像ばかりしてゐたユングフラウに登れると思ふだけで、胸の鼓動ははげしくなつた、さう〳〵まだ學校にゐた時分、編輯會の歸りだつたか、高野君の所に大勢で泊つた事があつた、曉方の夢に中村君と二人登山をして、私が頂上の寫眞を撮さうとすると、中村のひよろ長い半身が霧の中に入つてゝ、いくら待つてゝも寫せなかつた、覺めて話したら大變叱られた。天氣はどうだと思つて西側の窓をのぞくと、ユングフラウは眞白ろに屹えて、丁度その上に沈みかけるオリオンが見えた。折り〳〵遠くアヴァランシュを聞く、時計を見るともう三時に近い。

ユングフラウ登山(千九百十四年一月二十五日)

眼られないと云つてもやはりころ〳〵したと見えて、ガイドに起されたのは七時であつた。先づカーティンをあけると、晴れ渡つてはゐるがまだ日が登らないのは、高山とは云へ緯度の高いためであらう。支度はすぐ出來た、朝飯はカフェー、にロールとコールド、ミート、晝の辨當にはパンにタングとハム、それからイヴォルンの白葡萄酒を一本携帶に及んだ、カリッシュ氏と二人でテレースに出る、東南の空がもううすあかくなつて、グローセル、アレッチ、グレッチャーの果ては、横雲の間にウァリスの山々が紫に見える、風は少しも無いが隨分寒むい、昨夜の最低寒暖計は零下二十六度を示してゐた。

午前八時出發、ガイドは二人づゝ同勢六人である、小屋を下りると、すぐ輪カンジキをつけて、ユンクフラウ、フィルンを横ぎりはじめる。こゝから正面のロッタール、ザッテルの取つきまでは、だら〳〵上りの雪田で、私達の通る近くにはクレヴァースは見あたらない、雪は凍つてはゐるが餘り硬くはない、丁度フィルンの半分もこえた時分に日が當りはじめて、もう、グレッチャー、グラスなしでは我慢にも歩るけなくなつた、雪田は決して急ではないが非常に呼吸ぐるしい、そして手足は凍るやうに冷たいが、胸からは汗が流れてどうも氣持ちが惡るい。競馬ではないがとかく速り勝ちな連中を、ランクサーム！ランクサーム！とガイドに注意されて靜々と、やゝ小高い雪の丘にとつついてロッタール、ザッテルの直下に達したのは八時五十五分であつた。

先づ一やすみする、これからザッテルまではなか〳〵急で、あほぬくと、さか落しの雪の間に蒼く光つたクレヴァースが口を開いてるやうで物凄い。煙草をふかしたり撮影したりしてゐる間に、ガイドはリュックザックからシュタイグル、アイゼン（Steigereisen.）を取り出して、輪カンジキと取りかへてくれる、それからロープですつかり縛られてしまつた。先登はシュトイリ、次が私でカウフマンが後殿である、私の一行はカリッシュ君の先きに立つた。さあこれからが本式の登山である、しかしいよ〳〵急斜にとつつくとすつかり樂になつて、一歩〳〵ガイドの足跡を踏んで登るのが少しも苦にもならなかつた。途中に大小のクレヴァースが隨分多い、大きなのには雪の橋（Schnee-brücke）があるからむしろ恐くはないが、小さな奴を飛びこすと、動悸がして〳〵たまらなかつた、やがて中腹の一番大きなクレヴァースに達する、思ひきつて飛びこしたら譯はなかつた、深さは三百米突、一番多く人間を呑んだクレヴァースださうな、苦しみは兎に角一時間つゞいた、そして丁度十時にロッタール、ザッテルの上に到著した。

登りきつた景色はすばらしい、西は直下のラウテルブルンネン、タールを深く〳〵距てゝ、一面に

雪の山の果てには、たゞ蒼空があるばかり、それには一點の雲も浮ばない。アルプスにいくつの山岳があるか私は知らない、諸君も計へたことはあるまい、然しその數の多い山の中で、人に知られた名峯の殆んど全部はこゝに書き上げることも出來やう、私がこのザッテルに立つた刹那、第一に、あゝ美しいと思つたのはワイス、ホルンであつた、それから、伊多利亞境のモンテ、ローザ。ワイスミス、これ等はよく見る寫眞や書はがきで、一目見ればすぐに分つたが、マッターホルンはモンテ、ローザの左にいかにも低くつて、いやにとがつたちつぽけな山だと思つて、あれはクライン、マッターホルンかと聞いたら、驚ろいた、本物のモン、セルヴァンその者であつた。モンブロンの山塊は遠いだけに小さく見える、ラウテルブルンネンに沿う山岳は、ザッテルにすぐつゞくロッタール、ホルン、その陰からグレッチェルホルン、エーベネフルー、グロースホルン、ブライトホルン、チングルホルン、谷の對岸はシルトホルンからベテルスグラートにつゞいて、ブリームリス、アルプが手に取るやうに近い。その中にカリッシュ君の一行が着いた。

ふりかへると、眼下にひろ〳〵と横はるユンクフラウ、フィルンをへだてたトゥルークベルクと、更らにその背後エーヴィッヒ、シュネー、フェルト（Ewig Schnee-Feld）をへだてたグリューンホルンの連脈（Grünhörner:—Gross-Grünhorn, 4047 m. Klein-Grünhorn, 3927 m.）の上にフィンシュテラール、ホルンが屹えてゐる、しかしこれはグリンデルワルト方面から見るやうに、鋭く尖つた樣子は見られない。それから更らに右につゞくのはロートホルン（Finsteraar-rothorn, 3549 m.）であつた。メンヒ、アイガーは極めて近く、メンヒの右にはシュレックホルン山塊（Schreckhörner:—Gross Schreekhorn, 4080 m.）、アイガーの左にはウェッテルホルンを見る、ユンクフラウの斜面に横はる無數のクレヴァースは、まともに朝日をうけて水色に光つてゐるのが何とも云へず美しい。

私は雪の上で雀躍りして喜んだ、そして明日はメンヒに登らうと決心してしまつた。實際この景色

を見ては、二三年この近所にうろついて、山と云ふ山をのこらずきわめてしまひたくなるのは、あながち私一人ではあるまい。冬の眞中でも、ユンクフラウ、エーベネフルー、フィンシュテラールホルン、ウエッテルホルン等には登れるし、メンヒにも今月初めに一人登つた組があつたさうだ、無論、夏よりは危險なのには相違ないが、此の山岳の間に立つては、危險とか安全とか考へるのは馬鹿〳〵しくなつてしまふ、自働車に曳かれたり、梯子段から辷り落ちる男がある世の中なんだから、危險なのは何も登山に限つた譯ではない、死ぬ時さへ來なければ、どんなことをしたつて死ないいものだ、第一人間はそんなに弱いもんぢやない。理窟はとにかく登らずには置くものか、だが恐ろしいのはそのメンヒから北に落ちるグッギー、グレッチャーである。

暫く休んで急なアレト（Arête）をステップ、カッティングをやりながら頂上に向ふ。危險と云へば危險だが、側眼さへしなければ大丈夫だし、苦しいには相違ないが愉快だから何ともない。

私はミシャーベル（Mischabel, 4554 m.）が氣になつて、時々ふりかへつてはさがしたが、少しアレトを登ると、ラウテルブルンネン、タールを限る山稜の上に、實に立派に表はれた。中央の突起は云はずと知れたドームである、がアルプの山の中に、最、美しいのは東にオーベレス、アイスメーヤ（Oberes Eismeer）の上に並んだシュレックホルンと、西南には彼のティンダル（Prof. Tindal）が、第一の登山をやつたワイスホルンの二つであらう。昨日登つた連中の足がたが、そのまゝ凍つて足がゝりになるから餘程樂である、ロッタール、ザッテルから頂上まで四十五分かゝつた、私達がユンクフラウの頂上に、我がなつかしい加賀君の足跡を踏んで、グリュッセを叫んだのは十時四十五分であつた、シュトイリは手袋をはづして握手を求めた、標高四千百六十七米突の氷の上で、天氣はよし風はなし、何しろうれしくつて〳〵たまらない、三時間半かゝるのが普通なんだが、今日は思つたより早く、二時間四十五分で著いてしまつたんでガイドも喜んでゐた。寫眞を撮してからウィスキーを飲んでると、カリッ

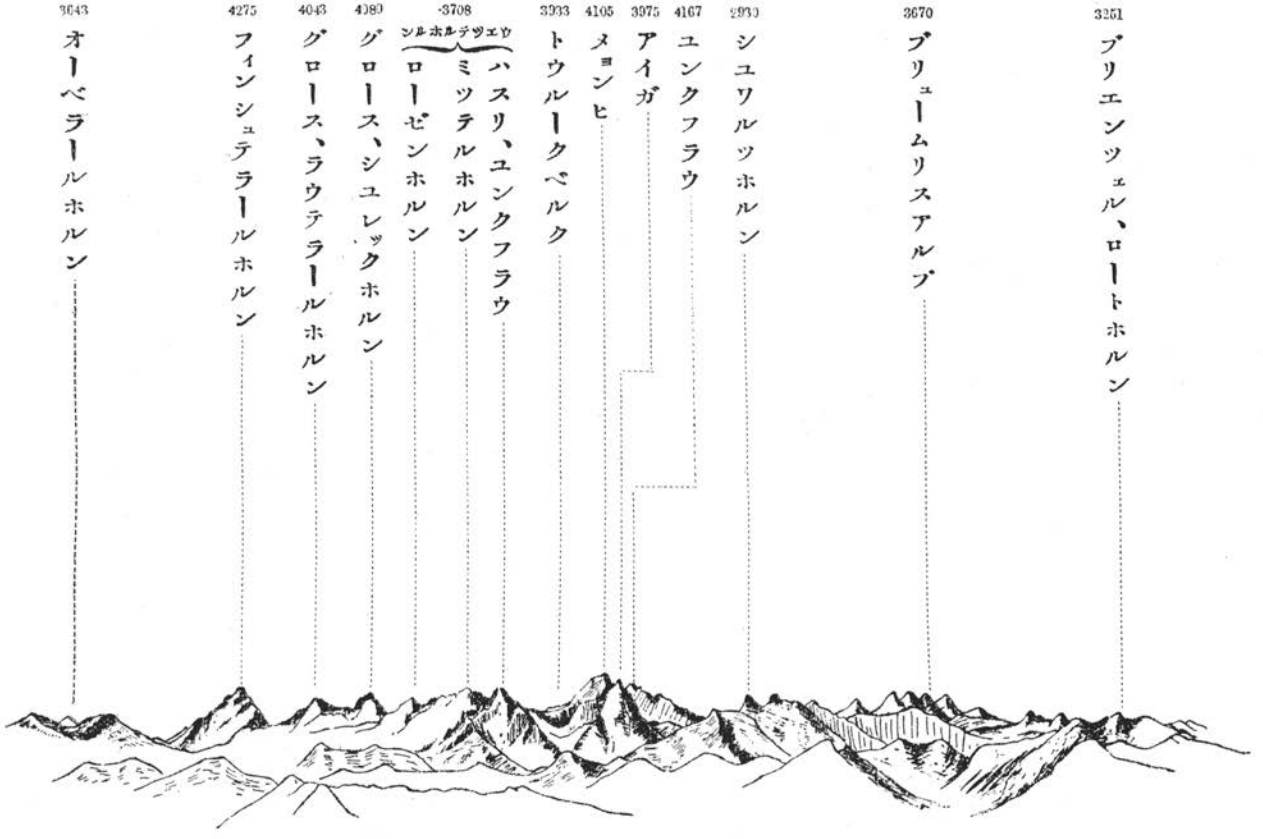
◎スヰス日記　辻村

シュ君の一行がやつて來た、また山頂の一角に立つて、ラウテルブルンネンの山脈を背景に薄いアレトを登つて來る一行を見下ろして撮影して、それから頂上で一同記念の寫眞をとつた。歩いてる間はちつとも感じなかつたが、かうやつてぢつとしてると實に寒むい、辨當に持つて來たパンやチースはボロ〳〵に凍つてしまつて、タングは舌にくっついて痛くつて食へなかつた。

ロッタール、ザッテルに下りてから晝飯にすることにして、イヴォルンだけ飲んだが、これも冷たくつてちつとも酒らしく思はれない。

頂上から見る山岳の記載は、とりもなほさず、歐洲の山岳誌である、東はティロールの山々から西はサボイ、南はピードモントの山脈からロムバルディヤ、北は獨逸でシュワルツワルトの丘が黒く小さく望まれる。大空は濃く澄み渡つて半點の隈もない、たゞ見下ろすトゥーンからベルンの臺地には湖のやうに密雲が閉ぢてゐる。東北のルツァーンとツューリッヒの湖は湖水の形に綿雲が沈んで、その間からピラトゥスとリギー（Pilatus, 2122 m; Rigi, 1800 m.）と、ウリの湖水の南につゞく、ウリ、ロートシュトックの連峯が、置き物のやうに小さい。ウェンゲン、ウェンゲルンアルプはすぐ足もとに點在してゐるが、ミュルレンはすぐ下のシルベルホルンの蔭で、たゞ臺地につゞくギンメルワルト（Gimmelwald）が見えるだけだ、從つて數日前、ミュルレンに遊んでゐた時、アルペンルーエのテレースから仰いだのは、頂上の一角に過ぎなかつたのだ。ラウテルブルンネンからミュルレンに登るケーブルカーの終點グリュッチュは雪の間にはつきり見える。絶頂から瞰下ろす北と東側は、ギーセン、グレッチーの上まで直立の絶壁で、雪は極めて少い。グリンデルワルトの村はアイガーの裾にかくれて、たゞうしろの雪の斜面の間に、小さな百姓家が飛び〳〵に數へられるだけであつた。

展望はいゝが寒くてやりきれない、一時間ばかり雪の上にゐた後、また同じアレトを注意して、ロッタール、ザッテルまで下りて來た、そしてこゝで辨當を平げた、ワインの味は格別である、暫くすると、



リギより望めるベルネル・アルペン

下から三人づれで登つて來る連中がある、ガイドはシュトイリの弟で、兄哥にまけない山う人然とした男だつた、これらは一番の電車でやつて來たのださうな。別れてクレヴァースの多い急斜にかゝつたが、酒のたゝりで苦しくつて閉口した、然し御かげで身體だけはぼか〳〵してゐる、ザッテルの直下で、遲れたカリッシュ君の一行を待ち合したが、きりが無いから御先きに御免を蒙つて、ユンクフラウ、フィルンの上をまつしぐらに辷りだした。粉雪が帽子や手袋に凍りついて、三人とも樹氷のやうに眞白ろだ、距離は長し、傾斜はあまり急でなく、危險も大してないから、こゝは恐らく歐洲第一のシー、フェルトであらう。小屋の下まで辷りつゞけに辷つて、例のテレースで小屋の連中や見物にブラボーを叫ばせたのが、午後一時二十分、あまり早やかつたんでガイド連も驚ろいてゐた。然しそれは理由があることで、私は二人のガイドの間に縛られてゐるから、先登のシュトイリさへ早く歩けば、それだけ時間は縮少するわけで、あへて健脚たると如何とを問はない。もつとも時々ふりかへつて休みましやうかなんて聞くけれど、やすむのは癪だから『うん頂上へ着いてから』と、いつでも答へることにしてゐた、人間の足に遲速はさう大してあるもんぢやない、休まなければ早く着くのは自然の理である。

四十分ばかりたつと、カリッシュ君の一行がやつて來た。これも隨分早かつたさうだ。改めて晝飯を食ひ、改めてワインを飲んだ、同君は、明日アレッチ、グレッチャーを下つて、ドライエックホルン(Dreieckhorn)の直下から右にグローセル、アレッチ、グレッチャーを登つて、エゴン、フォン、シュタイゲルの小屋から、レヨッチェンタールを辷つて、ゴッペンシュタインの停車場に出るんださうな。私は後、スウィスの旅行を終つて、約束の寫眞を送つた、その返事はシチリヤ島のバレルモで受け取つたが、君は計畫通り無事に、カンデルシュテークに着いたとしてあつた。午後も、夜も、山の話でもちきつた、日本で何とか云ふ人を訪問して、御辭儀の馬鹿〳〵しいのに驚ろいたと云つてる、これはあながち同君ば

かりではない、日本の年寄りに挨拶する時は、上眼で對手の禿頭に注意して、時期を見計つて御辭儀を切りあげるんですと、敎へてやつたら、『なーる！』つて大變感心してゐた。それから日本人は妙ですね、細君がちつとも出て來ませんねなんて云つてた、『僕ならすぐ紹介しますよ』と答へてやつたら、大口あいて笑ひ出して、結婚したらどうぞ是非、なんて頭から人を若輩にあつかつてる、マンチェスターに訪問の約束をしたが、まだ訪ねて見ない。氏の持つてたシーの地圖を見ると、エーベネフルー、フィンシュテラールホルン、ウィルデフラウ、ウェッテルホルン等には冬でも登山が出來るとしてある、但しユンクフラウも同樣で、山の斜面はシーを利用して、それから上はクライミング、アイヨンをつけるのは勿論である、そして夏より危險が多くつて、困難なのは云ふまでもない。隨分おしやべりをして、もう十一時過ぎになつてしまつた。

メョンヒ登山（MÖNCH, 4105 M.）（一月二十六日）

ユンクフラウに登りかけた時、我慢が出來なくなつて、いよ〳〵今日はメョンヒに登る事にした。ユンクフラウと共に、メョンヒの名の知られたのも隨分古いことであるが、どこの山岳も同じやうで、果してそれが今の山頂に與へられた名であるかは、比較的近代まではつきりしてゐなかつた。最初に文字に殘された Münch, と云ふ名は、千六百〇六年のことで、然しそれはシュワルツ、メョンヒを意味してゐたと想像される。千七百十六年に、Münch in Grindelwald と云ふ語が用ゐられてをると云ふが、いづれの山岳を云つたものかはつきりしてゐない。十九世紀になつて表はされたベルンからの見取り圖にも、ユンクフラウに並んでシュネーベルク（Schneeberg）と、ガイスベルク（Geisberg）と記したのがある、前者はアイガーであつて、後者はメョンヒである、そしてアイゲルス、シュネーベルク、及びアイゲルス、ガイスベルクと云ふ名や、インネル、アイゲルとか、ヒンテル、アイゲル（Innereiger

◎スヰス日記　辻村

u. Hintereiger) など、區別されてゐるところを見ると、我がメョンヒはむしろ、アイガー、四千米突に達しないアイガーに屬してゐるやうな名稱を、與へられてゐたものと考へられる。が、それも無理はない、ユンクフラウの最初の登山は千八百十一年であるが、メョンヒは半世紀も遲れて五十七年の八月十五日になつて、初めて山巓を人に示したとつたへられてゐる。

登路はいろ〳〵あるが、そのいづれも『危險』の部に屬する、殊に冬の登山には、たゞメョンヒ、ヨッホから、アレトをつたうて登るよりほかに仕方はない、幸ひ天氣つゞきで、此の分ならば別に大した困難はあるまいと思はれた。

小屋を出たのは朝の八時十五分、見下ろすアレッチグレッチャーの右に、ドライエックホルンの頂は、朝日を少しうけて光りはじめた、私達は小屋の人たちに送られて、ユンクフラウ、フィルンの上に立つた、そしてカリッシュ君の一行と再會を約して握手した。メョンヒに行くには、フィルンからもう足跡も無い純白な雪の上を左に登つて、クレヴァースの間をよけながら、トッルークベルクの直下を、北へ〳〵と登つてゆくのだ。雪は思つたより軟く、輪カンジキのまゝでも膝まで踏み込んだ。昨日にこりて今日は雪車を引つぱつて來た、無論、登りには重くつて仕方がないが、歸り路の面白ろさは、今から想像される。今、私達が登つてゆくフィルンの右は、前に述べたトッルークベルクで、左は東ユンクフラウヨッホ（Östliches Jungfraujoch）である、こゝと、昨日私がオーベルラントを瞰下ろした西ユンクフラウヨッホ（Westliches Jungfraujoch）とは、小屋の背後に屹えた岩山で境されてをる、そして私達の登らうとするアレトは、メョンヒの頂上から東南に曳いて、その裾はこのフィルンを横つて、右側につゞくトッルークベルクに接してゐる、その一番凹いところがメョンヒヨッホで、特にオーベレス、メョンヒヨッホと呼ばれてをる。私達は軟い雪で苦しんだあげく、丁度小屋を出て一時間の後、そこに達することが出來た。ヨッホから望む東の景は、何と形容していゝか、私には適當の文字が見出せない。足

下にながら〳〵こつ〳〵く氷河が、末廣がりになつたフィーシェル、グレッチャーの正面に、シュレックホルンの群峯が半空を領して屹えてゐる、トゥーンの湖を渡る旅人の、眉にせまるアーベントベルクの黒木の森の上に、朝の日に燃えては、水底に眠むる魚鱗の夢を破るかと、かつと中空にきらめく時、心無き旅人も、ちり氣だつまでぞつとして、ふなばたにのり出して、ぢつと見つめる一座の山岳のあつたのを忘れまい、彼のグロース、シュレックホルンである。

私は茫然として、ガイドは氷に覆はれた、とある岩角にどつしと御輿を据えて、ひとしくこの山頂を仰いだ。空は濃く深く澄み渡つて、一點の雲もない。そして山と云ふ山、谷と云ふ谷、眼のとゞく限りのすべては氷と雪に埋れて、たゞ塵埃のやうに點ぜられたのは、急なアレトの風淀に、取りのこされた形にたゝずんだ、二人のガイドばかりであつた。

私達は雪車とシーと輪カンジキを、此のヨッホの岩角に殘して、シュタイグルアイゼンをつけて立ち上つた。今日は少し風立つて、アレトの雪を吹きまくるのがしぶきのやうに望まれる。折り〳〵左側の絶崖にアヴァランシュが起つて、粉雪が霧のやうに吹つ飛んで來る、ガイド達は立ちどまつてじつと見下ろしてゐる。とても登れないと宣告されるかとびく〳〵してゐたが、二人とも石像のやうに、なほ默々としてゐた。崖の下からしきりにアヴァランシュが聞える。メョンヒヨッホからアレトにかゝると、間もなく急な岩壁を登らなければならない、それがすつかり氷で覆はれて、アイスピッケルは見事はね返されてしまふし、カンジキもかうなるとあまり役に立たないので、どうも非常に恐ろしかつた。岩角を登りきつて、またも吹きしきるアレトの上に、きつと絶頂を見上げると、雪のアウトライは吹雪にうつすらとぼかされて、西の風が直下グッギー、グレッチャーからまともに吹きつけてゐるのが手に取るやうに仰がれた。シュネーシュトゥルム！重く濁つたシュトイリの聲が、疾風の間にもづんと鼓膜にこたへた。然し、彼はもう何事も云はない、カウフマンも默して私の後を登つて來る、私は勿

論、駄目だ！と宣告されるのが恐ろしさに、そ知らぬ顔で息をころして、吹雪の中を登つてゆく。然し風速はあまり變らず、私達の期望した通り、むしろ案外早く、十時四十分には絶巓の雪の上で雀躍りして、グリュッセを叫び、握手をして、さて四方を見廻した。西に近いのは勿論ユンクフラウである。ユンクフラウ、ヨッホの小屋は、こゝからは見えないが、ユンクフラウ、フィルンからロッタール、ザッテルと、昨日の登路はあり〳〵と見渡される。

北側はアイガー、グレッチャーの上にのしかゝつた直立のワントで、右にアイガーがギザ〳〵に割れたグラートに連いて低く且つ小さい。然し何よりも眼をひくのは、ベルネルアルペンの最高峯フィンシュテラールホルンではなく、又、第二高峯四千百八十二米突のアレッチホルンでもない、オーベレスアイスメーヤの空に高く、フリントのやうに雪を浴びた、彼のグロース、シュレックホルンであつた。

風は時々思ひ出したやうに吹きすさぶ。今日も山と云ふ山はすつかり見える、たゞインテルラーケンからトゥーンへかけて、てうど湖のやうに雲が棚引いて、その厚い敷布の上に、ニーセンが置き物のやうに屹えてゐた。すぐ眼の下はクライネ、シャイデックで、こゝから唾をしたら、山神の靈雨と麓の人達は思ふであらう。グリンデルワルトは村はづれが見えるだけで、アイガーの蔭にかくれてゐる。

幸、風は少し吹きやんで來たが、紀念の撮影をする時分には、厚いハントシューに包まれた手先も凍つて、思ふやうに用へなかつた、十一時に下りかける、然しまた、たまらなくなつて、再び最高點の雪の上を歩きまわつて見廻わした。

下り路は同じステップを踏んで降りるので、初めの中は餘り恐ろしいとは思はなかつた。只、困つたのは例の岩壁である、そして山登りは一人に限ると思つた、私だけならどうにか注意して降りられるけれど、もし上から石か氷の塊でも落されゝば、それを避ける餘裕などはとても無い、私は日本の山岳にも隨分ひどい場所のあるのを知つてゐる、然し今初めて味つた苦い經驗のやうに、怖氣を振つ

たと云ふのは、一歩辷らした場合がもう此の世の御別れで、その恐ろしさに加へるに氣壓の減少である、殊に風立つた冬の登山は、事實を白狀するが、決して〳〵樂なものではなかつた。私はかう云ふ苦しさの中にも、無事に麓からこの山頂を仰ぐ時のうれしさと、今迄私に對しては想像の外に何物も、たゞガイドブックは白紙に似た感じを與へたに過ぎなかつた此の山を、親しみのあるものとして、此の後は机に飾つた寫眞にも、登山案內の一節にも、そしてかつてこの山を仰いだ人達の話にも、より多くのなつかしさを味ひたいと云ふに過ぎない。

鋭い岩角を、一足づゝ氣をくばつて、やつとオーベレス、メョンヒ、ヨッホに歸着したのは丁度正午であつた、風はかなり强い。

私達は、雪車を殘した岩角の風淀に休んで晝食をはじめた、パンは例によつてぼろ〳〵になつて、味はまるでない、ベイコンも舌に凍りついて、甘いより痛いが先に立つ始末だ。今日はクラーレットにレモナードを混せて飮んだ、そしてまたあらためてシュレックホルンを望んだ。オーベレス、メョンヒ、ヨッホの向ふ側に、トゥルークベルクの山稜が犬の齒のやうにつゞいた上に屹えてゐるのは、エーウィヒ、シュネーフェルト（Ewig-Schnee-Feld）とフィーシェル、フィルンを距てゝゐるフィーシェルグラート（Fieschergrat）から東南につゞく、グロース、フィーシェルホルン（Gross-Fiescherhorn, 4049 m.）と、フィンシュテラール、ホルンで、ベルグリの小屋は眼下の山の蔭になつてゐる。ヨッホの西南は今朝登つて來たフィルンで、此の方面で第一に眼に入るのは勿論近いユンクフラウである、その形は北側、即ちラウテルブルンネンの方から仰いだやうに整つた形ではないが、ユンクフラウ、ヨッホの邊から見るよりも遙かに立派である。直下のフィルンはなが〳〵と南にうねつて、アレッチグレッチャーとなるのであるが、こゝからはトゥルークベルクにさまたげられて、小屋から見渡すほど、ひろ〳〵と眺めることは出來ない。この方面ではさすがに群を拔いてゐるのはアレッチホルンである、そしてそのすぐ右には、遠くロ

ーンをへだてたミシャーベルの眞中に、四千五百五十四米突のドームが嚴然と屹えてゐた。一口頬張つてはかう云ふ景色を見まわしてゐる中、一本のワインはたちまち空になつて、雪の上にころがされた。氣樂なシュトイリは太い聲で唱ひはじめた、そしてその民謠の終りはドゥエットになつて、ガイド達の野太い聲が、透明な空に響き渡つた、小屋では又アヴァランシュだと思つてゐたらう。

日はます〳〵強く照つて、二日の山登りに頬がヒリ〳〵する。岩蔭は風淀で、晝すぎの日をまともにうけても、私はぶる〳〵震へてゐた、クラーレットもかうなると役には立たない。

宴會は一時間ばかりできり上げて、いよ〳〵雪車に乘る。はじめは靜かに辷つた、中程はいさゝか痛快過ぎた、そしてだん〳〵急になつて、クレヴァースが方々に口を開いてゐる間を縫つて、ユンクフラウ、フィルンの上に飛び降りた時分には、よせばよかつたと思ひ初めた。速度はます〳〵加つて、止めやうつたつてどうしやうもない、粉雪が全身にふりかゝつて、三人とも彫刻のやうになつた、グレッチェル、グラスも凍りついてもう何にも見えない。フィルンの上の小屋で、盛んにブラボーを叫んでおだてゝゐるのに氣がついた時は、いつの間にか傾斜のゆるい雪の上に止つて、雪だらけなグラスを拭いて、けそ〳〵と廻りを見まわした時であつた。

小屋に入つてガイドと三人、またあらためて飲みなほす、そして杯をあげてプロジットを叫んだ、シュトイリの胴間聲が、づんど拔けに小屋の中に響きわたる、折りから御着きの見物は、あきれかへつて感心してゐる。

二時三十五分の電車で、シュトイリと一所に下山する。ガイドの賃金は、小屋からユンクフラウまで往復四十フラン、トレーガーに三十フランで、メョンヒへも同じであつた、それはいゝとして、少々驚ろいたのは小屋の拂ひである、二晩泊つて二百フランばかり取られた、兩方を合せて、これに小屋までの電車賃を加へると、かれこれ四百フランに近い。二日の登山に百六十圓は、成るほど高いのは、



(右)ウラフクンユりよホツヨウラフクンユ
ンルホルータツロび及(左)を望む

辻村伊助氏撮影

標高ばかりではないと思つた。

私達は地圖をひろげて、いろ〳〵山の話を開いた。グロース、シュレックホルンは一番危いさうだが、比較的容易で面白いのは、ウェッテルホルンから山越しに、クライン、シュレックホルンを越す三日がゝりのプランだと云ふが、無論それは夏のことである、冬でもウェッテルホルンの頂上までなら、一日泊りで行つて來られるさうだ、然し登山はいづれも天氣次第で、雪の模樣さへよければ、ウェッテルホルン如きは決して危險なことは無いと云ふ話であつた。

アイスメーヤで乘り換への間に、シュトイリとまたトンネルの窓から頭を出して、シュレックホルンを仰いだ。晝過ぎの强い日をまともにうけて、黒く澄んだ大空に肩をいからせた山容は、登れると思ふなら登つて見ろ！と威嚇してゐるやうに思はれてならない。

乘りかへると、山登りとは思はれないドイツ面の中老爺がやつて來て、うるさくいろんなことを話しかけるんで、山登りのプランもろくに出來なかつた。奴は紡錘形のビール肥りで、このまゝ水に叩き込んだら、河豚に化けてぶく〳〵游ぎ出しさうに思はれる。トンネルを出ると、アイガー、グレッチェルで、雪の上には一昨日見た北極犬が、眞赤な舌をべろりと出して、珍らしさうに電車を見送つてゐた。

私は初め、クライネ、シャイデックからグリンデルワルトへ行くつもりであつたが、電車は冬の間運轉しないので、このまゝシュトイリに再會を約して、驛長さんからあづけて置いた荷物を受け取つて、同じ線路をインテルラーケンにむかふことにした。大分永くなりましたね、はゝあ貴下ですかいメンヒに御登りは、と驛長殿もチョコレート、ソルディアーに聞いたに相違ない。ウェンゲルンアルプを廻ると、もう片蔭になつて、雪の中ながら暗い黒木の森の上に、入日を斜めにうけた三山をなつかしく見かへりがちに、ウェンゲン、ラウテルブルンネン、そしてツワイルュチーネのもう灯の入つた村々

を、ピツェアの森の間に見送つて、淡い靄のたちこめたインテルラーケンの町はづれ、オスト、バーンノーフから、雪車につけたシュネー、ロルレンを聞きながら、夢見るやうに、人もない大通りを走つて、ベルネルホーフに着いたのである。冬とは云へ山登りに汗ばんだ身體を浴場に横へて、眼をとぢてぼんやりと考へてゐた。湯上りのソーファにぐつたりとよりかゝつて、窓をあけて南をながめると、外は夕闇ながら雪もよひか、こゝは仄白ろく靄がたちこめて、山はいづこ、今はなつかしい二つの峯も仰ぐことは出來なかつた。宿の人達は、私の顔の雪やけと、初めて知つた山登りに、深い興味をそそられたと見える、バーで飲んだキルシュ、ワッサーはうれしかつた、夜は次第に更けてゆく。

グリンデルワルト（一月二十七日）

天氣はあまり思はしくない、起きぬけに百餘枚のフィルムを携へて、例の寫眞屋を訪ねる、暢氣老爺のニクレスはいつもの調子で話しはじめた。山登りに來たんだよと云つたら、妙な顔をして、だから日本人はえらいなんて變なところで賞めてくれた。昨日はグリンデルワルトに行つたさうで、しきりにすゝめるから、私も一寸その氣になつて、その足で、オスト、バーンノーフからグリンデルワルトの直行に乘つた。

ツワイルュチーネまでは同じ線路である、こゝから左に曲つて、狹い谷底を進んでゆく、ところ〴〵に百姓家が雪の中に見うけられる、兩側の絶壁は、眼の屆くかぎり氷柱で、ラウテルブルンネン、タールのやうに高くはないが、もつと狹く、もつと暗く、リュチーネの流れに沿うた冬枯の、山毛欅や白樺はまつ白ろな樹氷に飾られてゐる、そして何となく物凄い谷川は、シュワルツ、リュチーネ(Schwarz-Lütschine)の名にそむかないと思はれた。晝少し過ぎにグリンデルワルトに着く。そしてそこに近づく前から谷が左右にやゝ開くと、第一に眼にふれるのは折り曲つたリュチーネのつき當りに、綠り色に

垂れ下つたグリンデルワルトの氷河である、村に近い氷河はグロース、シュレックホルンの峯つゞきのメッテンベルク(Mettenberg, 3107 m.)で、右左に分れて、右なるは村に近いウンテル、グリンデルウエルデル、グレッチェル(Unter-Grindelw. Gletscher)で、やゝ村に遠くウェッテルホルンのすぐ西側に垂れ下つてゐるのが、オーベル、グリンデルウェルデル、グレッチェル(Ober-Grindelwälder- Gletscher)である。この兩氷河の間に屹えてゐるのが、マッシーフなメッテンベルクで、その山脈は遠く東南に走つて、次第に高く、次第に急に、クライン、シュレックホルン(Klein-Schreckhorn, 3497 m.)からネッシホルン(Nässihorn, 3749 m.)、それから最高峯のグロース、シュレックホルン(四〇八〇米突)となる。そして屏風のやうな薄い峭壁は、更らに第二高峯のグロース、ラウテラールホルン(四〇四三米突)につゞいてゐる。しかし、これ等の山岳は、グリンデルワルトから北側につゞく丘に登らなければ、望むことは出來ない。村から近く見えるのは、メッテンベルクと、右にアイガーと、そして左に、村には昔からつきものゝウェッテルホルンの三山である。が、今日はアイガーの頂は雲の間に隱見して、アイガーワントの急斜には、烟のやうな靄がねばりついてゐた、そして村はづれに屹えてゐる、彼のウェッテルホルンの絶壁には、瀧のやうに霧が這ひ下つて來る。空は陰鬱な灰色で、縦の裏葉の青黑い外は、空も山も一面にどんよりと沈んだ中に、鳴り渡る會堂の鐘がかへつて心寥しかつた。

私は物々しいホテルの間を、眼をふさぐやうに通りぬけて、村はづれから左の山手に、小さく雪に埋れた百姓家や、厚い氷の間からたら〳〵と滴り落ちる清水の前を、上へ〳〵と登つて行つた、眼界は次第に開けて足もとに散らばつたグリンデルワルトの村をこえた前面には、前に述べた山々と、更らに氷河の奥にあたつて、雲の色と見わけ難くいくらか淡く、フィーシェルホルンの連峯が望まれた。今、私が辿る雪路は、恐く五尺に近かつたらう、急な坂は硬く凍つて、まるでフィルンの上を登るやうな氣がする、そしてこの丘を北に登りつめた所が、バッハアルプ(Bach-alp)からファウルホルンにつゞ

く山脈であつて、比較的樂に山を見るには、もつとも適してゐると云はれてをる、然しそれは勿論、晩春から初秋へかけてのことで、雪の今はどうすることも出來なかつた。私はもう少し〳〵と思ひながら、隨分高い所まで來てしまつた、村はまるで箱庭のやうで、リュチーネの流れが眞白ろな溪底に絲のやうに薄蒼い。

私はグリンデルワルトの景色に、非常の興味をもつてゐたけれど、今こゝに來て少しく失望せざるを得なかつた。南につゞく山岳は餘り高く、あまりに近く屹えてゐて、呼吸がつまるやうな氣がする、北側の斜面は反對に、あまりに平凡で、たゞ畑と牧場と、その間を點接する小屋の間に、葉をふるつた果樹があるばかりで、ラウテルブルンネンのやうな寥しさはなく、シャイデックのやうな、凄さに乏しく、且つミュルレンのやうな、廣々とした打ち開いた景色をそなへてゐるのでもない、殊に村に近いウェッテルホルンは、たゞひ高さに於ては三千七百米突を越えてをるにせよ、カンデルシュテークから東に望む彼のブリュームリスアルプのやうな、美しい整つた形をそなへてゐるとは思はれない、が、これは私一人の感じたところである。

然しウィンテルシュポルトから云へば、シャイデックから村まで五哩半にわたる傾斜は、シーにはもつとも適した場所と思はれる。然し多少の不便と危險を恐れぬならば、グローセル、アレッチ、グレッチェルは歐洲第一のシーフェルトである、何を苦しんでアメリカ人の巢のやうな、此の谷底のグリデルワルトを選ぶ必要があらうか。

私は、グリンデルワルトと云へば必ず撮される、ウェッテルホルンを二三枚撮影して、斜面を村はづれに下りて來た、そこにこれも寫眞にきつと無くてはならない會堂がある。元氣にまかせて歩いたものゝすつかり腹がへつてしまつた。會堂の前にグレッチェル、ガルテンと怪しげな看板をかけた、一軒の旅籠屋があつた、が、それも中をのぞき込んで、何か晝食ができるかねとたしかめた上でなくては、

入れないやうな粗末なもので、奥からは年の頃は、左様まづ十九か二十、山女の標本と云つたのがのつしと表はれては來たが、食べ物は空腹のせいか、思つたよりも食べられた。例によつてカフェーに混せるキルシュワッサーは、本場だけに中々うまい。

表、と云つてもすぐ前で、もとより淺間な家作りだけれど、女は表まで出て來て山の名を敎へてくれた、だん〳〵話して見ると、驚ろいた、シュトイリの妹なんだ、往來から見ると、前はだら〳〵にリュッチネーの流れに下りて、そのすぐ向ふがメッテンベルクの裾になつてゐる、その左にはウェッテルホルンに支へられて、逆落しに谷に垂れ下つてゐるのはオーベル、グリンデルウェルデル、グレッチェルである。こゝからはハスリ、ユンフラウの一角が頭の上に仰がれる、氷河の上の方に小屋(Wetterhorn Club-Hütte.)が見えると云つてるが、私には雪と氷の外何ものも見えなかつた、絶壁の裾には明かに屋根らしいものが見える、それはフニクラールの終點であつた。此のウェッテルホルンの絶壁、いく度か下手な畫や、寫眞に表はれた急斜の左は、雪の岡でしきられて、村から街道を東に行けば、その峠をこして、グロース、シャイデック、それからマイリンゲン(Meiringen)の村に出て、左はブリエンツ、右は山越しにグリムゼルのホスピツから、ローンの溪の源なる、同じ名の氷河に達するのである。

今にも雪になりさうで、天氣はどうも面白くない。降られない中にと思ひ切つて夕方、今朝と同じく汽車に乘つて、インテルラーケンに歸つて來た。ベルネルホーフのテレースでカフェーを飲んでると、果して雪になつた。

雪の中に日はたそがれて、今日も山の姿は見えない。

ウンテルゼーエン (UNTERSEEN)

雪と思つてカーティンをあけると、日がかん〳〵當つてゐる。朝飯がすむとすぐ表へ出たが、ユン

クフラウは霧の中で、雲行きはあまりおだやかでない。私はホテルの角を曲つて、アーレにかけた橋を渡つて、ウンテルゼーエンの村路を眞つすぐに、トゥーンの湖水の方へ行つた。右はハルデルの岩山つゞきで、樅の林に覆れてゐる。トゥーンの湖の北につゞくベアテンベルクや、南岸のアーベントベルクの頂には、どす黒い雲が波のやうに搖れて、うみ岸のポプラの風は中々はげしかつた。水には幾群の水鳥が枯芦の間に浮んでゐて、岸は雪に、あらはな冬枯の木立が吹きしきる風にうなつてゐる。湖をへだてた西の空には、ニーセンが雲の間に見えかくれる。

水にそうて南に廻つて、雜木林をくゞりぬけると、カナール、ブロムナードに出た、もうそろ〳〵晝に近いので、そのまゝ右手に見えた城跡の塔へも登らずに、ホテルに引きあげてしまつた。

晝過ぎはクライン、ルーゲンの森をつっきつて、ウンシュプンネン(Unspunnen)の城跡に行つた。これも書はがきに御なじみな景色だが、背景の雪の山岳は、今日は雲の中で、まつすぐに見える筈のラウテルブルンネン、タールは眞白ろな霧のほか、たゞ兩側に林の裾を見るばかりであつた。ルーゲンを一まわりして街に歸つて來る。歸り路にニクレスの店に入り込むと、丁度たゞ今出來上つたところで、みんな上出來ですよとにこ〳〵してゐた。フィルムの包を引つかゝへて、大急ぎでホテルに歸つて來たが、何事も二の次として、先づ包をあけて見る、成る程うまく寫つてゐる、現像の調子も立派なものだ、これなら老爺が自慢するのも無理がないと思つた。私はフィルムでこれ程に寫るとはちつとも知らずに居たんだが、今となつて殘念に思ふのは、結果を危ぶんだものだから、同じやうな景色が澤山あるので、このくらゐなら、思ひ切つて異つた景色ばかり撮せばよかつたなんて、考へ込むのは少々慾ばりすぎてゐたかも知れない。兎に角今夜は安心して寢られる。

ブリエンツェル、ゼー（BRIENZER SEE.）

ベルナーホーフの主人は氣持ちのいゝ男だつた、此の夏また山登りに來る約束をして、待たせてあつた雪車に乘つて、ヘヒーエウェークの大通りをオスト、バーンノーフに行つた。幸、例の店先きに、ニクレス老人もゐたので、寫眞は上出來だつたとどなり込むと、先生大いに喜んでゐた。停車場のすぐ裏はアーレの流れで、ブリエンツの湖の落ち口になる、私と外に三四人の御客は、深い朝霧の間につながれてあつた汽船に乘り込んだ。

トゥーンの湖水には、汽船のほかに鐵道が、その南岸にはベルンからシュピーツを通つて、このインテルラーケンまで來てゐるし、湖水の北岸には、こゝからトゥーンの街まで電車が布設されて、此の春から開通のはこびになつてゐる。然しこのブリエンツの湖岸鐵道は、まだ布設中で、私がこれから行かうとするルツァーンからは、湖水の東端ブリエンツの村までしか來てゐない、それからは湖の北岸を馬車で行くか、又は今、私が行くやうに、汽車に聯絡してゐるこの汽船に乘らなければならない。然しそれは別に面倒なこともなく、急ぎの旅でない以上は、むしろ選んだ方がいゝと思はれる、たゞ幾年の後、全通したとしても。

十時、船は靜かに動きはじめた、湖水を渡る風は冷く頰をかすめて、雪やけの顏がぴり〳〵する。ボェーデリの霧はやゝ晴れて、ふりかへるとなつかしい平野の中に、ルーゲンの森が現はれた。湖水の上には霧が這ひ渡つて、たゞ折り〳〵、曇り硝子を透したやうに蒼空と、ブリエンツェル、ロートホルン（Brienzer Rothorn.）の峯つゞきがあらはれる。外輪の船はがしや〳〵と、平らな水をきつて、湖水の右左に寄り路をしてゆく、暢氣な旅にはそれもうれしかつた。日はシンニゲプラッテの上に登つて、空は湖水のやうに澄み渡る、そして波の上には、烟のやうな淡い霧が風のまに〳〵流れて來る、然し

◎スヰイス日記　辻村

南の岸は切つたてゝ、朝の日は湖水のまん中までしかさし込んで來ない。ふりかへると、インテルラーケンはいつのまにか遠くなつて、ハルデルとルーゲンにはさまれた低地のはづれに、ピラミッドのニーセンが結晶のやうに光つてゐた。北岸はハルデルからロートホルンにつゞくリーデグラート(Riedegrat)で、まともにうけた朝の日に、眼もくらむばかりに光つてゐる。この湖水のほとりにある村々のうちで、一番いゝと思つたのは、南岸ファウルホルンの麓にあたる、イゼルトワルト(Iselwald)の岬である。そしてそこを過ぎると、同じ岸に、シュワルツホルン(Schwarzhorn, 2930 m.)から流れ落ちるギースバッハ(Giessbach)の瀑布が、船の右手に仰がれる。

私は寫眞機を取り出して、船の上から撮しはじめた。何か話したさうな顔をして、いやにこ〳〵してゐる男がゐると思つたが、それは前年横濱に來たことのある英人で、行く先は同じルツァーンと云ふところから、始終一緒にゐるやうになつた。これからツァーンに行くんださうな、道理で英國人のくせに獨逸語が達者だと思つた。連れがなくちやさぞ寥しいでしよう、まあ此の次は新婚旅行で、またやつて來るんですなアなんて、頭から人を若輩に扱ふのが癪だから、そんなに若く見えますかねつて云つてやつたら、奴まじめな顔をして、はあ、奥さんは御國ですかつて聞きかへした、可笑くなつて吹き出したもんだから、奴も大いに面喰つてしまつて、いさゝか痛快だつた。

中々親切に世話をやいて呉れる。そのうちに船はブリエンツの埠頭に着いた。こゝは湖水の東端で、小さな船つきの村である。待つてゐた汽車に乘ると、湖につゞいた山合ひの平野を過ぎて、間もなくマイリンゲンに着く、こゝはグリムゼルの別れ路で、峠ごしにグリンデルワルトへも遠くはない、汽車はこゝから少し逆戻りをして、今來た平野を下に瞰下ろしながら、だん〳〵高く登つてゆく、この谷をへだてゝかなりの山がつゞいてゐたが、それはシュワルツベルク(Schwarzberg, Schoniwanghörner, 2448.)の山脈と思はれる。そして谷の端には、ブリエンツェルゼーが蒼く光つてゐたけれど、

間もなく線路は岩山の中腹を、右に迂廻してまもなくブリュニック（Brünig）の停車場に着いた。

私達はマイリンゲンで車掌に話して置いたので、ブリュニックの停車場に着くと、すぐブュフェーにかけつけて、晝飯にありついた。停車時間は二十分、三皿の料理と一本の葡萄酒と、スウィスチースを平げて壽はがきを認める暇は充分ある、カフェーにキルシワッサーも中々うまかつた。代は全部で三フラン半、日本より餘ほど安いと思つた。

ブリュニックは峠の頂上で、こゝから短いトンネルをこすと、急な下りになつて、眼の下に北側の谷が瞰下ろされる。そしてその雪の中からぬけ出した尖塔の、日に閃いてゐるのがルンゲン（Lungen）の村で、同じ名の小さい湖水のふちに、しよんぼりと取り殘された形に望まれた。が、私の最も美しいと思つたのは、その次に表はれたサルネンの湖水（Sarner See）である。

湖はブリエンツェルゼーを小さくしたやうな形で、汽車はその東岸にそうて、ギスウィル（Giswil）からサルネンの村へ走つてゆく。東側のアルニグラート（Arnigrat, 2031 m.）も、對岸のエンツィグラート（Jänzigrat, 1741 m.）も、とりたてゝ云ふほどの山ではないが、今まで牙のやうな氷の山を見なれた眼には、風もなく靜かに眠つた山の湖の、岸に近く一かたまりのギスウィルや、なだらかに雪をかづいたシュウェンデイ（Schwändi）の山ふところに、二軒、三軒と、板屋の軒を並べた小村小村が、何とも知れずなつかしかつた。水の面はところ〴〵、蜘蛛の網のやうに凍りはじめて、岸のシルフにも、湖にも、ため息ほどの風も吹かない、そして氷の間には、向う岸の雪の山や會堂の尖塔が、そのまゝはつきりと寫つてゐる。

サルネンに着くと、遠くからもそれと知られるピラトゥスが、もう窓に近づいて來る、そして汽車は小さな流れに沿うた平野の間を、向ふにピラトゥス、右手にはシュタンザルホルン（Stanser Horn, 1901 m.）を雜木山の上に見て、アルプナッハの湖水のふちをぐるつと廻ると、うわさに聞いたルツァーンの、

◎スヰス日記　辻村

平らな水が窓の右に現はれた。

ルツァーン (LUCERN.)

ルツァーンは古びた街である、私が着いた時はピラトゥスの雪が紅く輝く頃であつた。停車場から五分ばかりしかないホテル、コンコルディアに、スライションのトレーガーに荷を運ばせて、室がきまると、すぐ街に飛び出してしまつた。横町をいゝ加減に、うね〳〵曲ると、ロイス (Reus.) の水の湖からたぎり落ちる、ロイスシュテークのほとりに出る。水底は青貝を沈めたと思はれるほど碧く光つて、斜めにかゝるカペルブリュッケ (Kakellbrücke.) の、古ぼけたワッサートゥルムの右に並んで、山の名は知らず、峯から峯に、遠く湖をへだてたウリの山が、晴れわたつた冬の日に、手にとるやうに望まれる。そして右手にはひし〳〵と建てられた古い屋根の上に、ピラトゥスの雪が入日を浴びて美しかつた。そしてこれ等の山に圍まれた水の色はエメラルド、グリーンで、折りから風もない水の上に、眞白ろに群れ騷ぐ鷗が、ふとアルプの雪を思はせた、が、街も湖もしーんとして、雪路を歩く人達も、描かれたやうに靜かである。私は橋を渡る、橋は鍵の手に折れ曲つた木造で、屋根のついた古ぼけたのが、春日の階樓でもわたるやうに思はれた。そして湖水のふちをぶら〳〵してゐるうちに、ピラトゥスの日は暗く沈んで、空は湖水のやうに澄み渡つた中に、仄白い夕月が仰がれた。

リギ (RIGI.)

ルツァーンの湖は、ウリ (Uri.)、シュウィーツ (Schwyz.)、ウンテルワルデン (Unterwalden.) ルツァーン (Lucern.) の四つのカントンに圍まれてゐるから、フィールワルト、シュテッテル、ゼー (Vierwaldstätter See) と呼ばれてをる。そして、そのいづれも雪の山が水岸にせまつて、狹い〳〵切つたての

崖が、廣い湖水をいくつにも分けてゐる。昨日通つたアルプナッヘルゼーは、西南のはづれで、これと反對に、ルツァーンの沖を東北に入り込んだのがキュッスナハト（Küssnacht.）の入海である、東の端はブルンネン（Brunnen.）から眞南に曲つて、深く〳〵入り込んだウリの湖（Urner See.）で、これ等の湖は趣きこそ異へ、いづれも水は一つにつゞいてゐる、此のほかに北側にはツーク、（Zuger See）東にローウェルツ（Lowerzer See）、いづれもリギの裏山の裾を圍んでをる。

私がルツァーンに着いた次の日は、湖水の霧につゝまれて、街に出ても何にも見えなかつた、悠々と落ちつきこんで、まあ晝前は湖水のふちでもぶらつかうと、何氣なくロイスの河ふちに來ると、ウリに通ふ汽船があるので、ふと氣が變つて乘りこむと、殆んど同時に岸をはなれた。埠頭の杭が朝霧の中にふうーつと溶けてしまふと、もう一面にまつ白ろで、外輪車のゆるく波を切るより外に、眼をなぐさめるものはない。船はロイスの川口を曲ると、もう廣々とした大海にのり出したやうな氣がしたが、絶えず鳴らすネーベルホルンは、すぐ左から木魂して來る、アルトシュタットの鼻を廻るんであらう。

間もなくキュッスナッヘル、ゼー（Küssnacher See.）の沖にかゝつたと見える、しきりに鳴らすネーベルホルンも、靜かな波の上に消えて、船を包む扉の中に、私も夢の心地である。

室は二つに分たれてゐる、私の仲間にはシーを携へた身輕るな連中で、所謂一等室の眞ン中には、ノートルダームの塔の上から盜んで來たやうな獨逸人がたつた一人、船をわがもの顏にそつくりかへつてゐる。

ネーベルホルンが、すぐ鼻の先からけたゝましく木魂をかへしたと思ふと、霧の中から眞つ黑ろな杭があらはれて、船はツェッギス（Weggis.）の岸に橫づけになつた。岸には何にも見えない、外輪が逆にまわると、どろりとした水底に、綠の泡が渦まいて來る。

◎スヰイス日記　辻村

ノートルダームは下りてしまつた、ウェギスから霧の湖を、たゞず木魂を左り側の崖から聞きながら、私達はヴィツナウ（Vitznau）に着いた。船つきのすぐ前に、登山鐵道の終點がある、シーの連中も一緒になつて、同じ電車に腰かけた、私達はリギに登るのである。

リギは南から西にかけて、ルツァーンの湖水につゝまれて、北はツーク、東はローウェルツの湖にかこまれて、丁度蝶が羽をひろげた形になつてゐる。ヴィツナウは南側で、登山鐵道が頂上のリギ、クルム（Rigi-Kulm, 1800 m.）まで設けてある。そしてそこからやゝゆるやかな北側に沿うて、ツーク、ロトウェルツの間にはさまれた、アルトゴルダウ（Arth-Goldau）の町まで下つてゆく、然し冬の間は、一日數回の電車が南表から、中腹のリギ、カルトバート（Rigi-Kaltbad.）まで通じてゐるだけで、その他は運轉してゐなかつた、又カルトバートから尾根づたひに、シャイデック（Rigi-Scheidegg, 1665 m.）にゆく鐵道も、雪のある間は動いてゐない。

線路は、初め十五分ノ一の向背から、だん〳〵急になつてゆく、そして間もなく、四分ノ一の傾斜となつて、木立の中を登つてゆく。霧は次第に薄くなつて、右側には雪に飾られた樅の木立のうしろに、集塊岩（Conglomerate）の絶壁が表はれた、電車はその直下にそうて登つてゆく、左は眼界がひらけて、ルツァーンの水を覆ふ霧の中をはなれると、下は湖なりに沈んだ雲の海で、南から東につゞくアルプの山々を背景にして、ピラトゥスやビュルゲンシュトック（Bürgenstock, 1132 m.）が、島のやうに浮んでゐた。雲の上に日はうらゝかに照り渡つて、リギの雪は眼が眩むばかりである。

五十分にしてカルトバートに着いた。停車場の横に立派なホテルがある、その前を素通りにして、掻きわけた雪路を曲ると、きつ立ての岩の下に芝居がゝりの、サンクト、ミカエルの祠（St. Michael's Kapelle）がある。路は西に折れて、なだらかな森の間をぬけると、ケンツェリ（Känzeli, 1470 m.）の展望臺まで、三十分ばかりしかかゝらなかつた。

私は、山の見取圖をとり出して、一々比較して見た、眼の下はルツァーンの湖をそのまゝに覆ふ綿雲で、すぐ近く、ピュルケンシュトック右よりに、スタンザホルンとピラトゥス、その間に深く入りこんだ雲の海は、アルプナッハの湖である。透明な空に、書き出された山と云ふ山は、悉く雪に覆れて、見取圖に記されてある通り、一つ殘らず數へられる、アルペンの名のある山で、今こゝに記されたのが百七十ばかりある、もとより急ぐ旅でもないから、ケンツェリの腰かけに地圖を擴げて、一々景色と比べて見た。ベルネル、アルペンはもうこゝからは隨分遠い、然し地平線上にくつきりと、刻みつけられた山の輪廓は、それを覆ふ蒼空と、はつきり區別されて、此の間、登つた山などは、明かにそれと指さゝれる。ユンクフラウはアイガーの右に見える、アイガーの左にはメョンヒ、そしてオーベレス、メョンヒヨッホの上にトゥルークベルクがつゞいて、これから左に並ぶのが、グリンデルワルトのハスリユンクフラウと、尖つたミッテルホルン、更らにシュレックホルンのグロース、シュレックホルンと、グロース、ラウテラール、ホルン、そして次に、さすが群をぬいてゐるのは、最高峯のフィンシュテラールホルンであつた、フィーシュルホルンも中々立派に見える。

ワリーゼル、アルペンは、オーベルラントの山脈にさへぎられて、こゝからは見ることが出來ないが、ベルネルアルペンはこれ等の山々の右に、ブリュームリス、アルプ、ニーセンからウィルツトルーベルまで數へられる、そしてその右は、近くピラトゥスのマットホルン(Matthorn, 2040 m.)の斜面でさへぎられてゐる。

ピラトゥスの右はひろ〳〵となだらにつゞく雪の國で、地平線上には、佛蘭西よりのニューシャテル(Neuchâtel)から、ソロトゥルン(Solothurn.)にまたがるユラ山系(Neuchâteller, Berner und Solothurner Jura)で、西を見渡せば獨逸が近く、フォゲーゼン(Vogsen)やシュワルツワルト(Schwarzwald)の山脈が、バルデックを(Baldegger See.)覆ふ雲の上に、遙る〳〵と見渡される。

此等の、殆んど無數の山岳の中で、特に私の眼にふれたのは、エンゲルベルク（Engelberg.）の谷の上に、左の一角が切つたてに、まるで船のへさきのやうに見えたティトリス（Titlis, 3239 m.）と、東にあつたつてグラールスの谷の奥に、一群のグレルニッシュ（Glärnisch, 2913 m.）の山塊であつた。そしてウリロートシュトックの連峯も、こゝからあまり離れてゐないだけに、雪の日蔭もはつきりして、ぼんやりと看過ごすわけには行かなかつた。

私はケンツェリに腰かけた、丁度三時間を費した、アルプの主脈から遠いにもせよ、もう僅かの間に雪の國に別れてしまふ私には、燧石の破片のやうに眺められる小さな氷の山でも、このまゝに別れてしまふのが惜しまれてならなかつた。

麓の雲の中から鐘の音がかすかに響いて來る、オーベルドルフ（Oberdorb）かウェッギスの寺の鐘であつたらう。私は殘り惜しげに、一足下りれば樅の林にかくされる此の雪の山々を、見かへり勝ちに、同じ雪路をカルトバートに戻つて來た、もう二時に近かつた。ホテルの爺さんは愉快な奴だつた。晝飯をすませると又電車に乘つて、がた〳〵動き初めると間もなく、霧の中に歸つて來た、カルトバートから瞰下ろした時、下界の人達はあの雲に蒸されて、息がつまつてしまつたらうと心配してゐたが、ウェッギスは朝のまゝの靜けさながら、やがてネーベルホルンが遠くから響いて、今朝乘つて來た同じ船がフリュエレンの方からやつて來た。御客は極めて少い。船は今朝のやうに深くたちこめた霧の中を、ルツァーンの川口に着いた、街にはもう灯がともされてゐる。

アルプナッハの湖（ALPNACHER SEE.）

一昨日の午後、汽車で眺めたサルネンの靜かな水は忘れることができなかつた。私は今朝汽車に乘つて、同じ線をアルプナッハの湖にそうて、サルネルゼーの片ほとり、ザクセルン（Sachseln）の停車

場に降りた、湖水は二日のまにすつかり凍つてしまつて、もう此の間のやうな山の姿は影らない。スティンドグラスのやうに、封ぜられた湖の上を、低くかすめて二羽の黒鴨が、寥しく鳴いて行くのを見たばかりで、岸は雪の中から生え茂げる、丈にあまるシルフの風に亂れるのが物さびしい。

ザクセルンの停車場から、湖の岸をぐるつと廻つて、北はづれのサルネンの村に來た。雪國の冬にあるやうな、空は灰色に重く濁つて、谷をとりまく雪の山の、裾だけが村のうしろに見えるだけで、こゝはあまりに陰鬱な景色であつた。停車場近くのレストランで、晝飯をすませて、雪路をぶら〳〵と、湖から流れ出る小川に沿うて、北へ〳〵と歩いて行つた。谷は平らに雪に埋れたその間に、取り散らされた百姓家、牧場の棚の横手には、梨か林檎か果物の木が、枝もあらはに並んでゐて、この谷を限る右左はなだらかな丘つゞきで、その背には左り手にピラトゥス、右にはシュタンザホルンのピラミッドが、雲の中から見えかくれする。

私はどう〳〵ケーギスウィル (Kriegiswil) まで歩いてしまつた。小さな停車場で汽車を待ち合せてゐる中、何となく青梅街道でも旅してゐるやうな氣がしてゐた、間もなく着いた汽車に乘つて、次のアルプナッハシュタット(Alpnachstadt)まで行く。

停車場前の小さなブュフェーで、一杯飲みながら新聞を讀むと、櫻島の噴火のことが二欄にわたつてのせてあつた。こゝからぶら〳〵とまた北へ歩きはじめる。村をはなれるとすぐアルプナッハの湖で、ルツァーンの湖水から枝分れするこの水は、ところ〴〵に薄い氷を浮べて、シルフにつゝまれて靜かにたゝへた樣子は、まるで變つた感じをあたへてゐる。街道はすぐ水際に沿うてゆくから、私は時々たち止つて、シルフの間に遊んでゐる水鳥に手頃な石を叩きつけたり、雪の上に腰を据えて煙草をふかしたりした。對岸の枯木に覆はれた小山の上には、シュタンザホルンが近く屹えてゐる。

思つたより路が遠い。湖水の西側を廻つて、石切場の下を通つて、きつ立ての岬を水についてぐる

◎スヰス日記　辻村

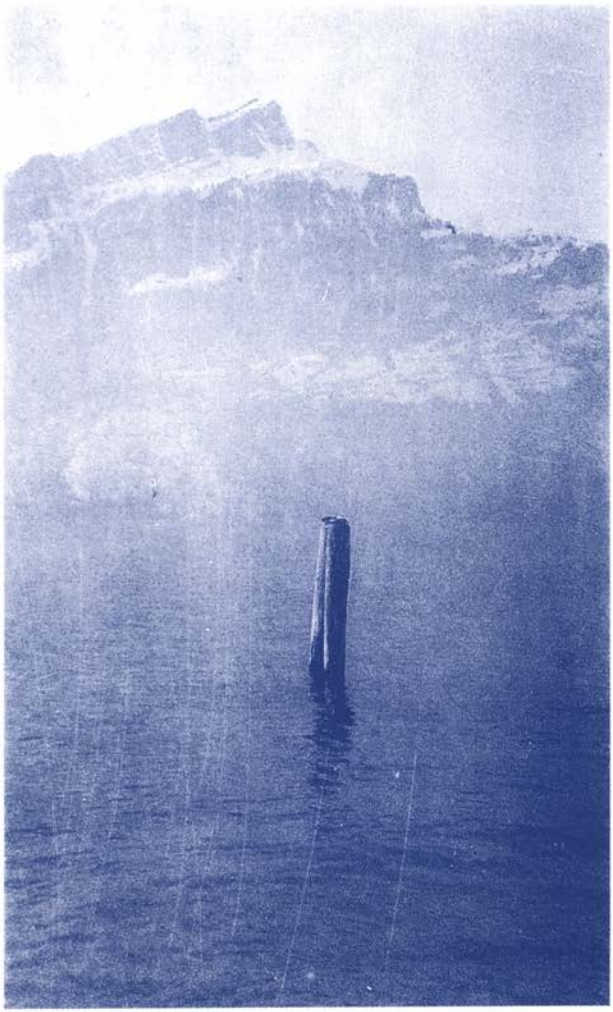
つとまわると、湖水は兩岸がせまつて、川のやうに狹くなつたところに、シュタンスシュタット（Stans-stadt）の橋があらはれた。あまり暢氣にぶら〳〵してゐたので、冬の日はもう黃昏近く、水はうす暗くなつてしまつた。

橋を渡つて、シタンスシュタットの船つきに行く、棧橋の杭の上にのつかつて煙草をふかしはじめる、船は中々見えない。日はくれかけて、水から拔け出したシュタンスの浮き城が、夕闇の中にうす靑く仰がれた、城の名はシュニッツ、トゥルム（Schnitz-Turm）である。

この町はエングルベルクへ通ふ電車の終點で、ティトリスの登山にはこゝから行くのが便利である。その中に船がついた、デックに立つと、さすがに寒い夕風に、ふるへながらも、ピラトゥスの空に消えのこる、オレンジ色の夕やけに見とれてゐた。船はやはり方々の村によりみちして、靜かな山の影を亂しながら、カスタニエンバウム（Kastanienbaum）の鼻をまわると、遠くちら〳〵ルツァーンの灯が見えはじめて、日はとつぷりと暮れて、蒼黑い湖水にゆらく四日の月が物凄い。ホテルに歸つたのは八時をとうに過ぎてゐた。

ルツァーンの湖水（VIERWALDSTATTER SEE.）

ルツァーンの滯在の中に、もう二月の一日となつてしまつた。今日も湖水の霧が深くつて、散步も何もあつたものではない。ロイスの流れの、湖に一番近いゼーブリュッケを渡つて、シュワイツェルホーフ、クェイ（Schweizerhof-Quai.）から、左に曲つてレヨーウェン、シュトラーセ（Löwenstrasse.）に行つた。今日は相憎く日曜である、氣の利いた店はみんな閉つて、街の中の見物は何にもならない。つき當りの坂路の右にある、有名な獅子像を見に行つたが、冬の間は氷や雪に疵つけられるから、厚い板でその刻みつけた岩壁は覆はれてをる、只、庭からは、今は凍りつめた池に臨んだ岩壁と、像の上下にゐり



るげ仰りよレルペカスルテ
ンペルアルネルウ

影撮氏助伊村辻

つけた、紀念の文字を見るだけであつた。像はトルワルヅェン（Thor-valdsen）のモデルによつて刻まれた、身長二十八呎の獅子で、背から脇腹へかけて、槍や矢疵をうけてあへぎながら、前足の下にブールボン（Bourbon）の紋章たる、百合の花を護つてゐる、一千七百九十二年八月十日、トュールリー（Tuileries）の園みに戰死した、スヰス、グワード、二十六名の士官と、七百六十人の士卒の爲めに建てられたのである、彼等はフランスの傭兵である、國とか民とか云ふ特別な考へを度外視して、ただ一言の約束のもとに、屍をさらした、そこに私達には、何とも云へぬうれしさを感せしめるのである。

すぐうしろに續いたグレッチェル、ガルテン（Gletscher-Garten）も、今日は閉つて入ることは出來なかつた。デンクマール、シュトラーセから、また湖水のふちに戻つて來たが、霧は深し、日曜ではあるし、街をうろついても初まらないから、そのまゝクェイ、ナツィョナール（Quai-National）から、眞つ白ろな湖畔のプロムナードを、宛てもなく東へ東へと歩いて行つた。岸にはヴィルラが建てつらねられて、霧の中に折り〳〵眺められる、樅や唐檜の庭も中々面白ろく思はれる。街道はやはりルツァーンの湖に沿うて、東の方へ行くらしい。途中で二條に別れてゐたが、私は左に行つてもよし、又は右へ出てもよし、もしなんならこのまゝやめにしても差し支へはないんだから、先づ路傍の石に腰を下ろして、煙草をふかしながらぼんやり考へはじめた。もとより街をはづれると、此の雪路の霧の朝に、人つ子一人通らないから、眼をとぢてぼんやりしても、行路病者のうたがひはかゝらなかつた。

私は眼むくなつて來た、吸ひかけの煙草をすてゝ、首をあげると、前には木立の深さうな丘が、ぼんやり見えて、左りの路は峠ごしにメッゲン（Meggen）の方へ通ふらしい。ふら〳〵とその氣になつて山越しにかゝる。森は思つたほど深くはない、二三軒の百姓家があつて、いやと云ふほど犬に吠えつかれた。どこをどう歩いたか、自分にも未だにはつきりしない、たゞ峠をこすとそのうちに汽車の

◎スヰイス日記　辻村

笛が聞えて、村らしいのに近づくと思つたら、だら〳〵路の左に小さなホテルが表はれた、右に下りると停車場で、村の名はメッゲンである。

メッゲンは、キュッスナハトの湖（Küssnacher See）の西側にある小さな町で、湖水にそうてキュッスナハトの方へ行つて見やうか、それもこの霧では仕方がなし、いつそ汽船を待ち合せてルツァーンへ引きかへさうか、それも歸つたところで日曜ではつまらない、後で考へると馬鹿〳〵しいが、今日の旅は隨分もてあつかつたものである。

いづれにしても、腹をこさへて上のことゝ、今來た坂路を戻つて、さっきのホテルで、少し早いが晝飯を吩咐つけた。空はだん〳〵明くなつて、ちら〳〵とキュッスナハトの波をさへ、窓のむかうに見下ろした。私は急に氣が變つて、食事がすむと汽車を待ち合せて、ウリ湖畔のシヽコン（Sisikon）まで切符を買つた。

キュッスナハトの湖には、時々霧が渦まいて、湖のふちを行く時も、うす暗い波がちら〳〵するだけで、すぐ對岸のリギも、こゝからは見ることが出來なかつた。キュッスナハトからリギの裏を、左の窓からひろ〳〵とツークの湖を見渡した時、戀人に別れて舟をこの夜明けの波にうかべて、

Aug' mein Aug" was sinkst du nieder,
Goldene Träume kommt Ihr wieder,
Weg du Traum so gold du bist,
Hier auch Lieb und Leben ist.

と唱つた、詩人のおも影が胸に浮んだ、舟には彼の親友がゐた、杯をあげて見まわす湖の、

Auf dem Welle blinken tausend schwebenden Sterne,
Weiche Nebel trinken rings die türmenden Ferne.

はリギクルムの山々であつたらう、今日は霧にかくれて、たゞ麓にタンネの森のつゞくばかり。

アルト、ゴルダウからロッスベルク(Rossberg, 1583 m) の山崩れを左にして、右は低いローヴェルツの湖にそうて、シュウィーツ (Schwyz) に近づくと、霧は霽れて左にはミーテン (Gross Mythen, 1903 m; Klein Mythen, 1815 m.) が現はれた、地層の順序がアルプの山々と全く反對になつてゐるので、地質學者の間にはアルプの波の飛ばつちりと考へられてをると聞いたが、何にしても先づその位の小山であつて、登つて見たいなんて考へは毛頭おこらなかつた。

ブルネン (Brunnen.) から、ルツァーンの湖の枝わかれしたウルネルゼーに近く沿うて、午後二時半、シゝコンの停車場に着いた、私の今まで乘つて來た汽車は、サンゴタールの急行である。

テルス、カペルレ (TELL'S KAPELLE.)

シゝコンはウリの湖水の東岸で、停車場のまわりに散らばつた、古ぼけた村である。背ろは急な岩山で、すぐ前にはウルネルゼーの暗い水をへだてゝ、仰くやうにオーベルバウエン (Oberbauen) の峯つゞきが屹えてゐる。

小さな旅籠屋に入り込んで、カフェーにありついた。どうも非常に寒むい、きたないテーブルには、土方らしい先客がゐて、キナ臭い煙草をチュー〳〵吸ひながら、ぢろ〳〵私を見てゐたが、相手ほしさうに話しかけた、聞いて見ると村の男なんだ、成程今日は日曜だつた。かうした話相手も、山國の旅らしくてうれしい。

村をはづれると、平らな雪路は殆んど直立とも思はれる崖の中腹に、棚のやうにかゝつてゐて、右は樅や雜木のしがみついた絶壁の麓に、深くたゝえた湖の色は、雪空のせいか、何とも云へず物すごい。路は、いくつも氷柱のぶら下つたトンネルをぬけて、南へながら〳〵とつゞいてゆく、程なく一二

軒、家の並んだ所に出た、こゝがテルス、プラッテ（Tell's Platte）である。

私はまだ、ロッシニの序曲（オーベルトユール）に表はれるやうな、此の山の湖の夜明けは知らない。空は薄くもり日の物悲しく、バウエンの峯は雲の下ながら、冬なればクーライエンのメロディーも響かず、フェーンの前の静けさは知るよしもなかつた。山はウィルヘルム、テルの背景である。私はたまらなくなつて、崖路を千鳥がけに下りて、テルス、カペルレ（Tell's Kapelle）の前に立つた。水にのぞんだ祠には、木立が深く覆ひかぶさつて、ウルネルゼーの波は物すごく、ざわ〳〵と岸に砕けてはまたよせて來る。堂のフレスコはシトゥッケルベルク（E. Stückelberg）の筆になつた、ウィルヘルム、テルの物語りである。私はゆふべ、ルツァーンの本屋でさがしたシュラーの詩集を、かくしから取りだして、波の音を聞きながら、また幾枚をくりかへして見た。祠は千三百八十八年の建立にかゝる、フレスコは無論十九世紀の改造であつた。

アクセンシュトラーセ（AXENSTRASSE.）

ウルネルゼーの東岸に、絶壁の岩を砕いて、ブルンネンからフリュエレン（Flüelen.）につゞく、八哩半の街道は、アクセンシュトラーセの名のもとに、リヴィエラのグラン、コルニシュと共に、歐洲名勝の一つに數へられる。直下はウリの湖である、前にはバウエンの上に、氷河にとりまかれた、ウリ、ロートシュトック（Uri-Rotstock, 2932 m.）の群峯が屹えてる。殊に美しいのは、今、私の立つてゐるテルス、プラッテから、湖水の南端フリュエレンまでの三哩であつた。

街道をまた南へむかうと、さすがの名勝も冬になれば、人つ子一人出會さない、景はます〳〵壯大になつて、對岸のロートシュトックが眉にせまる。街道はいくつもトンネルをこえて、上は直立の一枚岩、下は三百六十呎の懸崖の底に、湖の色がもの凄い。この岩壁はアクセンフルー（Axenfluh）と呼

はれて、摺曲が儘様のやうに表はれてゐる、岩質は石灰岩である。

フリュエレンが行くてに低く見えはじめた、そのうしろは三角にそびえたブリステンシュトック(Bristenstock, 3075 m.)が、思つたより近い。然し一番注意をひくのは、マッシーフなウルネル、アルペン(Urner Alpen)である。暢氣にぶら〳〵歩いてゆくうち、フリュエレンの見覺えのある、尖塔の下についた時は、冬の日は氷の山に落ちて、湖水の波はもうさびしく暮れた。

船をまち合せてルツァーンへ歸る。水の上から見ると、更らに驚かれるのは、兩側に氷柱のたれ下つた斷崖である。テルス、カペルレの船つきは沖をすぎて立ちよらなかつた。フヨルトに似た湖はもう暗くなつて、ブルンネンに近づくと、オーベルバウエンの雪の上に夕月が仰がれて、やゝうち開いた右手にのぞむミーテンには、それでもアルペングリューンが見える。水には夕の闇がせまつて、湖に沿う小村小村の、灯火がまたゝき初める。コンコルディヤ、ホテルに歸つたのはもう九時過ぎになつて、ルツァーンの街は今宵も靄が深い。

ツューリッヒ (ZÜRICH.)

私はスウィスの湖水のなかで、水の色の一番うつくしいと云はれてゐるルツァーンに、なほ數日を送るつもりであつた。然し冬は湖畔はいつも靄が深くつて、この邊の旅には、あまり適してゐないとさとつて、近い中に明るい伊多利亞よりの、山の中にむかはうと思つた。二月も今日で二日過ぎた。

ツューリッヒから、二時間ばかり汽車で東に行くと、ワーレンゼー(Walensee)の湖水がある。私はそこに出かけるつもりで、まづツューリッヒまで汽車に乘つた。今日も靄が深く、ルツァーンの町をはなれると、いくらか明るいと思つたが、ロートゼー(Rotsee)やツークの湖水(Zuger See)も、まつ白ろな中に、水をちらりとながめたばかり、ツューリッヒも同じやうで、ユトリベルグ(Uetlibberg, 862 m.)の

◎スヰイス日記　辻村

展望臺も、登つて見る氣にはならなかつた。ビュフェーで晝飯をすませて、バーンノーフ、シュトラーセをまつすぐに南にぬけると、ツューリッヒゼーの水際で、アルペン、クエイ（Alpen-Quai）の左は、リムマート（Limmat）の水の落ち口に、クエイ、ブリュッケと云ふがある。私はまづ橋の上に立つた、千九百十年の夏加賀が、ユングフラウへ登山の途すがら、ミュンヘンからわざ〳〵携帯に及んだと云ふ、曰くつきのアルペン、シュトックを、何に見されたか知らないが、惜し氣もなく橋の上から落したとある、紀念の場所で、思はずにや〳〵笑ひながら、水の中をのぞいて見た、底はアクアマリンを埋めたやうに蒼く光つて、杖らしいものは見ることは出來ない。ビュルクリ、プラッツ（Bürkli platz）で山の見取圖は見たが、湖は霧の海で、鷗が群れてゐたばかりだ、アルペン、クエイを西に曲ると、トーンハルレ（Tonhalle.）の前に出る、相憎く今は休業で、惜しむべし、大理石の床の上を加賀がしたゝか踏みにじつたとある、ネイルドブーッの足跡は、撮影して來ることが出來なかつた。

この調子では、ウァーレンゼーに行つたところで何にもならないから、街の中をうろつき廻つて、三時の汽車で、またルツァーンへ歸つて來た。ツューリッヒは美しい街である、しかし何處となく獨逸かぶれのした樣子から、往來の人間も、何だかスヰス人のやうな氣がしない、町の人達はベルネル、オーベルラントの者を、バールネルトラッピ（Barner-trappi）なんて云つてるが、私はそのトラッピが、ツューリヘーゲル（Züriegel）よりも、遙かにドイツに似たところが、丁度シェネーフが、全然、フランス風であるのと、同じやうに感せられた。

同じ線路をルツーァンに戻つて來る、霧は更らに深い。

サンゴタール (ST. GOTHARD.)

私は思ひ切つてルッァーンの湖を見すてゝ、南の旅に向はふとした。二月三日はやはり霧の中に明けて、九時四十七分の急行は、此の間と同じ路をゆくのであるが、ブルンネンに來るまでは、ピラトゥスもリギも、どこやらさつぱり分らなかつた。

室にはフランスの老人夫婦がのつてゐる、但し老の字は夫の方だけで、細君は極めて若い、從つて窓をあけて見たり閉めて見たり、寒むくはないかい、眠むいかい、あの景色を御覽と云つた調子で、喃々としやべりつゞけるのが、もとよりあまつたるい佛蘭西語だから、とても聞いてはゐられない、それも喃々は老人だけで、奥方は嚴然と窓に頬杖つきたまひ、ウイとかノンとか簡にして明なるおん言葉、平つたく申せば突つかゝるやうな切口上で、禿あたまなんか見むきもしない有りさまは、人妻ながら勇ましかつた。

ウリの湖水は右の窓から眼下にある、ロートシュトックは今日は雲の中で、ブリステンシュトックも、氷の裾をながめたばかり、フリュエレンからアルトルフと、ロイスの谷はだん〳〵深くなつて、アムステーク(Amsteg)、ワッセン(Wassen)。ウィンテルベルク(Winterberg:— Dammastock, 3633 m; Rhonestock, 3603 m.; Schneestock, 3608 m.; Eggstock, 3556 m.; Galenstock, 3597 m. etc. etc.) の山々も雲の中で、麓の谷に雪をあびた、タンネやフィヒテの森のほかは、汽車から何も見えなかつた。

その中にゲッシェネン (Göschenen.) の停車場に着いた。前に車掌に話して置いたので、着くとすぐレストランに飛び込んで、三品の料理で、名の知れない地酒を空にするとベルが鳴つた、あわてゝ室に戻つて寫眞機をもち出して、停車場から氷柱の下つた崖の景色を二枚撮影した、間もなく汽車が動きはじめる。

◎スウイス日記　辻村

ゲッシェネンからすぐサンゴタールで、アンデルマット（Andermatt）、ホスペンタール（Hospenthal）の村々や、ピッツォ、チェントラーレ（Pzo Central, 3003 m.）の雪の山は、トンネルの中に過ぎて、四萬九千百七十九呎と云ふ、サンゴタールトゥンネルを南へぬけると、ティチノ（Ticino）の谷に雪は消えた、アイロー（Airolo）の村に着いたのである。

家の作りは全くイタリヤ風で、もとより冬枯れの谷ながら、ティチノの水をはさむ草原は、雪を見なれた私の眼には、餘りに色彩が沈んで見えた。そして草も、木立も、枯葉色の寥しい中に、石を並べた百姓家から、ほそぼそと立ちのぼる烟の糸も物悲しい。汽車はその流れに沿うた崖の下を、ファイド（Faido）、ジョルニコ（Giornico）、ビヤスカ（Biasca）と、谷はだんだんに廣くなつて、ブレニオの谷（Valle Blenio.）を南に走れば、ベリンツォナ（Bellinzona.）の町のうしろに、サン、ミケーレの城跡（Castello San Michele）が望まれる。

ベリンツォナはイタリヤ風の町である。ティチノの流れは、いくつにも淺く枝分れして、マガディノの原をうろほして、ラゴ、マジョーレ（Lago Maggiore.）は西に近いのであるが、私達の乘つてゐるミラノ行きの急行は、河原を左に曲つて、再び谷合ひに入つてゆく、と窓からは急な山の裾に一かたまり、誰かあわてものが汽車の窓から、喰べかけの辨當と一緒に、落して行つたかと思はれる小村小村の間を縫つて、やがてルガノの停車場に着いた。

ルガノ（LUGANO.）

今年の雪は元日のヴェルサユからついてまわつた、パリからリヨンの汽車の旅も、フランスの野は一面の綿細工で、スウィスでは無論見ることも出來なかつた往來の土の上を、久しぶりに靴で踏むのが珍らしかつた。停車場はテレースの上で、ルガノの街と、蒼く光つた湖は、すぐ眼の下にのぞまれる。



(レプテンモとカツンレロンサ)ノガル

影撮氏助伊村辻

私は、同じスウィスでも、もうファッキーノと伊多利語に變つた擔荷夫（トレーガー）を呼んで、すぐ下のアートラー、シュタットホーフ（Adler Stadthof.）へ荷物を搬ばせた、テレースからはすぐ眼の下で、サン、ロレンツォ（San Lorenzo）の高塔が、落ちかゝる入日を浴びて美しい。

私はグランド、フローアの一室を選んだ、驚ろいたのは例の老夫若妻で、私がくわへ煙草で散歩に飛び出すと、ぱつたり玄關で出會した、何をうろ〳〵してゐたんだか。一寸あいさつして外に出る、棕梠の葉の青々したのがうれしかつた。

サン、ロレンツォの入り口で書はがきを買ふ、おやちはイタリヤ語しか話せない、幸にしてクワントと金の勘定くらゐは分るから、いゝ加減にごまかすと、Parlate italiano ? と聞きやがつた、こつちは逃げ支度、Si, Si.....Buon giorno ! で、表に飛び出してしまつた。空は蒼く晴れて、町の白壁にみづうみがさえ渡る。丸石を敷きつめた狹い通りを下りて、湖水のふちに出る、對岸はモンテ、サン、サルヴァトーレ（Monte San Salvatore, 915 m.）が水にせまつて、少し風立つた山の湖には、シャヴァンスの「貧しき漁夫」に見るやうな、覆のかゝつた小舟がいくつも波に搖られてゐる。

ルガノ、チェントラーレから、ピアッツァ、ジアルディノ（Piazza Giardino）の綠りの蔭を通りぬけて、カムポ、マルツィヨ（Campo marzio.）の方までうろついた。東側はカスタニョラ（Castagnola）の鼻でさへぎられて、その上にモンテ、ブレ（Monte Brè）がそびえてゐる。くね〳〵した小路を通つて、またルガノ、チェントラーレに戻つて來た、今度は西の方に水際にそうて歩きはじめたが、風だつて埃がひどいので、パラディソ（Paradiso）の方までは行かなかつた。

ラゴ、ディ、ムッツァーノ（LAGO DI MUZZANO.）

次の日は大分寢すごしてしまつた。モンテ、ブレに行くつもりだつたが、御蔭げで時間の都合もわ

るし、頂上のレストランも夏場だけと聞いたので、宿の主人にすゝめられて、晝前はムッツァーノの湖水に撮影に出かけた。

ホテルの前の坂路を、停車場前のテレースに登る、左に丘にそうて、ながく〳〵とつゞく坦道を歩いてゆくと朝の日はほか〳〵と、路ばたの葡萄畑にさし込んで、左に見下ろすみづうみには、靄が一刷、帶のやうになすり付けられて、その靄からぬけ出したサンタ、マリヤの塔が、蜃氣樓でも眺めるやう。路は岡をこえて北側に下りてゆく。北イタリヤには近いが、こゝはさすがにまだスヰスである、ムッツァーの氷の下で、もう春が近づいた草原の上に、少し持てあつかつた外套をはふり出して寢ころぶと、空はやわらかに、霞とも見える一はけの横雲がながくとつゞく彼方には、枯草の丘また丘のうしろに、雪の山がちら〳〵見える。風は無い、日はあたゝかに刈り草の香をまじへて、あゝ旅の中に春が來たなどうなづかれた。何の鳥か知らず、水ぎわに餌をあさつてゐる、そしてうち開いた湖から、氷の割れる音が、ホルンのやうに響いて來る。こゝは私の好きな山の湖と云ふ、寥しい感じはあたへなかつたが、崩れかけた石屋根や、ニレの木立の上に、遠くなだらかな山の並んでゐるのが、もうイタリヤに來たやうにうれしい。近所の百姓家のあひだをぶらついたら、野良犬に吠えつかれて、あわてゝ逃げ出した。

停車場上の丘を、のそ〳〵、下りて來るとすれちがひに挨拶する男がある、誰かと思つたら昨日の書はがき屋さんで、いやに、にこ〳〵してゐる樣子が、話でもはじめさうだから、また、ブォン、ジオルノで御免を蒙つて、急に、いそがしさうに歩き初めた。ホテルに着くと丁度晝飯である。

食堂では、若い別嬪と小さなテーブルでさし向ひにされたんで、みんな羨しさうな顏をして、こつちばかり氣にしてゐるから氣がひけて、何を食はされたんだか、今もつて、覺がないくらゐのぼせてしまつた、相手がイタリヤの女では、一番ハイカラがつたところで、十八番のブォン、ジオルノではは

じまらない、御蔭でバラディソの酒がすつかり頭にあがつた。成るほど、食べ物のやかましい奴には此の手に限ると、獨りて可笑しかつた。

その中、無事に食事もすむ、思ひ入れ宜しくあつて、一禮に及んで、棕梠の葉の風にそよぐヴェランダで、シガーを吹かしてゐると、遠くの方からペラ〳〵つと、何かしやべつた女がある、見ると變てこな婆さんで、失禮何ですかと聞きかへすと、貴下は英國人ですかつて云やがつた、はゝあ我輩の英語も中々上達したんだなと、自惚れた上、なるべく流暢なるイングリッシュで、ワタクシ、日本人、日本人、と答へてやつたら變な顏をして、あまり御靜かにしてゐらつしやるからとぬかしやがつた、怪しからん婆だ、英國人でなければ、御靜かでは平仄が合はないと思ふのがそも〳〵癪にさはる、第一、面を見れば、忠良なる大日本帝國の臣民とは、すぐ氣がつきさうなもんだ。ヴェルサュではイタリヤ人になつた、シェネーフではスペイン人だと思はれた、しかし怪我にも英國人と思ふなんて、あんまり人を見くびつてゐる、此奴の眼球は碧くつて、その上いやに窪んでゐるから、安い寫眞のレンズみたいに、アナスティグマートではないんだらう。自慢ではないが、スヰス仕込みの赤ら顏で、鬚は、いやこれはそゝつかしい女だから、氣がつかなかつたなんてぬかすかも知れないが、一歩讓つても、髮の毛は赤くも黃ろくもないんだ、さうだ、此奴は色盲に違ひない、なんでも病氣でリヴィエラに轉地にゆくと云つてるから、大方、南歐の氣候が色盲によく利くんだらう。

私はいゝ加減に失敬して、街はづれからフニコラーレに乘つて、モンテ、ブレの頂上へ行つた。空は名ごりなく澁み渡つて、西の空にモンテ、ローザが屹えゐるて。つゞいて見えるのはワイストール(Weisshor, 3580 m.)で、マッターホルンは見當がつかない、カフェーの女に聞いたが話しが通じない、やがて持つて來てくれた見取り圖を見ると、あつた〳〵ワイストールの左に、小さい槍の穗先だけぬけ出してゐるんだ、山の名はモンテ、チェルヴィノ(Monte Cervino)マッターホルンではわからないん

たらう。私はルガノが、これほどまでもイタリヤ化してゐやうとは思はなかつた。ミシャーベルやシュトラールホルン（Stahlhorn）も見えるけれど、何と云つても、立派なのはモンテローザである、ピードモント（Piedmont.）のグランデ、パラディソ（Gr. Paradiso.）が見てゐるうちに横雲の上に表はれた。此等の山々はこゝから眞西に當るけれど、冬の日はづっと南に沈むから、夕日にもなほはつきりと望まれる、距離はやつと十五里ぐらゐなものであらう。

いろ〳〵に入り組んだラゴ、ディ、ルガノを取りかこむ、冬枯れの山々のうち、やはり立派なのは、對岸のモンテ、サン、サルヴァドーレである。頂上のホテルもはつきり見えたが、冬の間は電車もなし、汗を流すほどの山でもないから、再遊の折りにゆづつて、割愛してしまつた。南には、湖に渡すポンテ、ディガ（Ponte Diga.）を通る、ミラノ、エキスプレッスの烟が見下ろされる。そして水にはくっきりと、山の片影が映つてゐる。頂上のレストラントには物見の塔がある、後ろは入うみが奥深く、モンテ、ブレンツォーネ（Monte Brenzone.）の向ふに、湖のつき當りは、東側のコモの湖水の境となる、モンテ、ガルビガ（Monte Galbiga, 1697 m.）や、トレメッツォの山々（Monte di Tremezzo）で、この邊にはもう雪は殆んど見えない。

夕日の沈む頃、ホテルに戻つて來た、困つたのは晩餐である。

晝の女は歸つてしまつたと見えて、テイブルの御相手はさつきの婆さんだ。御一人なんですかと變な顔をしてゐるが、例のを連れだと思つたんだらう、それで御靜かの意味が了解された。婆さんは英吉利生れだから、イングリッシュとホームメードが鼻について、氣障で〳〵でやりきれない。日本は同盟國だとか何とか云つて、時々御世辭をつかつてるが、そんな甘手にのる奴は、山登りなんかに來るもんか、全體英國と云ふ國は、ろくに高い山もないくせに、いやに威張つて外國人を科の異つた動物あつかひにするから癪にさわる。日本にも近頃よくある奴だが、わたくしは同國ですとか、あれは他

府縣の者だとか、やれ縣人會だ町人會だと、騒ぎ立てるのが滑稽だ。

婆さんは、何とかの大學を卒業したとかしないとかで、獨逸に何年ゐて、フロリダに何年ゐて、今は露都で敎授を商賣にしてると、聞きもしない事を白狀した。先生だけに口は中々達者だが、惜しいことには山のことは何にも知らない。退屈で退屈で閉口してゐるのに、人の氣も知らないで、しきりに雄辯をふるつてゐる、これでなくては先生は勤まるまい。よくは聞いてもゐなかつたが、人間には宗敎が必要で、宗敎は耶蘇敎で、耶蘇敎はプロテスタントに限る、だから妾が一番えらいんだと云ふやうなことを、ながたらしくしやべつてる。私は宗敎が、山登りのアルペンシュトックほど必要だとは知らずにゐた、出來るだけ話をさらして、ユングフラウの美を說き、ラウターブルンネンの夕を語つても、かう凝り固つた宗敎婆さんには、馬の耳に念佛ほどの効果もない、或は向うでもさう思つてたかも知れない。今迄、宗敎と幼年監は、罪の子にだけ必要なんだと思つてたが、婆さんの說によると、人間は御互に罪の深いものなんださうな、御互はどうも人を馬鹿にしてゐる、第一みんなが皆罪人ならば、帳消しでもう罪でなくなりさうにも考へられるが、さうすると婆さん飯が食へなくなるから、それこそ一番の罪惡となるとは、素人にもすぐに了解された。何でも妾達のやうに、山にも登らないで、御宗旨をひろめてゐれば、福德圓滿と云つたやうなことをしやべつてゐたが、婆さんの顏は角を拔かれた磐若みたいで、そんな立派な御面相では決してない。とゞのつまりが、そして貴下の御宗敎はと來た、先祖代々の御寺は定林山實安寺、何んでも曹洞宗なんだけれど、飜譯しやうに困つたから逃げ身にかまへて、宗敎はヤマト、スピリットです、では失禮をつてんで、ヴェランダに逃げだしてしまつた、モンテ、サンサルヴァトーレの上に銀河が仄白ろく、足もとにバラディソの街の灯が美しい。

ポンテ、トレーザ (PONTE TRESA.)

眼ざめると、窓には一杯に日がさし込んで、てうど秋晴れと云つたやうにのんびりする、カーテインをあけると、庭の蠟梅が咲きはじめて、今日も蒼空が澄みきつてゐた、寢すぎたも寢すぎた、顏を洗つて飯をすませると、十二時七分の電車に、半時間とは暇がなかつた。私はこれから、ラゴ、マジョーレーに行くつもりである。電車はすぐ上の丘から出て、國境のポンテ、トレーザまで通じてゐるから、そこからイタリヤ側の鐵道に乘りかへて、ルイノまで行くのである。

電車は私一人をせて、間もなくルガノをはなれた、昨日の朝寢ころんだ、ラゴ、ディ、ムッツァーノのふちを廻つて、サン、サルヴァトーレの丁度うしろの、うち開いた谷の間を走つてゆく。そこここには、小さな家が散らばつて、枯草の間には、低い石垣でしきられた蔓ばかりの葡萄畑、ニレの木立の向ふに、古い會堂の塔などの見える村路に沿うて、三十分ばかりごろ〳〵走ると、ポンテ、トレーザの湖水のふちに停つた。荷物を殘して置いて、ステッキをふりながら、小さな村路を湖水について歩いてゆく、この邊では獨逸語はまるで通じないし、ポンテ、トレーザの橋むかうは、隣り村のイタリヤで、橋のまん中に、國境のポストが立てゝある、そしてそのたもとには、交番みたいな番小屋があつて、御互に餘り強よさうに見うけられないおもちや見たいな兵隊さんが、それでもしかつめらしく、鐵砲かなんか持參に及んで立ち番をしてゐる、私はのそり〳〵橋を渡つてイタリヤに入つて行く、何か云ふかと思つたが、てんで氣にもとめない樣子だ。

ポンテ、トレーザの湖は、ラゴ、ディ、ルガノの入りうみのやうになつてゐる。電車は三時の發車で、まだ大分間もあるし、周りも大して廣くないから、湖水を一周りしやうと思つたが、乘り遲れると馬鹿〳〵しいからやめてしまつた。村はづれの湖水のふちの草原には、この温さにも雪がまだらに殘つ

てゐる、私はその枯草の上に外套をはふり出して、ビスキットをかぢりながら、寝ころんだ、風は少しもなく、小春日のやうにうらゝかで、湖を取りまく山々や、トレーザの村の白壁がはつきりと水に寫つてゐる、すぐ向ふの山の陰が、サン、サルヴァトーレで、モンテ、ブレからうしろにつゞく山々が望まれる。あほのくと、これもみづうみのやうに、靜かに澄んだ大空に、晝の月影は仰がれた。

すつかりいゝ氣持ちになつて、うと〳〵してしまつた、何だか自分のうちのつい近所でも散歩してゐるやうで、パンの食べかけを犬にやつたり、口笛をふいて見たりするうちに、もうそろ〳〵時間だから、橋を渡つてもとの停車場に戻つて來た、すぐ前のカフェーで晝ハガキを認めてると、遠い街道をゆく、から車が湖を渡つてひゞいて來る。

そのうち、驛夫がカフェーの窓をのぞき込んで、それではまゐりますと云ふから、電車が出るのかと思つて、身仕度すると、奴は荷物を手車にのせて待つてゐるんだ、なるほどルイノ（Luino）行きは、隣り村のイタリヤ側から出るんだつた。車のあとにくっついて、例の小橋にやつて來ると、今度は兵隊さんに呼びとめられた、そこで往來の眞中で、稅關の檢査がはじまるわけなんだが、大した荷物でもないので、御目こぼしにあづかつた。さつきは氣がつかなかつたが、湖水に沿うて、小ぢんまりした停車場がある、こゝから汽船がルガノへ行くと見えて、立て札の杭に太い曳き綱が捲きつけてある。どこからともなくピアノが聞えるが、いくらイタリヤだつて、停車場でピアノを彈く奴もないもんだと思つて、待合室をのぞき込むと、板敷の眞ン中にスタンドピアノを据えて、一生懸命で調律してゐる奴がある。なる程イタリヤだなあと感心して中に入ると、驛長殿をはじめとして、電車を待つてる連中が、輪になつて見物してゐるんだ。室は湖に行きぬけで、水際には舟つきの太い棒杭がつっ立つてゐる。周りの壁には、廣告のビラがかけられて、ブリュッセルの大博覽會としてあるから、變だと思つてよく見ると、千九百十一年としてある、この調子ではぶら下つてる時間表だつて、何年前のか知れたものでは

ない。果して三時は過ぎてしまつた、三十分ばかりたつと、ころ〳〵っと可愛いらしい物音がして、何がやつて來るのかと思つたら、おもちや箱みたいな滊車だつた、しかしおもちやにしては薄きたない。電車だとばかり思つてたら、これがルイノへ行くんださうだ。

御客は私を入れて七人きり、さつきの電車は、二、三等にしきられてゐたが、今度は一、二等と記されてゐる。が、どうせ二つにわけるなら、いつそ七、八等とでもしたらよからうと思はれるくらゐで、きたなさに於ては、足尾の鑛山鐵道だつてこれ程ぢやあない。

そのうち、ぷーつと變てこんな笛を相圖に、滊車がのそ〳〵動きはじめる。トレーザの川を流れにそうて、雜木林の谷の間を縫つてゆくと、沿線には、どう云ふ氣か知らないか、兵隊さんがうろ〳〵してゐた、枯木の丘が少し開くと、遠くスウィス境の雪の山が見えて、やがて間もなく、車はルイノの町に入る。こゝはラゴ、マヂョーレの東岸にあつて、夕日にむかふ向ふ岸は、もうそろ〳〵霞だつて、カンネロの浮城が夢のやうに淡い。

私ははじめ、ルイノに一泊のつもりでゐたが、日はまだあるし、こゝは見たまゝの船つきだから、すぐ前に横づけになつた汽船に乘つて、ラゴ、マヂョーレの水に浮んだ。北は、遙る〴〵と見渡される水の果は、ロカルノ (Locarno) の丘をこえて、スウィスの雪が望まれる、湖の半面は山の影になつて、もううしろになつた常綠樹のルイノの町に、サン、ピエートロの高塔が、入り日を浴びて美しい。

船はさつきルイノの沖に、遠く望まれたカステリ、ディ、カンネロ (Castelli di Cannero.) を右に見て、對岸のカンネロによりこんだ、この浮き城はそのむかし、マッツァルダ (Mazzarda.) の五人白浪の巢になつてゐたと傳へられるが、かうした昔語りも、さすがはイタリヤである。今は住む人もなく崩れ落ちて、夕日の波に洗はれてゐる。

船は西側の小村小村により路して、最後に、また湖を横ぎつて、ラヴェノ (Loveno.) の街に着いた



ザーレト・テンポ

辻村伊助氏撮影

時、もう日はとうに沈んで、空と波は、一と色にぼうつとかすんで來た、私の行く先は對岸のバランツァであるが、こゝの船つきに小一時間またされた。

船のへさきに何氣なく出ると、西の空は湖の果に、オレンジ色に染められた殘んの夕空に、一座の大山岳、頂は五つに分れてマッシーフな、一と目見てそれと知れた、モンテ、ローザの英姿である。

夜は八時をすぎて、やゝ肅寒むの湖を、なかほどまではその山の頂を仰ぎながら、西にむかへばイントラ（Intra.）の街の灯が水に搖く岬をまわると、サン、ジョヴァンニの小島の陰に、バランツァの燈火が望まれた、すぐ湖ぎしのホテル、ベルヴューに宿をとる。

ラゴ、マジョーレ（LAGO MAGGIORE.）

窓一面に、朝日は今日もさし込んで來る、湖には淡い靄がたなびいて、水に浮ぶ島々は、常綠木の森がまつくろに、指されるが、對岸は岸にせまつた山の裾がうつすらと、その靄よりやゝ白く、ストレーサ（Stresa）の町の白壁が、水ぎわに並んでゐるのを見たばかり、みづうみの色はブルーにさえて、朝空の如く靜かである。

北イタリヤで一番大きいラゴ、マジョーレは、南北にのびて長さ三十七哩と云ふが、今、私のゐるバランツァ（Pallanza）は、西に分れて入りこんでゐるから、昨夕、船から眺めたやうな、ひろ〳〵とした景色はのぞまれない。羅馬人の呼んだラクス、ヴェルバヌス（Lacus Verbanus）の、北に延びた一部は、今はスウィス領になつて、カントン、テイチノ（Kanton Ticino）に屬してゐる。湖水の南方は全部イタリヤ領で、その方面の山はなだらかに、水ぎわに沿うてます〳〵低く、ロムバルデイアの平野につゞくのである。私はまだ北端のロカルノは知らない、從つて綠の水と呼ばれてゐるその景色に對して、一言も云ふ資格はないけれど、ルイノから望んだ景色から想像すれば、ラゴ、マヂョーレー

の最も美しいのは、バランツァの沖、ここにそこに浮く、イソレ、ボロメエ（Isale Borromee）の島々であらう。

ホテルの前の船つきには、棕梠やコルデリネの繁つた花園がある。朝のうちは左のだら〳〵路を上つて、昨夕まつくらな水を渡つたブンタ、デラ、カスタニョーラ（Punta della Castagnola）の岬を廻つて、碧の水に白壁の浮く、インドラの街までやつて來た。薄手ながら外套を着てゐると暑つすぎる。岬には常綠木がまつくろに覆ひ茂つて、すぐ下の小島はサン、ジョヴァンニである。バランツァのうしろは、モンテ、ロッソ（Monte Rosso, 693 m.）の丘つゞき、村の半分は狹い石だゝみで次第にテレスにのぼつてゆく、そして一かたまりの白壁の、村の間から、ぬけ出した、サン、レオナルド（San Reonardo）の白塔が、西の空に雪をかづいた、ワイスミス（Weissmies）にむかひ合ふ。

低く水に這つてゐた朝もやは、もう温い日に溶けて、ラヴェーノの沖に、水みちが儀様のやうに美しい。

晝過ぎに小舟を雇つて、ボロメオの島めぐりに出かけた、岸をはなれると、すぐ船頭の櫂をとつて、久しぶりでこぎはじめる、バランツァの街はゆるく流れる波に搖れて、カムパニヤのマドンナの手にとるばかり岸に近いうしろには、冬枯れの山に野火の烟がゆるやかに立ち登る。西は枯れ葉色の山また山の、空にぬけ出たシムプロンの雪の上に、カステロか、前山の左に見えはじめたのは、モンテ、ローザの尾根つゞき、蒼空にきざみこまれた、氷の牙が眉にせまる。舟はゆるく搖れ、ゆるく動いて、南の小島につながれた。島はイソラ、マードレ（Isola Madre.）である。

私は寫眞機をぶら下げて、岩の上に飛び移つる、船頭は、やつとなと、櫂をおさめて、のそ〳〵あとにつゞいて來た。石門の鐘をならすと、石だゝみのだら〳〵路を、白髪あたまの爺さんがやつて來て、門を開いて案内する、島はやつと六町歩に少しもある小島ではあるが、月桂や泰山木に覆はれた

森の間に、セイゴ椰子やリヴィストナの茂つてゐるのがうれしかつた。庭は悉く亜熱帯の密林で、椿、夾竹桃、コルク樫、などにまじつて、ミモサの花の香が、リヴィエラの春を憶はせた。キプレス、やツェドルス、アトランティカ（Cedrus atlantica）セクォイヤなどの大木も珍らしい。島のまんなかにパラッツォ（Palazzo）がある、そのすぐそばのオランジェリにオレンジが生つてゐるが、これぱかりは露地ではうまく生らないと云ふのが不思議でならない。庭の芝原には、ところ〴〵にまだ雪が殘つてゐる、今年は寒さがひどくつて、珍らしく一週間前に積もつたんださうだが、それにしても、とにかく雪がつもるやうな此の氣候に、青々と生ひ茂げるコヽス、やセーゴの椰子の樹の高さは數米突に及んでゐる。

船に戻つてなほ南にこぎだすと、ストレザの沖にまだ二つの島が見える、私達は右側から廻りはじめた。島には小さな家が重なり合つて、眞中に古い敎會の尖塔が見える。岸の岩の上には、島の女が歌を唱ひながら洗濯してゐる、水際にさらした網にかげろふがもえて、水草の香のたゞよふのもさすがにもう春である。舟はこのイソラ、デイ、ペスカトーリ（Isola dei pescatori）をはなれて、すぐ隣りのイソラ、ベルラ（Isola Bella）についた。こゝもボロメオの伯爵家に屬してゐて、西むきには、十七世紀に建てられたと云ふ大きな城跡があつて、東側の常緑木にのぞんだテレースの上には、いろ〳〵の像をのせた石屋根が陰見する。木立は亜熱帯の常緑樹で、ツェラスヽ、ラウロセラスヽのなめらかな緑にまじる、マグノリヤの裏葉が美しかつた。

私はこゝを一周りして、すぐ向ふ岸のストレーサには寄らずに、平らな波の上をすべつて、イソラ、マートレを左に、バランツァにこぎ戻つた、岸はすぐそばに見えて中々遠い、船はゆらり〳〵、のんびりした水をわけて、無理やりに動いてゆく、右はラヴェノ、やチェルロの岬が水にせまつて、その山上の一つ家と見えるのは、サンタ、カテリーナ、デル、サッソ（Santa Caterina del Sasso）の尼寺である。

◎スヰス日記　辻村

日は次第に傾いて、シムプロンの雪の山は、斜めに日を浴びた氷の尾根が、空にぬけ出てゐるだけで、あゝ、今日の日はもう暮れてゆく。

サン、レオナルドォの白塔が、殘んの日にかゞやいてゐた。

私はこの雪の山を見終めにして、もう山の湖に別れなければならない。楢の落ち葉は、アルプの雪といもに、ながく夢に通ふことであらう。次の日は、うみ岸の靄の中を、なごり惜しげに見かへりながら、バランツァ、フォンド、トーチェ(Pallanza-Fondo-Toce.)から、ストレーサの岸を湖にそうてミラノに向つた。

根なし雲のたゞよふ山ふところの小村は、もうたゞ夢に見るばかりである。

……千九百十四年一月七日より二月七日、

雜錄

女學生と登山

私共が、この大阪府立夕陽丘高等女學校に、赴任致しましたのは、明治四十三年の四月と、九月とに前後して參りましたが、以前は二人共神戸の學校に勤務して居りましたので、其當時から山岳に趣味を持つて、六甲山や摩耶山はまるで自分の庭園の如く感じて、いつも登つて樂しんで居つたのですが、當校に參りましてからは是非生徒たちにも、この趣味を悟らせたいと思ひましたが、山と云へば非常に恐ろしい處で、行けば直ちに大怪我でもする樣に考へて居る、家庭に育つた子女ばかりですから、生徒自身は登山をしたいと云ふ考があつても、仲々家庭が許さないので始めの中は隨分此の趣味を感じさせるのに骨を折りました、我々は暇さへあれば、近い山に登つて諸種の植物や、昆蟲を採つて來て之を生徒に示しなどいたしまして、一日一日と山の感じを與へて參りました、翌四十四年十月二十三日に先づ校長以下職員生徒全部を率ゐて錦繡織るが如き中秋の六甲登山を決行致しまして、茲に初めて生徒に山なるものゝ感興を起させました、越へて翌四十五年一月卅日の休暇日を利用しまして、有志の生徒を白皚々たる六甲に登らせ、膝を沒する位の積雪中に一日中遊ばせましたのは、昨秋登つた時よりも更に生徒は山岳の美觀にうたれた樣に思ひます、此の二回の登山が大なる導火線となりまして其後月に一回位づゝ比叡山や、愛宕山や、時には金剛山などに有志の生徒をつれて登山を試みることが出來る樣になりましたが、丁度明治四十五年七月は、思ひが

◎雜錄　女學生と登山

けぬ御大喪に遭つたものですから其秋からは、謹愼の意を表して餘り大勢づれの生徒を諸方に連れ廻ると云ふ事が面白くなく感じたものですから、一時盛になりかけた登山熱も一頓挫を來したわけでありますが、其間も私共二人は出來得る限りの方法を以て校內に登山趣味の鼓吹を昂めて參りました。

大正二年の秋から同三年の春にかけては近郊の諸山に登つたのでありますが、四月には又もや、國母陛下の御大喪のため再び中止して居りましたが、大正三年八月には二人づれ富士山に、同年七月には同じく日本アルプスの槍ヶ岳に登山いたしましたので、其登山談等で生徒の山岳趣味も加はり、職員の中にも熱心な登山者が增加して參りました、昨秋京都で開かれた、山岳會の關西大會の時なども、熱心な女教員三名は相伴ふて比叡に登りまして、京都に一泊して翌日は、圖書館內の陳列會を委細に觀覽いたし、其夜京大の學生集會場に催された山岳講演會にも傍聽に參つた樣な次第であります。

多年我々二人が唱導して參りました山岳趣味も大分其根を校內に深く下す樣になつたものですから、學校長にも謀つて今大正四年四月からは校友會事業中に登山部なるものを設立いたしまして、此に初めて獨立したものが出來た樣な次第であります、近頃は特に女子の教育界に於きましては、一般に華美だとか、虛榮心が增加するとか、輕浮逸樂に流るゝとか云ふ、社會からの攻擊を受けるのでありますが、我々が特に登山を奬勵すると申しますのも、此の點に深く留意して居るのであります、當校で登山奬勵について學校長が生徒の家庭に向つて發表いたしました、言葉の中にも、『駑馬が平地を行く樣な普通の身體の運動に比べると、登山は駿馬が曠野大澤を驅ける樣な身體の烈しい運動で、特別の筋肉運動が加はるわけであるから、其之を强健にする上に於て此上ない好事情を附與することになります、更に登山が齎す效果の重なるものとしては、之が無上の强肺術になると云ふ一事です、此は勿論新鮮なる空氣を呼吸すると云ふことが原因には相違ありませんが、併し

それぱかりではなく、何故かと申しますと平地にあつて五分十分深呼吸をしてさへ、肺が強くなると申しますが登山をすれば、麓から頂上まで深呼吸のし續けで言はゞ一種の連續的深呼吸術となるのです、此の一點は殊に當市のやうな空氣の不潔な都會の人にとつては、看過するとの出來ない効果で、「私は始終山登りをします」と云ふ人は十中八九までは肺の強い人ばかりで「私は一向山へはよう登りません」と云ふ人の中には、脚の弱いのや心臟の弱いのもありますけれども、其大多數は肺に故障のある人です、私は思ひます今後大阪の人で山に親しまない人は必ず藥に親しむ人だと斷言しても間違はないと。」

併私共が教育上登山の價値を認めて居るのはこればかりではありません、「此等は皆身體的方面に於ける登山の効果でありますが、更に精神的方面に於ける効果に至りては到底平素の訓練によつては得られない貴いものがあります、第一には忍耐力の養成と云ふことで、登山をしますと、其登る中途と云ふものは、隨分苦しいもので、其苦しみの大なる程益々頂上に着いて、四圍の眺望を恣にすることが出來るやうになると其時の愉快さは又格別のもので、此れを成効の悦樂とでも申しませうか、此れまでの苦しみは、皆此の樂しみを得る爲めの方便となり、此迄の苦しみの多く大きかつたと云ふことは、頂上の愉快をより多く大きくする爲めの前提とのみ見られるやうになつて來るのであります、「勞苦に依つて贏ち得たる悦樂」此の一語は實に貴重なる人生行路の暗示ではありませんか、第二は登山でなくては得られない特効と申すべき、崇高壯美に對する情操涵養と云ふことです「居は氣を移す」と申もまして吾々の氣分は、地下の暗室に居るときと、床下を這ふて居る時と、平家に立つて居る時と、三階の窓から見渡す時と、特に高山の頂上に突き立つた時と、それ〳〵趣が違ひますが、殊に山上の感は一種云ふべからざる尊い點がありまして、あらゆる人事自然を一望の下に展開し、ちやうど造物者が大空に居つて下界の一切を瞰下して居ると同じやうな氣持になつて、比較的神に近い考へを起すことが出來ます所

謂崇高の感とは之を云ふのです、壯美の情操とは優美とか可憐美とか云ふ小さい意味のものでなく、懸崖數十丈飛沫を噛んで怒號するナイヤガラの瀑布だとか、七里の紅葉湖面を爛らかす日光男體の秋色とか云ふやうなものは其美はしさが、大仕掛で通常之を壯美（サブライム）と申します、所謂山上の展望なるものは其後者に屬する方で云はゞ其山以下の天地山川草木の凡てを皆我庭園としたやうなものでありまして此眺めは電車や腕車や自働車の轍ばかり見てゐる市内では味はふことが出來ません。

右は登山に關する一般に亘つての効果を述べたのですが、最後に女子の登山に就いて一言つけ加へておきたいと思ひます、世間通常の考へではたださへ寒い冬の終日をかよはい女の身として金剛山や六甲山へ登ると云ふことは非常な冒險のやうに思はれませうが、當校年來の經驗に徵しますと決して冒險でないと斷言して憚らないと思ひます、寒いなど云ふ事は比較的の言で、一日ずつと室に引籠つて何のなすなく、唯チーッと寒さに襲はれるのを待つて居ると云ふやうな人程きつくこたへるので勾配の急な山路をかけずりあるいたり、尺餘も積んだ雪の中で勇ましく雪礫を投げて居る寒いどころか汗ビッショリになつて肌着が一絞りになる位です、それに女子が「カヨハイ」と云ふ事は通常世人の云ふ意味に餘程註釋を加へる必要があらうと思ひます、非常な險阪峻路を一氣呵成的に攀ぢ登ると云ふ風な急激な運動にかけたら成程女學生は中學生に敵ひません、一般婦人も一般男子には及びません、から此の點に於て女子がかよはいことは確です、けれどもさう大した難路でなく又時間も餘程裕な豫定で歩々漸進的の登山をしますならば、女學生と雖も決して中學生に劣りませぬのみか、却つて辛抱が強いかも知れませぬ、男子が強いといふのは鋼鐵のやうな強さで、女子が弱いといふのは絹糸のやうな弱さなのですから、太いけれども一時的な鋼鐵と細いけれども永持ちのする絹糸とは双方に長所もあり短所もあるのです、で、當校では男子に奬勵するやうな人跡未到の高山や深谷を探檢的に跋渉させるやうなことはせないで、既に一般人の足馴れたところで

略疲勞程度のわかつてゐる處を選んで登らせることにして居りますが、まだ今日までに一名の落伍者はなく、又一名も疲れのために翌日缺席するやうなものはございません、他ではよく「夕陽丘は何かといふと登山をする學校だ」などいふ噂を立てゝ何かそれが非難の一理由にでもなりさうに云ふ者もあるさうですけれども私は前申したやうな考の下に奬勵して居りますので決して奇を好み異を衒ふと云ふやうな輕浮な動機から出たことではありません云々』とありますが、實際登山より受くる効果としましては、殊に都會育ちの輕浮な、物事にあきつぽく、忍耐力に乏しいものも自然に良くなるやうに思ひます、更に多數のものと行動をいたしますから共同の精神とか同情心が非常に強くなることを我々は感じます、高等女學の上級生位の年齢になりますと、空想に耽り易き時季なのですが登山は之に反して實際的の考が起るやうになるのであります、身體についての特記することは我々の身體に垢が出來れば沐浴さへすれば表面の垢は清潔に除去されますが、登山をすると全身の烈しい運動を而も新鮮なる大氣中で行ふので組織中の老廢物は汗となつて出てしまつて身體内部を洗滌するのでありますから其効果も亦大きいと存じます、女子は一般に自分でも弱い〳〵と思つて居りますが、登山を常に行ひますと自分の體力の自信が出來て平素仕事をいたしますのに勤勞を厭はぬやうになつて參ります、其他自然に接觸するのですから自ら自然界に親しむ樣になつて、お轉婆であつたものが、追々と着實になつて來て學科の成績の上にも夫れが現はるゝやうになつて參ります。

登山部の事業は毎月一回必ず何れかの山に登るのでありまして、當大阪を中心として一日で往復の出來る山を第一の條件といたしてありますが今日までに登りました山は次の通りであります。

山名	標高尺	所在地
金剛山	三九七三	河内
六甲山	三〇五九	攝津
愛宕山	三〇四三	山城
比叡山	二七七九	山城

◎雜錄　女學生と登山

摩耶山	二二九〇	攝津	
妙見山	二一三七	同	
生駒山	二一一二	河内	
信貴山	二一一二	大和	
二上山	一八九八	河内	
再度山	一五三五	攝津	
鍋蓋山	一六〇一	同	
城越山	一五一四	同	
甲山	一〇八五	同	

これ等の山々に登りますには第一に注意をいたしますのは服裝でありますが、こゝの學校の生徒は筒袖に袴靴と平素から規定されてありますので靴はなるべく足尖を丸くいたしまして踵も低くそれに護謨をつけ裏には三本程細い皮で「サン」を打つて辷るのを防ぐやうにして居ります、短靴を用ゐるものには特に作つた短かい「ゲートル」を穿たせて靴の中へ小砂が這入らぬやうにして居ります、今一つは辨當とか其他菓子とか果物とかを入れる袋なのですが、普通の信玄袋を下げてと云ふと餘程邪魔にもなりますし、疲れ易いので別に一本の太い平たい紐を持たせ、袋の底の兩端に小さい襷をこさえまして別の紐の兩端には一寸位の細い箸の切れをつけておきまして、それを襷にかけて袋の口をゞめて其紐で別の紐の中央に縛りて小さい「ルックサック」の樣にして背負はせますのですが、不必要な時は別の紐丈けは袋の中に入れて仕まへば普通の信玄袋になるので、これは餘程便利で生徒も其味を覺へて、必ず山登りにはかく袋をいたしてをります、冬季寒い時などは多く將校マントを來て參りますが之は俄か雨を防ぐ上からも餘程好良いやうに思はれます、途中不用の時は背負袋と共に負ひますから兩手もあいて居つて便利であります。

先づ今日まで一の障碍もなく年と共に登山の氣風が高まつて參りましたから餘り突飛なことをしないで穩健に其思想を發達させて本校訓育の一部の責任を全うしたいと考へるのであります、最後に本年四月卒業いたしました生徒の在學中登山いたしました回數を調べたものを附け加へておきます。

第六回卒業生在學中登山調査統計表

大正四年三月廿四日

山名	所在地	標高	登山人員	一人が同一の山に登りし最多回数	回數延人員
富士山	駿河	一二四六七	一	一	一
金剛山	河内	三九七三	二四	二	二六
大瀧山	阿波	三一二五	一	一	一
六甲山	攝津	三〇五九	一五	六	三〇
愛宕山	山城	三〇四三	四	一	四
高野山	紀伊	二八五八	四	一	四
古處山	筑前	二八四五	一	一	一
箱根嶺	相模	二八三三	一	一	一
比叡山	山城	二七九九	二八	二	三〇
摩耶山	攝津	三九〇	一七	二	一八
吳葵々宇山	安藝	三五二	一	一	一
成相山	丹後	二八一	一	一	一
妙見山	攝津	二三七	四	一	四
生駒山	河内	二一二	二四	三	三六
二上山	同上	一八九八	二	一	二
彌山	安藝	一八四五	四	三	六
犬鳴山	和泉	一八一八	一	一	一
信貴山	大和	一七〇三	三〇	三	三七
多武峯	同上	一六五七	一	一	一
金山	備前	一六四八	一	一	一
笠置山	山城	一三八	七	二	八
鳥取山	攝津	一〇九〇	一	三	三
甲山	同上	一〇一三	六	一	六

（竹下英一、朝輝記太留）

◎雜錄　甲斐駒山脈に就て

甲斐駒山脈に就て

甲斐駒山脈を、縱走した折に、心付いた點を、秩序なく書き連ねて、此欄の一隅を拜借する事にした、今後此の山脈に遊ばれる方々に、幾分なりとも御參考になつたらば、幸である。

一　駒ケ岳

（一）前宮　先年登山した際には、社務所に誰も居らなかつたが、今年は其際扉風の小舍にゐた婆さんが留守をしてゐて、立寄つたら茶を入れたりして私等をねぎらつて呉れた。

（二）瀧　前宮裏の吊橋を渡つて、川畔を數町右す

◎雜　錄　甲斐駒山脈に就て

ると、二つの瀧がある、前者は小さく後者はやゝ大きい、事更に行つて見る程のものでもないが、若し時間がゆるされるなら僅かの寄り路であるから、足のつひでに寄つて一覽せられたい、河床は花崗の砂で白く、透明の水は層をなして青綠に光り、底には魚の群れてゐるがあきらかに透いて見えた。

(三)屏風小舍　先年行つた時は、二百十日の暴風雨で弱らせられたが、今年は晴天で心地がよかつた、小舍は其時と變りなく別に手入れをした樣な所も見當らない、山へ來て食物の贅澤なんかは言へないが、夏期は登山者も相應にある事だから、少しは青いものでも食べさせて呉れたらばと思ふのは、あながち私ばかりでないと思ふ、次に尾籠な事を申し上げて恐縮ですが、便所は少し清潔に出來ないものであらうか、無いのなら無いでよい、なまじ便所らしい小舍が別に立つてゐるだけに、何とか言はずに濟されなくなつてくる。

謹んで小舍主伊三郎君に此の件を御相談申しあげたい。

(四)鳥居　禿の石小屋側に花崗石の鳥居が出來た、今年八月九日に私が登山した折、恰度鳥居を建て終つた處であつた。

(五)奥宮　新しく造宮するさうで、絶巓より一段低い（奥ノ院と稱する石碑や神樣のお像が雨晒しになつて立たせ給ふ處の横）處を掘り下げて、基底部の土を平にし、四壁はすべて石垣で圍んであつた、當時お宮は未だ何にも出來て居らなかつたが、もう出來あがつた事と思ふ。

白崩はいつ降つても心地のよい山である。

二　駒津岳

駒ヶ岳から駒津岳につゞく山稜の駒津に近い大きな岩の蔭に、偃松でこしらへた小舍が一つ出來てゐた、たぶん御料局の役人等が測量の際に作られたものであらう、かなり完全に出來てゐる、私は熱いので此の小舍の中に隱れて晝食を濟せた。

駒津岳から仙水峠へ――、眼下に見える峠を指して偃松の海を泳いで下る、今年は新しい切り明けが出來たので餘程勞力が省ける樣になつたのは何よりだ、切り明けは終りも知らず續いて居る、木の切り口が未だ生々しい、偃松がつきて針葉樹

の林へ這入り林を出てまた少し傾斜の中を行く、前年までは途中から亂石の上に出て永い間、ゴロゴロした岩原の斜面をあぶない足どりで峠まで降つたものであるさうだが、今後此處を通過される人はこの切り明けによらるれば、峠まで比較的涼しい思ひをして行かれる計でなく、岩原に出るよりか時間に於て大分の節約が出來る事と思ふ。

三　仙水峠

池には水が乾れてゐた、風にいぢめられて盆栽に好い木の多いのが眼についた、峠に下りきつて右へ二十分程亂石を踏み占めて下ると、森林の中になつかしい水音が聞える、北澤の水源はこゝである、私は水源より三町程手前の森林中に野營することにした、嘗て辻本氏が野營されたのも此處であると同行した人夫の一人は言ふてゐた、其の晩の冴えた美しい月光がまだ眼の底に燒きつけられてゐる。

大武川を溯り仙水峠に出る路を知つてゐる人夫は少ないさうである、私の伴れて行つた二人の人夫（臺ヶ原）も、此の路はまだ知らないと言ふてゐた、尤も谷は中々惡く里數もたしか柳澤から五六里はあらうかと思ふ、早川尾根に泊つた晩御料局測量夫から聞く所によると、柳澤の丑田重義は此の路の案內者として、最も適任者であるといふ話であつた。

四　朝奥岳

仙水峠から續いた尾根には切り明けがつけられてあつた、此處も以前なれば可成り長い間岩原を日に照りつけられながら登らねばならなかつたさうであるが、今年からの登山者は切り明けの有難さを感せらるゝことが大であらうと思ふ、二つ三つ同じ位の峯を越えると三角標のある峯の頂へ出た、陸地測量部五萬分一の圖にアサヨ峰と書かれてあるのは此處のことであらう、三角標標はもうお用濟みになつた爲か一段低い處に橫倒しになつてゐた、標石を建てゝ終れば標なぞは不用のものかも知れないが、邪魔になるわけでもなければ其のまゝ殘して置いて呉れてもよささうに思はれる、斯うした希望は必ずしも私ばかりではあるまいと思ふ、此所から見た白峯北岳の頂は鋭く尖つ

てゐる。

朝興を降つて早川尾根に到る迄に小さい峯をいくつ越えたか、今しかとその數を覺えて居らないが何れもひどい高低が無かつた樣に思ふ、太い枯れた偃松の幹が風雨に漂白されて、生態もなく横たはつてゐるのと、針葉樹のすべてが申合せた樣に野呂川溪に面する部分だけ、枝を出して居らないのが眼に付いた、常に風の強い爲でもあらうか。

五　早川尾根

三角標櫓のある處から少しく下ると冷たい水が渾々と涌き出てゐた、勿體ない程である、森林の中ではあるが野營に充分な廣い空地もある、私の行つた時は恰も御料局測量部で夏から秋にかけてこの邊の測量に從事されるさうで、完全な天幕小舍が二つ出來て居つた、聲をかけて見たがどちらにもまだ人影は見られなかつた、私等より三十分程後れて御料局の皆川技手が柳澤の人夫八九人を連れて到着せられた、其夜皆川氏の好意で天幕の中に一夜あたゝかい夢を結んだ上に、同氏から早川峠の通路をうかゞふ事が出來て好い拾ひものをした樣な氣がする、嘗て本誌七年一號に登載された辻本氏の甲斐駒ヶ岳山脈縱斷記中、十二頁左から六行目に「柳澤から大武川を溯つて、此邊で此山脈を乘越して、野呂川ミヨシ澤に下る早川峠と言ふものがあるらしいが、其路は春吉に聞いても確には分らなかつた、多分此三角標の附近を通るのであらうが、路と云ふべき程の形のあるものでは無いらしい」と書かれたのは、皆川氏等の登つてみえられた路と同一のものではあるまいか、私にはどうしても同一の路らしく考へられるから、皆川氏からうかゞつたまゝを左に取次することにした。

藪の湯から大武川を溯り赤薙澤に這入つて三十間程進むと高さ十五間位の瀧がかゝつてゐる、これを此の澤の終りとして右手の尾根に攀ぢ登つて、尾根先きを上に傳へば早川尾根の三角標の處へ出る事が出來る、無論路らしい路とてない、同氏の計算によると藪の湯から赤薙澤まで二時間半を費し、赤薙から早川尾根まで六時間程で達せら

られるさうである。

早川尾根から野呂川ミヨシ澤へ下る路は未踏地のことゝて、遂に聞くことを得なかつたのは殘り惜い。

六 ゴーロ澤の頭

登り口附近の偃松が大きい上に此處だけまだ切り明けが出來てゐなかつた爲大分難澁をした、三角標櫓は幸に倒されずに殘つて居つた、そんなに大きくない岩のゴロ々々した尨大なまとまりのつかない山である、北岳の頭は鈍く且つ圓く、大樺澤の殘雪が眼に痛い程強く光つてゐる、間の岳、農鳥山も見えて來た、頭をめぐらせば鳳凰山の地藏佛が手に取れさうに近い。

ゴーロ澤頭を下つて鳳凰山にいそぐ途すがら、花崗岩の大塊が簇立してゐる峯で初めてホウワウシャジンの咲いてゐるのを見た。

七 鳳凰山

度々諸先輩の紀行や報告で紹介されてゐる山だから改めて書く程の事も思ひ當らない、私は花崗岩の大塊が高く重なり合つてゐる工合を面白いと思つた。

八 地藏ヶ岳

幾度か甲府盆地から仰いで一度登つてみたいと思つた願望がやつとかなつて、今日此の峯の頂に立つことが出來た、三角標の櫓は何處へ行つたのか今跡方もない、私は嘗て讀んだことのある小川未明氏の小品「地藏ヶ岳の麓」を思ひ浮べずにはゐられなかつた。

九 南御室

優しい、まるみのある、名前を聞いただけでは里つぐきの樣にも思はれるが、來て見ると海拔二千四百米突餘もある山上なのに、すつかり感心してまつた、掛け渡された木樋には清い冷たい水があふれてゐた、伐採の名殘をとゞめる大鋸屑が堆い、附近には名も知らない紫紅色の草花が美しく咲き亂れてゐた、此處より右すれば西南地藏平をすぎて野呂川へ、左すれば東北靑木湯を經て小武川に沿ひ韮崎へ出ることが出來るさうである。

一〇 芦安

御勅使川のほとりに建てられた一軒の二階家、旅

◎雜錄 甲斐駒山脈に就て

◎雜錄　赤城登山道案内

人の泊るホテルは此家より外にないといふ、温泉であると聞いて喜んだのもほんの一時、生ぬるい白濁の硫黄泉の氣持ち惡さに、私はほと〳〵閉口してしまつた、川原に近い湯元から樋で引いて來た湯を、風呂に入れてわかすのだと聞いて、湯の少いのも、生ぬるいのも、無理のない次第と合點が出來た。

此家に泊つた夜私は浴衣一枚で猶寢苦しいのに弱らせられた、翌朝宿の主人に聞いて見るまでは山と里との氣温の相違を忘れて、幾度か發熱したのではあるまいかと心配しながら夜を明したことを、今更おかしく思はずにはゐられない。

このあたりの女たちが山へ仕事に出る時の服裝は、一寸京の大原女に肖た處がある。

養蠶が盛んだとみえて桑園が多い。

溪間に位する爲なつかしい山の姿を仰ぐことが出來ないのは遺憾である。

川原には撫子の花が咲いてゐた。(大正三年大槻禎郎)

赤城登山道案内

空華集に「上野有大山　曰赤城　有大河　曰利根」とあり、實に河は利根、山は赤城、溶々滔々晝夜舍らざる利根川に對して、裾野を長く曳きて聳ゆる赤城山は、關東平野の雙美なり、豈たゞに上毛の誇とのみいはんや。

妙義、榛名、赤城を上毛の三山といふ、石門の奇巧人目を驚かすなく、伊香保の靈泉を近く山中に有せざる、赤城山は、其名他の二山の如く著はれず、登山者の數も遙に少なし、之、山比較的高くして道遠きが故なり、然れどもそれだけ俗了せず自然の美に豐かなり、榛名は温雅なれども規模小に、妙義は奇巧なれども長く親しむ可からず、赤城は高さ六千尺、日本アルプス諸峯の雄偉崇高の觀なく、山岳黨の渇望を癒すに足らずとするも、東京より一日にして登り、半日にして下山歸京し得れば、相當に人隱を距り自然の山岳美を保ちをる山として、恰好の位置にあり、湖上に舟遊し、全山を跋渉し、優遊默思するによく、四時交

通滯在するに足る、以下登山路を記述して後の遊者の栞となす。

一、水沼道
　柏山道、花輪道
二、梨木道
三、大胡道
　瀧澤道、湯ノ澤道
四、前橋道
五、澁川道
　深山道
六、沼田道
七、五輪峠道

一、水沼道　大洞迄三里

水沼は群馬縣勢多郡黑保根村役場の所在地、渡良瀬河畔、足尾街道に沿ふ小村なり、花輪町より一里餘、大間々町より二里、旅舍に綠野外二あり。東京より行くには、東武鐵道淺草停車場を發し、四時間許にして桐生驛にて足尾線に乘換へ、行くこと三四十分水沼驛に達す。上野停車場よりすれば、小山、又は、高崎、より兩毛線に入り、桐生にて足尾鐵道に乘り換ふべし。

水沼停車場を出で、直に足尾街道を横ぎり、溪間の小徑を上る道あり、近道なり、三十分にして本道に合す。本道は足尾街道を上る事二町餘、水沼の村に入らずして、左に折れ流に沿ふて急坂を登る、二十分にして道やゝ下る、道は右に折れ左に岐るれど、每に青年會の木標により示さる。

西に赤城山立てり、黑檜山右に高く、駒ヶ岳之につゞき、籠山の小突起をなして、再び上り小地藏、長七郎山をなす、其の間の凹みは即ち鳥居峠なり。

清水の村を過ぎ、澤につきて一の鳥居に至る、水沼より三十町に足らず、右に橋を渡れば鹿角の村に入る。一の鳥居をくゞりて、叢間の小徑をゆくこと數町、柏山より來る道と合す、松原を左にして上る、一小丘を下れば、下田澤の開墾地なり、溪間に二三の屋を見る、溪廣し、左に低く溪をのぞみ、棚道をゆく、道の右は山、家三あり、四月軒の梅桃笑ふ、前方に鳥居峠を仰ぐ。

開墾地より十町餘、一の鳥居より一里の處に二

の鳥居あり、老杉道を挟み、石の小祠あり、右に溪流の橋を渡る。圓山をめぐり、右に高く屏風岩あり、此邊五月下旬巖出で、左に溪流をきく、十月紅葉の節頗る美なり。

道は一度下り、溪流を横ぎりて再びのぼる、二の鳥居より三十分、道の右に大樅あり、此邊より道漸く急峻、暫くゆけば左に龜岩あり、頸を道に突出し、踞る狀龜に似たり、大樅より數町、溪流右の山間より奔騰し來る、岩上に不動尊の石像立てり、石を渉り、道は笹の間を上る、息あえぐ、十五分にして鳥居峠の上に出づ。

峠の上に出づれば、右に駒ヶ岳、左に小地藏、下は覺滿淵に馬牛遊び、雜木林をへだてゝ、赤城社の森黑し、湖は盃の形なして湛へ、藥師岳中央に盆景の山の如き形をなせり。顧れば丘陵連り、渡良瀬の沿ふ低地に上神梅、大間々の町を見る、利根の河白くかゝやき、晴れし日は筑波山遠く紫影浮ぶ、渡良瀬の連山近く屏風の如く聳ゆ、景觀壯大なり。

峠を下り、覺滿淵に沿ふ濕地をゆく、もうせん苔多し、林は大洞に入るの門の如く、再び原となり、右にゆけば常番小屋の原より直に湖畔に出で、五輪峠道にゆくべく、再び樽の小林に入れば、猪谷旅館の庭前をすぎて、赤城神社の社頭に至るべし、水沼より大洞迄三里と稱す。

柏山道

水沼停車場の出來ぬ前は、大間々より足尾街道を、津久瀨より左に登りて、柏山に出で、一の鳥居に出でずして、松原、開墾地をへて、鳥居峠に出でたり。

大間々より津久瀨迄一里半、津久瀨より柏山迄廿町、柏山より鳥居峠迄二里なり。

花輪道

花輪町は大間々より足尾に通ずる足尾街道の中間にあり、足尾鐵道、花輪驛あり、花輪警察署あり。

花輪より一ノ鳥居迄二里、水沼道に合す、日光、足尾方面より來るものは此道に寄る、足尾より赤城山大洞迄九里なり。

沼田、沼貝方面より古峯ヶ原に參詣するもの

は、赤城山を越へて花輪に出づるを常とす。

大間々町

足尾鐵道開通以來、大間々町は、赤城登山の基點とする必要なくなりしが、此邊の大きい町にて、宿屋には豊田屋旅館外數軒あり。人口五千五百。

二、梨木道　大洞迄三里弱

新田郡大間々町より、渡良瀬川に沿ひ、足尾街道を行くこと一里餘にして上神梅に出づ、道の左に梨木鑛泉案内の繪看板立てり、道標の指示する所に從ひ、左の小徑を登り、行くこと一二町にして道は一度降り、二度のぼる、小流を横ぎり、桑畑の間をゆくこと一里ばかりにして梨木鑛泉に達す、梨木は數戸の小村なれども、梨木館は三層の高樓にして、浴客二百を宿せしむべし、外に清水屋あり。微温の鑛泉を沸して浴せしむ、費用低廉、四時浴客絶えず、初夏は殊に雜沓す。

梨木は溪間の窪地にあり、北微西に赤城山を仰ぐべし、地藏嶽を中央に、長七郎、荒山、薄紅の曙光を浴びて、黒樹の間に聳ゆ、山容崇美なり。

梨木川に沿ひ、行くこと數町、石切場あり、梨木川の溪谷を捨てゝ、急坂を攀づれば、立岩あり、山頂稍平なる草地を左に下れば小松原に入る、山の南麓板橋村より來る小徑に合す、道を右に採りて、前面に長七郎山を仰ぎつゝ上る、松點々、紅、紫、黄、花を混へて、軟草綠輝く、左に低く、放牧の牛馬、白き河原に悠遊せる、溪谷を下瞰しつつ馬の背なす山稜を裾る、甚だ險峻ならず。左右は輻射溪を距てゝ、躑躅ヶ峯と長七郎つゞきの尾根に對し、顧れば發達せる裾は緩き傾斜をなして、關東の平野に連れるを見る、利根川帶の如く白し。

立石より一里許にして、三十分程の稍急なる坂を上れば、息未だ喘がざるに、茶の木畑の峠に達す、茶の木畑峠は外輪山の一角にして、長七郎の峯、東南より更に西に彎曲して、外輪山に接合せるもの、西に壁上を傳へば銚子の伽藍の巖頭に立つべし。

峠を下ること三分、道は長七郎の腹部を横に傳ふ、長七郎の南面せる傾斜は、地藏ヶ嶽の東南面

に等しく、人體に見るが如き、緩き圓味ある曲線、恍惚たらしむるものあり。此邊一帶の緩傾斜地に、水楢の疎らに立てる、樹容愛すべし、粕川の水路の崩れを見て、右すれば小沼の落口に出づ、小沼の渚を傳ふもよく、中山の中腹をゆくもよし、數町にして地藏ヶ嶽の下、小沼と血の池との間の平地に出づべし、こゝより八丁を下れば猪谷旅館の前に出づ。

八丁の下り口に石標あり、右湯の澤大胡道、左瀧澤梨木道と書けり、八丁を地藏の裾にそひて下れば、右は千日ヶ澤に出づる谷なり、左に地藏ヶ嶽、黑檜山は前面に聳えたり、黑檜の下に大沼見え、大沼の際に赤城神社の森を見る、道は炭燒がまの跡に出づ、伐採せし樹の株點々して、落漠たる內に開豁なる一種の趣あり、道は密樹の間に入る、牛馬の道錯綜せるも、道を惑はすに至らず、三丁にして猪谷入口の木柵に達すべし。

三、大胡道　大洞迄五里

大胡町は前橋市より東に二里、伊勢崎町より北三里の地に在り、前橋より馬車あり、赤城山の物資供給地にして、夏期は日毎駄馬通へり、町は相當の生活をなし、信濃屋外二軒の宿屋あり。

大胡より東一里苗ヶ島をへて、更に二里大間々町に達す。苗ヶ島より三夜澤にゆくが順路の如きも、大胡より直に三夜澤にゆけば二里、苗ヶ島を經てゆくよりも十數町近し。

三夜澤は、縣社赤城神社の鎭座まします地なり、登山路より左に入りて社あり、大貴己命を祭る。

三夜澤より荒山裾の牧場の柵に沿ひて登れば、道やゝ急なれども湯ノ澤道より十町餘近し、荒山の裾を、右に輕井澤を下瞰し、棧道をゆく、風當り強きを以て、冬期風雪の日は多少危險なり、輕井澤峠の下に炭燒小屋あり、輕井澤峠は、石磊々たり、峠をのぼれば荒山より前淺間の方に沿ひゆけば、地藏爆裂火口の上に出づべし、峠より直に下れば、小流と小林を越へて血の池平に出づ、此邊蕭條たる林容、晩秋の候殊によし、新坂平の初夏と相對比せば、全く別個の山の如き趣なり。地藏の裾をつきて八丁の右に出づれば梨木瀧澤より

來れる道と合す。

湯ノ澤道

三夜澤より道を右にとれば湯ノ澤道なり、湯ノ澤には鑛泉あり、鑛泉宿熊野屋外二軒あり、溪相迫り、盛夏雲湧き、黑き迄繁れる山の樹の豪雨に打たるゝなど、山間の宿らしくしてよけれど、此頃は梨木に客を奪はれて、寂れゆくが如し。湯ノ澤より牛石峠に出づ、左は太子澤にのぞみ、道急なれども、馬通ふ程度なれば知れたものなり、牛石は峠の上の方にて、今はその石の下を通らず。牛石峠より左に外輪山に沿ひ、斜に下りて輕井澤峠より來る道に合して八丁に至る。湯ノ澤より大洞迄二里なり。

瀧澤道

瀧澤に出づるには、三夜澤より右折粕川の谷につきて上る、川を渡ること三度、廿町許にして瀧澤鑛泉あり、小屋の如きあれども、宿屋としての設備なし、此邊の農民逗留湯治せるもの〻外浴客なきが如し、鑛泉より五六町にして、瀧澤不動堂あり、堂守の僧あり、香華たへず。不動湯は更に十町ばかり溪流に沿ふて上る、之より上流の溪の姿幽邃なり、瀑は高さ四十尺餘、小沼より落つる水なり、蓋し山中の壯觀なり。

不動堂より湯ノ澤へ西十丁、東すれば梨木へ一里半也、梨木へゆく道につき、數町ゆき、左の山に登りて、三十分程ゆけば躑躅ヶ峯なり、道は馬背をゆくが如し、躑躅ヶ峯は、古來嶮岨を以て名あり、赤城神社の御託宣により參詣者は此道をとらざりし由なり、山中第一の嶮といへど實は左程にあらず、躑躅ヶ峯は粕川の谿を距てゝ湯ノ道に對す、銚子の伽籃の斷崖、秋ならば紅葉、夏ならば綠滴る、頗る偉觀なり、此道は銚子伽籃と茶ノ木畑峠との間に出づ、茶ノ木畑峠にて梨木道と合す。小沼をへて大洞まで二里半なり。

瀧澤道、湯ノ澤道を七月頃上れば、山百合道傍に芳香を放ち、崖にかゝれる純白の大輪は山姫の飾しの花に似つかはしく、綠の葉の中よりのぞけるは、白と綠の調子柔かにつゝましやかに見ゆ。

四、前橋（小暮）道　大洞迄約七里

前橋停車場より、前橋の街を北に縱斷し、師範

學校前より桑畑の間をゆく、赤城山は美しき裾を長くひきて前面に立つ、中央に尤も著きは鍋割嶽にして、右に荒山、左に鈴ヶ峯を見る、地藏嶽黑檜山は鍋割の蔭にかくれて見えず、桃の木橋を渡り、細井の村を過れば足やうやく仰ぐ、道は桑畑或は雜木林の間に低くえぐらる、處々老松の並木めきて立てり、左に榛名山を遙に望む、夕なれば渉間の煙美しく、夜なれば雜木林の間を星の光透く、時澤小學校の前を通り小暮に至る、前橋市より二里、細井村はその中間に當る。

小暮は山麓の小村、三等郵便局あり、赤城山の郵便は此局に取扱はる、電報も此よりは別配達に非れば普通郵便と等しく配達さる、郵便は前橋との間に二回、赤城山には冬期に非れば大抵隔日也、旅舍あり綠屋といふ。

小暮より松原に入る、道の右林間を開きて桃畑となせる處あり、此邊より松原の黑きを下にして、赤城山の姿美なり、林間松露多しと、右の窪に灌漑用の池あり、大松を出づれば、小松原に入る、漸く山路に入るの思あり、然も傾斜尙緩なり、初夏なれば路に花菖蒲咲けり。小暮より一里、「原の小屋」あり、茶菓あり憩ふことを得。小屋より數町にして白川を渡る。近く植林をなす、右は白川の谷をへだてゝ、鍋割の峯をはらんとし、左は硯石の連嶺低く走る。路の左の落葉松を植ゑし小林あり、牧場の留木關門をなして道をさへぎる。鍋割岳と硯石山の間、やゝ廣き回地をなせり、顧れば前橋の市街は遠く輝き、高原松點々、景趣雄大なり、牛馬道に送迎し再び白川の一支流を渉りて、箕ノ輪の村に入る。

箕ノ輪は前橋より五里半、大洞まで一里半あり、人家十數、養蠶、養雞、蠶紙貯藏、牧牛等を業とす、旅舍なけれども、已むなくむば懇請して宿ることを得ん、然れども地藏谷樺澤旅館は箕ノ輪より半里にすぎず。

箕ノ輪より道は漸く急にして栗、楢、稀に白樺を混へ、新綠、黃葉共に美なり、十數町にして右に硫黃山の廢屋あり、昔時（五十年前）まではここより右に、地獄谷に沿ひてテンヤ坂を登り、小沼平に出でゝ大洞にゆきしも、今は道壞れて交

通稀なり。路傍に「一杯清水」あり清泉琅々喉を濕すべし。こゝより二三町道の樺澤鑛泉の木標立てり、道より右折三町許にして、地獄谷の湯（地藏湯）あり、鑛泉宿一軒、（鑛泉湧出するに非ずして不純硫黄鑛を投入せしに過ぎずと、震災豫防調査會報告）あり、赤ヅロより流下する溪流をわたり新坂上迄三十分を費す、道急峻、小暮道にては唯一最險なれども、馬を通ずるなれば、他の高山性の山に比すれば論ずるに足らず、道によらず直に登攀するも亦難事に非ず。

新坂を上り盡せば新坂平なり、地藏の熔岩流外輪山姥子坂に阻められて、此に平を作りしもの、疎に生ひし水楢の樹容愛すべく、牛遊ぶ若草の原、六月なれば馬酔木の花赤きが點綴せる、赤城山初夏の景趣はこゝにつきたり。右すれば地藏に登るべく、左すれば姥子、鍬柄より澁川方面にゆくべし、顧れば秩父より碓氷に續きし山々に、晴れたれば富士、八ヶ岳を見るべし、近く黒く峻なるは荒山也、北に原をゆけば澁川より來る道に合す、山の峽に見ゆる遠山は、武尊山なり、初冬雪の皺美し、沼より吹く風冷く、道は稍下る、此邊白樺の樹幹銀の如きあり、七八町にして道分る、右に下れば大洞へ十町、左すれば沼尻迄六丁、「沼尻分れ」と稱す、水標立つ。沼田方面に行く者は沼尻に出で、足尾桐生方面に至る者は大洞を過ぐべし。

坂を下り小溪をこゆること二、四本楢牧場に出づ、右に地藏の傾斜を負ひ、前面に高く黒檜聳ゆ、大沼は水楢の林をこえて湛え、五輪峠、藥師岳の外輪山を繞らす。原の中央に楢二本あり、樹幹四、故に四本楢と稱す、馬牛の踏みし道縦横、本道と分ち難し、道につき少しゆけば、大なる白樺の老樹あり、枝四方に張る、矮樹の間をゆく、道やゝ壞えたり、沼田道と合す左に水楢の樹間の間に低く大沼の漣波寄す、棚をゆくが如し、五丁許にして道の左に右の鳥居あり、赤城神社の老樅黒く天をつき、四周石垣をめぐらしたり。道は猪谷旅館前をすぎて、右に坂を上れば、小沼より梨木、湯ノ澤、大胡、伊勢崎方面に出づべく、直進すれば鳥居峠より水沼、柏山方面に下るべし。

大洞は富士見村の大字なれども、赤城神社と猪谷旅館との二戸あるのみ、前橋より六里半ばかり、普通七里と稱す、上り七時間、下り五時間餘を費せば可なり。

五、澁川道　大洞迄五里

高崎、前橋より、伊香保行きの電車に乘れば、三四十分にして澁川に至る、此間五里許なり。澁川より伊香保迄二里、電車あり、中ノ條、四萬方面及沼田行きの馬車鐵道は此所を起點とす。

澁川より赤城山を眺むれば、右端に鍋割、荒山、地藏之につゞき、中央は低くして、左端に鈴ヶ峯尤も高し。

澁川を東に、利根川を渡り、八崎をへて、溝呂木迄一里半、溝呂木より裾野の松原を行くこと二十町、道は林を出で灌木叢の間を上る、少許にして、麓の野は廣く、眼界開け、顧れば近く榛名山と相對す、山の背を徐々に上りゆけば、一里にして六道の辻に出づ、道は比較的平坦にして幅廣く、迷ふ憂なし、路傍樹蔭なく、時に孤松の丘上谷合に立てるを見る。

六道の辻には、六角の石に地藏尊六面を刻したる、高さ二尺ばかりの標立てり、道五方に分れ、右(南)すれば箕ノ輪、左(北西)すれば深山、やゝ戻るが如く南西に向へば石井村に出づ、東に向ひ登りゆけば即ち一里半にして大洞に至る、六道の辻に立ちて、赤城諸峯を望むに、右に踞れるは鍋割、荒山は途の小丘の上に僅にその頂をあらはし、左に鈴窪を距てゝ鈴ヶ峯そびへ、地藏は姥子にかくれ、黒檜は鍬柄に隱れて見えず。

六道の辻より、猶二十分ばかりの上りは緩なり、姥子峠にかゝる坂はやゝ急峻にして、三十分を費せば頂に至る、更に十分姥子の峯をまわれば、下に新坂平を見、地藏嶽の偉大なる山塊と相對すべし、黒檜岳は大沼をへだてゝ、聳へたり、春もよし、秋もよし、此處眺望よし、坂の降り口に、石の積みたる內に、馬頭觀音、地藏菩薩、庄塚の嫗の石像、壞えて立てり、元祿の年號僅に見ゆ。

峠を下り新坂平に出で前橋峠に合す、道より大洞迄二十町ばかり三十分を費す。霧深き日、又は日暮れたる時は、よく迷ふ人ありて、新坂平を横ぎ

り、更に地藏嶽に上るとあり、六道の辻よりは、山の背を高き處と高き處、來る爲、一度下り又上りて、不知不識に地藏の頂に至るなるべし、又六道の辻邊よりは牛馬の道ありて、多少分りにくき樣なれども之も夜か濃霧の日に非れば迷ふとなし。

深山道　大洞迄三里

深山は澁川より三里半、敷島村にあり、澁川より沼田行きの馬車に乘り、長坂にて下車し、津久田をへて、長井、小川田（南雲）より沼尾川に沿うて上れば、津久田より一里半にして達す、深山には宿屋なし、天狗の社ありて、懇請すれば堂に宿せしむべけれど、南雲迄ゆきて宿るを可とす。

天狗社は村の最も上にあり、社の石段をのぼり、社後をゆく、萱野をわけて、山の背をゆく、勾配急ならず、一望萱野にして、高原風の景色心地よし、行くこと一里ばかりにして、道やゝのぼる、左に鈴ヶ峯の西、鍬柄峠よりつゞく、三個の小峯あり、之等の山裾をめぐりて上る、左前方に鈴ヶ峯屹立す、道漸く急なり、鍬柄峠を越へ、前橋道に合す、鍬柄峠は姥子峠の北につゞく、姥子よりやゝ高し、峠の上より大洞迄二十町餘、姥子峠より遙に遠し、前橋道より左方に見ゆる尖峯之なり。

深山よりする道は此外三あり、沼尾川に沿ひて溪流を行くことは殆んど不能なるも、大體に於て沼尾川に平行して、出張山の麓をめぐりて、沼尻に出づるものを、最も普通とするが如し。又前にのべし道の左右の谷にも道ありて、一は鈴窪より鍬柄峠に出で、他は六道の辻へ出づるもの也、四つの內第一のもの尤も近きが如きも、何れも里程三里にみたざるべし。

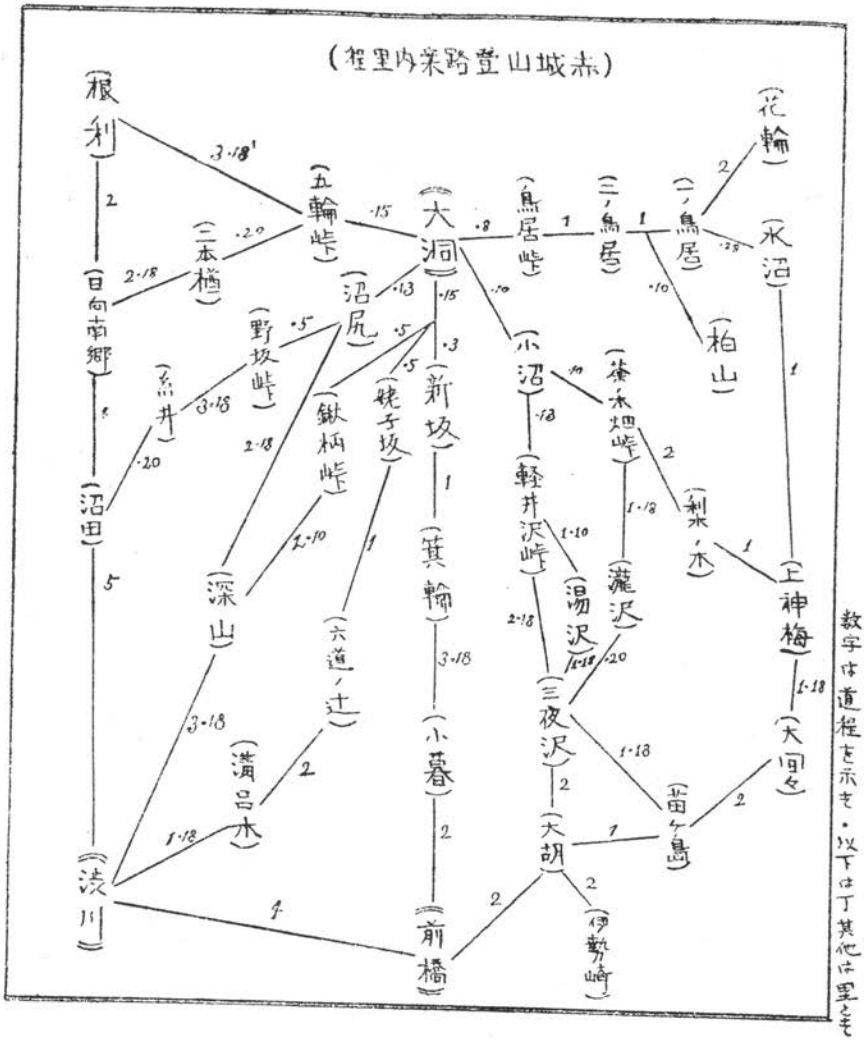
六、沼田道　大洞迄六里

沼田は利根郡々役所の所在地にして、中學校もあり、前橋より九里、澁川より四里は馬車の便あり。

沼田より赤城山を望めば、利根川岸の上に直に美しき裾を左右に長くひきて、聳ゆる姿立派なり、鈴ヶ峯最も高く、船ヶ鼻近く舟形をなせり。

沼田より上沼須迄十五丁、上沼須より道は下りて、利根川を渡り糸井をへて、裾野をゆく、秋なれば尾花萱女郎花道に亂れたり、越後境の山々を

（赤城山登路案内里程）



数字は道程を示す・以下は丁其他は里とも

背になが(ムコツ)めつゝ上る、草津白根より清水越、三國峠の邊越後境の連山は、早く雪ふり、晩く雪消ゆれば、春に霞める姿も、秋空にきわだつ雪の皺も殊に美し。糸井より長者久保の南を通り、東南に向ひて、裾野の草わけば、二里許にして、道は迫り、山峽に入る。右は船ヶ鼻つゞきの脈にして、左は藥師、古五輪より出づる脈なり。更にゆくこと一里ならずして、左に二本檜牧場に通ずる道あり、木標、樹の繁り小暗き方に立つ。此道をゆけば十町にして二本檜に出づべし。

分れ道より、道は上りとなり、草山の急坂を攀づること、十町餘にして、右に頂圓き小丘あり、右すれば深山にゆく丘の裾を廻りて、二三町上れば、野坂峠に出づ、湖は脚下に展開し、湖畔の辨天の小祠、赤城神社の森の根方に見ゆ、峠は藥師岳の肩を通ず、南に直下すれば、沼尻迄五町なり、沼尻に旅館青木屋あり、沼尻より大洞迄十三町、湖畔をゆくべし。野坂峠より湖畔に下り、左にまわり沼向(ムコウ)を五輪峠の下、小鳥ヶ島の背後をゆけば大洞迄二十町なり。

沼田道は初夏六月の候、鈴蘭多く咲けり、裾野ゆく緩き勾配と、豁く雄大なる眺望は、赤城の趣によく添ひたり。

七、五輪峠道　日向南郷より三里

沼田より片品川に沿ひて、沼田街道を東に二里、高平、平出をへて日向南郷に至る、平出より川を渡りて輪組より青木に出づるも可なり。日向南郷は赤城根村にあり、東すれば三里、黒檜山の北麓、根利に通ず。根利より赤城山に上るには、山の背を傳ひて、小黒檜の肩に出づるもよく、花見ヶ原方面より黒檜の峯に出づるもよし。日向南郷より、沼田街道を北に進めば、老神、追貝、小川、戸倉をへて、尾瀬より會津街道にゆくべし、小川より日光湯本に通ず、故に五輪峠の道は、東京より直にゆく人には用なけれど、赤城山より更に尾瀬沼、或は菅沼をへて湯本にゆき、白根山に登るには此道によらざるべからず。日向南郷より、棚道を青木迄七八丁、砂川をへて鷹の巣迄一里餘なり、鷹の巣より大洞迄二里、二本檜牧場番小屋の外に人家なし、道は溪流を渡り、七重なす、

山の裾を縫ひゆくなり、初秋の風吹きそめし頃は、桔梗、尾花、我母香、秋の七草優雅に、重なる山の果に、遠く燧嶽を見るべし、二本楢よりは牛馬の道縦横にして、注意せざれば道を失する恐れあり、(此邊五月半ばより、厳萌えて、遠近の人々厳取りに集ふ)五輪の麓の谷は樹木茂りて小暗く、苔に濕りし道、羊齒の類、赤城登山の他の道には見得ざる趣あり、五輪峠は黒檜の嶽の直下にして、湖をへだてゝ地藏嶽に對し、脚下に小鳥ヶ島を見る、顧れば近く武尊山魁偉豪の姿雄々しく立てり、至佛、燧、より遠く會津駒ヶ岳を見る、日光白根は孫黒檜の上に半身を出だせり、五輪峠を下れば、大洞迄十數町なり。二本楢より古五輪を越へて沼尻に出づる道あり。(關口泰)

奥仙丈嶽に就て

九年二號の木暮氏の「秩父の奥山」にある奥千丈嶽の記事中に、「奥千丈と云ふ名に敬意を表して、其區域と思はれる北部に二千六百米突の高峯があるのを幸と、自分は是に奥仙丈嶽の名を與へて、此名高き總括的山名の代表者としたのである」と斷定されてゐるのに就いて、私は少し云爲したい。

木暮氏の所謂二千六百米突の高峯と云ふは、國師嶽の三角點の在る所より東南で、花崗岩の巨岩が多く露出し、崩壞した花崗岩の細砂に掩はれ、偃松岩蒿蘭岩鏡苔桃などの有る高所だと信ずる。私は此高所を國師嶽の東南の一隆起と思ふのである。概して三角點は山頂に置かれては有るが、必ずしもさう許りではない。山頂と餘り高さに差のない、展望の好い所にある事が往々ある。國師嶽の三角點も此類例ではなからうかと思ふ。

八ヶ嶽火口壁の主峯赤嶽にも、三角點のある所より四五米突高い所が、少し離れた西々南にある。他の山岳にも是に類する例が多からうと思ふ。梓山川浦の登路、甲斐の北國境の連嶺上より見たる國師嶽の山容は、東南の高所をどうしても別峯とは思へなかつた。

然して花崗岩の山の頂きは、概して廣大である。

甲斐の鳳凰山地藏嶽金峯山等の山頂は、かなり廣く且大なるものである。同じ岩石に成り、二千五百米突以上の標高ある國師嶽の山頂が、三角點のある所の隆起のみでは、餘りに狹少貧弱ではなからうかと思はれる。斯る狹少なる山頂は、花崗岩の山として有り得べからざる事と私は思ふ。是等の理由に依りて、木暮氏の所謂二千六百米突の高峰奥千丈嶽を、國師嶽の一隆起であると私は主張するのである。山麓の三富村でも、東南の高所を別峯としてゐない、國師嶽の一隆起と云つてゐる。僅かなる距離を以て隔りたる東西の二高所を別峯と見るは、少し無理ではなからうか。私は東西の二高所によつて、國師嶽の山頂は成つてゐるものと信じて疑はぬのである。

木暮氏は國師嶽の東西の二高所に就いて「立山の淨土龍王二山の關係に能く似てゐるから」と云はれてゐるが、立山は火山である、噴出岩の山骨たる國師嶽とは、其成生を異にしてゐる。山頂の形狀の類似に由つて、成生の全く異る火山と噴出岩の山を同じやうに見らるゝは、果して當を得たものであらうか、私は疑はざるを得ぬ。

山麓三富村で云ふ奥千丈嶽は、木暮氏所謂二千六百米突の高峯、私の云ふ國師嶽の東南の隆起より山梁を續けて、其亦東南にピラミット形の尨大なる山容で、國境の連嶺より稍離隔して聳立して居る、金峯山圖幅の二千四百五米突の山岳がそれである。滿山樹木に掩はれて、黑絲威の武者振嚴しく、所謂名高き奥千丈の名に恥ぢざる山容である。此山岳の背後西北の山梁は、國師嶽に連續して居るは、前に書いた如くである。北麓は西澤御料地の山岳に連續し、東北の山梁及び東麓は、蘆毛御料地の山岳即ち蘆毛山脈に接續して居るのである。

前面東南の山梁及び南麓東部は、乾德山の背後に接續し、南麓の一部及び西南の山梁は、姥ノカドヤ亦ゴトメキの舊稱ある西保山德和山柚口山の山頂が集合して、殆んど一の集合山頂をなして居る所に連續し、其連續する所は鞍狀をして居る。西麓は國師嶽の南麓と相接合して居るのである。

金峯山圖幅の西保村奥千丈御料地は、奥千丈嶽の西麓及び西偏の南麓と、西保山をさう云つてゐる。西保村で云ふ北奥千丈西奥千丈は、奥千丈嶽の西麓西偏の南麓である。此以外に奥千丈御料地に前山と稱す所があるが、西保山と同山の南麓らしいのである。此方面に燒山棚澤地獄澤一つ木等の稱呼がある。然して奥千丈嶽の西南麓より出づる溪流が三ある。一は三繰平より流れ出づる荒川の溪流に注入し、二は西保川琴川の源である。

重複の嫌ひがあるけれど、木暮氏の所謂二千六百米突の高峯に奥千丈嶽なる名を附す事になると、同名の山岳が同じやうな所に二つ有る事になり、しかも共に其山梁を續けて居るのである。

金峯山圖幅の奥千丈嶽の登路は、國師嶽の登路と同じく、國師嶽に登山して山梁を傳ひて登山するか、西保村の字鹽平（だひら）より湯澤平柳平を經て姥ノカドヤに出で丶登山するかの二登路がある、諏訪村柚口よりの登路は、西保村登路の柳平で道が合するのである。私は奥千丈嶽に登山した事はないが、甲斐の北國境の連嶺の一部を旅行した時の展望と、金峯山に御嶽新道から登山して、下山路を諏訪村柚口にとつて、乙女坂を越えて、西保川の溪谷を挾んで、水晶と重石を採掘して居る西保村倉澤の鳳鑛山に出で、琴川に斷續的に沿つて下つた時と、山麓三富村で聞き得た處を綜合して、誤りのないと思ふ所を記述したのである。鳳鑛山の所在地は、西保村の最北で、鑛山の始業より部落が出來たので、住民は鑛山に關係ある者のみで、戸數は四十戸許りである。

甲斐の北國境に連立する山岳中で、三富村即ち川浦を根據として登山して好いと思ふ山岳は、笠取山より金峯山迄の連嶺である。川浦登路では、鹽山驛か諏訪村の窪平で、準備が出來る。登山用具や糧食を送るには、日々川浦より木炭を運び來る戻り馬に托せば、其日の中に根據地に屆く。川浦には川浦温泉山縣館が宿泊に適するのみで、是以北には宿泊に足るやうな旅館はない。雁坂峠附近で糧食の補充が出來るのは、峠の澤の製板所である。茲には立派な建物が五六あり、多くの人夫を使用してゐるから、米味噌醬油鑵詰位は得られ

る、無心を云へば泊めも呉やうと思ふ。さうして井戸の澤の下に完全した二間に三間許りの小屋がある。

川浦登路では、三富村字天科の廣瀬正太郎と云ふのが山に詳しい。笠取山から國師嶽迄は掌を指す如く、溪流の名などは殆んど暗んじて居る。笠取山より金峯山迄の縦走は、六日位で出來ると思ふ。木暮氏の秩父の奥山にある、破風山に偃松があつたと書かれて居るが、自分には見當らなかつた。アスナラウを誤認されたのではあるまいかと思ふ。（小佐野逕々）

甲斐北國境山脈に就て

九年三號の木暮氏の「甲信武國境縦斷を讀む」の一文に對して、私の紀行の誤りや、文字の誤りを訂し、なほ紀行に書き洩らした處を茲に記述したのである。

袴腰山は袴腰で、私の袴越と書いたのは、旅行に携行した手帖に何心なく書いたのを、國志も見ないで其儘用ひた誤りである。然して三峯圖幅の古裕山が三富村で云ふ袴腰山で、私の古裕山の西に延びた尾根を袴腰と云ふとかいたのは亦誤りである。三富村で云ふ前葡萄奥葡萄は、古裕澤と水晶谷であると思はれる。雁坂峠の一杯水は、私等の旅行した時は、旱り續きであつた爲めか更に水氣のない迄に枯れて居つた。三峯圖幅の二千八十二米突の雁坂峠に三角點があつたと紀行にかいたのは私の誤りである。雁坂嶺と三富村で云ふ二千二百八十九米突の隆起に三角點があつたのである。私の紀行に對しての木暮氏の注意に據つて手控へを見て、餘りなる馬鹿げた誤謬に自ら屹驚した。茲に私等の縦斷の經路と時間を記して誤りを訂正する。雁坂峠山頂七月三十日午後零時十五分、雁坂嶺三角點午後一時五十分、午後二時十五分雁坂嶺を下山し、ナカノ澤の鞍部に出で、やがて、ナメラ澤のせりに登山したるは午後四時五分、是が東破風である。東破風より再び鞍部を傳ひ、ヌク澤のせり即ち西破風の三角點着は午後四時四十五分であつた。西破風を下山し、國境の切明を行き

しも露營の必要より横路を辿り國境切開きを西南に離れ、標高約二千百六十米突の地に下つた時一溪流を得たのである。是が鷄冠谷の溪流であつた。金鑛の痕跡は溪流を隔てた溪流の西で、約十米突許り高き所である。川浦温泉の鷄冠谷迄行程約七里であつた。鷄冠谷の露營地出發七月三十一日午前六時廿分。斜面を國境の切明に出で、鷄冠の大岩即ち金峯山圖幅の二千百十二米突の鷄冠山に登り、鞍部を歩して金峯山圖幅の二千四百六十八米突の山岳で、木賊山雲切山の稱があつて、三富村で鷄冠谷のせりと呼稱する山の頂きに着したのは午前八時三十分。三角點は三等であつた。甲武信嶽の山頂午前十時二十五分。金峯山圖幅二三七九米突の三角點着午後一時五十分。甲武信嶽と國師嶽連結する長き山梁の西北に轉向せんとする處を北に急坂路を約二百二十米突下り、信州南佐久郡梓山村落葉松窪の溪流の畔に着したのは午後三時三十分であつた。此日の行程は約三里弱と思はれた。是迄記述した經路と費した時に據つて、私等の縱斷路が明かになつたと思ふ。然して斯の如き誤謬の多い紀行文を九年三號に敢へて書いた私の輕忽は、紀行を書く時に三峯金峯山圖幅を碌々見なかつたのが因をなしたのであることを茲に告白して置く。袴腰山から流出する溪流の流末を廣河原澤と云ふが、其名は少し大袈裟に過ぎると思はれた。廣瀨ではヤム川澤の清冽なる流れを用ひて居る。雁坂峠の山麓にバラ平なる廣き平地がある、開墾すれば廣瀨に稍似たる小部落と耕地が出來ると思はれるが、相憎開墾制限地であるさうだ。クド澤の源は峠の澤と云つて雁坂峠より流出し、クツキリ澤ナカノ澤ナメラ澤タナ澤ヌク澤等の小溪流を集合して、遂て西澤東澤が合流して子酉川となつた笛吹川の上流に注入するのである。峠の澤がクド澤となる處が魚止めと言つて、是より上流には魚が生息しないさうである。鷄冠谷溪流は東澤に入るものと思惟せられる。奥千丈とかいたのは別に意味はない。されど我が縣下では奥千丈の文字を用ゆるが多くして、國志の文字の奥仙丈を殆んど用ひないことを茲に記しく置く。

金峯山圖幅の鷄冠山は、圖幅では國境より餘程

離隔して居るやうに思はれるが、私は稍南方に突出して居るが國境上に峙立するものと思ふ。赤ッバ尾根より見たる雁坂嶺破風山鶏冠山の三山は、殆んど直線上に並列して居つた。國境山脈の分水嶺の背梁踏破中、鶏冠谷に下りし時に國境より離れたのみで、翌日斜面を登攀して國境の背梁に出でゝ、鶏冠山の山頂を踏破したのである。私は鶏冠山も國境上に連立する山岳の一であると信ずるのである。此の鶏冠山は小黒金山の背後で稍西に、木暮氏の所謂鮫の歯のやうに聳立してゐるのが勝沼澤から見える。（小佐野迢々）

鼷鼠談山

○本誌九年二號に載せた「秩父の奥山」の記事中、奥仙岳に就ての異議が、山梨山岳會員小佐野迢々君から提出されたので、自分は彼の記事の遺漏を補ひながら君に答へることにした。

先づ議論の道筋を簡明にする方法として、始に君と自分との論據の異なる主要點を擧げて見ると、君は（一）國師岳を主とし（二）三富村で聞き得た所を基として立論してゐるやうであるが、自分は（一）奥仙丈山を主とし（二）甲斐國志其他を基としてゐるものであることを特記して置く必要がある。議論の分岐點は是處に有ると思ふから。序でに尚ほ一言して置き度いことは、例へば日本南アルプスの惡澤岳のやうに、これまで絶えて記載された事の無い山ならば格別、既に立派な記錄を有してゐる山を取り扱ふ際には、是等の記錄を閑却してはならぬことは勿論であらう。君は從來世に知られた甲斐國志の記事に對してさへ、一向無頓着の様子であるから特に注意を促して置くのである。

國師岳を主とするか或は奥仙丈山を主とするかに依りて、結果に大なる相違を來すのは言ふ迄も無い事であるが、此二山の場合では殊にそれが甚しいので、君の如く國師岳を主とすれば、奥仙丈岳は辛うじて國師岳の一の尾根の末端に餘喘を保つに過ぎない事となるし、自分の如く奥仙丈山を主とすれば、國師岳は當然奥仙丈山のうちの一峯

として其存在を許される事になるのである。國師岳を主とす可きか奥仙丈山を主とす可き乎、その孰れを選ぶ可きかは各自の心次第であるが、之を選ぶ際に充分注意して、有効に其選擇權を使用することは、國師岳に對しても又奥仙丈山に對しても、忠實なる選擇者である爲には必要なる行爲であらうと思ふ。自分は甲斐國志、甲斐叢記、山梨鑑山梨縣市郡村誌、夢窓國師語錄等に相談して、終に奥仙丈山を選んで主としたのである。そして君は同じ樣にして——といふ外、何に據られたかを知らぬ自分には、それと言ひ顯はしやうがない。然し君にも根據とする豐富な材料があつての事と思ふから、三富村で聞き得たといふ奥仙丈に關係ある事柄などは、恐らく其中の尤も貧弱な資料なのであらう、夫を既記の如く（二）に根本資料たるが如く記載するを餘儀なくさせたのは、其豐富なる材料を洩さなかつた君の罪である——國師岳を選んだのであらう。斯ういふと君は國師岳を主としたとも又選んだとも書いたことは無いと言はれるかも知れないが、奥千丈岳（仙丈トハ千丈ノ

義カと甲斐國志にもあるから、自分は奥仙丈を奥千丈と書くことに就て別に異議は無い）を君の所謂國師岳の一峯が漸次低下した尾根の末端に据えた所から察すれば、國師岳を主とした者と認めても差支ない事と思ふ。

これから順序として自分が奥仙丈山を主とし、國師岳を特に奥仙丈山の中の一峯に限られた名稱であると斷定した理由を陳べて、問題を解決した後、自分の記事に關係ある君の文の各項に就て答へることにする。

三繋平に立つて展望する迄も無く、試に金峯山圖幅を披いて見れば、此山上の低平地を擁して、西と東と南とに高度の差著しからざる峯が、而も近距離に稍や二等邊三角形を成して聳えてゐるのを見るであらう。東西の二峯が底邊の兩端に在つて、南の峯が角頂に位してゐる。高さは西峯が最も低く、三繋平から約二十米突、東峯はこれより三十米突餘も高く、南峯は最も傑出して、三繋平から六十餘米突の高さにあるとは、地圖が明に之を示してゐる。そして言ふ迄もなく南の峯は主峯であ

る。故に若し國師岳が此山塊の主人公であるならば、此峯は正に其絶巓であつて、國師岳の一隆起などゝ稱す可きものではない。反對に若し奥仙丈山が主人公であるならば、山塊の最高壇たる此峯を捧げて、奥仙丈岳の鎭座の所とするに何の不思議があらう。元より此三の頂は密接に連續した廣大なる山塊の上に立つた分岐峯であるとは云ひながら、相當の理由がある以上は、各個に命名したからとて毫も差支はない筈だ。然らば國師岳と奥仙丈山とは、孰れが此山塊の主人公たる可き者であるか、これを選擇する前に豫め二山の資格を調査する必要が有る。自分は「秩父の奥山」と題する文中、奥仙丈岳の條に於て、甲斐國志に據り、「奥仙丈山は、西は荒川東は笛吹川、南は兄川を限りて帶那山に至り、北は三鬱平を境とした大山塊の總稱である」ことを陳べた。これは餘程國師岳に對して讓歩した推定であつて、甲武信岳や雁坂峠まで奥仙丈山の中に含ませることは如何あらうと思ふが、前記の山塊が奥仙丈山の主脳であることは、殆んど疑を容れる餘地が無い。更に甲斐叢記笛吹川の條には、「奥仙丈山（本州の極北也）の東麓なる西澤に發源せり」、とある。山梨鑑國司ヶ岳の條には、「東山梨郡三富村ノ北ニアリ、山ノ極北甲信武三州交界ノ處ヲ三國山ト唱フ、東ハ雁坂峠ニ西ハ金峯山ニ連ル、此邊ヲ總稱シテ奥仙丈ト云フ、」とある。同書の笛吹川の條にも、「東山梨郡奥仙丈ヶ岳ノ東ヨリ發シ」、とある。（序に曰ふ、自分は秩父の奥山の記事中、奥仙丈岳の條に「又子酉川の東澤西澤なども、當然奥仙丈の中より發源すと特記されなければならない筈であるのに、反て西澤を冠して西澤御林山の名がある位である」と威張つて書いたが、甲斐國志にこそ無けれ、甲斐叢記山梨鑑共に前記の如く、笛吹川が奥仙丈の東より發源することを明瞭に記載してあるから、上に抄出した句はあの文の中から削除することにして、不穿鑿の譏を免かれたいと思ふ）。又山梨縣市郡村誌三富村の條には、「奥仙丈岳、本村ノ極北ニシテ、國司嶽ノ西ニ綿亘セル高山ナリ、國司嶽ハ一ニ西澤御林山ト云ヒ、總テ奥仙丈ト稱ス」、とある。如上の記事は一として前記の山塊が奥仙丈山である

◎雜　錄　鼯鼠談山

ことを強く證明してゐない者は無い。そして是等の著書は孰れも甲州人の手に依て成つたものである。甲州の古圖に就ては自分は何とも言はなかつたが、享保以後の出版に係る古圖を見ると、此山塊に相當するらしい位置の山に、奥千丈山又は奥仙丈岳の名を見ることはあつても、國司岳又は國師岳の名は自分の知つてゐる限りでは、終に其位置に見出せない代りに、反て甲信武三國の境に記載してあることに就ては、曾て陳べた通りである。茲に唯一の除外例と見る可きは、享保繪圖（後出）の下圖である。それには奥仙丈の名が見えないで、珍らしくも國師岳の名が國師岳として記してあるが、金峯山と雁坂峠との距離が比較を失して短いので、位置が東に寄り過ぎて殆んど甲信武三國の境に近い。後の人が國師岳を三國の境に聳立せる山として取扱ふやうになつたのは、必ずや此圖を基としたものであると斷言することが出來る。一言にして盡すと、甲州の地誌や地圖の類はすべて彼山塊を奥仙丈山として記載してゐるのである。

今度は國師岳を調べて見る。山梨鑑又は山梨縣市郡村誌等の記事は、國師岳が奥仙丈山の一峯であることを明示してはゐるが、更に進んで奥仙丈のどの峯が國師岳の名を冐す可きかに至つては、頗る漠然たるもので、捕捉に苦しむのであるが、甲斐國志を見ると、幾度となく引用した通り、西澤御林山の條に、「奥仙丈ノ東へ續ケル絶頂ヲ國司ケ嶽と云」、といふ記事がある。古人は種々の源因からして、甲州の北境は、金峯山から東走して來た山脈が、其儘一直線に東の方へ走つて、雁坂峠に續いたものと信じてゐた事を推定す可き理由がある。内閣文庫所藏の甲斐國繪圖は、享保年間に元祿圖を基として修補した極彩色の繪圖で、頗る珍重す可きものであるが、西は八ヶ岳から東は雲取山に至るまで、全く一直線である。此繪圖に記名された甲斐北境の山岳は、雁坂峠から西では八ヶ岳と金峯山とがあるのみで、奥仙丈も國師も共に山名が記載してない。此繪圖の下圖のことは前項に陳べた。甲斐國志奥仙丈山の條の終に、「凡ソ此筋奥仙丈ノ諸山皆連貫一脈ニシテ金峯ノ羽翼ナ

リ」、とある記事や、中牧山の條に、「奥仙丈ハ金峯山ノ鐵嶽ノ東見通シナリ」、とある記事などは、金峯奥仙丈の諸山が署一直線上に聳立してゐるものと考へなければ、分りにくい文である。又笛吹川の上流西澤の東澤如きも、當然南澤北澤と稱す可すき可きものであるのに、之を西東に分つたことは、北方に彎曲した國境を東西の方向に引き直して考へた後、始めて適當の稱呼となるものではあるまいか。それで「奥仙丈ノ東へ續ケル絶頂」と無造作に書き出した所で想像すると、國司岳は奥仙丈の東の別山であるとしても、極めて近い距離にあるものらしく思へる。いやこれは別山では無く、奥仙丈山のうちで東に在る絶頂といふ意味であらう。若し別山とすれば、金峯山と距離も近く且其東の肩とも見る可き鐵岳を、「東方ノ別峯ヲ鐵嶽ト云」、と記載したやうに、「東へ續ケル別峯ヲ國司ケ嶽ト云」、と書く可き筈だともいへる。兎に角西澤御林の山で奥仙丈の東へ續く絶頂といふのであるから、或特殊の一峯に限定された山名であることが分る。或は夢窓國師が其山に蹟を遺した爲に、國師岳と呼ばれるやうになつたといふことが眞ならば、其座禪窟は恐らく今の大嶽山神社（維新前には赤ノ浦權現と稱す）の奥院と唱ふる所であつたらう。さうとすれば國師岳なる名は、奥仙丈山の一峯に限定的に與へられた稱呼となる譯で、前說の旁證とすることが出來る。そして自分が國師岳を金峯山圖幅に二千五百九十一米突の三角點ある地點と定めたのも、これに導かれた結果である。今でこそ岳といへば、獨立高聳した峯でなければならぬと考へる樣になつたのであるが、昔は山上の平地若くは斜面でさへも、場合に依つては岳の名を無造作に命じたことは、金峯山上の奥院藥師岳の例を見ても分る。それで疎石和尚を尊崇する土地の人々は、和尚が後に夢窓國師の號を賜つた所から、其遺蹟を國師岳の名で呼ぶやうになつたのであらう。夢窓國師年譜や語錄の類を見ると、國師は應長元年の春川浦に龍山庵を掬めて、翌正和元年の冬雪中に山を下りし迄、滿二年の間隨從の衆徒を敎化した傍、朴直なる里人の乞に應じて寺の開山になつたり、時に遠近を跋涉して林木泉

◎雜錄　鐵嶺談山

石の瑰奇なるものに遇へば、樹下石上忽ち禪三昧の人となつたりした。笛吹川の沿岸は窪平邊から川浦附近に至るまで、夢窓國師に關係ある寺院が可なり多くあるし（山梨縣市郡村誌に據る）、乾德山も亦國師が其一夏面壁の地だと傳へられてゐるから、國師の國師岳登山說も謂れがないとは言へない。恐らく國師は乾德山からわが奥仙丈岳を望見して登山の念を起し、奥院附近の山貌を愛でゝ茲に面壁の人となつたのかも知れない。乾德山は國師岳の子山であると山梨鑑に書いたのは、多少此邊の消息を洩したものではあるまいか。そして乾德といふ山名は、元來國師が創めた慧林寺の山號であつたのを、國師に因緣のある所から移して乾德山の名としたのであつて、もと〳〵乾德といふ名の山があつて夫を慧林寺の山號としたのでないことは、乾德を山號とする臨濟派の寺院は慧林寺の外にもあることを見ても分る。或は國師が一夏面壁の折に、山貌の雄偉なるを愛して乾德山と名付け、後に慧林寺の山號としたのではあるまいかとも考へられる。德和村の乾にあるから乾德と名付けたといふのは附會の說であらうと思ふ。乾德は支那宋初の年號で、彼地の寺院に山號寺號として用ゐられたのを、入宋の僧徒が本邦に傳へたのであらう。之と同じ樣にして奥仙丈山の一部であり且つ西澤御林の山である、或地點が、國師に因緣のある所から國師岳の名を有するに至ることは、決して不可思議の事では無い。少し想像の翼を擴げ過ぎた說かも知れないが、國師岳といふ名は始めは今の大嶽山神社の奥院と稱する岩窟の在る峯、即ち二千五百九十一米突の三角點ある峯から東へ二町許下りて又少し登つた地點を指していふたものではあるまいか。「奥仙丈ノ東へ續ケル絶頂ヲ國司ヶ嶽ト云」！甲斐國志の文を讀むと、そんな馬鹿なことがとも言へなくなるではないか、大嶽山神社と國師岳との關係に就ても自分の意見はあるが、こゝに餘り必要が無いから省くことにした。

自分が奥仙丈山と國師岳とに就て調べた結果は如上の通りである。此兩者を比較して、奥仙丈山を此山塊の主人公とし、國師岳を其中の一峯に與

へられた名稱であると斷定したのは、自分勝手の無理であらうか。

奥仙丈といふ總括的名稱だけに止めて置くならばそれで好い。苟も其範圍の中から代表的に一峯を選んで、之に奥仙丈岳なる名稱を與へるものとすれば、特別の事情無き限り其山脈中の最高峯を選ぶのが至當であらう。偶其附近に名の著れた山があるからといふので、遙に低下した尾根續きの一隆起に其名を代表させるが如きは、自分の組せざる所である。

古くから著名であつた奥仙丈山が、多少世に知られてゐたとはいへ元來其一峯たるに過ぎなかつた國師岳の爲に、其根據地の牙城をさへ明け渡さなければならないものゝやうに、世人に思はれるが如き破目に陷つたのは、農商務省の甲府圖幅若くは陸地測量部の輯製甲府號などが、獨り國師岳のみを奥仙丈山の位置に大書し、誤て奥仙丈岳を現今の朝日岳に擬したことが深く殃を爲したのであらう。然し國師岳の爲には夫が幸となつて、今では可なり廣く世に認められてゐるのであるから、自分は特に三繋平の西に在る峯をも國師岳の一峯として、同山が頂上を東西に展開したものとし、之と殆んど直角に南走してゐる高距二千六百餘米突の峯を奥仙丈岳としたのである。が、實を言へば、三繋平の西方の峯は、東の峯よりも寧ろ南の峯に附屬させる方が至當であることは、西南の二峯を結び付けた連脈の最低所よりも、一段低い所から東峯が崛起してゐるのを見ても明かである。勿論其差は決して大なる者ではないが、然し其低所を境として國師岳を獨立の峯としても、夫が何處に在るか容易に認めることが出來ないといふやうなことは無い。然るに自分が此西峯を國師岳に加へ、南峯だけを奥仙丈岳として獨立させたのは、くびれ目の深淺よりも距離の大小の方が、より多く別山らしく見えるといふ考から來たのである。

總括して言ふと、東山梨郡西保三富兩村の堺から起つて、北の方信濃の國境かけて蟠つてゐる大山塊は、少くとも甲斐國志以來明治三十年頃迄は、明に奥仙丈山と呼ばれてゐた。そして國師岳

は其東若くは北に聳えてゐるか、さもなければ奥仙丈山の中の一峯でなければならない。そこで自分は前に陳べたやうな理由からして、國師岳を奥仙丈山の一角に與へられた名稱であると斷定し、從つて奥仙丈岳なる名を其山塊中の最高峯に與へた譯である。若し地藏岳が鳳凰山塊の最高峯である如く、國師岳が奥仙丈山塊の最高峯であつても差支ないではないかと言ふならば、夫は別問題である。

或は又國師奥仙丈二山の距離が餘りに近いから不都合であるといふことなれば、自分は寧ろ國師岳を奥仙丈岳の別名とし、奥仙丈岳即ち國師岳であることを主張せんとする者である。

自分の言ふ可きことは以上で盡きた。以下君の文に就ての答は、只前言を繰り返すに過ぎないのであるが、思ふ事言はぬも何とやらで、また候足曳の山に緣あるよしあし言を長々と書くことにした。讀者諸君には甚だ申譯のない次第である。

正直に白狀すると、君の文は何處から何處までが眞面目なので、何處までが戲談なのか、洞察力の無い自分にはとても判斷が付かぬ。從つて自分の文にも時に埒外に逸出した文字が紛れ込まぬとも限らぬ。これも讀者諸君に對して誠に濟まないと思つてゐる。

自分の所謂二千六百米突の高峯といふのは、地圖が示す通り國師岳の三角點より西南に當つてゐる峯で、君のいふ如く東南ではない。頂上は五六の巨岩が散布して、其中の一に大嶽山神社と彫付けた石碑が立て懸てあり、一面に敷き詰めた花崗岩の細砂が、偃松其他に掩はれてゐる處もある。自分が之を奥仙丈岳と命名した所以は前に陳べた。若し始めから此處に此仙丈岳なる名が正當(そして其事が正當である通り)に與へられてあつたならば、君は鉾を反して現在の國師岳を奥仙丈岳の一隆起であると主張するに相違ない。それはさて措き、君はこゝで三角點が必ずしも山頂(恐らく絶頂即ち最高點の意味ならん)に在ると限られた者でないことを、八ヶ岳の赤岳の實例を以て證明された。自分が赤嶽に登つたのは可なり古い事で、三角標の有無すら覺えてゐない。多分まだ無

かつた様な氣がする。夫で赤岳の三角點に就ては何にも知らぬが、三角點は山の絶頂にあるものと極つてゐないといふことは、御尤千萬な話である。御望みとあれば此の如き例の十や十五は直ぐ提供することが出來る。立山、黑岳、常念、槍岳、淺間、本白根（上野）などは其中尤も著しい者である。君は自分が二千五百九十一米突の峯に三角點があるので、之を國師岳の絶頂と定め、二千六百米突の峯に三角點が無いので、國師岳に屬す可き者を理不盡に奧仙丈岳としたのであると推量したのであらうが、これは君の邪推であつたことを既に悟られたであらう。自分は君が想像されたやうな三角點絶頂主義者ではない。自分の立說の根據は三角點を超絶した所に据えてある。東南（西南か）の高所を如何しても別峯とは思へなかつたとあるのは、つまり國師岳が此高所を主峯とした山塊の一隆起であることを證してゐるのである。

花崗岩山の頂上論は頗る珍奇なる新說ではあるが　是等の理由に據つた主張は一顧の價値も無い者といへる。假りに金峯地藏鳳凰等の山頂が廣いものとして　夫を前提として花崗岩山の頂上は廣い者と斷定することが可能ならば、金峯の東の朝日岳や北々西の小川山や、若くは甲斐駒の頂上などは、可なり狹いから、花崗岩山の頂上は狹い者と斷定しても差支ない譯になる。花崗岩の山を二つ三つ登つた許りで、花崗岩山の頂上は廣いといふ定義を下すのは大早計であらう。一寸した話が何百年何千年といふ長い年月の間、熊は黑い者白鳥は白い者と一般に信じられてゐた。夫さへ白い北極熊や黑い濠洲の白鳥が發見されて見れば、早計であつたと言ひ得るではないか。好きこそ物の上手なれと褒られても、實は下手の横好かも知れない。又甲斐駒などは二千九百米突以上といふ國師岳よりも遙に高い標高を有してゐながら、頂上は狹いに拘らず、誰一人斯る狹小なる山頂は花崗岩の山として有り得可からざる事と思ふ者は無い。君は若し花崗岩の山が狹い頂を有してゐる場合には、之を花崗岩の山として有り得可からざる事とし、他の——例へば玄武岩粘板岩等の山と見做す積かも知れぬ。斯れば日本の花崗岩山は、疑もな

く君に依りて其幾座を抹殺されるに相違ない。

國師岳は山梨縣治一班や山梨縣統計書などに據るも、三富村の山であるが、奥仙丈なる名は甲斐國志其他に據り、元來西保村の稱呼であると自分は信じてゐる。從つて三富村でそれに該當する山を國師岳の一峯であると云ふてゐたとて、斯樣な例は稀ではないから、少くとも其一事でわが奥仙丈岳の位置が變更さる可きものとは思はない。況んや三富村で之を國師岳の一隆起と唱へてゐるといふ事は、取りも直さず國師岳の本體が他に儼存してゐるといふことを強く暗示してゐるに於てをや。

自分はわが奥仙丈岳對國師岳の關係を、立山の淨土龍王二山の關係に似てゐると書いた。謂ふ心は、淨土山の長い平な頂上が少し落ち込んだと思ふと、むつくと起き上つて更に高く聳えたのが龍王岳であるから、其關係は恰もわが奥仙丈岳の頂上が、極めて緩傾斜を以て三繋平の低平地に達し、其處から急に國師岳が崛起したのと、標高の差はあるが、距離の近い所まで能く似てゐるといふ事である。この見易き道理が分らなかつたのは、君の深い地質學上の知識が祟りを爲したのであらう。火山と噴出岩山との研究もさることながら、單葉飛行機と蜻蜓との類似點を知つてゐることも、時としては大に役に立つことがある。

三富村でいふ奥千丈岳が、金峯山圖幅の二千四百九米突の三角點ある峯であるならば、測量部では三富村の言に從つたものと見える。而してこれはわが奥仙丈岳が、ぐいと脚を南に伸した其爪先に當つてゐるので、尨大とか、名高き奥千丈の名に恥ぢないとか、武者振り嚴しくとか、威張つた形容詞を用ゆ可き山容ではない。試に黑平附近の高所から北方を展望した時、金峯朝日の二山が突兀と峭拔した東に當つて、わが奥仙丈岳が南の方から長い頂界線を畫いて、絶頂綠青色の大ドームを築き上げたのを見てこそ、奥仙丈や何處と探した目に、始めて稍や滿足を以て迎へられるのである。二千四百九米突の地點の如きは、南方に派出された前衛であつて、奥仙丈岳の本體は其後に扣えてゐるのである。成程此峯も南又は東南の方面

から望見したならば、周圍の山が低い丈に著しく突起して見えるであらう。それで三富村あたりでは何時の間にか後面の本體を閑却して、此突起を奥仙丈岳と呼び做すことが習慣となつて、其儘今日に至つたものと想はれる。これは山名の退化とでも稱す可き例であるかも知れぬ。

西保村奥千丈御料地の境域は、二千四百九米突の三角點ある峯の西及西南の山麓に限られてゐるとは思はれない。西保村に屬する此峯の西北方即ちわが奥仙丈岳の西麓も、必ずや奥千丈御料地の中に相違ないと信ずるが、必要もないから調べては見なかつた。尙ほ君は二千六百米突の地點に奥仙丈岳の名を付ると、同名の山が同じ連脈中に二つあることになると心配されたが、わが奥仙丈岳は三富村でいふ奥千丈岳をも中に含むことになるから、心配するには及ばない。

最後にこれは奥仙丈の記事に關係のない事であるが、次手だから答へて置く。君は自分が破風山に偃松が有ると書いたのを見て、「自分には見當らなかつた、アスナラウを誤認されたのではあるまいか」と言はれた。これは丁度今朝飛行機を見たといふ人に向つて、自分は見なかつた、鳶を間違へたのではないかと曰ふのと同じで、君の自信力の强いのには感心するが、同時に甚しい粗忽さをも認めない譯には行かない。破風山の偃松は自分許でなく、同行の南日君も中村君も皆羅漢柏（アスナロ）とは認めなかつた。三人寄つて文珠の智慧は出ないにしろ、松と柏とを間違へる氣遣はない。君は偃松とアスナロとは白晝に誤認される程外形が類似してゐると信じてゐるらしい。自分は君こそ御氣の毒ながら偃松を其アスナラウと誤認されたのだと斷言する。曾ては銚子原からあの高大な槍穗高の山塊を隔てゝ、夫よりも低く且つ遠い樅澤雙六蓮華の諸峯を透視したり、又は測量部で櫓を建てる前迄は針葉樹の大木が密生してゐた木賊山（秩父）の頂上で、偃松帶より上でなければ容易に見られない岩桔梗を探ぐり出した程の君の烱眼でも、時としては松柏の見分さへ付かぬものと見える。自分は登山を始めてより二十餘年になるが、幸に毎年偃松の生えてゐる山に登つて其形狀を熟知してゐ

る。アスナロなら東京の線日の夜見世にも見ることが出來る。黑闇で探つても此二者を誤認する氣遣はない。而も自分は破風山へは白晝二度登つてゐるから、君よりも一日の長がある。火山と噴出岩では君にひけを取るかも知れないが、假松とアスナロでは決してひけは取らない積だ。君はも一度假松を熟知してゐる人と同伴して破風山に登り、國境の切明けの跡を辿りながら西方の斜面を探る際に、目に入る針葉樹を注意して一本一本丁寧に檢査する必要がある。其時君は初めて「自分の見損ひ」といふことを適切に感ずるであらう。

金峯山圖幅の標高二千百十二米突の鷄冠山は、木賊山から子酉川に向つて突き出した尾根の末端に位してゐる山で、山頂が岩石突兀として鷄冠（トサカ）に似てゐる爲に其名を得たのであるから、附近の山と紛れる譯は無い筈だ。然るに君は地圖では著しく南方に派出してゐるやうに記載してあるが、其實は武甲二州の國境上に聳立してゐる山であることを信ずると喝破した。茲でも自分は君の強い自信力いや甚しい粗忽さに驚き且呆れざるを得ない。測量部の三角測量は其程までも信用することの出來ない者であらうか、自分には君が赤ッパ尾根から眺めて、雁坂破風鷄冠の三山が一直線上に並立してゐるから、鷄冠山は武甲の境上に聳立してゐると斷定したことの方が、一層信用することが出來ないやうに思へる。三つの山が一直線上に在るか無いかは、橫から眺めて決して分るものでは無い。よし又一直線上に在るとしても、其事が何故に國境上に並立してゐる證據となるのであらうか。所詮是は實査の上で解決しなければならない問題である。そして木賊山が國境に位する以上、夫よりは少しでも南に在る山は、國境をはづれてゐることは火を睹るよりも明かである。君は川浦から雁坂峠に登る途上、廣瀨の寒村から、行手正面に大きく立ちはだかつた木賊山の雄姿を眺めたであらう。頂上から右に引いたなだらかな尾根は破風山に續くもので、之が國境を爲してゐる。左に延びたものは凸凹が甚しく、取り分け東澤の上に蓋ひ懸つてゐる最後の岩峯は、可なり樹木を粧ふてはゐるが、半腹以上は殆んど登攀不可能で

あらう、壁立の翠崖が渦巻く青葉の波の上にそゝり立つて、四つ許の大きな岩頭（イハガシラ）を擡げてゐる。是が問題の鶏冠山である。東の方の雁坂破風若しくは西の方の東股ノ頭などから望見しても、此山と木賊山との距離は著しいもので、勿論尾根に切明けは無い。困難を冒せばよし通行が出来るとしても、少くとも三時間以上を要するらしく思へる。鶏冠山の南麓を流れる東澤の溪谷は、本年五月新に蹈査した所に據れば、鶏冠谷の合流點から四五町遡ると、俄然谷が壑つて物凄い淵が現はれ、これより上二十町許の間は斷崖と懸流と深潭との連續であつて、足に蹼（みづかき）があり手の平に爪があつても、到底河身を遡る譯には行かない。然し夫から上は日本に類の少ない峽谷の美しさが歩毎に展開して、景物の雄麗瑰偉なる、吾等は唯だもう譯もなく嬉しさが込み上る許りであつた。

木賊山は前述の左右の尾根の外に、此兩者の中間にも一つ尾根を南に向つて派出してゐる。之は西の鶏冠谷と東のヌク澤（西破風をヌク澤のせりと曰ふといへる君の言より推すれば、此澤即ちヌク澤ならんか）とを分つ尾根で、曾て自分が「秩父の奥山」の記事中木賊山の條に書いた如くに、御料局で造つた道が其上を通つてゐるから、子酉川とヌク澤の合流點附近から木賊山へ登るのは、少しも困難では無い。

君の文に據つて自分がヌク澤と推定した谷は、或はヌク澤ではないかも知れないが、鶏冠谷が鶏冠山の東下に在る谷であることは、動かすことの出來ない事實である。そこで自分は君が國境山脈縦走の際に、破風山を下りて鶏冠谷に露營し、翌日鶏冠山に登つて尾根傳ひに木賊山に登られたといふ記事を疑はしく思ふのである。破風の三角點を午後四時四十五分に出立して、鶏冠谷の水ある所まで明るい中に行つたとすれば、約二時間の行程であるが、破風の頂上から鶏冠谷迄は優に四時間を要すると思ふ。翌日は六時二十分に露營地を出發して鶏冠山に登り、鞍部を歩して八時半に木賊山頂に着いたと書いてあるが、鶏冠谷から鶏冠山へ登れるかどうかは疑問である。尤も二千百六十米突の露營地から二千百十二米突の山に登つた

のであるから、北方から下り込んだとも見られるが、孰れにしても鷄冠谷から鷄冠山へ登り、轉じて木賊山へ登るには、二時間や三時間で行かれるもので無いことを斷言することが出來る。木賊山と甲武信岳とので間さへ君の一行は一時間と十五分を費してゐることを考へて貰ひたい。況して鷄冠谷から國境の切明けへ出て鷄冠山（二一一二米突）へ登つたなどは、甚しい妄誕の言である。想像するに君は木賊山の東の肩即ち金峯山圖幅に二千四百二十米突の圈を有する隆起を、二千百十二米突の鷄冠山と思ひ違ひをしてゐるのであらう。夫が爲に破風山からヌク澤（假定）の上流に下りて露營したのを、鷄冠谷に下りたものと信じ、翌日西の尾根を攀ぢて例の御料局の切明けに出で、而も之を國境の切明けと思ひ誤り（或は眞に國境に出でしやも知れず）、前記二千四百二十米突の小隆起に登りて、鷄冠の大岩に登りたるものと考へたものらしい。此推量が誤りでないと思ふ譯は、時間も丁度恰好だし、其他の記事にもしつくり當て嵌るからである。恐らく君は「甲斐北國境山脈に就て」を草する時も、金峯山圖幅を碌々見なかつたのではなからうか、切に君の再登山を煩はし度いと思ふ。（木暮理太郎）

信州駒ケ岳通信

西駒ヶ岳に於ける中箕輪小學校職員生徒の遭難記念碑は本年八月中旬除幕式擧行致し候碑は將棊頭に於ける高さ丈餘の自然石に刻りつけたるものに候が此繪葉書一葉御覽に入れ候。

今回本郡富田村出身東京岡田藤太郎氏亡父の遺言により參百圓を義捐し同村青年會員は勞力を寄附して寶劍岳の北に岩小屋を作る事に相成り明年登山の季節迄には建設すべき豫定に候又本郡伊那町字内の萱の有志も同樣の企あり千六百餘圓の寄附を仰ぎて將棊天水岩附近及其北の森林帶に大樽頭に各一棟の小屋を作り登山路を修繕する事となり先頃より寄附金の募集に着手いたし居り候多少に係らず御寄附可被下諸君有之候はゝ御紹介願度右に關する印刷物郵便送仕候小屋は小生の考案に

基き建設致すべき筈にて大要左の如き設計に候が御高評被下度候。

小屋の大さは間口二間四尺奥行四五間（經費の都合により伸縮すべし）とし四壁は岩を疊みて高さ七尺とし屋根、床及戸のみ木材を用ふ屋内は中央四尺の爐兼用の通路を設け此處にて適宜火を焚くことゝすされば兩側六尺の處に於て岩壁の方に枕して寢ぬるを得小屋の前後及左右の岩壁の上部に開閉し得べき烟出しを設け別に左右に金網にて被ひたる小き硝子窓を設く内部岩壁の上部には狹き棚を設く入口は常風を避くべき方に設け尚其前に矩形の石壁を築く木材の部は總てクレオソートの如き防腐劑を塗抹することゝす。

されば小屋は頂上附近に二ヶ所森林帶に一ヶ所を作るべきにより登山者には大に便宜を得可申候。

本年の登山は西駒ヶ岳に二回東駒ヶ岳仙丈岳及鹽見ヶ岳に各一回登り候。

南アルプスの植物分布は昨年來の登山によりて大要分明致し候本年鹽見ヶ岳の登山は七月二十六日矢澤米三郎岡田邦松牛山傳藏の三氏と共に本郡伊那里村鹿鹽温泉より鹿鹽川に沿ふて登り三伏峠を踰へて中俣に下り駿州方面より鹽見ヶ岳に登り北荒川岳に近き處より荒川の溪谷に下り市の瀨を經て歸宅致し候山中の植物はハクセンナヅナ、ヤツガタケシノブ、ヒメクモマグサ、シロウマチドリ、スンシウヘウタンボク、サハルリサウ等の奇品を採集致し候スンシウヘウタンボクは昨年小生が中俣に於て發見候ものに候が南荒川附近にても數多採集致し候同行岡田氏は鹽見ヶ岳の頂上に於て不明の石竹科の一種を發見致し候。

東駒ヶ岳及仙丈岳の登山は矢澤米三郎牛山傳藏兩氏と共に八月十四日出發本郡美和村市の瀨より市の瀨川に沿ふて登り東駒ヶ岳より峯傳して六方石を越え一旦甲州方面に下りて更に仙丈岳に登り北澤峠より市の瀨川に下り候仙丈岳には中々に奇品多くクロバナヘウタンボク、ヤツガタケシノブ等なり又先に岡田氏の鹽見ヶ岳にて發見する石竹科の植物は同山に於て數多採集致し候市の瀨の溪谷中にてはイテフシダを採集致し候。（大正三年十

◎雜錄　信州駒ヶ岳通信

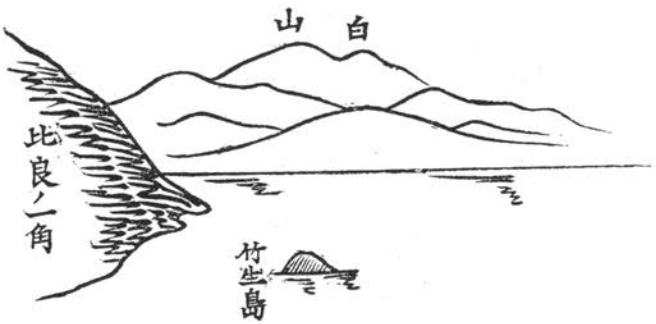
◎雜　綠　比叡山より見たる白山と御嶽

二月廿九日河野齢藏）

比叡山より見たる白山と御嶽

京都に來て以來、年頭の吉例として、毎年正月早々先づ、叡山に上り、山の幸多かれと、祈ることが、余の年中行事の一として缺かすことの出來ない、家例である。丁度京都人が、初午、初大師、初天神には、何を差し措いても、參詣するのと同じ心持であらうと思ふ。それで、今年も正月元旦に、石阪雉本兩博士（京大法科敎授）及同僚東儀一君（日本山岳會員）と共に、叡山の上り初めをしたのであつた。

朝來天候が曇り勝であつたから、折角叡山四明頂上に立つても、展望は駄目であらうとあきらめて居たが、是はまた大意外であつた、四方の山々、特に、東北南の三方面が、最も能く開けて、展望廣濶、今日迄あまり見なかつた山々が、波の樣に起伏して、互に新春の挨拶を交換して居る樣である、それが何れも雪の衣を着けて居るのであるから、美觀此上もない。就中、加賀の白山と、木曾の御嶽が、我等の見參に入つたときは、丸で夢でもみて居るのではないかと、疑ふ許りで喜んだのであつた。



（一）白山は丁度琵琶湖竹生島と、其對岸賤ヶ岳の眞上に、駱駝の背の樣な形して、白雪にスッカリ埋れて居る、白山は前にも兩三度此頂上から見た、これでも、今日ほど明白に遠望したことがなかつたから、余の喜悦は一と通りのものでなかつた。

（二）木曾の御嶽　今日迄叡山に何十回と云ふほ

新高山



尺之一分万五

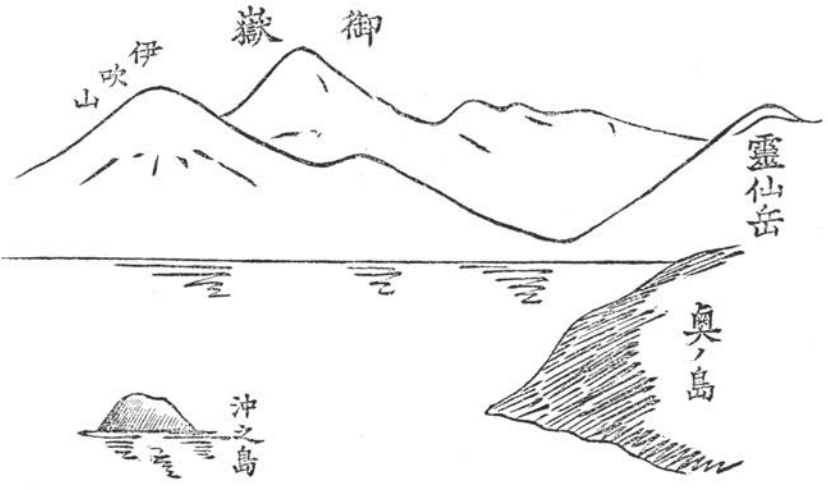
米 1000 500 0 1000 2000 3000 4000

町 10 5 0 10 20 30 1里

日本山岳會々員　野呂寧氏實測製圖

大正四年八月刊行

日本山岳會發行



◎雜錄　比叡山より見たる白山と御嶽

ど、御千度を踏んだのであつたが、未だ嘗て其雄姿に長揖するの機會がなかつたのである。否な寧ろ之れを遠見し得らるべしとの想像さへ、浮ばなかつたのである。

其位置は、江州伊吹山と靈仙岳との間、即ち東海道線關ケ原の天空に當り、銀冠を戴きて、堂々たる雄姿を一萬尺の天半に聳立せしめて居るのである。

懷へば、余は此御嶽と奇しき因緣を持つて居る、余が高山に登つた最初の試は、實に此御嶽である、云はゞ余は、御嶽で山岳宗の洗禮を受けたとも云つてよい、爾來、其麓の木曾谷を通過して、日本アルプス方面に往復する毎に、未だ嘗て其當時の苦樂を想ひ出さずには居られなかつた、それから余は、初めて高山に上るには、先御嶽を逸してはならないと人々に推奨して居つたのである、それ許りでない、丁度昨夏會員中村清太郎氏が、御嶽頂上二ノ池小屋に一箇月ほど立籠りて、豪壯なる其頂上と、夏の空色を寫生せられた油繪が、舊臘到着した許りであつたから、元旦の朝叡山に上る

前にも、必行く許りに之れを賞觀して、もの〳〵二時間も經たない後に、此の思懸けなき、實物の御嶽を遠望することが出來たのであるから、余は其山靈に感受したかの樣にも、思はれて、しばし不思議の感に打たれざるを得なかつたのである。かかる、喜悅と、かゝる感興に打たれて、余は此四明頂上を去ることが出來なかつたのであつた、比良より吹き下ろす寒風にさらされて、耳をも切らるゝ思ひしながら。

かうなると、余等のみが白山と御嶽を見たと云ふ許りでは、此等の山靈に相濟まぬのである、越の白山はとにかく、日本アルプスの一大雄峯が京の比叡より遙かに望見し得ると云ふことは、山好の余等にとりても、實は意外のことであるから、余は爰に幾多我同好の士に以上の事實を報告し、其喜を共にせんことを希望する次第である。

附曰　麓の人が一年に一度位叡山の頂上より富士が見えると云ふのは、或は御嶽と間違へて居るのではあるまいか、若し富士が見えるとすると、靈仙岳より尚南の方でなければならぬ、さうすると三國岳一帶の高峻なる山岳が、邪魔をして、到底富士を望見がることは六かしいと思はる、御嶽の形が富士式であるから、以上余の斷定は間違なからうと思ふ。

余は、本年になつてから四月の末迄に、丁度十度叡山に上つた、そして上る度毎に、先白山と御嶽方面を眺めて、尚一度其雄姿に接したいと願つたが、何時も駄目であつた、雲の幕深く閉されて容易に其雄姿をあらはさないところが益奥ゆかしく、益尊敬を拂はしむる所以であらう。（四月二十九日今村幸男）

新高山

新高山は支那人の所謂玉山にして、歐米人の「モリソン」(Morison)山と呼ぶもの是なり、臺灣の我領有に歸するや、其の帝國第一の高嶺なるを以て、明治三十年六月二十八日　明治天皇陛下特に名を賜ひて新高山と云ふ、臺灣島の殆んど中央に位し、脊髓山脈たる所謂中央山脈の西方支脈中に聳え、

北緯二十三度二十八分六秒東徑百二十度五十七分十二秒を占め、海拔一萬三千七十五尺山脊高く南北に延び、北二千米突及南二千五百米突にして、更に其の頭を崛起するあり、北方に在るを北山と云ひ、海拔一萬二千七百尺、南方に在るを南山と云ひ海拔一萬二千七百六十八尺、而して東南に小支脈の流れて一峻峯の聳立するあり、是れ東山にして海拔一萬二千八百十六尺、又西に急傾斜を爲して走るもの二千四百米突にして海拔一萬一千六百九十八尺の峻峯を起す、之を西山と呼ぶ、是等一團の最高嶺、即ち主山と南山、北山、東山及西山とを總括して新高山と稱す。

新高山一帶の山嶺は、古生紀の粘板岩及砂岩より成立し岩層傾斜して山脊に突起す、其側面は解體し片々に碎破せられ、急斜面に沿ふて崩壞落下し、山脊は恰も鋸齒の如く、一昇一降し兩斜側の急峻なること、殆んど眩目せんとし匍匐僅に山脊を傳ひて嶺頂に達するを得べし、主山の絶巓平かなる所僅に幅十尺內外長百尺許に過ぎず、斜面の急なる所は七八十度の甚しきを呈し、岩片絶えず

◎雜錄　日本アルプス（短歌十九首）

溪谷に辷り落ち登降爲に膽を寒からしむること屢々なり。（野呂寧）

本號に附せる新高山圖參照、圖は野呂寧氏の實測にかゝり未だ他に公にされたるものなし、本會の是を公にするを得るは、最も喜ぶ所なり。

日本アルプス　（短歌十九首）

大槻禎郎（遺稿）

心なき雲の往來（ゆきゝ）もなつかしや眼路をさへぎる日本アルプス

われいつかこの高原に迷ひ來ぬ、忘れえぬ山よ日本アルプス

眼路のはてにつらなる山の頂の雪の光よ、心をどれり

神の聖き御座（みくら）もいまはちかからん踏みゆく雪もしたしまれぬる

谿をこめ峰をめぐりて冷えびえとせまれる霧のしづかなるかな

ことばりなく泪あふるゝ今われはこの高山の

◎雜錄　大正二年八月旅中の歌

頂に立つ
われすこし疲れて憩ふ足もとにタカネスミレ
の花かそよけり
目をあぐれば山の姿のおごそかに雲のはれま
に見えかくれつゝ
一塊の雪を手にのせぬくもりにやゝに溶くる
をじつと見つむる
雷鳥は偃松蔭にほろほろと低く鳴くなり霧の
せまれば
雷鳥の小さき羽音にわりなくも山の沈默(もだし)のま
ま破れけり
おごそかに山の波濤のわが立てる峰をめぐり
てせまるもうれしや
アルプスの魔女が紡げる白糸のながくたれた
る谷の朝霧
あれ今し尖峯(ピーク)に雲のかゝれるか截れて音なく
谷に落ちゆく
山はいつか靜かに闇のどん底に桔梗の花の如
くしぼめり
沈默、沈默、われおごそかにいま山に對ひて
立ちぬ涙湧きくる
ふいと胸をのかれて峯の白雲にまぎれ入りた
る一羽の小鳥
永久に沈默(もだ)すこの高山の岩蔭にをののきつゝ
も日の出を待つ
きはまれるこの悲哀(かなしみ)の堪へがたな、さみしく
山を降りなんとする

大正二年八月旅中の歌

田口虎之助

木曾の御嶽を仰ぎ見て
昔見しその御嶽はかけはしのかけてそしの
ぶ木曾のみたけは
神ちふる木曾のみたけは白雪の夏も積りてな
つかしきかな
信濃の有明山にて
曉の子規をきゝて
ありあけの山邊とよもすほとゝきす傾く月に
鳴渡るなり

同國燕ヶ嶽は見るめ
いとよろしかりければ
畫工も得こそ寫さね神さふるつはめヶ岳のくしき此さま

なつもなほみ山に殘る白雪は神代のまゝの姿なるらむ

同し處にて子規をきゝて

名にも似ぬ燕ヶ岳の子規ゆき見なからにきくも珍し

槍ヶ嶽を仰ぎ見て

うへしこそ名つけ初けれ槍ヶたけ雲をしぬきて天そゝりけり

燒ヶ岳に登りて

大空に烟たなひくやけかたけいかつちのこと山もとゝろに

去けりたる木々はいつしか燒はてゝ面かけとめぬ山の姿か

飛驒の深山を
旅行しける時に

白雲に入にけるかな衣手のひたのみ山を百重

◎雜　錄　大正四年八月旅中の歌

こえ來て
なく鳥も谷水さへもきこえぬは深くも山に入りにけるらし

養　蠶

こかひする時にしなれは信濃路のみ山の里もいと無かりけり

山畑の桑やつむらむ處女子が菅のを笠の見えかくれする

製　糸

をと女子かうたふひなうた繰糸の節おもしろくゝゝう返しつゝ

おこたらす糸をそつむく處女子ら母のかふ兒のまゆこもりして

旱　魃

おのかきし鋤鍬とりて枯れし田に水そゝかむとさわく村人

かれし田に立ちてそ嘆く大御民ことしの貢いかに納めむ

四國山名の讀方に就て

「山岳」七年一號雜錄欄に掲載せられた、永田氏の「四國山岳表」は、多大の勞力と、精細な調査とによつて出來た重寶な記事で、我等四國山岳の研究者は氏に對して、特に感謝するのである。

さて、同記事中、一六八頁上段に、漢字の山名の讀方に就て二三の疑問を提出せられてゐたから、其内予の承知してゐるものを、記して答へる事とする。

筒城山　ツヽジョーサンと讀む。予が石槌山案内者から直接に聞き、また地質詳圖（歐文）に Tsutsujosan とある。

劈禿　イザリハゲと讀む。地質圖に Izarihage とある。これは峠の名であるから、正確に言へば、劈禿峠と言ふべきであるが、土俗は單にイザリハゲとかサヽハゲとか言つてゐるのである。五萬地形には劈峠と記してあるが、これはよろしくないと思ふ。

平家平　ヘイケタイラと讀む。海部郡の人竹井氏の高敎による。

大座禮山　オーザレヤマと讀む。これは直接に聞いたのではないが、かう讀むべき筈の理由がある。併し長くなるから此處では言はぬ事とする。

京柱山　キョーバシラヤマと讀む。予が旅行の際直接に聞いた。また地質圖にも Kyōbashira とある。

赤城尾山　アカギヲと讀む。竹井氏の高敎による。永田氏の「古き農二十萬分一圖」と言はれてあるのは、陸測揖製廿萬の事であらうが、同圖上の赤首山と五萬地形の赤城尾山とは、位置が大に違つてゐる。

工法石山　クボーシャヤマと讀む。地質圖による。

鰻轟山　ウナギトヾロキヤマと讀む。竹井氏の高敎による。併し同地方では、元來鰻轟と言ふ谷の名があるので、山の名としてはあまり用ゐないさうである。

猶殘りの天堤山、高研山、貧田丸に就ては調べて報告する考である。

それから同記事中、一六七頁の櫛ケ岳は、嘗て其邊の人に聞いて見たが、そんな山名はないと言つたやうに記憶してゐるから、矢張津司瀧山の事を誤記したものであらう。一六八頁のジローギューは「次郎笈」の漢字を用ゐるのである。阿波志によると、劍山頂上西南に卓立する巖が笈に似てゐる所から、太郎笈、次郎笈と名づく云々と記してある。さうして前記ジローギューの山名は、次郎笈の巖名から出た事が明白なのである。劍山の繪圖には此山に當る所を治良行山と記してあるが、此漢字は全くの宛字である。次に雲早山は五萬地形には「クモソウ」と讀んであるが、土俗は「クモサ」と言つてゐる。友内山は「山岳」四年三號多田氏の記事中にも「イウチ」と讀んであるが、これは誤で「トモッサン」と讀む。友内の代りに友落の漢字を用ゐるのも一つの證據である。次に一六八頁下段に「槇小屋は湯桶丸に當り」とあるが、これは單に兩地圖比較の上から推察したものであらう。予の考では、槇小屋山は總稱的の名で、湯桶丸は槇小屋山中の最高の一峯である。蠶神社縁起にも「槇小屋山湯桶の丸と言ふ所云々」と記されてゐる。又一五六頁上段保賀山峠は鮎喰川には關係なく、穴吹川と貞光川との分水嶺上に當る。

猶山名、山脈の分類等に就て、永田氏の記事を批評し、同時に愚見を述べたいのであるが、他日「四國山岳考察」を發表する心算であるから、これで擱筆する。(笠井藍水)

◎雜錄　信州より甲州へ

信州より甲州へ　(大正三年)

七月二十一日　小淵の湯より赤石嶽頂上、里程約六里
七月二十二日　赤石頂上より荒川嶽、(西河内に登りて)歩里程約二里位と思はる。
七月二十三日　荒川嶽より東嶽に登り西俣に下る里程約二里半。
七月二十四日　野營地より東俣に出でデンック峠を跋渉して甲州新倉迄、里程約八里。
七月二十四日　新倉より甲府迄、歩行五里、鐵道馬車五里。

一、赤石嶽登山

結束漸く、九時小淵の湯を出發す。赤石嶽頂上迄は、吾々五名の外、友人二十名同行し、都合同

勢二十五名なり。是從吾人の行く手は、猿鹿と雖も、一步も進む能はざる所の兩岸絕壁なる小澁の上流を、或は石傳ひに、或は足も切れん許りの冷水を徒涉して、前進せざるべからず。故に宿にて充分仕度を整へ徒涉に便宜なる樣準備するを要す。

吾々は、困難と云ふより、好奇心に驅られ愉快に、兩岸の奇勝(所々に瀧あり、)を賞しつゝ、河を橫ぎる事二十數回にして、十一時半廣河原に達する事を得たり。約一里の所に、二時間半を費せし事より、如何に、其前進の困難なるかを察し得らるべし。此處は、東南より來れる福川と、東北方より來る荒川との合點にして、河原廣き故此の名あるなるべし。持參の餅を平げ、勢力を付けつゝ、仰いで荒川上流を望めば、西河內嶽巍然として雲上に聳え、福川上流方面を眺むれば、赤石嶽峨々として天空を摩す。飯田より此の地迄は、傾斜も少なく、平凡なりき。然し、是從愈々、赤石嶽に、登るなり、天氣もよし、腹も出來、一行の意氣頓に百倍せり。登山するに際して、第一に忘るべからざる事は、飮用水なり、廣河原にて充分用意する事を要す。登山口は、山岳會登山口ありて、何人と雖も立木を削りて明記しあるを、容易に發見する事を得む。荒川の左岸を東北に向ひて、尾根傳ひに攀ぢ登るなり。登山に著きしは、午後一時頃、暑さの爲隨分苦めらる、十五分登ると、十分休むと言ふ樣な具合にして、猶、先登者の進行の早きに過ぐるを、罵倒しつゝ登る。大古其儘の如き、森林帶の主なる樹木は、縱とツガなり。三時間半を費して、漸く樅木帶に入り、木の間より、霞める伊那の谷の一部を望む事を得、此邊より、所々の谷間に雪あるを仰ぎ見、羨望暫時よだれの流るゝを覺えず。船久保てふ橫手を通りて、白樺を出づ是從方向は轉じて西斜面を北に向ひて進むなり。

白樺を過ぎれば、偃松帶にて、岩の脆き爲、步行實に危險此れ赤石山脈の水成岩なる由なりと。石南の花咲亂れり。其鮮美なる五花辨の花、其光澤ある綠葉は、空漠たる四邊を、春の景色に彩れり、緩勾配の橫手を、登る事半時許り大聖寺平に達す、傳へ聞く、昔宗良親王が、大小を御埋めな

されし所なりと。小高地に登れば直ぐ眼前の窪地に一大雪田あるを發見し皆思はず萬歳を絶叫して假松の上を轉がるが如くに走り下りて渇せる口を濕せり。時に四時半。以後頂上に到る迄、諸處に小雪田あれ共、大聖寺平のもの、最大なり。高山に於ける、唯一の水分は雪なる故に、雪田ある毎に、少々づゝ用意するを要す。然し、雪の儘にて、餘り澤山食ふ時は、腹を害するを以つて能ふる限り、水筒等にて沸して飲むを可とす。休息する事約半時にして、急斜面を眞直に攀ぢ少時にて、拜所に達す、先第一、壯然たる富嶽の、雲上に聳立せるに驚かされ、轉じて北方を眺むれば、東嶽、荒川嶽、西河内等、呼ばゝ答へん有様なり。時々霧軍急に襲來して、又急に去り、其間に、厚藍色をせる壯嚴なる腹面を現し、又急に雲中に消ゆ。更に、眼を西方に轉ずれば、駒ヶ岳、(木曾)及びはるかに御嶽、南方には、惠那山を始め、諸連峯の魔群の如く立ち並べるを望み得て、大自然の大氣に氣を打たれて、暫時の間我を忘れて茫然たり。殊に、富士には初對面の者ありて、其喜び言はん方無し。尾根傳に、南方に向ひて進み、小赤石を越え、七時無事赤石嶽頂上に達する事を得たり。

赤石登山隊萬歳を三唱せし時は、早や、日は西方はるかに最後の光を投げて雲を茜に染め、其美麗なる事實に、名家の油繪を見るが如し。二三年前迄ありしと云ふ三角測量臺は、無慘にも、中途より切斷せられ、石室の屋根に代用され居たり。頂上より少し南東方に下れる、窪地の石室に宿る事となり、或者は薪を集め、或者は石室を修繕し、他は火をたきて餅をやき、或は、雪を溶しなど、野營の準備に忙し。石室は、辛じて二十五名を入るゝに足り、德利形をなし、少しの風雨には堪え得らるべしと思はる。然し、天氣具合惡しく、頂上を恐るゝならば、大聖寺平の雪田下より北斜下して、一小溪を降る事五六町にて、安全なる露營地を得ん。先づ餅とパンとにて空腹を滿し、火を燃きて暖を取る。殊に、朝方になるに從ひ、風さへ加りて仲々惡し、用意のシャツを著、石室の內に轉げ込む。丁度新月なれば、空は晴れたれ共、唯、天の川の清澄たるを見る事を得ると、四方の

闇を通して、茫然と魔の如き諸秀峯も望む事を得るとのみにて、高山の夜の風景を充分味ふ事の不可能なりしは、殘念なりき。

二、西河内嶽攀ぢと荒川嶽

寒さと強風とを冒して、五時頃御來光を拜す、東南方整然たる、富嶽の左所謂雲の海、中に、眞赤な太陽の現れたる時の景色は、到底筆舌の良く盡し能ふ所にあらず。幸にも、雲は低く、朝の赤石頂上の遠望は、實に壯觀なるものなりき。富士より北方順次に、秩父山脈（？）と思はるゝものあり、北方には、東嶽、鹽見嶽、荒川岳、甲州駒ヶ岳、西河内岳、間嶽、前嶽、（仙丈嶽）、小河内岳等一大城壁の如く連れり、更に北西より西方にかけて、木曾駒ヶ岳、御嶽、惠那山までも西南隅に現れたり。眼を南方に轉ずれば聖、大澤、兎の三高峯を越へて遠く遠州迄霞の中に茫然たり。絶好の晴天にて、一行皆元氣旺盛なり。餅パンを食ふ者、雪を食ふ者、強風を冒して寫生する者、歌ふ者等皆興のつくる時を知らず。八時名殘惜しくはあれど去る、途中雷鳥を追ふ、九時大聖寺平に降る、雪など食ひて、九時半互に健康を祈り合ひ、彼は萬歳を叫び吾は成功を誓ひて、友人等に別を告げ、愈々五名となりて雪田の下の小溪谷を降り始む。總て此の邊の雪田の滴は地中をくゞり出て遂に大井川の上流となるなり。途中に紫色の小田卷草あり。十時頃、西河内岳に登るに適當と思はるゝ川の出口に達し、晝食をなす。持參の米を洗ひ飯盒にて煮る、少々心あれ共、又特別なり。日光は暖く、所々に殘雪を見る事を得るも、少しも高山にあるが如き感せず實に愉快。十二時出發。非常に嶮しき標木帶を木の枝傳ひに河に沿ひて登る事四五町にして、右に方向を轉じ、河を渡りて白樺中を登る。此處にて飲用水を充分用意す。各自、平均二貫目位の荷物を背にし、氷砂糖にて勢力を付けつゝ登り、七八丁にて尾根に達するを得たり。而して、直ぐ前面の窪地に雪を發見し、充分食ひて休息する事半時許り、三時頃より又暑さを冒して、登山に著く。世謂御花畑を通りて、赤石が目前に見ゆる尾根にて、植物を採集して又一休す。美しき事は、毛氈を敷けるが如しとでも形容せん

御花畑と、毒々しき惡臭には、閉口せり、多分何か毒草なるべし。其從尾根傳ひに十餘町、登り極れば、即西河内岳頂上なり、時は三時四十五分。頂上には、毀れかけたる三角測量臺と、小祉あり、今日は、豫想外に早く且樂に登る事を得て、一行の歡喜實に譬へん術もなし。然し、空模樣惡く、四方は、霧の爲に包み消され遠望はきかず唯、霧の間に、荒川岳頂上を眼前に見る事を得たるのみ、更に、寒氣を感じ、風さへ強さを增すに及びては、皆不安の念に驅られつゝ、パン、干芋等を喰ふ。其從、荒川岳頂上迄は、僅々數丁なり、荒川頂上に達せし頃は、天氣益々險惡となり、强風と共に雨少々飛び、頰にあたれば礫の如し。實は東嶽（一名惡澤岳）と荒川岳（一名魚無河内と呼ぶ）との間の窪地に露營すべき豫定なりしも、何分にも風雨荒らく、霧の爲前進不可能なる故、未だ時間は早きも仕方なく、急ぎ少々退却し、野營地に適せる地點を見付け、早速準備に著手せり。小屋は三方に石を疊み重ね、屋根は這松を渡して、其上に油紙を張りしものなり、而して、薪は總て這松なり。漸く萬事出來上りし頃より、天氣は追々快晴に趣き、焚火して餅を食ひ居る中には、全く天候回復して四方は、拭ひしが如く晴れ渡り、富嶽は前面に、赤石の嶺は石方に、巍々たり。若し此の際、風雨に出會ひしならば、最も非常なる困難に陷りたるべし、然し、幸運にも、此事なかりしは、天祐とこそ云ふべし。晴れたりとは雖も、安心すべきに非ざれば、明日東嶽に登る道を、豫め定め置くを必要として出掛けしも、暗くなりし爲に、遂失敗に歸せり。此の夜は風非常に强く、寒さ甚しく、時々寒さの爲眠を破られぬ。殊に困りしは、飮料水の缺乏にて登山には防寒防水用意と、水の用意とが肝要なりてふ事を、痛切に感じたり。

三、東嶽と西俣降り

朝七時露營地出發。昨晩赤石頂上に露營せる、矢張飯田中學生の一團を判然と望む事を得たり。荒川岳頂上の眺望は、赤石嶽と大差なし、然し雲高くして都合惡し。

少し下れば小西俣谷の一斜面に雪田を發見し三四町の急斜面をも苦とせず取りに行き昨夜よりの

渇を癒す。殊に今日の東岳登山にも途中水分なき様見受けられたれば充分用意せり。此處の富士實によし。九時東岳に登らんが爲に、東南斜面に下り始む、之れ、尾根傳ひは危險なればなり。道は長き這松にして意の如く進む能はず、荷物の紐は切れて一層重くなり、昨夜より腹を害して弱れる者出來、「此れでは到底」とさへ思へる事も數々なりき、一度、這松の間に足を落せば、揚ぐる勢さらに出ず、然し又、這松を傳ひて恰も馬乘りの如く斜行下する際は、實に痛快なりき。降る事半時許りにして、今度は急斜面を攀ぢ始む。

暑さ及び水分の缺乏と苦闘する事、約二時間にて、漸く十一時四十分惡澤岳頂上に達するを得たり。名の通りの惡澤にて、其困難なる事非常なれ共、又此處に登り盡したる時の愉快は、其れに正比例して一層なり。思はず知らず、皆萬歳を絶叫してかけ登りぬ。頂上は、赤褐色をせる巨岩の轉々たる所にして、中央に小社あり、社前には登山者の名を記したる木片、二三が置れたり。吾々も又記名せる紙片を瓶詰とし社前に捧げたり。眺望には、赤石嶽に優れる遠く北日本アルプスの秀峯槍ヶ岳、穗高等、雲上に聳え、其他近傍の諸連峯は勿論一大環をなして順次に連り、自分等の心を吸ひ取るが如くに感せられたり。東北下方に方りて雪田及び一小池あるを發見し、渇せる喉を鳴らして、蘇生せるが如く躍如たりき。此の壯嚴なる絶景を前にして、アンズを切り喉を濕して一休し、高山植物を採集しつゝ雪田見がけて降る。採集せる高山植物の主なるものを示さんに、黑百合を始めとし、ひめうすゆき草、石つがざくら、おやまのえんどう、ひめいはかゞみ、こきんばい、ちしまぎきやう、つまとり草、しこたん草、ひめいはしようぶ、はくさんいちげ草、ちんぐるま、よつばしほがま、いはつめ草、くるま百合、いはひげ等一大御花畑をなして、咲き亂れり。最後の雪なりとて、思ふ存分食ひて晝食す。松島氏兎の子を捕へ來りて大喜び、三時頃愈々降り始む。

荷物も大部減じて輕くなり、皆元氣よく惡澤谷より二三の谷を隔てたる左方の溪谷を下る、彼の小池の下を通過し、急峻なる溪谷を或は岩傳ひ

に、或は絶壁を匍匐し、或は餘分の絶壁の爲止むを得ず森林帶を迂廻などして降る事三時間許り（紐の必要を感ず）、然も未だ大井川本流に迄出づる事能はずして、次第に日は暮れそめぬ。實に六時五分之れ吾々の頭上に、一大不幸の將に降らんとして幸にも事なきを得たる一瞬時なりき。

此處に淵上に横たはれる大枯木あり、其れに大平氏の知らずに上りて渡らんとせし一瞬間、大木は轉げて氏は眞倒に瀧壺に墜落せり。幸にも何も怪我なくして上る事を得たり。

此の事の爲め又暗くなりし爲に、其處より少し降りたる河原に野營する事とせり。先第一焚火して洋服を乾し、大平氏の幸運なりしを喜び合ひつつ夕飯のパンを食ふ。

横になりしが、今日の事ども思ひ浮べて、以後如何になる事かと、暫時の間眠りもあへず居たりしも、遂晝の勞れに、不安の夢を結べり。幸土地が餘程低き故、夜も仲々暖く充分眠る事を得たり。

四、西俣野營より新倉迄

昨日の兎を肴に飯を焚きて食ひ六時野營地を出發せり。豫想せるよりも容易に、五六町にて大井川本流即ち西俣の谷に出づ。邊りは山の斜傾も緩にして河は巾に於ても水量に於ても小澁川より一層大にして徒渉には非常に困難なりき。此邊より河原の所々に斧の觸れたる材木、或は火を焚きたる痕跡等あるを見て喜びつゝ河原を傳ひて下る事半時にして先年此の邊を、伐木せし大倉組の小屋を發見す。時は正に八時半。最早や引き上げし後なれば空巢なり、然し、少しも此邊の地理を精知せざる連中が、兎にも角にも赤石、荒川、惡澤の三嶮峯を横斷し終り、始めて人間の造りたる家と名の付くものを發見せし事故、何人と雖も多少の誇りと、歡喜とにて、躍々たらざるを得んや。

地は大井川右岸の河原少し廣まれる場所にて、東斜面を背にして二棟の小屋立ち竝べり。（能ふべくんば此處迄下りて宿泊せんか、少しも危險を恐るゝ要なく大安全ならん。）

丁度運よく左岸に道を見付け、地圖に照せば、三伏峠を越して新倉に通ずる道らしき故、大喜びにて一休す。吾々の豫定としては、惡澤を下る筈

◎雜錄　信州より甲州へ

◎雜錄　信州より甲州へ

ずなりしも、偶然此れを變更して降りしかば、是の如く都合よく道を發見する事を得たるなり。何となれば、惡澤を下りたらんには、新倉に通ずる道を發見するに困難なればなり。道は、急に四五町許り登りて、其れよりは、横手の比較的樂な道となる然して大倉組の伐木の際修繕せしならん、良道にて歩きよし。水には少しも困難を感せず、又所々の木の間より惡澤岳の殘雪を望む事を得たり。十時頃松の小屋に着く、前の小屋よりは少々大規模なりき。其從又同樣なる横手をば、惡澤を右に見つゝ進み、尾根を越へて東俣に出づ、急坂を下れば、東俣より出づる大井川の上流に架せられたる萬客橋てふ危險なる釣橋あり、橋は一本筋の針金にて釣り、此れに小枝を渡し、人の通る所のみへ、板を並べたるものなり。動搖する事甚しく、漸くにして渡り、此の奇勝を賞しつゝ左岸に晝食を取れり。最初の小屋より二里許りと思はる。天氣が少し怪しくなりし故に、そこ〳〵に切り上げ、デンヅク峠に登りかゝる、最初は河に付きて登り、暫時にして別れ森林帶に入りて登る。

實に太古其儘かと思はるゝが如き物すごき森林にして、何ごとはなしに壯嚴なる氣に打たれたり。數知れぬ大木は、倒るれば倒れたる儘にて、其れに、苔むして古色蕭然たり、道邊には、名も知れぬ草花、一輪二輪今を盛りに咲き亂れ、物すごき鳥の鳴き聲、聞くからに身の毛のよだつを覺ゆ。峠の中程に、破小屋ありて赤石連山雪中より手に取るが如くに望見せられ、寫生する者ありて一休す。急に甲州方面より曇りて、下方に雷鳴を聞く、雨少く降り露を踏みて、熊笹の間を分けつゝ登る。實に長き平凡なる峠にて、頂上と見違へて無駄に喜べる事幾度かは知らず、三時間餘を費して二時二十分漸く頂上に達す。此の邊より木賊に通ずる道あり、水を得る爲に直ぐ、富士川の支流、早川の斜面に降る、降りは一層峻嶮にして、廻り廻りて、ひた下りに降る、大平氏、彼の墜落事件の際、打ちしならん、足痛みて困難す、降る事時餘にして、又大倉組の小屋に達す。然るに道を間違へて、反對方向に取り、水汲場に到り又後に退却せざるべからず、然し水の缺乏を感じたる時なれば、

幸充分飲み、又用意せり。大倉組小屋に戻りし頃より、雨一層はげし、幸暫時にして止む。指磁石を見乍ら、方角を違へ、南へ南へと降る樣に思はれて心配せしが、夕方後方にあたりて日光を拜し、漸く東に下り居る事を知れり。下りても下りても尾根はつきず、其中に日は暮れ、道も危險になり、身も綿の如く疲れ、話聲も漸次絶え、はては、無言の儘吾と我身をはげましつゝ降る、幸にも、はるか下方に燈火及び車屋を見開し、勢を付けて猶も下りに下る、急斜面を下りて釣橋を渡れば、即新倉なりき。時は午後九時。宿屋のなき爲、牢時も徘徊して終に川口眞榮氏宅に宿る事になる。親切なる人々にて、何くれとなく世話を見て下されたり、吾々一同深く感謝する所なり。

今日は豫想外に遠く、且嶮しき道なりし故、疲勞甚しく、其上、赤石山系横斷の大成功を見る事を得て心ゆるみ二三日間の疲れ一時に發し、布團に包まるやいなや、前後も知らず樂しき夢路に入りぬ。

五、新倉より甲府へ

◎雜錄　信州より甲州へ

醒むれば雨の音蕭し、九時深く謝して、川口氏宅を出發す。見れば直ぐ前面は、早川の急流浩々として流れ、早川東岸の山腹の如き場所にある三十戸許りの僻村にして、山梨縣南巨摩郡三里村に屬す一字なり、大平氏も足の痛み去り、雨を冒して森の下なる小學校を右に見て、大峠にかゝる、非常に暑し、所々に散在せる山中のさびしき村里を通り、十二時頃頂上に達す、道邊に美麗なる白百合野生して、今が盛りと咲き亂れたり。雨は晴れて益々暑し。下り道にて草鞋を切り、非常に困難す。十谷に三時着。

草鞋を求めて居る中に又降り始む、雨の中を大いに語り乍ら、知らぬ間に道はか取りて、歐澤に四時十五分著。

四時四十五分の鐵道馬車にて甲府に向ふ。雨は全く止みて、甲府盆地青色新なり。車窓より過ぎ來し後を顧り見れば、日本南アルプスの諸連峯雲の爲に見え分かず、吾々は此等諸峯に向ひて、何事かを語りつゝ七時頃甲府に著きぬ。（松島八郎）

一萬尺を越ゆる臺灣の高山

一、	新高山	一三〇七五	四、	大水窟山	一二六五〇
二、	シルビヤ山	一二八二九	五、	南湖大山	一二四三〇
三、	秀姑巒山	一二六五〇			
	以上高士山より高し				
六、	中央光山	一二一七四	二〇、	白姑大山	一一〇五二
七、	關山	一二一〇〇	二一、	薈萊主山南峯	一一〇〇二
八、	大雪山	一一九〇〇	二二、	能高山南峯	一一〇〇〇
九、	薈萊主山北峯	一一八九五	二三、	タロコ大山	一〇九八〇
一〇、	東郡大山	一一八九五	二四、	卑南主山	一〇九〇六
一二、	薈萊主山	一一六二五	二五、	于卓萬山	一〇九〇三
一三、	大覇尖山	一一四九七	二六、	郡大山	一〇八六五
一三、	東巒大山	一一四三六	二七、	畢祿山	一〇八六三
一四、	カシパナン山	一一三五〇	二八、	能高山	一〇七三二
一五、	北合歡山	一一三〇〇	二九、	大武山	一〇六六五
一六、	東合歡山	一一三〇〇	三〇、	安東郡山	一〇一九三
一七、	合歡山	一一三〇〇	三一、	卓社大山	一〇一八四
一八、	南玉山	一一二九一	三二、	巒大山	一〇一三〇
一九、	丹大山	一一一三四	三四、	大石公山	一〇〇六〇

此外無名の高峯にして一萬尺を越ゆるもの尚多し。（野呂　寧）

六甲山の峽谷

六甲山は我國にて一千有餘米突を越えざる一小峯なれども、西攝の西北隅に聳立して、山脚遠く播丹の境に及び、東南は直ちに茅渟の海を壓し、潮の霧、夕の雲、行客をして座に其雄姿を仰がしむ。

山容は東北方に隆起して、風侵雨蝕の跡、山骨露出し、斷崖の裂皺劒の如く削立して頗る偉觀を極む、登山路は普通摩耶山より唐櫃に到るものと、石屋川又び新在家より直路を取りて頂上に達するものとあれども、住吉より舊有馬道に因りて成るものを最も平坦とす。

中にも茅屋川の峽谷を辿るものと、鷲林寺越より中畑に出るの二途は、羊腸たる山徑數々絕え、頽廢したる樵路僅に跡を止めて、今は殆んど行人を絕す、去れども六甲山の特色を窺ひ、峽谷の眞

相を知らんとせば、此の二路に因らざるべからず、而して此の二路は最後の到着點に於て、出會するものなれども、其の出會地迄の險峻は互に相讓らず、兩者恰も日本北アルプスに於ける、針木越よりする立山の徑路に似て、峯巒連亘して谿深く、巉巖鋸齒の如く逆立し、地肌は黄褐色に露出して崩壞す、其間に青松參差として點綴し、雜木は蔓爾として懸崖に絶垂す、幾多の峽谷は概ね磴呵たる巨岩、磊落たる頑石縱橫して、北アルプスの所謂空澤の如き觀をなすのみならず、奔龍の如き溪流所々より激越し來つて、風川及茅屋川の源をなす。

關西人士六甲山を說けば、唐櫃の外人村、有馬越の嶮のみにて、未だ此二峽谷の勝景に及ばざるを遺憾とす、余は常に日本アルプスの小模型として、未だ日本アルプスの峽谷を知らざる人に奬誘する以所なり。（柳　直次郎）

◎雜　錄　山岳の聯想

山岳の聯想

○あらゆる事、微細なる事にかゝはらず、「山」に關するは、一片のはがきにても云ふ、前號のお勸めに依り、引込み思案の私も、山に關する記憶を喚び起す樣になりました。

○山岳と山嶽との文字上の深い解釋は知らないが、字形としての感じは、岳と書く方が何んとなく高尙で、文藝と科學とが調和融合してゐるの樣でもあり、針峰や絶壁が重なり合つて、ギツクリとした男性的な、然かも其輪廓には、燦爛たる光輝が放たれて居るかの樣な、ハツキリとした懷しみを起させます。嶽と書れると、何んだかかう平凡な朦朧としてゐる、饅頭形ののろい山に小柴ばかりが生えて居るかの樣で、光榮ある山と云ふ感じが起らない、これ必ずしも監獄の獄の字に似てゐると云ふ譯であるまいに。

○文字の意味から言ふと富士山と云ふ名稱は、富んださむらいと言ふのだから、餘り面白くない。富國强兵と言ふのはよいが、金溜めさむらい、金を欲しがる士となつては嫌である。其故に不二山と言ふ方が意味の上に於て好いと思ふ。然し文字の恰好から言ふと不二山と云ふ淋しい文字よりも富士山の方がいゝ。富の字は又座はりのよい安定な恰好であるから富岳の泰然たる姿を思はせるにはよい。不の字は否定の意味で餘り隱やかな文字でない。金溜めの士でなく恒産あるリツキとした士と云ふので富士で我慢しよう。

○鳥海山と云ふ名稱は八九合目の處に鳥ノ海と稱する湖水があるから山の名前になつたのであらうが鳥と云ふ字の裾幅の廣い所が

◎雜　錄　山岳の聯想

既に鳥海山の恰好を現はして居るもの〻樣にも思はれる。彼の日本海の海べに高く聳えて居る姿は雞が半ば羽を擴げて曉の空に元氣よくうそぶいて居る樣でもある。鳥海山と云ふ聲を聞くと直ちに前に述べた樣な感が起ります。

○人間が物の表裏を決定するには太陽本位の場合と人間本位の場合との二樣あると思ふ。前者は太陽に相對する方を表、之れに相反する方を裏と言ふ場合で、後者は多くの人間に向いてる方を表、反する方を裏と云ふ場合である。又第一に通る方が表二番目に通るのが裏となる事もある。明い方を表暗い方を裏とし、或は陽を表陰を裏とも言ひ、尙又凸面を表、凹面を裏と言ふ事もある。山岳の表裏は其何れに屬するかが問題である。最も人口の多い都府に向いてる方が表となる事もあらうし、下山よりも登山に便なる方を表と言つたり、めつたに人の上下せぬ方を裏と言ふとか、要するに人間本位の定め方であらうと思ふ。褶曲山脈は直線に進行する事稀にして大彎狀をなし、其弧狀弓形を arc(英) bogen (獨)と言ひ彎と譯され居る樣であるが其弧の凸面を外帶、外面又は表面と言ひ凹面を內帶、內面又は裏面と言ふから日本國の地勢上太平洋面は外帶即ち表日本であり日本海面は內帶即ち裏日本である。此日本國の表裏は地勢上のみならず都府の關係や、天候の明暗、文野の程度等凡て表裏の意味を敷衍するであらう。雲の表裏となると全く人間本位でない。太陽に向いてゐる方が表で人間界に面する方が裏と言はねばならぬ。「高く雲表に聳ゆ」の雲表も小島烏水の「雲表」でも下界から言へば雲の背面即ち裏面を意味する事で、太陽に面せる明るい方面を表と言ふたのであらう。之れを稱して太陽本位と言ひたい。雲の表裏と山の表裏との解釋の根底には金貨本位銀貨本位以上の差異があらう。

○嘗て藤村が雲の研究のためにラスキンの「近世畫家論」を傍にし信州の山に隱ると云ふた樣な事を聞いた事がある。其研究の結果如何は知る處でないが、「藤村詩集」や「破戒」に現はれた藤村と云ふ其人、雲の美、ラスキン及其著書、信州の山岳、之等が如何にも調子好く揃ふて居つて渾然として融合したかの樣で雲の劇を演ずる背景としては之れ以上のものがないと思ふて非常に氣持よく感ぜられた事がある。

○今から六七年前、東京に放浪してゐた頃である。文藝美術の評論に屢々ラスキンの「近世畫家論」が引合ひに出され、山岳會の方からは小島烏水氏を先頭に盛にラスキンの旗を翻すので略ぼ其內容は想像してゐたものゝ實物は見なかつたので、雲の美、山の美を極めたいと云ふ一心から其當時上野の圖書館に行つて「近世畫家論」を見た事がある。其本は丁度此頃の「山岳」の樣に頁と頁の折り目に鋏がはいつてゐない小刀で一々切らなければならぬ。然し其第一卷第二卷及第三卷に於ける一般の藝術及一般畫家の評論に關する部分は度々見る人があつたと見えて頁の折り目は切りはなされてゐた。第四卷第五卷のターナー論や山岳美の精細なる研究に全力を注げる處や葉の美、雲の美を讃美せる頁は其時未だ鋏が入れられずに折紙のまゝであつた。美術の評論家は折り〳〵「近世畫家論」を借り出したに相違ないが第四卷第五卷は未だ鋏を入れられてない處を見ると、日本人の多くの頭からは山岳のある事を忘れられて居つたのではあるまいかと思つた。帝都の大圖書館に何年

前から備ひ付けたか知らないが未だ山岳を墓ふて此本に手を出したものは一人もなかつたかと、少しく驚いた。日本山岳會の末班に連つて以來未だ何等の寫す處のない私であれば、せめて山岳研究として此本を借出す人の便利のために云ふ變な理窟をこれて鉄の入つてない處を全部小刀で切り離してやつた事がある。さうして第一番に讀んで見たのは小島烏水の趣味の銀線にヒリリツと刺戟を與へたと云ふ The mountain glory であつた。貧弱な英語で拾ひ讀みしたまでゝあるが山岳を好愛するお陰であらうか？處どころにキラ〳〵とした山岳の閃めきがチラ〳〵する樣な氣がした。何んとも言へないぴつたりと共鳴する處もありました。高山の暗線の森林の間から雄壯に然かも懐しく見える。殘雪に、時ざき雲の合間からキラ〳〵と差込む日輪の光の樣に感ぜらるる處もあつた。

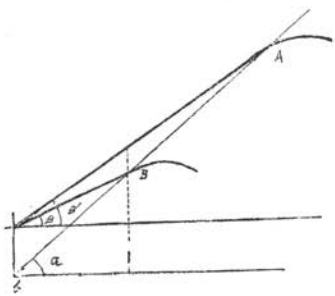
Glory と云ふ單語には三四回突き當つたが完全に其意味を會得しなかつた。「マウンテングロウレー」と言ふよりか「山岳の光榮」と言はれた方がハツキリと腦裏に染みる樣であつたが、拾ひ讀みながらラスキンのマウンテングロウの一章によつて雄壯な方面のグロウレーの意味が明瞭になつた樣な氣がした。同時に「山岳の光榮」と云ふ譯語よりも原語の方が眼の映りもよし耳の響きもよいやうな氣がする。丁度徳富蘇峰の「故郷は一種のインスピレーションなり……」の一文でインスピレーションの譯語を用ゐる人が少くなつた樣に。

○七八年前かういふ事を思ひました。

若し何人にも新婚旅行の必要ありとせば富士登山を試み山上の靈氣を通ふして二人の心を冥合せしめたいと。

○戀を知らない時分から、汽車の窓からなりとも雄偉崇高な墓はしく懐しい壯美な紫色の大山岳に對すると忽ち滿身の心血が湧きかへり願はくは全身を彼に捧げ彼の懐に抱かれて靜かに眠りたいと思ひました。

○同一傾斜角を有する山でも高さによりて急斜に見えたり緩斜に感ぜられたりするのは何う云ふ譯であるか普通常識で直ぐ判る事であるが時々聞れる事である。それにはいろ〳〵理由があらうが私は左の樣に解釋して居る。同一傾斜角（アムバ）aを有するA及Bなる山あり其高さを異にするものとして別々にあるのを假りに上圖の如く二つを重れ合したものとせばa角同一であるから斜面は一致する。人がhに立ち眼高はEあるものとせば目測を左右する角度はaに非ずB又はB'（ビーダー）である。例令ば器機によりてB山のa角を測定し三十度を得たりとせよ、其人は三十度の角はEB線の仰角即Bに見えるものなりと云ふ經驗を得る。其經驗による目測の標準を他に應用せんとするときにBと同高の山であれば誤りが少ないがAの如き高山になるとa角に變化はなくとも視線はEAとなり目

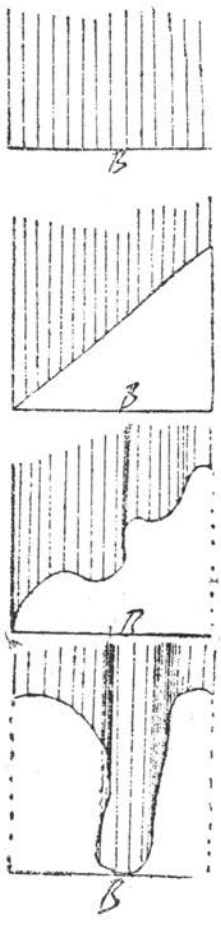


◎雜錄　山岳の聯想

◎雜　錄　山岳の聯想

測を左右する仰角は增大し。

B, VBとなるからA角までも增大せる如く思はれる。富士登山の際の頂上を見上ぐると殆んど直立して居るかの樣に見えるが實際は左樣でないのもこれがためであらう。Aの高さが高くなればなる程B角は增大し、無限に高くなれば終に九十度になると推論することが出來る。故に目測によりて傾斜角の緩急を判斷する場合は自分の位置と見透點との高さを念頭に置いて考ふる必要がある。然し眼を基脚即ちbにつけて見上れば高さによりて緩急に感



ぜらるゝ事はない。北齋の書いた富士山は非常に急であるが山其ものゝa角は兎も角見樣によつては、B角に變化を來し急に思はれる事もあるから北齋の眼が必ずしも違ふて居るとも言へない。北齋の繪は山其ものゝ實際の傾斜角を示したものでなく、或る地點からはあの繪の樣に誰れの眼からも急に見える事があると云ふ意味とすれば必ずしも非難すべきでなからう。

○富士山の頂上から下を瞰下ろしても、自方は左程高い所に居るとも思はれない。それは下に居れば三四千尺もあるかと思はれる山の頂も富士の頂上から見れば平地と選ぶ所がなく一樣に見えるからであらう。

○富士山の頂上の恰好が何れの方面から見ても大體似よつて居るのは頂上の火口が圓形に近く外輪山の峰座が芙蓉即ち八と云ふ偶數で整然として相對して居るからであらう。

○山岳に雲霧の生じ易い理由は温度の冷却、温風の遮止、森林地被物の水濕保存等、種々あるであらうが私はそれ以外に山岳の地形が預つて力あるものと思ふ。水蒸氣の蒸發は成る可く直上の天空に向つて上昇せんとするものであれば水平面積に比し其表面積即ち蒸發面の大なるもの程空氣に及ぼす濕氣の影響は有効確實である。他の條件が同一なりとすれば蒸發量の大小は空氣の接觸する表面積の大なるもの程多いと言はなければならぬ。太陽光線の當り工合や其他の關係により表面積に正比例はせぬまでも大體に於て前述の事が言へると思ふ。今第二圖に示すが如くBなる面積を有する平地より蒸發する水蒸氣の量を甲に示す平行線の密度を以て現はし同樣に乙は水平面積甲と同一なる傾斜地、丙丁は凹凸極りなき球面即彎曲面を有する傾斜地とし其上にある平行線はそれより生ずる濕氣量の多少を現はすものとすれば、蒸發量は水平面積の如何に關せず其表面積の大小に關係するから等しくBなる底面積を有するも

のでも空氣を接觸する表面積即蒸發面の大なるもの程蒸發が多く然かも底面積同一であるから空氣の影響區域は同一である。此同一なる空氣に對して多量の水蒸氣を上昇するもの程其空氣の濕度は濃密で之に反するもの程濕氣が少くないと見なければならぬ。

故に等しくBなる低面積を有しながら乙は甲より其表面積大であつて蒸發量も多く、濕氣の量を現はす平行線は密になる。同樣に丙は尙密になる。丁の如き斷岩絶壁は表面積大にして然かもそれより生ずる水蒸氣は相共に小區域の天空に上昇する。峽谷から雲霧の生じ易いのは蒸發水蒸氣が周圍の空氣に平衡融通せらるゝ事の少ないためもあらうが丁の如き關係で大なる表面積より生じたる多量の水蒸氣が小區域の空間に集合し、忽ちにして空氣が水蒸氣の飽和點に達し對岸の水蒸氣と共に凝結して遂に雲霧の生成となるからである。これは我々が山岳旅行の際屢々目擊する現象である其場合に森林があると此此作用が益々敏活に行はれる。

○尙又山岳が相連つて山脈をなす時は濕風を遮止する。即ち比較的溫度の高い下空の風が山脈のために一度は頂上に吹上げられそれから背後に吹き入るものであるが、下空の風は高溫で容易に水蒸氣の飽和點に達しないので絶對的濕氣量の多い場合がある、濕風が山脈のために遮止せられ上空に吹上げられると溫度は低下し水蒸氣の飽和量が減少するから下空で凝結しなかつたものでも頂上附近に至れば水蒸氣を持ちきれないで飽和量以外の水蒸氣は凝結して忽ち雲化する。森林があれば此活用を敏活になる。此等の觀察も山岳旅行の一興である。

○同一地域の同高の山脈でも濕風に直角に走るものと之れに角度をなすものとによりて雲量に差異がある。直角をなすものは雲を生ずることが早く然かも濃密な雲となり、濕風に角度をなす山脈が既に雲がはれても、直角をなす山脈がまだ雲の冠りを脫がぬことがある。これ風に直角なるものは、風は頂上に向つて直上に吹き上げられ、角度をなすものは、斜めに吹き上げられるから、同じ速度でも直高を增すことがのろい。又斜めに吹かるゝ結果頂上を吹き越さずに中腹から背面に吹き廻はされる風も多い。それで風に直角なものよりも雲が薄く雨も少くない。山岳旅行の際驟雨襲來の順序を眺め、山脈の走向を風向との角度の關係を研究するのも趣味あることである。

○水蒸氣を多量に含む風でも其通過する空中が水蒸氣の飽和點より遠い狀態にあれば多少の薄雲を生ずるか又は雲も生成しないでそれなり素通りして終ふ。然し凸凹恰りなき褶曲面を有する傾斜地は低面積に比し表面積が多いから前述の理由によつて空中濕氣に及ぼす影響は有效確實である。故に山岳がなければ唯素通する濕風でも、山岳あるがために濕風の通路が飽和か又はそれに近い狀態にあると、忽ち水蒸氣の過剩を來し雨を產むのである。申命記十一章十一節「汝が濟たり（ゆきて獲るところの地は山と谷の多き地にして天よりの雨水を吸ふなり」と云ふのは結果のみを述べられて其原因を說明してゐないが何んだか物理學の結論を讀む樣な氣がする。

○經濟界が活氣を呈して生產事業が盛に勃興して、何事業に拘らず利廻の好い時分に際しても相當の資本がないと其利を吸ひ取る事が出來ない。金錢でも或る程度以上の額に達しないものは資本

◎雜　錄　山岳の聯想

として貸付ても利子を産むことは出來難い。濕風は生産事業である。事業の氣運が起つても資本がないと其利を收むることは出來ないと同樣に、飽和水蒸氣量即ち或る程度以上の資本がなければ其濕風の利子たる雨滴を取り入れることが出來ない。林業の資本に相當する森林蓄積でも或る程度以上の材積がないと其利子たる連年收入は生ないと云ふ事である。

○さすれば飽和せる空中の水蒸氣は濕氣の資本であつて雲霧雨雪霜、露、雹、霰は其利子の如く、此の資本の絕對量が溫度により て變化することも普通資本の大小程度が利率の大小に支配せらるゝ樣なものである。

○水蒸氣、塵埃其他の媒介物がなければ、宇宙の光のない部分（暗黑と言ふべきか）は青く見えるさうだ。高山の頂からの空の青は濃い。

○天地青壞の青は最も天に近い雲の意味であると云ふから千八百八十九年巴里に開かれたる萬國氣象學會に於て英人ホーワード氏の分類法を採用し雲を分ちて十級とせる中の最高層雲即ち卷雲 cirrus に相當するものであらう。而して此雲は平均高二萬九千七百尺大約富士山の二倍半、青壞の差と云つても餘り大した差でない樣に思はれる。

○恰も無から有でも生ずるかの樣に見ゆるのは夏の炎天に高山の直上に凝結する雲である。

○雲の種類形狀を極むるのは夏の空が最もよい。鎭夏の娛樂にもなる。

○最も雲らしき雲、摑んでも摑み甲斐のある樣な雲は夏の炎天の積雲即ち雲峰である。

○天下を橫行せんと意氣込む人はあれど縱行せんとする人もないか。山岳には橫斷旅行の外に此頃は縱走が流行する樣である。

○東京の冬の空の樣な澄みきつた時に高山に登つて遠くを望んだら眞に天下の大觀であらう。

○空中飛行機及飛行船が一般の交通機關となつたら著名の高山の頂はこれが停留場となり其處に人家も多く出來て雲上の「御花畑」もあらさるゝであらう。

○葉山、逗子あたりの海岸の景色もさることながら國粹を突出した樣な富士、足柄、箱根、天城の諸山が漫々たる相模洋を包んだ光景が此名勝の七八分を占めて居る樣だ。

○海の水が山に會ひたくなると雲となつて陸に飛んでくる樣に思はれる。

○自然界の觀察を主とする文學者に流れる水の行く末に思を寄せる人は多いが其過ぎにし千變萬化に想ひ及ぼす人は少ない。

○信州長野市の北方に黑姫山と戸隱山とが並んで居る。姫とし言へば、姿優しく色美しき女性と聞ゆるに黑姫とは殘酷で氣の毒な命名の仕方と思ふ。

○自然文學に與つて居る人だちの事を想像すれば次の樣である。

○吉江孤雁と言へばどうやら自然の寶庫から甘い汁でも吸ひ、造化の懷にトロ〳〵と醉ふて見やうと山湖のあたりからフワ〳〵と攫がる樣に飛び廻つて時々森や林に近寄つて來る小サツパリと可愛い樣に白い一羽の雁が目の前にチラ〳〵する氣がする。

○中村星湖と云ふ其雅號は其産物にふさはしい文字である。暗綠の森林に取り圍まれた、清い山湖に、澄み切つた秋の空から、銀色の涼しい星が差込んで居る。其星が凝つて甲斐の葡萄となり、其葡萄に露を帶んだ樣に、クル〳〵と水々しい眼をした女が山國に生れる。さういふ風な女性が屢々星湖の小說の題材になつた樣な氣がしてならぬ。

○小川未明と云ふ文字と二三の作品とより其人を想像すれば、朝霧深く立ちこめし小川の邊りに、獨り佇み、未だ夜の幕の全くうせやらぬ、小川の源の方に深き思ひをよせ、ペンオースのいささ川に思ひを焦がした小女ダツフネーの如く、汀の蘆の根を洗ひ小石の上を流る〻小波の調子にひかれて、トロ〳〵と神秘の境に入り込んで、餘所目から見れば魂を拔かれたかの如くに、トボンとして、近所でダイナマイトが破裂しても一向氣が付かんと言ふた風で、どこまでも宇宙のドン底の暗い所に行つて見たいと思ひ込んで居る樣に見える。

○春の雲は輪廓に乏しい。結合力がない。

○世界中で一番晴空の青味の濃いのは伊太利と日本とであるとのことである。

○アルプス山に於けるラスキンから見れば地質學は自然美學の一節となつて居る樣である。地質學者は地質學を美學と見なくともよいが普通人は美學の一節として取扱ふてもよからう。而して其自然美學の目的は何んであらう。

○文筆に興はる人々のうちで、山に關係した雅號を有する人も大分ある樣であるが、其文章に現はれた思想趣味から見れば山岳の境地に踏み込んで見やうとするものよりも、山岳の遠望のみを好愛するために山にちなんだ稱號をつけたのではあるまいかと思はれるのが多い。三宅雪嶺と云ふて山岳の境地に飛び込んで眼さむるばかりの殘雪を好愛する元氣もない樣である。比良の暮雪とか夏季炎暑の候信州の高原から日本アルプス大連嶺の雄大なる殘雪を眺むる樣な其光景が好かれるので雪嶺なる雅號が出來たのではあるまいかしら。

○山路愛山と云ふのも、山岳の懷に包まれんとするよりも山岳の遠望を主として愛されるのであらう。

○德富蘇峰も焰々と煙を吐いてゐる阿蘇の霧島火山の雄姿に引きつけられたのではあるまいか。

○水や花を好愛するかの樣な雅號を持つた文士の大抵山岳の境地にまで踏込まなければ序知の出來ん人々の樣に思はれる。實際そうである。花袋、藤村、鏡花、水哉、水蔭等作物には山岳の奥底に入り込んだ文面が表はれて居る。此點から言ふと烏水さんも此部類に入れてよからうと思ふ。（山本德三郎）

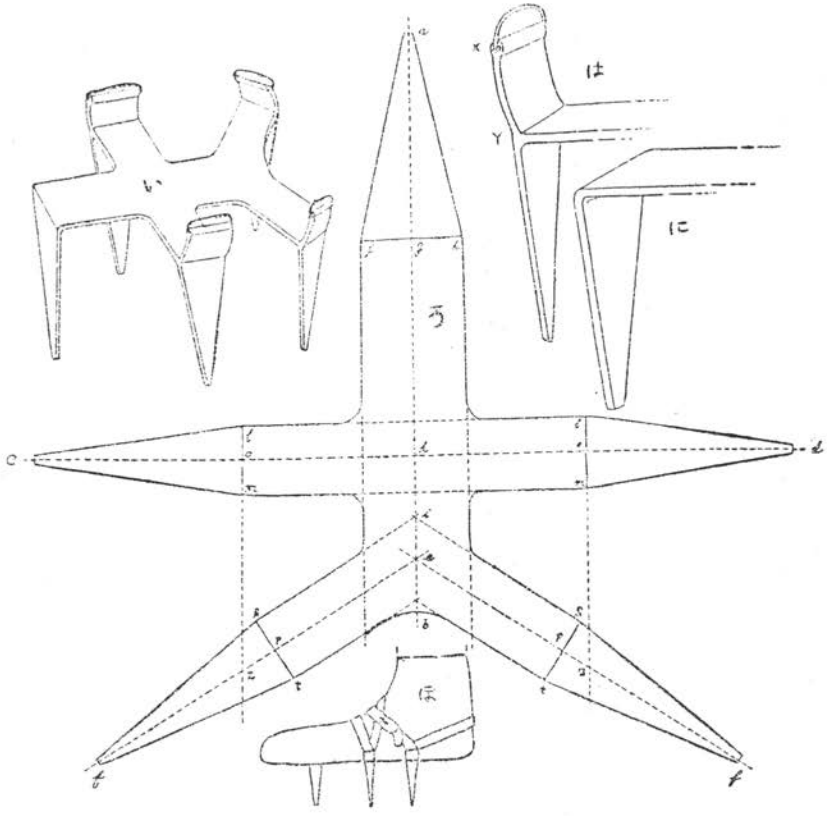
再び「東京より見ゆる山」の補遺

本誌八年二號と九年一號とに載せたスケッチで、富士山から右の方秩父の笠山に至る間の重なる山を紹介した。本號に載せたスケッチは笠山から更に右に見ゆる山を紹介したものである。之等

の山々を望み得る市内の展望臺は淺草の凌雲閣と芝の愛宕の塔だけであらう。其他駿河臺のニコライの塔や高臺の上の火の見櫓といふやうな場所に上れば、多少は見ゆるには相違なからうが、普通誰にも自由に展望し得る所は、前記の二ヶ所のみである。尤も日光の男體山や奥白根などは市内の街道からもちよい〳〵見られる、例へば大學の赤門前からは冬の間よく此正面に男體山が見えて、冷い風が其方から吹きつけて來る。然し全體を大觀するには是非とも凌雲閣に登らなければならない、愛宕の塔ではまだ少し低いので、過半は前面の木立に遮ぎられて了ふ。凌雲閣ならば何一つ遮ぎるものは無いが、惜しい事には淺間山から赤城山の見ゆる方向に赤羽、王子等の工業地があつて、林立せる烟突から盛に吐き出す黒烟は、遠慮なくこれらの山々を呑吐して、容易に全容を窺ふことが出來ぬ。そこで自分は烟などに邪魔をされないで、ゆつくり眺める事の出來る場所はないものかと、市外近郊の地を探し廻つて赤羽臺に立つた時、其眺望の廣大なのにおどろいた。大菩薩の連嶺から右の方秩父、上信界、上越界、日光、八溝、筑波の山々まで、空氣の清澄なる日には手に取るが如く見得る、此スケッチは其中の淺間山から男體山に至るまでの間に見ゆる山々であるが、此等に就ては次號の紙上でゆつくり書いて見ることにする。（木暮理太郎）

新案の金カンジキ

從來日本にて用ゐつゝありし金橇は、使用上不便の點多く、此れが改良を要したり、歐洲にて用ゐつゝあるものは、靴に着用する爲めと、主として氷結したる所を登攀すべき爲めに、直ちに取つて用ふべからず、在來の日本のカンジキの缺點の最たるものは、結着法の點にあり、余は歐洲にあるものゝ長所を考慮し、新なる考案に由りて、金カンジキを創製せり、此カンジキは別項會報欄記載の美滿津商店をして製作販賣せしむる事とせり、余輩は此れを以て、滿足するものに非ず、幸にして使用者諸君の忠言を惜むなからん事を。



新案としての要點は結着法の改良と、齒數を增し、或角度を有せしめたる點にあり、結着法及び其構造は上圖に示すが如し。

a g 二寸・g h 二寸六分・h e 一寸・h o 一寸六分・o d 二寸・o z 二寸〇分五厘・j k 一寸・l m 七分・s t 七分・p e 一寸六分。

x y は l m、s t の部に由りて異にす即ち

l m の部分の x y の長さは七分。

s t の部分の x y の長さは一寸。

齒の先端は約一分の巾を有す鐵の厚みは一分五厘位にて十分なり j k の部分は單に曲げたる丈けにてかなり、製作技

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（一）

術上實物は歯の形を多少變更したり、上圖と異る點あり、結着紐を裝し、相當の外包を附して發賣せしむる事とせり。（大正四年七月高野鷹藏）

各地の山岳會彙報（一）

山岳會の設立さるゝもの各地に多く、同好諸君の爲め本欄を特設して、各地山岳會の機關に提供せんとす。

蹈雲會の發會及び建碑式

京洛の地、山岳四周、東に三十六峰の婉娗たるあり西に愛宕の屹立するあり、北に鞍馬、貴船の盤居するあり、南に男山、天王山の屏立するあり、而して叡山は夫れ其秀なるものか。巳酉の歲、今村學士（幸男）住友銀行京都支店長の任に就くや、乃ち四明嶽に登り群峰の巒々たるを歡び、淡海の漫々たるを樂む。氏や夙に日本山岳會員として海内に名あり、往年結城學士（豐太郎）の日本銀行京都支店長の職に在るや、夏として相携へて白馬、立山、鎗ヶ岳等の諸山に登らざるなし宜なる哉、氏の京洛に在るや、春夏秋冬、四周の群峰に遊ばざるなく、日曜祭日、登山を試まざるなし、終に四明嶽に登るを呼んで散歩となすに至る。嗚呼京洛の地、眞に知己を得たりと云ふべし。而して氏や又其の樂を獨りせず、或は行員を率ゐて山野を跋渉し、或は石坂、市村、小川の諸博士若しくは余等を慫慂して登岳を試ましむ。願ふ、辛亥の中夏、石坂博士と共に、氏に隨ひ四明嶽に登らんとするや、所謂「最後の五分」の峻坂に至り、氣息奄々行歩次かず、遂に中道にして低に就きしを。二回、三回に至り、既に少憩數次しにて攀るを得たり、而して今や又些の苦痛を感ずること無し。今村氏徹りせば、余輩何んぞ夫れ茲に至るを得んや。氏京洛に在ること茲に五年有餘、氏の風を聞き斐然として立つ者枚擧に遑あらず、近畿爲めに風靡すと云ふべし。

今歲乙卯元旦、石坂博士と共に氏に隨ひ叡山に上るの途中、小會を組織するの談あり、二三月の降に至り議漸く熟し、名けて蹈雲會云とふ。俚俗、登山を呼んで「ソラニユク」となすに基く、實に織田博士及狩野博士の推敲を經たるものなり。是より先き、四明嶽に達するの道、長短難易數條あり、交互錯踪、都人士の惑ひ易きを慮り碑を立つるの議あり。乃ち先づ一乘寺村の北端、辨財天道との交叉に一小碑を立て、又雲母坂口に一大碑を建つべきを決し、書を當代の名筆山本竟山翁に請ひ、刻を一乘寺村の石工山本尺山に託す（尺山の居詩仙堂に近し、故に丈に對して尺と云ふ、宇音又赤山に通ず、蓋中島博士の命名する所なり）。而して余の居偶々一乘寺に近く且贄を竟山翁の門に納るの故を以て其工を督す。唯、鐵刻善く筆意を寫す能はず翁の名を傷くるの慮あるは、余の憂を禁ずる能はざる所なり。碑成るの日（四月二十五日）發會式並びに建碑式を擧ぐ。此日偶々織田博士、狩野博士の行を難

たんせらるゝあり又神戸博士、市村博士、小川博士、佐々木博士星野學士の來會を妨げらるゝあり、一行今村學士、中島博士、石坂博士、青柳博士、守屋學士、青柳學士及び余の七名に過ぎずと雖も、登叡を試み、碑を檢して發會式を擧げたり。圖は一行の大碑を圍むものにして、今村氏の撮影する所なり。碑文中「叡」字は、竟山翁が六朝顏道照の碑に採る所、其書體と相俟つて晉魏の遺風を傳ふるに足れり。

噫嘻蹈雲會、之を率ゐるに今村學士の建脚あり、織田博士、野狩博士の詩文あり、石坂博士の書あり、佐々木博士の諧謔あり、中島博士の縱談あり、小川博士の橫論あり、市村博士の氣焰萬丈なるあり、守屋學士の快辯一瀉千里なるあり、神戸博士の經濟あり、星野學士の理財あり、青柳博士の電氣論あり、青柳學士の保險談あり、眞に多士濟々と云ふべし。蹈雲會今後の記事が多趣多端にして、又奇談逸行に富むべきは想像に難からず。而して余や偶々石工を督するの故を以て、禿筆を驅り此記を作る。又一奇と云はざるべからず。（乙卯五月初七、於如意山房東海居士誌）

一高旅行部創立

去る大正二年五月を以て成立したる、我一高山岳會は、其後全校の謳歌する所となり、大正三年三月、第一高等學校々友會旅行部として、公的のものとなつた。それで創立紀念の爲め、且つは一般校友に部を紹介する目的で、五月十六、十七日の兩日、展覽會を開催したが、諸方の御盡力で、相當に廣い展覽室も滿しからぬ位に出品物が集まつた。觀覽者中、非常に熱心な研究的態度の人が多かつたのは、當事者が殊に心強く感じた所であつた。（出品目錄略）。更に同月三十日には、講演會を開き左の講演があつた。

一、駒ヶ岳より仙丈岳（實物幻燈使用）　部員　廣瀨部長
一、櫻島視察談　山崎博士
一、旅行談（幻燈使用）　伊東博士
夏期休暇には我部の最も活動すべき時である。即ち我部は左の諸班を設けて、團體旅行を擧行する事とした。

第一班　木曾御嶽及駒ヶ岳方面　一組
第二班　常念山脈槍ヶ岳上高地方面　三組
第三班　白馬岳方面　二組
第四班　針ノ木峠を經て立山に至る　一組

七月一日、第一班が新宿を出發して木曾に向つた以來、七月三十日、第三班第二隊が糸魚川で解散するまで、何處が知ら日本アルプスで、我旅行隊が活動して居なかつた日はない事になつて居る。尙其他本部員の個人的旅行としては、南北日本アルプスを縱橫に活動したるを初めとして、或は海外に遊ぶものあり、或は殖民地を訪ふあり、其他あらゆる方面に未曾有の發展をなした。

十月、報告講演會を催し、展覽會に於ては主として夏期旅行の採集物等を陳列し、講演會に於てはその報告講話をなした。

一、針ノ木峠を經て（實物幻燈使用）　部員
一、白馬岳より祖母谷まで（同上）　同上
一、土耳其旅行談（同上）　伊東博士

同月下旬、本部は數日の休暇を利用して左の團體旅行をなした。

◎雜錄　各地の山岳會彙報（一）

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（一）

第一班　赤城山方面
第二班　富士裾野廻り

十一月、談話會と稱する研究的小會を催し、

一、白峯三山縱走談（實物幻燈使用）　部　員
一、大島の話　（同上）　同　上
一、新占領地の話　廣瀨部長

等の談話あり、會員相互旅行の智識を交換した。當日は木暮、梅澤、八代、辻村氏等の諸先輩が出席して下さつた。尙談話會は將來は「一週間の休暇を如何に利用すべきか」「何岳には何處と何處とより登り得べきか」「何山脈と何山脈との比較」とか云ふ樣な事を研究する機關にし度いと考へて居る。

以上を以て、部創立以來の經過は大體報告し了つた。

尙最後に少しばかり貴重なる紙面を拜借し度い。

山岳第八年二號に於て○○生氏が云はれた通り、高等學校時代は、あらゆる方面から考へて旅行とか登山とか乃至は其等の研究とか云ふ事に對して、最もよいコンディションにあるものである事は事實である。我舊一高山岳會が創立以來一年ならずして、校友會の一部となつたと云ふ事も誠に故ありと信じて居るのである。それで部は益々微力を盡して此好風潮を誘導激成する積である。

何分創立早々の事とて、設備の完全を期する事が出來ないのであるけれども、數張の天幕、其他の旅行器具、參考書籍地圖などを備へ、部員の使用に供して居るが、每休暇に之を利用するもの多きは勿論、同窓會とか懸入會とかで土曜の放課後より日曜にかけて箱根、秩父等近距離の地に、天幕旅行を試みるものあり、又鍋等を持ち出して郊外の原つぱで馬食會を催すものあり、設備は誠に不完全であるけれ共よく利用されて居ります。

德川三百年の鎖國は、參宮にさへも水盃や泣きの涙と云ふ樣な女々しい氣風を養成してしまつたが、元來雄大放奔な國民性の日本人であるので、殊に元氣のいゝ學生友などは、先に立つ者が一寸導いてやれば、いくらでも延びるものだと考へます。

尙末筆ながら、我旅行部が今日の成長をなして來たに就いて幾多の御好意と御盡力とを辱なした、日本山岳會、幷に我々をしてリユック、サックの重みを兩の肩にのりこませて踏破千山万岳煙と怒鳴る快さを、味はせて下さつた諸先輩に心から感謝の意を表します。

二高山岳會趣旨

（大正三年六月發表）

一、本會ハ山岳ニ關スル一切ヲ研究シ山岳並ニ旅行ノ趣味ヲ普及スルヲ以テ目的トス
一、此趣旨ニ基キ左記ノ事ヲ行フ
イ、隨時會員ノ會合ヲ催シ各種專門家ヲ聘シ山岳ニ關スル講話ヲ聽ク
ロ、會員相互ノ山岳ニ關スル研究及經驗ヲ交換スル爲隨時會員ノ談話會ヲ催ス

ハ、山岳ニ關スル内外圖書ヲ備ヘ會員ノ閲覽ニ供ス
ニ、各休暇休日ヲ利用シ會員中ノ有志者ヨリ成ル登山隊ヲ組織シ山岳旅行ヲ擧行ス

一、本會々員ヲ左ノ二種トス
通常會員（本校生徒及本校出身大學生）
會費毎學期金貳拾錢
名譽會員（諸先生）

○現今の通常會員八十四名（大正四年二月）

○幹事（大正四年二月十八日決定）
廣井愼平　中上川小六郎（庶務）
宇野實　田幸彦太郎（會計）
小倉謙　石川欣一（記錄、書記）

○第一回山岳旅行
大正三年七月一日―四日
栗駒岳…（嵐のため中止）　方面　十一名
吹上間歇泉

○第二回
大正三年九月廿六日―廿七日
泉岳　十二名
以上　二高山岳會幹事

二高山岳會大會記事

若い者の辭かも知れない、無茶苦茶に大きな計畫を立てゝ、さうして無茶苦茶にやつて仕舞つた。

幸、日本山岳會の、殊に、高野辻村兩氏の、非常に熱心な御援助があつたので、我々としては、成功を納め得た、こゝに先づ御禮を述べる。

五月の八日ほ、妙に寒かつた、朝早く、ステーションに講演者たる二氏をおむかへに行く、そのまゝ學校に廻つて、展覽會場を整理し、一方門のわきのまつかな若葉の楓の下に、天幕を張つた。陳列場は二階の會議室でやつたんだが、玄關から會場迄、兩側の壁にはポスタアなほりつけた、會場ほ、長方形の部屋だつたが、次のやうにわけて陳列して見た。

（一）机、（主なるもの丈）
I. 日本の登山用具、寫眞其他
II. 歐洲の登山用具
III. 圖書
IV. 博物標本
V. 山の模型其他
VI. スカンデイナヴイア、シユヴルツヴルド其他の寫眞繪書

（二）壁、
1. 日本の山に關する寫眞エハガキ
2. 3. アルプスに關するエハガキ

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（一）

4．植物標本

5．スコットランドの山に關するエハガキ

6．Winter Sports に關する器具及寫眞

何しろ、無暗に色々なものが集つたので、實に玉石混合の感があつた、立山の寫眞ペン、ネヴイスの繪端書なんかが出し切れないで行李の中に入れたまゝ、隅の方に置いてあつた。

十二時になると、もうヲイ〳〵見物人が來る、いつもは、先生が集つてむづかしい顏をして、我々の勤怠や出來ないのを討議した、此部屋も此二日丈は天國のやうだつた。

Iの机には高野氏の雪靴カンジキが列べられて非常に人目を惹く。それでも、流石は雪國のことゝて別に大した興味も、與へなかつたらしい、そこの壁には阿里山の大きな寫眞があつたし、又吉澤庄作氏の四つ切の美事なのもあつた、茨木氏の十餘枚の水彩及油畫のスケッチは美しい事一方ならず、次にIIにはアイスアックス、リユックザック、近藤氏の白い帽子。雪眼鏡。マニラ、ロープ迄は、よかつたが、誰だかが、ネールドブーツ（には違ひないが）と云つて、日本の兵隊靴を置いたから、直ちに机の下に投り込んで仕舞つた、こゝには、特にウエストン氏の寫眞と「ジヤパニースアルプス」を出した、2と3は一面の寫眞繪畫、大學の出品として、モンブランの大きな寫眞もあつた、無數の繪端書には呆れる人が多かつた。

IIIは山に關する圖書で、山岳雜誌は勿論、ヒマラヤの登山記、スクラムブルスなのから始めて、泰山の記もあり、富士山の古本もあつた、こゝには、他の所と同じやうに、椅子を置いたので、熱心な人は、すぱり込んで讀んでゐた、學校の獨逸人の先生は、ここで二時間ばかり妻君令孃と本を讀み、獨逸語主任の先生は、今度圖書館に、ヘディンかナン センの本を、きつと買つてやらうと約束された。

IVには、大學の出品、氷河時代の動物の化石標本、それから、東北學院の飯柴氏出品高山植物の咲いてゐるのが數種、壁には上部に安田敬授の植物標本を、下部には、上方屋出品の獨逸製の三色版の高山植物繪端書を、ヅラリとならべた、5はスコットランドが主で、其他の山の繪端書や、何かをならべ、6の隅は特にカインタア、スポーツ、に占領させて、アルペン、スキーと、ノールウエイ、スキー。ユングフラウのスキー繪端書、ラップの子供がトナカイに橇を引かせてゐる繪、それからスレッドを二つ置いた、冬中使つた品物なんで色々な事を思出して面白かつた。

Vには、二高山岳會の連中が作つた、藏王の模型、すこぶる手の込んだもので、皆感心してゐた、ユングフラウ三山の小さな模型に、よだれをたらしたり、矢部博士出品のアルプス旅行に關するポンチ繪に、腹をかゝへたり、大部忙しい壁と机だつた。

VIの机はあとになつて、いよ〳〵出しきれない物の中の惜しい物を、出す爲に使用した。ネープルスの大寫眞、シユルツアルドハウスのいゝ繪端書、フイヨルドの風にサク〳〵と鳴る白樺の景色、ほとんど歐洲の全體を集めたが、あとで來られた辻村氏がどれに對しても、くはしい說明を與へられたには驚いた、土曜（八日）半日には、割に來觀者はすくなかつたが、日曜は天氣もよく、又前日の評判を聞いた人もあると見えて、大變な人だつた、英國人

人が二人、いづれも一人で來て、吃驚して奥さんなつれて來たのも面白かつた、お國自慢に、レークカトリン の寫眞の前に椅子をはこんで、すはり込んだり、Bonnie Bloomin' Heather を指でつついたり、幹事は大部説明でひどい目にあつた。

第二師團の方でも、非常な期待を持つてゐた由だつたが、丁度支那の方が急にあやしくなつて來たので、日曜日でも忙しくつて來られぬとの事、二高山岳會に迄影響するとは偉いと思つた。

外に張つた天幕は、日本山岳會の圓錐形のが一つ、自分の携帶天幕が一つ、携帶天幕の中には高野氏の寢袋を入れたので、もぐり込む、イタヅラ者もゐた。

自分で、自分を批評するもの妙だが、たしかにこの展覽會は玉石混合だつた、だけども成功した、女のお客樣もずゐ分來た。

土曜は、五時半頃、まだ展覽會にお客樣が來てゐる内から、講堂の方にもう講演をきゝに來る人がゐるので、實に忙しく、とうとう夕飯も食へなかつた、丁度同じ日に、仙臺座でお釋迦樣の誕生日の祝があつたが、これは我々と違つて、偉い人が幹事をやつてゐるので、押しつけられて無理に行く人が多く、おまけに、丸い頭をしながら琴の彈奏とか、釋迦一代の活動寫眞とか盛に雜俗混合をやらかすので、こつちはずゐ分打撃をかうむつた、それでも約十分の一の女のお客樣もあつて五百人内外集つた。

エピデヤスコープは、本多理學博士の非常なる親切を以て、特に助手高柳君が來て下され、當夜美事なる像を東北の山好きに示すを得た、こゝに厚く、我が山にかはつて、理學博士本多光太郎氏にお禮を申上る。

◎雜　錄　各地の山岳會彙報(一)

六時半、校長の挨拶で、會ははじまり、第一がすこし山とは違ふけど、大學の岩崎講師の南洋の話、今度占領したパラウ島がダラル大石灰洞の探檢談、土人の酋長のお嬢さんの裸なの、コーモリの巢なの、あるひは實物を示し、あるひは幻燈によつて、すこぶる面白く話された。

其次は高野氏の日本アルプスの講演。日本アルプスと云ふ名の起原から、地理上の説明、登山の目的、其他歐洲アルプスと日本アルプスが氷河の有無、其他によつて如何に違ふかと云ふ事を、槍とマツタアホーンで比較されたり、朝の山の景色、雲の往來、又日本の山が森林、火山、水に富む事の説明として、針木峠にいく路の森や、燒岳や、上高地などの、幻燈を使用された、それからカール、萬年雪、クレヴアス、などと云ふ耳に親しい事も話され、高山植物の話もあつた、五色原のキヤムピングの寫眞なんかは、實に胸も躍つた。

次には割れるやうな拍手と共に、辻村氏が長脚を演壇上にはこばれた。

大體の筋は日本山岳會大會の折りの講演と同じだから略すとして、リヨンの川の水の色に心を引かれた事や、スカイスに入つたと云ふ心持がして、悦しくつてたまらなかつた事や、其日は一日そこでプラ〳〵して寫眞をとつた事や、いよ〳〵インタアラアケンで近藤氏と落合つた事や、話はだん〳〵面白くなつて行く。

グロースシユレックホーンの話の時には、本當に手に汗を握つて仕舞つた、講演者も流石に思出に堪へなかつたと見えて、聲はひくゝ、さうしていくらか、センテイメンタルになつて行く、我

◎雜　錄　各地の山岳會彙報(一)

我の心もひくゝ、落つき、しかも何とも云へぬ不安が、身體中を走る、非常に悪い岩があつて、これをやつと廻つてから、四人共上を向いて休んでゐました、雪に燒けて顏は妙に、暑く、近藤君はしきりに頭痛がすると云つてゐました、丁度其時、私ではありません、誰だか、アツと叫んだので、ふと見ると二三間上から、雪のかたまりがころがつて來る、ハツと思つて、アルペンストックを打つた時には、私達は、もうアバランシの上にのつてゐたのです、私はこの時、針木峠ですべつた事をふと思出しました、其時に突然強く後にひかれたかと思ふと、もうひつくりかへつて仕舞つたのです……。

聲はしばらく中絶する、自分の心の中には、ヘスラア、ホイツ近藤氏辻村氏の四人が、ロープにからまつて雪から出たり、入つたりして、手もつけられないやうな、傾斜面をころがつて行く所が見える。

「もう駄目だ、と思ふと又ひつぱられて出る、助かつたと思ふと、又雪の中にたゝき込まれる、今度こそは死んだらうと思ふと、又ひつぱり出される、かう云ふ工合にして五六度出たり入つたりしてゐる内に、びどく邪見にアルペンストックをもぎ取られたかと思ふと、もうそれつきり何にも分らなくなつて仕舞ひました……。

辻村氏は、スカイスのガイドの駄目な事をしきりに云はれたが、さうして見るとキヤレルなのはやつぱりもう昔の夢になつて仕舞つたのかしら、どこでも、同じくだん〳〵人間は悪くなつて行くと見える。

辻村氏の講演、すぬ分長くかゝつた。それでも湖畔の白樺が黃色くなりはじめて、さうして最後にユングフラウのアルパインクローで、講演會は終つた、それから應接室に一同集つて菓子を食ひ、色んな面白い話をして、この夜は散會した。——鵜二

終にのぞんで日本山岳會、殊に高野辻村兩氏にあつく御禮申上ます、なほ今後は會員丈で一學期に一度づゝ會合をいたさうと思つてをりますが各學校及地方の山岳會の御指導を厚く希望致します。(幹事)(出品目錄は畧す)

慶應義塾山岳會の設立

城南の一角三田山上に塾生の所謂稻荷山と云ふ、公孫樹などの老木の繁つた小高い所がある。晩秋から初春にかけて、外界は冬枯の寂寥より何物をも得られない間獨りこゝでは、透徹した空氣を通じて、玲瓏たる富士や白無垢の大山、さては秩父の連山など、偉人の群のやうに、我々の眼前に展開されて、山岳黨の塾生は飽き足らず、享樂を恣まゝにすることが出來るのである。

その頃になると朝七時頃から、既にこの稻荷山に來て、崇高莊嚴な景我を忘れて居るものあり、または夕陽山背に沈んだ靜寂な優美な、自然の藝術品の觀賞に、態々出直して來るものもある。中では地圖や、中村清太郎氏の愛岩山からのスケッチを持つて來て、見えるかどうかと、對照して研究して居るものもあれば、または熟心にピークやリッヂを寫生して居る篤志家もある。

または、品海より房總三浦半島の諸山までも、一望の中に集め

得る圖書館には、山岳會の雜志や、小島烏水氏著の日本アルプス日本山水論、高頭氏の日本山岳誌等より、ラスキン、チンダル等の山岳に關する書物も少しはあつて、同好の塾生に、盛に愛讀せられ、中では哲學詩文等の書物を讀むで居る中に、アルプスとかアルペンの形容詞のついたものや、苟も山岳に關する事ならば、一字一句も逃がすまじとて、總ての讀書を、山本位に讀む人もあるさうである。

此等の山を愛し、山を憧憬する根強い、執着をもつて居る塾生を、支離滅裂にして居てはと、云はゞこの執着心を、表見的にしやうとしたのが、我が慶應義塾山岳會のもと〳〵の起因である。

それに、鹿子木員信先生が中心となつて下さつて、茲に始めて、五月廿九日　呱々の聲をあげたのであつた。

當日は、會場に山岳會より出品された登山用具及高山深谷等を陳列し、多少奇抜ではあつたが、テントを室内に張り、一般の縱覽に供したところ、中では、これ等の品々を、非常に珍奇として、嬉んだ計りでなく、寫眞を見て現實界にもこんな所があるものかな――と、賞賛して止まない人もあつた。

一時四十五分　槇有恒君發起人として、壇上に進み、開會を宣して、本會創立の所以を述べて降壇した。

次に鹿子木先生は、比叡山の將門岩より青年の意氣に論及して、強き青年――肉體的のみでない――の最もよき運動を、登山より外になしとて、言々句々熱心に山岳の美、山岳の崇高なことを說かれて降壇せられた。

最後に小島烏水先生は、急霰の如き拍手を以て迎へられ、先生獨特の快辯を振つて、世界の山岳會史より、日本の山岳の地質構成等に至るまで、諄々として說かれ、殊に山岳と東京――重に江戸――の關係を詳述せられしところは、當時江戸時代の思想風俗習慣等を躍如たらしめ、丸で浮世繪でも見て居るやうな氣持がして、聽衆の滿足はこの上もなかつた。相愼先生は、其頃御病氣のに上に非常に御多忙であつたにもかゝはらず、遠方より態々御來會下さいまして、如何にも興味のある有益な御講話をして下さつたのは、本會の最も光榮とし、また深謝するところであります。

それから、山岳會から借用した幻燈を映したところ、寫眞の鮮明なのと、山の美、山の崇高なのに驚喜して、一葉毎に、拍手が盛に起つて、「素的素的」「いゝですれ」と云ふ叫びは、遂に『終りで御座いますお靜に』まで絕えなかつた。

斯くして、五時半頃閉會したが、當日は特に高野鷹蔵氏や、塾岡書舘長田中一貞先生、野口米次郎先生（山岳會員の方に非ずして熱教授）、及び神代氏などの御賛臨の榮を得、また入會申込者も續々あつて、第一回大會は大々的の成功を以て終つた。

其後、ピッカースホールの階上に、本會の倶樂部を設置することを得たから、これから追々と、山に關する雜誌書籍等を購入して、小さいながらも、ライブラクーを作り、會員は常にこの倶樂部で山の研究や、所謂机上談山をしながら、相互の親密を計りたいと思ふ。

それから、今度の夏期休暇に、初めての登山として、中房温泉から燕大天井、東、天井、常念　槍を經て、上高地に出やうと計畫して居るが、同行者も大分あるやうだ。

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（一）

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（一）

終に本會設立に關して、高野鷹藏氏及び鹿子木先生の甚大の御盡瘁に預つたことは、吾々會員一同の深く感謝してやまない處であります。（內田生）

附中山岳會講演會

大正三年十一月十四日午後六時から、附屬小學校講堂で開催した、來會者約百五十人ばかりで、中學の生徒が多かつたが、卒業生では、矢張り一高が一番多かつた、開會の辭に次いで、山岳會主任の伊藤先生立つて、附中山岳會の將來に就いて述べられる、大體の主眼點は登山を以て修養と研究の資にせよとの事で、例の雄辯を以て滔々數萬言、說き去り、說き來つて、無慮數十分を費したのは、感服の外はない。次は委員伴野清君の紹介から小黑部に下り大黑鑛山に出て、飯森に出た話。之は今年の山岳會大會で大木君のした幻燈に就いて、話したのであつたが、幻燈がよいので、いつもながら見あきがしなかつた。但し、アセチリンが度々消えたので、大分上つて居た樣であつた。其の次が山崎博士の講演。山崎先生のお話は、どんな難しい事でも平易に話されるので、誰にでもわかる。殊に其の話し具合のうまいのには、皆チヤームされて仕舞ふ、今日の演題は氷河の話で幻燈を用ひたので非常によくわかつた。幻燈の中で、アルプスやヒマラヤのよい寫眞を見るに、つく〴〵日本の山の貧弱なのを感じる。最後に田中阿歌麿子爵のお話。題は、今年山岳會で歩いた松原湖や、北安曇の三湖に就いてゞあるが、子爵の湖沼に就いての御研究は已に定評があるから、くど〳〵言はない。唯だ幻燈もなくして比較的無味乾燥な話を流暢に述べられ、誰にも了解出來た事を云つて置く。會が終つたのは十時。外で雨が降つて居る、山岳會講演會の雨に緣の多いのにはあきれて仕舞ふ。（ろの字）

附中山岳會

附屬中學校の山岳會は誕生以來已に四箇年を閱して居て、學校の山岳會の中では、すばぬん古參であるに係らず、通信を惰けて居た爲かあまり注目されない樣に思はれる。それで筆無性な私が此所にちび筆を握つた次第である。

一昨々年度の旅行は白骨溫泉から上高地に脫け、穗高や燒に登つて、德本峠を越して歸つた。昨年は中房溫泉から、燕、大天井、常念を縱走し、槍のピークを究めて上高地に下り、溫泉から、霞や、穗高、燒などに登つた、そして十一月に展覽會を開いて、會員の採集品等を陳列した。

いつたい附屬の山岳會の特色として誰でも等しく感ぜらるゝのは、一行が如何にも系統的に且つ科學的な旅行をすると云ふ事である。肯て自畫自贊するわけではないが、これは平常からの附屬式修學旅行で練りに練つた結果ではなからうかと思ふ。

今年なども五月末から研究やら照會やらを開始し、山崎直方博士、矢澤米三郎先生等の御講演をも拜聽して、一方ならぬ利益を得た。又準備品、防寒具等にも十分注意して、全然手落ちのない樣にした。多少大袈裟と思はれる樣な事も無いではなかつたが、

しかし十分手を盡して置けば後悔する樣な事はないと考へたからだ。山に入る時には人事を盡して天祐を待つより方法はない。

出發は八月三日、會員三十一名中、指導者として、本校教諭伊藤長七先生、吾妻利八先生及び卒業生三名が加はつて、上野驛を出發。御代田驛で下車し、臼田迄馬車五臺に分乘して、砂塵のたゝぬ濶つた中山道の往還を飛ばして行く。惜しい事に曇つて居たので淺間も、立科もまつたく見えない。臼田で待ち合して居た信濃毎日新聞の記者伴野一櫻氏に取つつかまり、同行する事になる。伊藤先生の怪氣燄當るべからずで、さすがの伴野氏も聊か煙に卷かれた體。これから三里の道は千曲川の左岸に沿つて行く。思つたよりよくないので、皆馬流さして急ぐばかり。それで四時にはもう馬流に着いて仕舞つた。宿屋一軒では入り切れぬので、牧生館と上州屋の二軒に分宿した。

四日、松原湖は中々よく、折から雨が降つて來たので、一段と趣を添え、湖に舟を浮べて、武田信玄の屍を入れて沈めたと云ふ石槨などを見た。馬流から此所迄は殆ど平地と云つてもよいが、此れから少し登り氣味になる。途中の裾野は高原の趣があり、且つ雲が非常に騒いで居たので、中々雄大豪宕の感に富み、天幕でも張つて、數日間滯在したい位に思つた。本澤温泉に着く少し前に夕立に逢ひ、濡鼠になつて温泉に着いたのは四時。諏訪中學の教諭で八岳に非常に詳しい牛山先生は、特に我等を指導下さる約束であつたが已に温泉に先着して居られた。

五日、曇つては居たが八岳に登ることゝして温泉を出たのは七時。夏澤峠から上は風も強く、信州側から霧を共なつて吹き上げる風が顔や洋服に當ると忽ち小さな水滴になる。

それでも植物を取りながら硫黄岳に這ひ上る、これからが一寸と迷ふ所ださうだが別に變りもなく横岳の長い山脊を傳はつて赤岳にかゝる。此の時霧が一寸と霽れて、甲府盆地や秩父山塊の青々とした山が、展開し、赤岳の雄々しい緒つちやけた山容を望んだが、又間もなく霧の爲に閉された。一時半漸く赤岳の絶頂に着く。少したつと霧がほんとの雨に變つて寒さも大分加はつたので、皆すぐに下山の途に着き五時無事に温泉に歸着した。此の晩茶話會があつて、信濃國歌などが、どなられ中々盛んであつた。

六日、夏澤峠に着いて見ると東の方は一面の雲の海で其の中から淺間が長大な山脊を表し、噴煙して居る樣は中々立派である。其の他荒船火山も、榛名赤城も日光も越後境の山々も雲の海から頭をもたげ、或者は島嶼の如く、或者は半島の如く實に雄大の極であつた、この調子なら日本アルプスも素敵に遠ひないと、どんどん下山する。其の中天氣は益々好くなつて、森林を離れると、忽ち現はれたのは日本北アルプスの連嶺。北は白馬から南は御岳迄の一大障壁は天空を限つて聳立し、雨あがりの透徹した空氣のためか、其の山膚の美しい輝と云つたら、實に透明な紫水晶の樣である。殊に立山、槍、穗高の巍々たる岩壁に食ひ入つた樣に殘雪が這着して居る雄々しさは一方ならず、私達の胸を躍らせた。こんな景色を前方に眺めて、どん〳〵下つて行くと、その中に南アルプスの北岳仙丈、甲斐駒などゝ裾野の上に頭をもたげだした。しかし下るにつれて暑い事は此上なしで、幾度ハンケチを絞つたか知れない。その中まつたく山を離れると道路は塵がたち初め、今迄眼

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（一）

を慰めて吳れた山々も前山の陰となつたので、唯桑畑や村落を駈け脫ける樣にして行く。

一時漸く茅野驛に着いて、驛前の菜店で思ふ存分涼を入れた。二時茅野驛を發して明科に向ひ五時半に下車した。明科館で夕食を終り、馬車五臺で此所を出發。此の晩は月が非常によかつたので車中大いに浮れ出し、晝の暑さも忘れ、五里の道も忘れて十時對山館に着いた。

七日、昨夜大分遲かつたので、今日起きたら日はずつと高く昇つて居る。三階の物干はスケッチする人で滿員の盛況である。午後先發十五人、その中吾妻先生と今日來着された矢澤米三郎先生が加はられ、馬車で四谷に向けて出發。自分は先發に屬したからこれからは先發は記事を書く。たゞし後發は、大町一日多く滯在し、明日から自分等の行を追ふ事になつて居る。後發の連中はこれから木崎湖へ舟遊びに行くと云つて居た。四谷に着いたのは五時。青木湖畔で夕立に遇つて、明日の天氣を心配したが、四谷に着いた時には雲も、まつたく散り、空は美しく晴れ渡つて、白馬三山の上には星が淡く光を放つて居た。

八日、六時出發前列の如く人夫の遲延の爲に七時になる。人夫は七人、中案內役を兼る者は丸山粂彌である。細野へ行く迄は實によく晴れて居て、白馬三山、不歸、五龍、大黑あたりの立派さと云つたらない。

二股から白馬尻間は割合に暑かつた。途中戶隱しやうまなどを採集した。白馬尻へ出ると、急に風が冷くなり、長大な雪渓がずつと續いて居る、雪澤登攀は割合に樂なもので、一時間半足らずで愈平に着く。成程高山植物は多い。植物家はもう何も忘れて夢中になつて取つて居る。後發隊の或者がこの下の雪渓で立派な條痕ある岩石を採集した。此れが今度の旅行の中で第一の獲物だらうと思ふ。かくて國境山脊に出で、山頂の小舍に着いたのは五時半。雲は黑部川に屯して居るが、その上に頭を出した、劍岳、立山、黑岳、槍など立派さは又格別である。小舍には先着者八人に自分等の一行十五人を加へて寢ればならぬので、其の窮屈はお話にならない。その中夕食が出來たので、小舍の外の星斗爛々たる下で、提灯を吊して、夕食を終つた。

九日、日の出を見る爲に小舍を出たのは四時。皆毛布をかぶつて頂上に登つて行く所は奇妙な形である、日の出の有樣を書く筆を持たぬ。しかし自分は「人は Language を失ひし時に、最も多く自然に同化す」と云ふ言を成程と感じた。九時小舍を出發して頂上から北へ下り。鉢岳を目當にして、リッチな北に北にと行く、天氣が惡いと迷ふ所ださうだが、今日はそんな心配は少しもない鉢岳鑛山跡に出ると、之からは路がある。蓮華溫泉までに二三の鑛山を見た、中には荒廢したのもある。

溫泉に着いたのは三時。其の汚なさは一寸と外で見られぬ。まつたくの木賃湯場で座敷は牢屋の樣だし、疊の代りに莚が敷いてあるばかり。天井は勿論なくて、隣りの室と交通自在である。湯槽は離れてあるが、混浴の樣にごく汚い。湯質は硫黃泉であるが、本澤のより聊か綺麗だ、しかし昨日あんな小さな小舍に二十五人つめられたことを考へると、餘程ましである。

十日、木地屋迄三里あるが、人家はなく、中々長い。十一時に

木地屋に着いたが、これから先は、殆ど水がないので其の暑さと云つたら、實にたまつた物でない。殊に山の坊へ出る小さな峠には、死に相な思をした。山坊には實に清い泉があつて、こゝで一息入れ始めて蘇生の思をした。誰やら復活の泉と云ふ。實際その通りである。

此所から少し登れば、あとはもう下り一方で小瀧村を通り、姫川に出る。名前は優しい姫川であるが其の荒れ川には一方ならず驚いた。殊に近頃の洪水の爲に線道をすつかり持つて行かれて、今盛んに修理中である。ダイナマイトで岩を崩す音は中々凄い。川水は灰色に濁つて、アルプスの氷河から流れ出る水もかくやと思はれるばかりであつた。粗小屋に着いたのは午後四時、遲れた人夫を待つ事約三時間で、馬車に乘り出發したのは七時。糸魚川の早川屋と云ふ宿に乘りつけたのは九時。

十一日、親不知を見物に行つたが、天氣がよいので氣分を味はふ事は出來なかつた。かへつて海水浴に適する位に感じた程だ。午後七時頃後發隊が着く。失敗と成功の赤白勝負があつて大いに賑はつた。

十二日　午前中骨休み、正午の汽車で、糸魚川を出發し午後四時田口驛に下車して赤倉滿泉に向ふ。此の邊の高原は特別の趣がある、赤倉では雫岳樓と云ふのに宿る。

十三日。雨が降つて居る。しかも荒れ模樣である。行かうか、行くまいかは問題であつたが、どう〳〵硬派の連中十五人許りが行く事になつて、七時半溫泉を出發した。しかし燕滿泉附近まで來ると、非常な降りになつて來たので、遂に見合せて燕滿泉に下つて、しばらく休み、赤倉に歸着した。この夜、大茶話會があつて、外の暴風雨の音も聞えぬ位大騒をする。

十四日、七時田口驛に駈けつけて見ると、昨夜の暴風雨で鐵橋が落ちて汽車は不通になつて居る。しかたなしに柏原驛まで歩いて、漸く十一時の汽車に乘るを得た、しかし車中でも新町や輕井澤の方が駄目だと云ふ話が出て、大分心配したが、先づ無事に上野に着く事が出來た。時に午後八時四十分。これで前後十二日間の山岳會も、無事に終了することを得た。（伴野）

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（一）

神戸高等商業學校山岳會

（前畧）如御案内神戸市背後は、一帶の六甲山脈に圍繞せられ、摩耶嶽再度城ヶ越等名山奇峯に富み、平常登攀を試み、趣味涵養體力養成の目的を相達し候爲には、絶好之地に有之候然候へば、當校學生中にも、志有る者は或は個人として、或は神戸徒歩會々員として、丘陵跋渉を試み候者僅少ならず有之候ひき、然るに多數者中には、志有り乍ら地理不案内之爲、又は徒歩會に入會の機會を得ず、憤懣の感を抱きて、空しく打過居候者も多く相見受け申候、於是地理にも相當明く、且趣味を同じく致し者數名相寄り、一層本校に獨立の登山會を設け、一般に登山趣味の普及を計り、同時に有志學生の便を計り候目的を以て、本校大山講師及岡田助教授に咨り、漸く登山會を設立致し、神戸高商山岳會と會名致し、かくて七月一日發起者の名を以て設立の趣旨を揭示し、會員を募

◎雜　錄　各地の山岳會彙報（一）

集致し候處、入會者忽ち五十名に達し、存外の好結果を收め申候、次で七月四日第一回例會として鷹取山に登り、再度鍋蓋、城ヶ越の三山を經て、奥平野村に至る登山會を擧行致し所、當日は天候甚險惡なりしに不拘參加者二十名に餘り、頗る盛大に御座候ひき、かくて本會は次第に本校學生を始め、一般同好の士に認識せらるるに至り候間、本會は去七月十日發會式を兼ね本校第三十一號教室に、山岳講演會を開催仕候、當日講演者は貴會員にて神戸徒歩會々長たる塚本永藏氏、及貴會々員朝鞠記太留氏にて、塚本氏は神戸市背後の山を論じて登山の要を說かれ、朝鞠氏は鮮麗なる幻燈により鎗ヶ岳登山談を述べ、專ら登山の趣味を鼓吹せられ候、又聽衆は二百名に達し隨分廣き同教室も立錐の地無き盛況を呈し候、其後本會に入會致す者絶えず、蓋し發達の途に向ひつゝ有之候、尙本會の主たる目的は神戸市背後の山を踏破致すに有之候へ共、機會ある毎に日本アルプス其他の深山に登山旅行を企て、以て會名を辱めざらん事を期し居り、現に此の夏も立山白山方面登山の計畫成立致し候、先は右大要本會設立の動機竝に經過御報知申上候　敬具

第七高等學校内に山岳會を設立せんとするの趣意書

（前畧）私は甚だ粗雜で且つ斷片的ではあるがとにかく山岳を讃美して來た。しかし私はそんな立場をはなれて、云ひ知れぬ愛

着の心にひかされて山に登るのである。――その愛着と云ふものも私の鄕愁が作用するのだと知つてゐる。私は科學者ではない、科學者よりは登山に際してある點において非常な損失を招き乍らもなほ山へ登らうとして居るのである。一度思ひ切つて信州まで行き、德本峠をこえ、神河内に入り、穗高の岩壁をへつり、梓川の急流に戰きながら丸木橋をわたり、白骨の溫泉に沿し、或は御岳の霧のうちに迷ひ、深山金梅の花を頰におしあて、田の原の小屋のまはりのしられざきうの白花を摘んで以來、私の心は怪しくもある幻想に囚はれはじめた。山上の痛快な貴族的な感じ、自然の壓迫の苦しさはかはるがはる私の心にやつて來る。私は全然私の心持を說明することは出來ない。そして私はこのやるせない思を日々に櫻島の引き下す曲線に富士や御岳を思ひ、高隈の尖つた峯々に鎗岳を思ひやり、吉野山の草原に裾野を思ひ、霧島の溫泉に白骨を偲んでゐる。實に私にとつては、私に戀人がない時があつても山を思はない日はないのである。

日本は元來海國であると共に山岳國である。信濃飛騨甲斐駿河越中越後にわたる大山系を有することは、近海にタスカロラ海床を有するより以上に誇るべく、奈良京都の古美術を有することゝ同じだけに私等に高慢の心を起させる。しかし一度ふりかへつて過去の日本人がこの山を如何に取り扱つたかについて考へる時には實に寒心に耐えない。山岳を對象とした文藝作品はどれだけあらうか、山部赤人が歌の四五位であらう、畫家はかゝる山岳を見すして徒らな南畫を學び、富士を畫くにしても亂暴極まるものを敢へて書く。我々はどうしてかゝる山岳を誇らずにゐられやうぞ、

しかしどうしてかゝる經路に滿足を表することができやうか。近來の日本の登山の風が、英人ウオルタア、ウエンストン氏によつて緒を發せられたことについて我々は大いに羞恥の心を感じて止まない。日本人たるものは大いに立つて日本の國寶を誇るべきである。實に青年期は體力剛健、意氣溌溂としていかなる峻嶮を問はず山頂を極めずには居られない、かゝる意志こそ青年の特權である。我々は進んでこの特權を利用すべきである。近時、日本山岳會の設立あり、各地方に登山遠足を目的とする結社が出來、一高及三高には山岳會を設立し確かではないが四高にも遠足を目的とする會があるさうだ。かゝる風潮にのり、かゝる登るべき山を有する薩摩の地に住んで安閑として居ることが出來やうか。こゝに於いて私等は七高に山岳會を設立せんと力說するのである。

鹿兒島縣内で千米突以上或は以下でも人のよく知り、又はよく登る所の山を私の手元にある日本山岳志（高頭氏著）及陸地測量部の數葉の五萬分一地形圖によつて調べて見る。（鹿兒島縣内にないけれども宮崎線に沿つてゐる山岳をも少々あげておく）

順序として北方からしてゆく。宮崎縣西諸縣郡には熊本縣球磨郡へかけて、白髮岳（一四一七米）陀來水岳（一二〇四）國見山（一二一七）等の高峯があつてその間に高野、萬年青平等の高原がある。（以上加久藤圖による）少し南下して鹿兒島宮崎兩縣の境上に有名な霧島の峯々がある。韓國岳（一七〇〇）は實に縣下の最高山岳である。高千穗峯（一五七四）も誰一人知らぬことはない。新燃（一四二一）は高千穗と韓國の間にある。その他夷守岳、大幡山、獅子戸岳、白鳥山等は一三〇〇米以上の山岳である。その登路等は小林圖によれば直ちに明瞭する更に南下して鹿兒島の對岸に見える尖つた山々は高隈の峯々である。最高峯は大篦柄岳（一二三七）である。その次が御岳（一一八二）である。こゝの高農の演習林であるさうだ。こちらから見ても知れるやうに非常によく茂つてゐる。その面白い形は縣下に比類が無いさうである鹿屋、岩川、垂水の圖を見ればその附近はよくわかる。それから櫻島の御岳（北岳ともいふ、北方の頭のへこんだ方の山、一一三三）がある。これについても人はよく知つてゐる筈である更に南下して開聞岳に所く、この山は高さにわづか九二四米の塊狀火山であるが海上から望見して非常に美しく、縣内の俚謠に一等多く出て來る山であらう。それから薩摩の國を北上してきて金峰山（六三八）はその形が變である。それから有名な野間岳（五九一）がその西に出た半島になつてゐる。野間神社がある。その先は古の笠沙崎である。それから更に北上して冠岳がある。五〇〇ばかりの山であるが傳說的に名高い山である。串木野から登るやうになつてゐる。更に北に行くと薩摩出水二郡の界に紫尾山（上宮山一〇六七）がある。

それから鹿兒島から一日中で往復し得る山をあぐれば、櫻島御岳、三重岳（四八六伊敷吉野郡山三村にまたがり、附近に花尾神社、丹後局墓がある）吉野牟禮岡（牧神岡）及赤崩（各五五〇餘）等がある。皆眺望よく、どれか一山にのぼれば他は皆指點することができるらしい。

かゝる工合に千米突以上の山岳を十座餘り有してをり上下するに遠くとも三日を要すれば十分に旅行できる。ことに霧島山は最

◎雜錄　各地の山岳會彙報(一)

も面白く私はよく行きたくなる、そして南西より東北に亘る九州山系と霧島火山帶とが交錯して極めて複雜な地形をなしてゐる。こゝにおいて大いに吾人の健脚を試みるのも痛快ではないか。日本アルプス地方はあちらの方の人々なら知らぬが、鹿兒島の人は一寸登らうとしても登れない。我々は第一の事業として縣内の山を跋渉することから始めたいと思ふ。我々の事業が、後進の中學の生徒等に刺戟を與へることがあれば實に幸福なことである。(辻莊一執筆)

大阪に於ける山岳講演會

△大阪小間物商工組合では自助會といふのを組織して、毎月一回知名の士を聘して修養本位の講演會を催ふしてゐるが、六月の例會には丁度同地でアルピニズムの勃興しかゝつてゐるのを機として、榎谷徹藏氏の日本アルプス實地探檢談を頼んだ。會場は北久寶寺前二丁目の事務所樓上で、開會當日の十六日は朝から五間に四間及び三間に二間の洋風廣間に同氏作の内外山岳水彩畫五十餘點及び會員中原繁之助氏作の日本アルプス概念地圖を壁間に掲げ、別に又榎谷氏の登山用具類及採集標品等を陳列した。例月のときは多く硬いコンヴエンショナルな修養談ばかりなので、晝間激烈な業務に從事して、そして恒にフレッシュな思想に憬れてゐる人達は、聽講中隨分欠伸や居眠をやるのだが、今回はそれ等の人達に對して可なりストゥライキングな材料であつたから、珍しくも四百有餘といふ發會以來に無い多數の聽講者は、いづれも熱心に耳傾けた。氏の講演は概畧次の通りである。

登山の意義は、是れを心の方面から二つに別けて觀ることが出來る。一つは衝動に立脚し、他の一つは觀念に基脚する。衝動は即ち興趣の發作であり、生の充實を追求するの根底である。さうして觀念は又之れを客觀的主觀的の二つに分ける。客觀的見地からすれば、正しく登山は人生の縮圖とも觀ぜられようし、主觀的見地からでは、全人格的感化要素の一つであり、潜在的活力涵養の一資料であり、又同時に自助的意義を寓した素質の一發露でもある。然し乍ら敏感な人は、登山といふ實行に入る前提として、山岳を觀ずることによつてのみでも、既に右の項目の前驅的本質を間接ながらに體得し得るものである。又その本來の巨靈が發展する最も顯著な動機となるのも敢て不可能といふことは出來ない。ヒマラヤの山靈に大きいインフリユーエンスを受けて、絶大の發展を遂げたタゴールの感情も理性も亦その傾向に於いて決して全然異つたものであると云へない。況して登山と云ふ嚴かな實行法を採つたならば、如何にしてもその體得を否む譯には行かないのである。本會が今夕山岳に關する講演會を催ふされて、斯く迄多數の來會者を迎へ得たのは、既に喜ぶ可きワンデル、ルーストの思想が瀰漫つてゐることを立證するものである。同時に處世上の根源要素たる活力の盈溢を、これ等の現象に據つて認識し得るの歡喜は譬へられないのである。

自分は茲に日本アルプスに關するイントゥロダクションを極く概畧述べて、從來物好きにも歩き廻つて來た山々の物語の一節を、斷片的に聽いて戴かうと思ふ。話の行き掛り上、分類表を作る。

(1)日本アルプスの分類　(2)日本アルプスの形相　(3)旅裝と用具及食糧　(4)人夫の選擇。右に就いて一順說明のあつた後、經歷談の斷片として、黑部川の徒渡し。劍岳攀登の概觀。平の留安小舍に眞裸の若者が二人。最後の露營。深夜の大暴れ。山拔けと濁流。夜半の騷動。等主として立山々脈北半縱走の際に於ける實驗談があつた。然し既に十一時に近くなつたので、山岳趣味の本意を說くに及ばずして降壇せられたが、尙その談を聞き度いといふ同好者が多いので、或は次回に於いて、再び同氏の講演を賴むかも知れないと云ふことである。

△關西大會で素晴しく山岳熱の昂つた大阪市では、敎育會や新聞業者などに各種の登山計劃が催ふされて愈市人の熱を昂めたこの際に當つて常に努力主義を訓育の根本としてゐる東平野校では、會員榎谷徹藏氏に囑して、六月二十二日午後一時から、日本アルプス登山講演會を開催した。聽講者生徒とも約一千名。司會者同校々長黑田泉三郎氏は、開會の辭として同校訓育の本綱たる努力主義と山岳攀登との共通點を指摘し、榎谷氏の日本アルプス經歷梗概を紹介して、現下同市に於ける大小各新聞紙が、いづれも連日筆を揃へて山岳に關する記事を揭載してゐることの、時世上最も有義に解せられる所以を述べられた。榎谷氏講演の概要は次の通りであつた。

登山の方法を講ずるのは、處世の方法を講ずるのと、その內包的意義に於て異らない。そして登山を實行するの精神は、轉じて又處世上の實行的方面に於ける精神と、その意義を等しうするものである。登山の困難に堪へ得べき心身の素質は、同時に又處世の

◎雜錄　各地の山岳會彙報(一)

難苦に耐へ得べき心身の素質であらねばならない。登山を危險視して實行し能はぬもの、參とも登山に恐怖を感覺して逡巡するの輩は、到底社會に出て、殊に大阪の如うな間斷なき刺戟の强烈な都會に處て、能く自己の道を開拓し創造し能はぬ弱者であるに逡ひなからう。然し乍ら、登山の危險を識らずして、徒に之を實行しようとするの徒は、處世上の皮肉な錯事を識らずして、出鱈目にやつてのけようとする無謀の徒ではあるまいか。登山は危險であると同時に壯快である。處世は至難であると同時に痛快である。その危險を排し至難を突破するの方法は、是れを緻密な智識による周到な準備に待たなければならない。精確周密な準備に基いた登山の安らかさは、家庭に起臥するの安らかさに等しいものである。然し乍ら又登山に成功しようとならば、厭く迄も努力主義を發揮しなければ駄目である。この意味に於いて自分達山岳會員の登山の心得が、本校の訓育方針と相通じてゐることを、非常な光榮とするものである。

右の緒論から、日本アルプスの分類。代表的風景。登山用具などつと說明して、同氏の山岳經歷談中、その斷片を次の如うな項目で講演せられた。立山の雄山頂。雪渓陷落の刹那。一越附近露營の朝。雄山の絕巓。劍岳の相貌。雲渓攀登狀態。巖壁攀登。劍岳最高點。山梁縱走の快。最後に山中で出會はした妖怪談を附け加へられた。尙同校では追つて再び父兄等を招待して、この講演會を催ふすさうである。

△大阪の山岳熱は愈沸騰して、七月十日午前十時から東區第二高等學校で、會員榎谷徹藏氏に依賴して山岳講演會を催ふした。聽

◎雜　　錄　各地の山岳會彙報（一）

講生徒約五百餘名。講演の梗概は次の通り。

當校の生徒はオリンピックを初め各種の運動競技等に、いつも優勝の成績を得て居るのは喜ばしいことである。これは平素から剛健の氣風を養ふやうに訓育せられてゐる結果である。剛健の氣風は國民性として最も大切な事で、獨逸の人間が、あの通り強いのは、日頃からこの氣を養成して來たからである。山登りも亦この氣風を充分養ふものであるから、他日大に我國の發展を望むならば、その國民として亦大に山登りをやつて、心身の鍛錬を計られ度い。私は山氣違ひであるから、國民性とか何んとか云ふやうなことを考へる前に、もう堪らなく山に登り度くて仕方がない。しかし無鐵砲には搔き登らない。矢張り氣違ひ相應の用意をして掛る。

右のやうな調子で、日本アルプスの概觀から登山準備を說いて、その經驗談中の斷片を、有明山からの奥山。中房谷と燕岳。大天井岳の雷雨。二俣の可笑しい一夜。靜かな月明に一發の銃聲。常念岳の南面。蝶岳へ、上高地の風色等の項目で話された。尙近日もう一回やそこら講演會をやるさうである。



會員諸君に

△餘白を拜借して申上候、本誌發行は種々の點に於て甚しく延引致し候何とも申わけ無之、殘り二冊は本年內に發行致すべき心組にて努力致し居候就ては每々の事ながら、原稿の御投與を得たき事に有之候。

△登山報、又新聞の切抜、一寸した雜報何れも御投稿を待つや切なる次第に有之候。

御投稿の有無は引いて、雜誌の發行期に及ぶものに有之候。

△總ゆる山岳に關する御報道を得たく、本誌は、會員諸君共有の舞臺に有之候事御記憶願上候。

（編輯係）

雜報

●火山の煙

○燒ヶ岳の噴烟

爆發後三時間飛驒より信州越への實見

六月六日午前八時飛驒平湯溫泉にて二回の激震あり音響激烈なりしを以て燒ヶ岳に新らしき爆發ありたるを知る同八時半同地出發同岳の狀況を見信州白骨溫泉に達せんと出發す峻險を攀ぢ熊笹深き難道を超へ鹿の子班らの殘雪を踏んで燒ヶ岳正面に位する阿房峠の頂上に達し同岳を觀望するに從來の火口は頂上及漸下位なりしが本朝の爆發により生じたる新らしき噴火口は中央以下の位置にして安曇方面字釜の尾上高地溫泉より約半里噴火口徑は約二十餘町にして熾んに灰煙を噴出し附近一帶より遠く東方に之を降下しつゝあり同地通行に際しては灰煙目口鼻を襲ひ臭氣鼻を衝き音響甚喧し此の爆發の爲めに同山より出づる澤谷の下流アヅサ川土砂埋沒せし爲め山道の交通を杜絶せしが水量の增すに隨ひ缺壞して村道に架設せる丸木橋二ヶ所押し流され宇澤の渡は家屋田畑流失に瀕し村民防禦に努めつゝあり一時流水を堰き止めたる爲めに其の下流に於ては多數の鯉鱒を漁獲せしと今時の噴火口は同山に於ける新なる者にして此の爆發後に於ける實見は吾等第一着た

◎雜　報　火山の煙　駒ヶ嶽の白骨

り平湯白骨兩溫泉は從來燒岳の爆發に徵するも更に危險あらざるべし爾後大小の震動數回あり風は多く西風なるを以て蒲田中尾平湯の飛驒方面に降灰更に無く多く稻扱、島々の信州方面のみなり

（六月六日夕白骨溫泉にて瓜須生）（高山タイムス）

○淺間山に降雪

三十日は朝來冷氣加はり且降雨あり夜に到るも止まず淺間山には植林地以上へ降雪ありて白皚々たり例年に比して降雪量多し

（卅日午後六時半岩村田電話）（大正二、十、三一、信、每）

○淺間又々爆發

輕井澤小諸地方にて十五日午前十一時二十分頃淺間山爆發したる大音響を聞きたるが恰も曇天にて山頂は濃霧に覆はれ居り爆發の樣を見る能はざりしと

山頂は濃霧に覆はる輕井澤地方にて十六日午後七時廿一分又もや淺間山爆發せる音響を聞きたるも前日同樣山頂は濃霧に覆はれて其狀態を見る能はざりしと（大正二、十一、十八、信、每）

●駒ヶ嶽の白骨

本月廿一日甲州駒ヶ嶽山中の宇蛇澤窪と稱する塲所の叢の中に

◎雜　報　諸高山の初雪　日本一の高山發見されん　米國の大探檢家來る　二八四

累々たる白骨の横たはり居るを發見し村民の訴へに依り所轄臺ヶ原警察署より係官出張檢屍せるが右は昨年八月十七日登山したる儘行衛不明となりし諏訪郡原村の御嶽行者野門仲藏なる事判明し遺骨は家族に引渡されたるが原因は多分病氣突發せるがためなるべしと云ふ　（十月二十八日、信、毎）

●諸高山の初雪

山名	初雪の期日	同前年の初雪
淺間山	十月三十日	十月二十六日
三ツ尾根山	同	十月三十一日
籠ノ塔山	十一月二十一日	十一月一日
烏帽子岳	十一月二十七日	同
四阿山	十一月二十一日	十月二十六日
立科山	十一月二十一日	同
武石峯	十一月二十七日	十一月一日

●日本一の高山發見されん

＝臺灣北部諸高山の踏査＝

臺灣北部の高山探檢は從來全く不可能なりしよりシルビヤ山、大霸尖山、大雪山等の地理は全然不明なりしが本年の蕃界討伐事業終了と共にこれが探檢測量に從事し着々進行中なるが何處も一萬二千尺以上の高山にてシルビヤの如きは未だ絶頂の踏査を經ざるも或は新高山（一萬三千二十尺）よりも高く一萬四千尺内外の標高あるべく遠からず行はるべき其の絶頂實査の結果或は日本第一の高山を發見すべしと　（臺北電報）

（從來シルビヤ山は標高一萬千二百八十九尺と目せらる）

（大正四、七、四、大阪朝日）

●米國の大探檢家來る

北極探檢でペアリー氏と爭つて世間を騷がした紐育のフレデリック、クック氏はシカゴの博物學者トムソン氏及活動寫眞技師ブルックス氏等を同伴し

▲ヒマラヤ山中　の峻嶺エブレットや西藏印度の國境でヴアージングラウンド等と呼ばれて博物學者や銃獵家の頻に垂涎しながらも誰一人深く踏み込んだ事の無い世界未知の高原を探檢する目的で六月十二日汽船モンゴリヤで桑港を出帆し三十日午後横濱に寄港した、此一行三名は直に上陸し暫く本邦に滯在したる上長崎より日本汽船で香港經由新嘉坡に向ひ同地から探檢に取掛るのである、赤黑い顏色をして頗る元氣さうなクック氏は記者に語つて『自分は新嘉坡から

▲世界の祕密國　西藏へ入るのだが其國境に中々面白い事がある筈だから大いに研究をしてそれが濟んだら印度土民十名許りを雇ひ入れエブアレットに登る積りだ、其途中の風物はブルックス君が得意の活動寫眞に撮影して廣く世界に紹介し又今回の探檢を永く記念したいと思つて居る、夫から歷史に富む印度國内に降り種々の古蹟を究めて北阿弗利加に渡り更に

▲地中海沿岸を　探檢しつゝ十二月頃紐育に歸着する見込である』と語つた、今回携帶したフイルムは　凡そ三萬呎であるといふ、クック氏は紐育大學で醫學を修めた人で醫員として　一八九一年ペアリー北極探檢隊に加はつて　以來南極、アラスカ等に數回の探檢を企て斯界に著名になつた人であるが殊に　名聲一時に藉甚を極めたのは一九〇九年九月一日紐育に現れ突如として北極を　究めて來たと發表した時であつた、當時北極は

▲人跡未踏の地　として名だゝる斯界の　強の者共が覗つてゐた所であるから此報一度傳はると共に紐育は　クック〳〵で非常な持て方であつたが僅か一週間ばかり經つとペアリー氏が現れて我こそ眞に北極に達したのだと茲に兩人の間に　功名爭ひが始まつた、此紛議は容易に決着が付かなかつたがコペンハーゲン　大學の調査によつてクック氏の主張は遂に不完全なるものと認められ爾來氏の名聲は殆ど消えて居たのである、斯く氏の　言ふ所は時に信を置かれないこともあるが併し何の道著名な　探檢家ではある　（大正四、七、一、東京朝日）

大和アルプスの踏破

大峰より大臺ヶ原に及ぶ

奈良水門町木本光三郎、吉野輕鐵社長阪本仙次の　發起にて大和アルプス踏破の計畫あり此程大阪に於て　開かれたる山岳會にも大和アルプスに關する出品をなせし由なるが　大和アルプスとは役小角時代より名高き大峯山上より熊野那智山に至る　大山脈にして古來七十二ヶ所の行場を有し之を踏破したる者　極めて尠し今回の計畫は吉野山を基點に大峰　山上岳、國見岳、彌山、佛經ヶ山、孔雀ヶ嶽、釋迦ヶ嶽を峰傳ひに踏破して　上北山村大字前鬼に降り更に伊勢紀伊大和の三國境に屹立する　大臺ヶ原山に登り紀伊熊野の尾鷲に出で鳥羽に上陸するに在りて　其往程は　左の如く決定し居れり

八月二　日　吉野山旅館さこ屋へ集合
同　三　日　未明吉野山出發、大峯山上に宿泊
同　四　日　彌山（露宿、天幕を用ゆ）
同　五　日　孔雀ヶ嶽（同）
同　六　日　前鬼村宿泊
同　七　日　河合村宿泊
同　八　日　大臺ヶ原山（教會宿泊）
同　九　日　山上滯在、山上見物
同　十　日　熊野尾鷲町宿泊
同　十一日　志州鳥羽港上陸
同　十二日　朝熊山を經て山田宿泊
同　十三日　奈良歸着

猶大臺ヶ原山にて分れ十日柏木に降り途中二三の　行者窟を探檢し十一日吉野驛に歸着解散する一隊もある由なるが　參加者にて既に定まり居れるは發起者の外に　大河內子爵、小四新右衛門、伊藤忠兵衛、住友京都支店長今村法學士を始め本縣にて　關信太郎、岩本武助其他十數名あり一行は總て　三十名內外となす豫定なれば加入希望者は一人に付經費の內十圓を添へ七月廿日迄に　吉野郡大淀村吉野輕便鐵道社內　阪本仙次　又は　前記木本光三郎宛　申込まるべ

◎雜　報　大和アルプスの踏破

しと因みに一行に要する大體の準備は發起者に於てなすべきを以て荷物は一人二貫五百目以下の携帶を許すことゝし之を人夫にて運搬すべく一行には案内者の外に寫眞師二人獵師二人加はるべし地圖は陸地測量部五萬分一の吉野山、山上ヶ嶽、釋迦ヶ嶽、大臺ヶ原、尾鷲の五枚を要する由なれば入用の方は木本方に申込むべしと

●婦人の登山

○婦人に登山を勸む

神戸徒歩會主催者塚本永堯氏夫人ふち子は山登りが何より好き、高等女學校に教鞭をとる傍ら祭日日曜日には必度お子さん方を引きつれて市の背後の山を跋渉して居られます、夫人のお話に

□只今では會員も殖えましたが婦人は殆ど無いと申しても宜しうございます、世界漫遊の途にある外國婦人が一箇月でも二箇月でも神戸に滯在中、臨時會員となるのは澤山ありますが極つた會員としては佛蘭西人のマダム、キヤベルと私共の家族ばかり、もつとも一箇月に一回宛特に婦人子供登山會と云ふのを催します、日本の婦人は登山に適しないと云ふ人もありますけれども、信心の爲には臨分年取つた婦人でも再度や摩耶へ結構行つてるではございませんか、私の方の六ツになる女の子でも父について諏訪山の頂上迄位平氣で參ります然し注意しなければならない事は今年十四歳になる娘が近頃段々やせて來て此の間から發熱致しましたので

□醫者の診察を受けますと過激な運動の爲に心臟が膨れてると云ふことです、若しこれが本當とすれば氣をつけなければなりますまいが、大人となつて仕舞へばどんな山登りをしたつてちつとも心配はないやうです、私など長男の生まれるまで毎日曜日六甲登山をかゝした事はありませんでした、山登りをすれば疲れると云つても疲れるのは身體ばかり、辛抱の出來るだけ熱い湯に這入れば直なほります頭腦は疲れる所ですからどんなによくなるか分りません。

□服裝は子供はすべて洋服、私は筒袖に袴、必度脚絆を穿いて齒の下駄をはきます、草履は登る時には足が滑り、降る時には指がつき出て爪を怪我しますからいけません、帽子は便利なやうでも汗が額際にたまつていけませんから男子用の洋傘を持つてゆきます、これならば杖の代用にもなります、お辨當はお握飯に梅干が一番よく飴か糖菓を持つてゆくことを忘れないやうにして、子供が坂道で疲れた時に甘い物を一ツ與へますと大變元氣を恢復するものです、一日位の登山ならば水は持たないでその代りに林檎とか蜜柑とかを持つて參ります、足の裏にワセリンかクリームをぬつて置くと疲れぬで宜うございます（寫眞は夫人の登山姿）（大正四、七、一六、大毎）

○四女史の大峰登り

拜み倒されて八合目から逆戻

山岳通で有名な夕陽丘女學校の朝輝教諭が同校の武部敎諭と語らひ女先生の中村、木村、駒井、秋山四女史に音樂家の山口末治

鄙氏を先達にして女人禁制の大峰上山詣りを企て 去二十四日出發二十六日歸阪したるが、山麓の 洞川村では大騒動、抑も優婆塞小角が此山を拓いて以來

△女人禁制のお山 の風に長い髪の一筋でも吹かせてはお山の尊嚴にかゝはるとて總代連が八合目の深霧まで出張つてこう〳〵女人連は擊退されたり四女史は殘念さうに 代る〳〵語る「吉野の一夜」「行く」「いかれぬ」と宿屋の主人と男の先生の大談判があつて私共は翌朝勝ち誇つた心持で浴衣に草鞋菅笠に 金剛杖の打裝勇ましく出立したのは廿五日の 晩でした「女人結界」の大きな札を背景にして女四人記念の撮影したり又は大天井 小天井など過ながら昔立派に修行した。

△女先達が竹槍 で追ひ歸された話など聞きながら深山の幽邃を味はひつゝスタ〳〵登つて參りますと道々 三人五人一團の行者さんに逢ひますのが先登の男の先生を見た 時には「ヤアお參りですか」など聲かけながら一歩おくれた私共を見ると忽ち妙な顏をして「女や〳〵」と囁きあひ中には頑固さうな爺さんなど「女の癖に生意氣な」と大きな聲で當てつけがましくいひましたが私共は平氣でやがて「深霧」に逢しますと取りつきの茶屋に洞川の信徒總代や青年會員などが待ち構へて談判といふよりも懇願されたのには驚いてしまひました、前夜

△吉野の宿から電話 で女の人々が登山すると洞川にしらせた時の騒ぎは隨分大變だつたさうです一村の重立つた人が 集合して引止策を講ずる談合に夜を更かして其日は明方の 三時頃から一團が此深霧で待ち受け若しどうしても肯かない時の 用意に次の洞辻には人夫二十人ほどを配置してあつたと後で聞いて 又々びつくり致しました、私共の目的や計畫を幾ら話しても 向ふでは只管中止を頼むばかりで「御婦人方の御登山を 決していけないとは申しませぬが萬一禁を破つて婦人の登山者があつたと云ては 全國の先達が怒つて了つて登山者に依つて生活する

△洞川村の浮沈 にも關りますから」など事を分けて頼まれるば馬鹿々々しいとは存じましてもマア學校の名もあるからと大人なしく思ひ止る事に致しました、處が洞川の連中は却つて案外だつたと見えて「矢張先生方はきゝ分けがいゝ」と口々に繰返すのが隨分なかしうございました昨年とか和歌山の或代議士がお嬢さんを連れて見えた時女人禁制を振廻したら其お嬢さんは泣いて〳〵どうしてもきかないで困つたとか申して居りました深霧で別れて男の方は登山道へ、私共はすご〳〵と使者の 案内で洞川へ廻りました時の殘念さ「西の覗」とか、何とかの行場とか、山上が手に取るやうに見えますにつけてもほんとに口惜しうございました、其の途中でパラ〳〵と夕立が少しこぼれかけた時 など洞川の人達青くなつて「ソラ

△お山が荒出した 禁制の山を女が侵すと恐ろしい」とて眞面目に騒ぐので私共も笑ふ事も出來ませんでした道々 到る處に私共の噂が傳はつて「あれや〳〵」と指さしたり又洞川では 全民殆ど總出で隨分氣まりが惡うございました、併し山上の尊嚴が漸う保たれたとて宿屋の歡待も非常なものでした、兎に角 頂上までの目的は達しませんでしたが堂々と女裝して深霧までも 入つたのは私共一行が山開けて以來最初ださうで幾分か 慰めた譯でございまし

◎雜 報 婦人の登山

た、よく山上詣りしたいふ婦人はありますが皆男に姿をやつして行つた人ばかりださうですから」云々斯くて四女史は洞川にて男の一行を待ち合し地上三千尺の索道に乘つた事谷の上で三十分停電して氣味の惡かつた事などを語りて頗る元氣なりき（大正四、七、二九、大阪毎日）

◎登山團

○日本アルプス踏破團

大阪市教育會主催日本アルプス踏破團は既報の如く愈八月一日より途に上る事となれるが第一種旅行團は二十七人宛二班に分ち第一班は八月一日午後九時迄に停車場前一龍軒に集合十一時卅二分大阪發第二日松本着泊第三日松本發德本峠を越え上高地泊第四日上高地滯在健足者は更に各班に分れて燒岳穗高霞澤山に登り第五日上高地休養第六日松本歸着解散第二班は八月二日同時刻大阪發旅程第一班に同じく七日松本歸着解散第二種は七日夜松本驛前飯田屋旅館に集合第一日は松本發明科まで汽車大町まで馬車晝食三湖の風光を覽て四屋泊第二日は廣途二里の大雲谷を經て白馬登山山頂の小屋に一泊第三日は山頂より峰傳ひに蓮華淵泉泊第四日は蓮華淵泉發山の坊を經て絲魚川に出づる筈なるが是亦二十人宛第二班に分つといふは希望者多きを以て或は第三班を作るべきやも知れず講師は文學士田中秀作氏任に當り大村忠次郎氏各班理事たり講師補助として宇野清水谷敎諭、竹下夕陽丘女學校敎諭附添ふ由本社よりは村上、水島、高浦の三社員同伴する筈（大正四、七、三一、大阪毎日）

○子供も山へ

昨夏好評を博せる大阪市教育會吉野山林學校の影響と今夏の山岳熱の刺戟により市内各學校の學童も競うて山へ〳〵と登り行く傾向あり最近に登山を實行すべく確定せるもの既に六校の多きに上り尙ほ續々計畫せられつゝあり。

▲汎愛校（八十餘名）有馬山へ八月八日より十日間▲難波第四小學校（五十名）高野山一乘院八月一日より十日間▲難波第一小學校（五十名）高野山安養院八月一日より十日間▲御津小學校（七十名）高野山遍照光院一日より十日間▲精華小學校（百名）高野山金剛院三昧院二日より十日間▲高津小學校（四十名）高野山普門院二日より一週間

尙ほ子供行團としては市敎會の山陰旅行團（八月三日より七日まで）、お伽倶樂部の日光山觀光團（五日より十日間）等あり何れも山地の風光を主として觀望せしむる筈なりと（大正四、七、三〇大毎）

○大山登山の便

標高五千七百尺、中國一の高山たる伯耆大山も山陰道の一片隅にありては餘りに世に知られず本年の如き山岳趣味勃興せるにも拘らず都會人士の登山するの尠きを遺憾とし大山中腹にある各佛寺協同して在來の設備を改善し登山客を集收せんと企てられるが鐵道院にても其擧を賛し左の規程により二三等乘車賃金割引券を發賣し尙京阪各地の學校團體には印刷物を配布し勸誘を試むる筈大正三年七月一日より九月末日迄の調査による山腹寺院に於ける氣

温は最高八十四度最低七十度にして夜間は約十度降下す山頂は寺院を去る約四十四町にして三十町の險阪あり日出の光景最も妙なりと。

甲京二條、大阪、三宮、神戸、兵庫より大山行、▲乙豐岡、城崎、鳥取より同▲丙倉吉、松江、出雲今市より同▲發賣期間七月廿日より八月卅一日迄▲通用期間甲五日間乙四日間丙三日間而して往路は途中下車を許さず　（大正四、七、二一、大毎）

○大和アルプス踏破

奈良市の木本光三郎、吉野鐵道會社長阪本仙次氏等の主催に係る大和アルプス踏破の計畫は當初會員三十名乃至五十名の豫定にて既に豫定以上の申込者ありしも其の大峰山以向の行程並に宿舍（露宿）等に就き精査し殊に我が社の永井瓢捻氏が踏破せる行程の困難なる狀況を聞き先づ第一回として會員を減少し踏査することとしたり而して一行の食料、器具運搬に要する人夫は會員一人に對し二人を要すと、一行の人名左の如し（大和上市）

諸井奈良縣技師、伊藤、西山兩女子高等師範教授、鈴木師範教諭、松本第六高等學生、間島三井大阪支店長、伊藤忠兵衛、大河内子爵、吉村生駒郡片桐村長、山本吉野郡中莊村長、岸田吉野郡技手、寫眞師北村稔、發起人木本光三郎、關信太郎、阪本仙次、岩本武助

（大正四、七、一九、大毎）

●燒岳登山の流行

大森博士の一行が島々の宿を立つて、德本越に爆發後の燒嶽探檢に上つたといふ八日の朝、記者も同じ島々の宿を立つて一足違ひに德本峠へ出た、博士の一行は柳澤松本測候所長、大久保同所技師等を初め各村長警察官小學校帝大學生など二十七八人、神高地（上高地とも書く）の温泉場に滯在して十日から恁々と連日研究に移る豫定ださうだ、記者は德本峠では「燒嶽見て來ました」といふ「フランス」といふ横濱の英國人一行にも逢つた、燒嶽に上るといふ學生達とも一所になつた。七日に松本驛へ着いた時にも「燒嶽上りの乘合ひがあります」と呼んで居る馬丁の聲を聞いた、斯んなことを思ひ合せると今夏の中央アルプスは多く

▲新噴火の燒嶽登山が大流行になるらしい、島々を出て梓川の流れを案内者が指さしつゝ「アノ灰のやうに白う濁つて居るのが燒嶽の灰です」といふ、德本峠の所々にある雪の溪を指しては

「黑い點の幾つもあるのが燒嶽の灰です。六日に最初の爆發があつたとき風が西へ〳〵灰を吹きつけたお蔭で此處等は斯んなになつても北側にある美しい穗高や鎗の雪が汚れなかつたのは仕合です」

流石山岳家の喜びさうなことをいふ、その峠を神高地へ下りて白樺の林を行くと枝にも熊笹にも一二分ばかりの灰が雨にたゝかれてコビリついて居る、氣がつくと四邊一面に灰白の山となつて居る、梓川に掛つた神高地の温泉橋まで來ると燒嶽が灰色の空に突ツ立つて、灰色の煙をドン〳〵と噴いて居る。

▲新噴火口　ツイ此の間、山案内の利吉といふ男が四尺に餘る灰泥の中を渡つてヤツと新噴火口を見て來たといふ話によると一番大きいのは山の裾から四合目ばかりのところに縱に割けて見える

◎雜　報　山岳旅行團訪問開始　霧島山噴火の虚報

噴火口で其の周圍に中なのや小さいのが十二三もあるやうに思はれたが何れも灰色の煙を噴いて地の底には尚ほ恐ろしい地鳴りが聞えて居るといふことであつた、四年以前の四月二十一日の爆發も知つてるが今度の爆發は實に天正十二年の大爆發よりも烈しかつたらうといふことだ、そして大正度に出來た上堀、中堀、下堀といふ三つの崩壞口の中堀の箇所が幾千尺といふ程崩落して其の上砂が梓川を堰いたから堪らない水は忽ちにして池を作つて漸く東南方に排出口ができた、夫れを

▲大正池と命名　して飛驒の國境から遙るゝ見に來るものさへある、水は次第に白樺の林を池底に沒して灰汁の沼池を現出して居る、「山林の損害は百萬圓では止まりますまい」と或る山林局員は話して居た、他の山よりも割合に上り易い燒嶽の新研究は何といつても今夏の中央アルプスを眼すべき材料であらう（九日、神高地温泉にて、せみ郎）（大正四、七、一三、大阪朝日）

山岳旅行顧問開始

山岳旅行は今度一般旅行家の流行となり大阪にては山岳旅行團體さへ組織され既に出發せりと聞く本社安心所は學生休暇の時期に際し斯道實驗家を聘し山岳旅行顧問を開始し毎日午後一時より午後三時迄親切に質問に應ずべし口頭五十錢書面一圓とす（大正四、七、十七、報知）

山　二九〇

霧島山噴火の虚報

○霧島火山帶活動す

■薩、隅、日地方の地震頻々■

十四日夜九時六分鹿兒島地方に強震あり薩摩國伊佐郡大口村地方にては十四日夜九時前一回、九時頃一回の強震あり其の後三十分又は一時間毎に強弱震あり、十五日朝尚止まず大隅始良郡吉松地方にては五分十分毎に震動し同梨野村方面にては十四日夜數十回の震動を感じ家屋内に安眠する能はず戸板等を外づして屋外に夜を明かせり十五日朝四時又強震ありたり、右は霧島火山帶が愈活動を開始せるものにて地震の模様により察するに多分霧島山白鳥嶽又は栗野嶽が震源地ならんかと云へり前田當測候所長は目下出水郡へ出張中にて十五日歸廳の筈なるが今後の模様によりては縣廳及び警察部よりも吏員出張すべく各地の報告を綜合しつゝあり（鹿兒島電報）

▲宮崎地方も亦　宮崎縣西諸縣郡加久藤地方にては十四日午後九時十分、同十五分、同二十分、同二十五分、同七十五分又十五日は午前二時十分、四時二分の數回に亘り弱震微震あり宮崎地方は十四日午後九時三十二分二十九秒より二十秒間弱震ありたるが宮崎測候所の觀測によれば加久藤地方の地震と關係あるものにして多分震源地は熊本縣阿蘇地方ならんといへり（宮崎電報）

○霧島噴煙は一時間？

■目下は何等の異狀なし■

霧島山爆發し噴煙一萬五千尺に昇り砂礫雨の如く降り避難民各

驛に雜沓すとの風說あるより記者は十六日夜大隅吉松に行き更に十七日朝横川に行きて取調べたるに噴煙も見えず避難民もなし警察電話、鐵道電話にて聞合せたるも鹿兒島宮崎兩線各驛とも霧島の爆發を認めず避難者なしとの事にて平靜なりされど霧島山麓一帶は十四日より晝夜十數回の地震あり震源地は吉松附近にて牧園、横川、栗野、吉松にては警察より避難の準備だけはなし置くべしとの注意ありたるより昨年の櫻島爆發の如く霧島が爆發するならんとの人心不安の際十六日午後四時頃日向國北諸縣郡高崎村の駐在巡査より霧島舊噴火口の西二里ばかりの處に噴煙し一時間許り噴煙を續けたりとの電報ありたれば宮崎警察は霧島に近き谷頭に聞き合せたるに異狀を認めずとの事にて多分鹿兒島内の霧島宇木曾燃方面が爆發せしものならんと鹿兒島に電報したれば横川警察より木曾燃の麓に巡査を派遣せしも異狀なく只昔よりの霧島噴火口の煙が少しく增したるのみとの報告ありたるも念のため十六日夜横川警察署長は登山の途に就きたり、更に吉松駐在所に問合せたるに吉松、加久藤、飯野附近は十六日午後四時頃激しき夕立あり天地暗黑となり雨霰降り霧島方面盛に鳴動し同時に地震ありたるより夕立雲及び雷鳴を霧島の爆發と誤り傳へしならんとの說あるも實際其の時爆發し霧島噴煙せしか確には不明なり而して霧島爆發せしとするも一時間許りにて終りたるものにて其後は異狀なし、尙栗野獄の溫泉藏し且濁り地震續發にて浴客避難せし外各驛其共避難者なし尤も稍不安の狀あるも避難する程にあらず、損害は吉松驛の附近字川添の鐵道長十間深一間許り陷沒し栗野驛の信號ランプの硝子は損じ栗野驛の構内僅か龜裂せし處ある外格別のことなし（肥後人吉電報）

▲白鳥嶽の爆發か　十六日午後四時六分霧島山爆發鳴動聞え噴煙見ゆ噴火口は白鳥嶽なるべし、右の噴火爆發については未だ詳報を得ざるも吉松により報告に依れば宮崎縣西諸縣郡小林飯野村間にして白鳥嶽の一部といふに相違はなかるべしと觀測さるゝと、勃發の際鹿兒島測候所にては四時六分地震を感じ次に大鳴動を傳へたるが火山爆發としては豫定の行動を取りたるものにて國分地方にては今尙鳴動聞ゆと、當地よりは遙に北東の天空に當り大噴煙を望み盛に昇騰しつゝあり白鳥嶽は過般來少量の噴煙を吐きつゝありたり（十六日鹿兒島電報）

▲硫黃燃の爆發　十六日午後五時霧島舊噴火口の北約二哩宇硫黃燃と稱する舊噴火口二箇處爆發鳴動今噴煙しつゝあり（十六日都城電報）

▲同上公報　十六日午後四時霧島舊噴火口の西北に當る約二里位の地點より噴火したり姶良郡牧園村下中津川キソトモエ（中津川と硫黃燃の誤りか）の宮崎縣境なるが如し勢ひ猛だしからず調査中（十六日午後六時五十分鹿兒島縣發内務省着電）

▲加久藤地方の地震　日向西諸縣郡加久藤地方の地震は引續き十六日夜より十七日朝に亘り數回に及び人心恟々たり宮崎にては十六日午後五時頃霧島方面に當り二回遠雷の如き鳴動あり十六日夜都城警察署より警察部へ十六日午後五時霧島噴火の場所は舊噴火口の北牧園村硫黃燃明礬溫泉の上方に當れりと電話あり宮崎測候所（大正四、七、一八、大阪朝日）

◎雜　報　霧島噴煙は一時間

◎雜　報　霧島噴煙は一時間

○霧島山大噴火

熔炎鹿兒島より望見せらる

霧島山の活動に就てその後の報告を綜合すれば鹿兒島縣姶良郡吉松、栗野地方は十六日一時間一回位の微震あり横川にては十五日夜二回の微震ありし外震動なくまた鹿兒島の測候所も同夜七時以後は微動計にも感ぜざるに至り漸次靜穩の模樣ありしも震源地が漸次霧島火山方面に近づき移動しつゝあるが如く觀測せられしが午後に至り途に霧島の大噴火となり今巖んに噴火噴煙をなしつゝありて火焰高く騰り鹿兒島市よりも望見し得て凄慘の觀を極む（鹿兒島來電十六日午後五時廿分發）

▲噴火は高千穗　横川警察署の霧島噴火口踏査報告達したるが之れに據れば霧島は高千穗峰の噴火口（大鉢）より現に噴火しつゝあり其の他において噴火せる箇所を發見せず山麓の居住部落は危險の狀態とは認められず牧園村の山麓は今尙微震ありと是にて十六日の大噴煙は霧島舊孔よりの大噴煙なりしこと確かめられたるが一時は新噴火として騷げり（鹿兒島來電）

▲吉松線の大混亂　熊本に達せる報知によれば十六日午後三時二十分霧島火山は數十回の鳴動の後大噴火をなし大響鳴と共に火焰天に沖し噴煙渦を捲いて騰る事一萬五千尺に達せりと觀測せられ住民は家財を取纏め各方面に避難中なり吉松、小林、牧園各停車場は非常の混雜にて遠望の光景悽愴譬へん方なしと（熊本來電）

▲新噴火の位地（明らかならず）　霧島山麓横川村より下關へ來着したるもの談に曰く、霧島山の鳴動は數日前より次第に激しくなり一日百數十回の地震ありて人心恟々たる折柄十六日正午に至り儼然たる大音響と共に黑煙濛々數百丈の高きに噴煙したるが白晝のことゝて火光は認め得ず噴火の場所も舊坑に隣接せるが如く見えたるも判然せざりし噴煙は一時に噴き上げたる後忽ちその勢力衰へ五分間の後再び猛烈に噴煙を始めたり、地震は爆發後微弱となりその度數も減じたれども附近の住居は避難するもの相踵ぎ吉松驛下り鹿兒島行列車は混雜を呈し居たり（下關來電）（大正四、七、一八、大阪每日）

▲噴火狀況奏上　大浦內相は十六日午後八時鹿兒島縣知事發內務省に着せし電報により同夜侍從職を經て鹿兒島縣姶良郡牧園村下中津川附近の霧島山脈より大噴火を起し附近在住民は避難しつゝありとの事を長き邊に上奏せり（東京電話）

▲備考　今までに達せる報によれば霧島噴火の位置は尙は明確に知る能はざるも舊孔又は其の附近なる事略ぼ明かなるもの如く前記牧園附近云々とあるは即ち十六日夜鹿兒島より達せる電報によれるものにして別項着電にあるが如く噴火の位置は同地點に非ざるもの如し、附記して尙は情報を待つ　（大正四、七、一八、大、每）

○霧島山爆發後報

▽噴火は白鳥嶽の一部か

▲噴火頗る壯絕　△溫泉地の避難　十四日以來活動の霧島山十六日夕五時一部爆發黑煙天に沖し高さ一萬尺溶岩噴出して壯絕を極む舊噴火口より約一里の北に當れり而して同六時半に至り噴火稍減じたるも尙二千尺に及べり更に大爆發を見るに至るやも計られざる模樣にて吉松附近に及べば鐵道線路にも危險あらん見込にて

各温泉場にては避難を了し殆ど人影を見ず（長崎電話）

▲鳴動二回に及ぶ　▽宮崎方面の影響　宮崎縣北諸縣郡加久藤地方に地震あり十六日より十七日朝に亘り數回に及人心恟々たり宮崎にては十六日午後五時頃霧島方面に當り二回遠雷の如き鳴動あり十六日夜都ノ城警察より警察部へ十六日午後五時霧島噴火す場所は舊噴火口の北牧園村木曾越明礬温泉の上方に當れりとの電話あり宮崎測候所が震源地は阿蘇方面と觀測せしは誤りにて直に技手を派遣し調査に着手せり（宮崎特電）

▲噴泉數百尺　△奇觀を呈す　霧島山麓なる大隅始羽郡東襲山、餘野温泉場一帶の地域は數箇月前より噴地に硫黄花噴出し氣温著しく上り居たるに十四日午後九時頃に至り泉源地は約三間許りの噴地より一大爆音と共に濛々たる一團の湯氣立昇り鳴動甚しく地中に於て石と石と打ち合ふが如き鳴動耳を聾せんばかりなり十五日午前十時に附近の崖崩壊し噴出口を塞ぎたるに又もや鳴動激しく二時間にして凄じき音響と共に噴泉數百尺に上り壯觀を呈せり温泉噴出の廣さは五百坪位にて鳴動を續けつゝあり（鹿兒島特電）

▲鹿兒島測候所報告　十七日午後四時五十分鹿兒島測候所報告に曰く「十七日午後三時四十一分同四時十八分の二回鳴動聞ゆ十七日霧島山の噴山の上れる方向は十六日噴煙の場所より稍西に寄り唐國岳見當なり噴煙の高き目測約一萬米突に達す」とありて霧島火山帶は依然小活動を繼續し居るものと云ふべし十七日午後四時五十六分同五時七分同五時七分同五時九分の三回に亘り再び鳴動あり同時に霧島山は黒煙渦巻き返りて昇騰し其勢ひ頗る迅速なり（鹿兒島特電）

◎雜　報　霧島噴煙は一時間

▲山麓一帶の地震　▽山北方面平靜　霧島爆發噴煙一萬五千尺砂礫雨の如く降り避難民各驛に雜沓すなどの風説頻なるより十六日夜吉松に到り十七日朝更に横川に赴き取調べたるに噴煙も見えず避難民も無く警察電話及鐵道電話にて聽き合せたるも鹿兒島宮崎兩線各驛とも霧島の爆發を認めず避難民も無しとのことにて平靜なるが霧島の山麓一帶は十四日より晝夜十數回に亘る地震あり。

▲震源地は吉松　附近にて牧園横川栗野吉松等にては警察より避難の準備丈は爲すべしとの注意あり昨年の櫻島爆發の如く霧島が爆發するならんと人心不安の際二十六日午後四時頃北諸縣郡高崎村前田駐在巡査より霧島舊噴火口の四二里ばかりの所に噴煙一時間ばかりを續けたりとの電報あり宮崎警察署に近き谷頭に聽き合せたるに異狀を認めずとのことにて多分鹿兒島内の霧島宇ヒソモエ（未發燃？）方面が爆發せしならんといふも横川警察よりはヒソモエの麓に巡査を派遣せしも異狀なし唯從前よりの

▲霧島噴火口の　煙が少し增したるのみの報ありたるも念の爲め十六日夜横川警察署長は現場まで登山して未だ歸らざる爲め確言は出來ざるも格別のことは無きもの〻如しとヒソモエ及び宮崎方面も異狀なきより吉松駐在所に問ひ合せたるに吉松飯野附近は十六日午後四時頃激しき夕立あり天地暗黒となり雨霰降り霧島方面は

▲盛に鳴動し　同時に地震ありたり、夕立雲及雷鳴を霧島の爆發と誤りしならんとの説もあり實察其時爆發し霧島が噴煙せしか確ならず霧島爆發せしとするも一時間ばかりにて濟みたるものにて其後は異狀なく栗野鰻温泉減じ且濁り地震頻繁にて浴客避難せし

（續報）霧島噴煙は一時間

外各驛とも避難者なく稍不安の狀あるも避難するほどにあらず吉松驛の附近字川添の線道長さ十間深さ一間ばかり陷沒し栗野驛構内に僅に龜裂せし所ある外格別のことなし（人吉特電）

▲霧島爆發の性質　△大森理學博士の談　理學博士大森房吉は去八日以來信州燒ヶ嶽調査中の所十六日結了十七日白骨温泉を廻りて午後四時松本市に來れり、博士は九州霧島山の爆發に就き語りて曰く

▲爆發の歷史　霧島山の噴火は淺間山と同じく爆發性のものなれば其光景は凄じくも被害は大なることなかるべく天明年間に於ける淺間山噴火の如く熔岩の流れ出づる等のことはなかるべしと信ず噴煙が一萬五千尺以上に上るは普通のことにて淺間山は二萬尺以上に上りたることあり霧島山は明治三十七年迄は時々活動し其後約十年間は休息し居りしが大正二年に九州南部の火山は一帶に活動し霧島山は同年内に二度爆發し大正三年一月八日に三回目の爆發あり同月十二日彼の櫻島の爆發を見たり。

▲火山系の活動　而して富士火山系に屬する信州燒ヶ嶽淺間山及伊豆の大島は其前に活動したり即ち燒ヶ嶽は明治四十年十二月以來度々活動し淺間山も時々活動したるが是が鱶て九州南部の活動となりそれが濟むと又富士火山系の活動となりたるものにて前月以來の小笠原島方面より燒ヶ嶽に亘りての活動は第二期と言ふべく而して燒ヶ嶽も最早其意氣も弱くなりたれば又復九州南部に及ぼし此程の諏訪瀨島硫黄島及今度の霧島山の爆發となりたる次第にて此火山系は相互に活動し一時に爆發することはなきものなり元來日本は

▲今後の豫測　全國を一の地震區域又は火山區域と見るを得べく此區域全體が目下活動し居るものなり然れども其火山系が一時に爆發的活動するものにあらず殊に霧島山は淺間山の如き爆發性のものなれば今回の爆發を見て地方の人民は驚くならんも今後大變動あるべしとは思はれず是は爆發前に起りたる九州地方の地震の狀態が大正二年の場合と同狀態なればなり云々尙同博士は十七日午後七時五分松本驛發列車にて歸京せり（松本電話）（大正四、七、一八、東京朝日）

○再度の大爆發

更に他の舊坑より

霧島山は十六日の大爆發後一時鎭靜の狀態に歸したるが十七日午後三時四十一分と四時十八分の兩度大轟鳴と共に大爆發をなせりその位置は多分十六日の噴火口より西に當れる西霧島山韓國嶽の舊噴火口ならんと觀測せられ噴煙の昇騰する事目測一萬米突、光景凄愴を極むとの報あり（熊本來電）

▲浴客の避難　十七日午前二回吉松横川にて地震ありし外霧島の噴煙は漸次減少異狀なし吉松にて十六日栗野嶽の雷鳴を鳴動と誤り横川署に急報し署長以下總出にて應援に赴かんとせしに異狀なきを知りて中止せり栗野嶽湯泉に於る二百名の浴客は地震以來下山し今は湯守外六名殘留せるのみ、山麓の民家百三十あり萬一の場合避難せべく老人は舁籠など用意し居れり、霧島山麓硫黄湯明礬湯等何れも異狀なき事を確めたるも浴客は十四日以來避難し此處も亦寂寞なり十七日保安課の警部横川署長等一行登山せり（鹿

兒島來電）

▲漸次鎭靜　十七日夜鹿兒島縣知事發　內務省着電に曰く霧島火山帶噴火の件は調査の結果噴火の位置は霧島シモイ（硫黄燃か）舊噴火口にて一時噴烟鳴動激しかりしも直に減勢時々少量の噴煙を見るのみにて格別の被害なし、湯野温泉は強震のため泉源の位置三里餘り變更し泉勢增加せり、浴客は皆避難したるを以て別に異狀なし漸次鎭靜に歸せり、震動は猶日々六七回ありと雖も勢數共に減じつゝあり（東京電話）

▲備考　電文中シモイは多分硫黄燃の事ならんが硫黄燃附近噴火の事は一時之を傳へられしも訛傳にして噴火は矢張り霧島山高千穗の蒼大鉢（十六日爆發）なりし事本紙既報の如し（大正四、七、一七、大阪毎日）

○霧島の噴煙は夕立

―鹿兒島測候所長の大間違―

前日來北大隅地方に地震頻りにて人心恟々たる折柄、十五日午後前田鹿兒島測候所長は數回に亙り霧島山噴火の鳴動聞え且つ噴煙高く天空に昇騰せりとの報告を縣廳及び各新聞社に報告したり然るに午後六時過に至り牧園村方面より霧島山麓驟雨あり雷鳴激しとの報知あるや俄に狼狽して前報告を取消すなどの醜態を演じ大に世間を憫ませたり、然るに十七日霧島山に登り大浪の池附近を視察したる片原横川警察署長は十八日下山して霧島山噴火の形跡無し又霧島温泉も異狀無く浴客無事なりと報告したれば是に於て愈噴火にあらざること判明せり、然れど十四日以來の地震に由り火山帶の活動せるは事實にて十七日は尙微震繼續し居たりと（鹿

◎雜　報　霧島噴煙は一時間

兒島電報）

▲成る程夕立　山には異狀なし　十七日鹿兒島測候所の發表を聞きて記者は十八日再び吉松、栗野、横川方面を踏査せしが韓國嶽方面には激しき夕立ありし由にて雲の模樣噴煙の如く雷鳴は火山爆發の如しとの說を聞きしより實地を見て確めんとて栗野に滯在して夕立を待ちたるに十八日午後五時頃栗野嶽の後方に夕立あり黑雲の間より一團の白雲（暗灰色に稍赤味を帶び火光の交れる如き觀あり）渦を卷いて昇騰し此の模樣寔に噴煙の如く電光は見えずして雷のみ轟々と鳴りこれを爆發と誤りしも成程と思はれたり十六日、十七日の爆發說も同じく夕立なりと思はる尙十六日より實地探檢のため登山せる横川警察署長は「硫黄谷、榮尾、明礬の各温泉の湯勢、湯度共に異狀なく浴客は尙療治を續け居れり爆發の噂ありし硫黄燃も無事、大浪の池の絕頂より展望の出來る限りの地域は總て變りなし大浪の池にて學生二名登山し居りたるが夕立に遭ひたる外何等の異變なかりしと語れり爆發說は疑はし」とて否認せり、又一時危險視され居たる栗野嶽温泉も其後異變なく十七日より浴客あり温泉宿も營業を始め居れり（人吉電報）（大正四、七、二〇）（大阪朝日）

○霧島は異狀なし

鹿兒島側の誤測

霧島山麓地方十四日より十六日に亙り數回の微震あり他に何等の異狀なく右は櫻島の爆發に怯氣を惧ける鹿兒島側の誤測によれるもの>如く霄雲の昇騰せるを噴煙と認めたるものなるべし（宮崎來電）

◎雜　報　百尺低し　霧島山の逆鉾又盜まる

●百尺低し

―矢張新高山よりは―

總督府蕃務本署測量隊の手にて臺灣北部高山の測量中にてシルピア山の如きは其標高或は新高山以上なるべしとの說もありしが今回愈確實に測定せる所に依れば一萬二千九百七十二尺にて新高山より百尺低く富士より五百尺高し、即ち新高山に次ぐ日本第二の高山なること確定せり之にて臺灣に在る一萬尺以上の高山は全部測定を了りたるが結局富士山より高きもの五つあることを判明したり尙同山頂上には日裏の方は六月下旬尙殘雪を見たりしが昨今に至りて全部溶けたりと（臺北電報）（大正四、七、二三、大、朝、）

●霧島山の逆鉾又盜まる

曩に鐵柵を設けて舊位置に安置しゐる霧島山絕頂の逆鉾を十三日鐵柵を破壞して又々拔き取りて何れへか隱匿せしものあり小林警察署は目下嚴探中なるが多分以前の犯人なる鹿兒島縣生れ當時日向都城在留の精神病者久保萬四郎の所爲ならんといふ（宮崎電報）（大正四、七、一七、大、毎、）



會報

登山案內者改善の一方法

會員及び一般登山家に熱望す

登山案內者の不良、賃金の不廉、高低定りなき事等、吾人は其非を聞くや久しく、如何なる方法に由りてか、其改善をなさゞるべからず、今や十週年を迎へて、將に其一方法に着手せんとす、會員及び一般登山家の援助と實行を乞ふや切なり。

本誌發行の後、着手して、明年登山期迄には、本事業の普及に勉むべし、幸にして會員及び一般登山家の本會の主旨を賛し、此事業の普及に勉められん事を乞ふ。

本會は一種の「登山案內者手帖」を製し、次の規定に從ひ、一般登山案內者に無料にて此れを交附せんとす、然して一般雇傭者は、必ず雇入れの最初及び終りに於て、雇傭者の住所姓名、登山路、賃金、案內者に對する感想等の後人の參考となるべき事の記入を乞はんとす。

後の雇傭者は、爲めに非常なる便利と參考となるべく、從つて、時に賃金の高低なかるべく、或は熟路なるか否なかを、誤る事なかるべく其案內者の性質等を知るを得べし、即ち案內者の立場より云はんに、本手帖に惡評を書かれんか、後人誰れか此れを雇ふものなかるべく、必然的に、改善を期し得べし、只本會は强制力を有せざるを以て、總ての登山案內者に强制的に本手帖を附與するを得ず、只會員及び一般登山家が、本手帖所持者に非れば、如何なる塲合にも雇傭せざる時は、必ずや案內者自身より乞求すべく、一に此事業は登山家諸君の實行さるゝや否やに關す、即ち一般登山

◎會報　登山案內者改善の一方法

家の德義に訴へて、實行を期せんとす。

本手帖所持者及び其動靜等は「山岳」に揭載して、一般の參考に資すべし。

吾人は、會員及び一般登山家諸君は、本會の主旨を賛し必ず實行さるべしと信ず、聲を大にして其實行を熱望するや切なり。

本事業は何等强制力を有せざるを以て、直ちに其完成を期せず、二年三年の後、完全の域に向はん事を期せり、總ての機會を利用して、此主旨の普及と貫徹に努力を乞はんとす。

會員及び一般登山家諸君は、登山案內者間に本事業の主旨の普及傳達に勉められん事を乞ふ、本會は諸君の推薦によりて本手帖を交附すべく、詳細なる規定は次に揭載せるが如し。

日本山岳會「登山案內者手帖」規定

一、本手帖は日本山岳會の本人の請求に由り又は本會より特に登山案內者として適當と認むる者に交附す。

但し荷擔人には交附せず。

二、本手帖所持者は登山案內者としての德義を重じ日本山岳會々員及び一般登山者に便宜を供すべし。

三、本手帖所持者は總て日本山岳會の指揮傳達に從ふべし。

四、本手帖所持者は雇傭の初と終に必ず本手帖を呈示し雇傭者の姓名、住所、期間內案內の經過、賃金、其他の記入を乞ふべし、如何なる場合にも本手帖の呈示を拒むべからず。

五、前項の記入事項に就ては何等强請すべからず又記入事項の改竄或は紙片の剝脫等を許さず。

六、本手帖の交附を受けんとするものは日本山岳會々員又は本會の適當と認むる者或は本手帖所持者の推薦に由り所定用紙に記入し手札又は名刺形の寫眞二枚（臺紙に糊付するに及ばず）を添へて日本山岳會事務所に申込むべし（所定用紙は無料にて交附す）

七、本手帖には其所持者の寫眞を貼付して正當なる所持者たる事を表示す。

八、前項の請求に由り登山案内者として適當と認むる時は日本山岳會は本手帖を交附し「山岳」誌上に姓名年齢住所及び其熟路等を公示す。交附の有無は日本山岳會の任意とす。

九、本手帖は日本山岳會より無料にて交附す記入濟の時は返附の上新しきものゝ再交附を受くべし。但し使用未濟のものを紛失又は毀損して再交附を受けんとするものは右料金として金五十錢を納付し寫眞二枚自署二通を添附して申込べし。

一〇、日本山岳會に於て適當なる登山案内者と認むる時は日本山岳會公認案内者として一般に推薦す。

一一、日本山岳會は毎年本手帖所持者の動靜登山の經驗等を「山岳」に公示す。

一二、本手帖所持者は本會より本手帖の呈示を要求する時は即時送附するの義務あるものとす。

一三、本手帖は他人に讓與又は貸與すべからず。

一四、本手帖の毀損紛失に就ては直ちに本會に通告すべし。

一五、日本山岳會は一般登山案内者として不當不德の行爲あるものに對しては適當なる手段と方法に由り其改善を強制すべし。

一六、本手帖所持者にして前記の各項に違背し又は登山案内者として不德義の行爲ありたる時或は不適當と認むる時は本手帖所持者としての待遇を停止し「山岳」誌上に公示し一般登山者の雇傭せざるを勸告す。

以上は登山案内者に對する規定なり、本手帖請求書等は總て事務所より無料にて交附すべく何等費用を要求せざるべし。

會員及び一般登山家諸君に希望す

△登山案内者としては、本手帖所持者を必ず雇傭あらん事を乞ふ。

△本手帖所持者の動靜案内者としての適否、其熟路等は御報告を乞ふ、本會此等案内人の監督上特に希望す。

△本手帖所持者を雇傭せられたる時は、其雇入れ

◎會報　登山案内者改善の一方法

の初と終りに次の各項の記入ありたし記入の事項は將來雇傭者の參考となり、案內者の改善の資となるべきものにつき忌憚なく記入を乞ふ。

雇傭者の住所姓名。雇傭の月日と所。仲介者。賃金。登山せる山名。旅行中の感想。登路其他の熟否。解雇の所と月日等。

△本手帖所持者の行爲に關しては本會は何等責任を負ふ所なしと雖も其改善の方法に就ては最大の努力を盡すべし。

△本手帖は日本山岳會公認案內人選定の前提にして且つ登山案內者改善の第一步たり只此方法は雇傭者諸君の本會の主旨と目的を賛し必ず本手帖所持者のみを雇傭せらるゝによつて完ふするを得るものに付き特に會員諸君及び一般登山者の援助を乞ふ事大なり。

△本手帖未所持者には、本事業の主旨意味を說明されたく、成るべく本事業の普及に努力されん事を乞ふ。

△本手帖の形式、交附者等は次號以降に記載すべし。

第八回大會の記

初夏の候、五月二十三日東京市赤坂溜池三會堂に開く、午前十時陳列所を開く、前回と相去る、僅かに半年にして出品物の少なかるべきを憂ひしも、意外に出品物多く、佐藤傳藏氏の噴泉塔、曾我部一紅氏の富士山に關する圖書、齋藤菊三郎氏の古文書、野呂寧氏の新高山實測圖、渡部英太郎氏のラミー製草鞋等珍奇ならざるはなし、來會者は遠く信州、或は仙臺大阪より來會せられたる會員あり、午後五時閉場、直ちに階上の講演會場を開く。

午後六時。小島幹事の開會の辭に次で左記講演あり。

哲學上より見たる山岳の印象　鹿子木員信氏

氏の專門的立脚地よりして、山岳を縱橫に論破して殘す所なく、多大の響鳴を來會者の胸中に與へたり、氏の論文は乞て以て本誌に載せたり、次で、

瑞西の旅　幹事　辻村伊助氏

同氏自寫の寫眞に由りて彩色製作せる幻燈映畫百枚に由りて、同氏の三度瑞西に旅したる有樣を語る、ローンの水に誘れて瑞西に入りしより、遂にクロッスシユレックホーンの絶崖に落下して、負傷し、インターラーケンの覇旅に病を養ひ、秋風冷かなる九月オーベルホーヘンを去り、夕陽に輝くアルペングルウンを見返へり〳〵故國にと懷しきスイスと別るゝ邊、多大の感興を與へたり。

十時半會を了る、會するもの三百、初夏の夜燦々たる星はスイスの夜を思ひて歸る。

關西大會の記

大阪と云へば先づ以て山に緣の遠い所である。大阪人と山岳と過去に於て現在に於て何れだけの交涉があるかといふことは、煙の多い樹木の少い太陽が屋根の瓦の鼠色から出て鼠色に沒する大阪の街では先づ問題にならぬと謂つて差支へなからう。否寧ろ大阪人と自然との交涉さへも疑はれるのである。その大阪の街々へ鳶色と群靑と濃綠とで美しく描出された劒岳の圖案の入つた日本山岳會關西大會のビラが吊されたのは一の强い皮肉であつた。近年日本に於ける登山熱の勃興は大阪にも少數の登山階級を生んだことは確かであつたがこの皮肉を市民は何と見るといふことは自分の興味を惹いた事實である。併し乍ら大阪市にも山岳會大會が開催さるゝやうになつたといふことは自分の最も愉快に想ふ所である。

六月に入つて急に暑くなつた。測候所の報告では例年より何度高いと報じてゐるが、機械ならぬ身には七月の末になつたやうな氣がして雪の日本アルプスが氣に懸り出したその時、大阪の諸新聞では盛に山岳に關する事柄を書き立てた。朝日、毎日の二大新聞が二頁大の日本アルプスの日曜附錄を出した外向上して來た婦人の登山趣味、西日本の高山趣味、歐洲のアルプス、山岳趣味の展覽會、山岳會陳列會などゝいふ題目が一日缺かさずに散見せられた。

これ等が大會前に於ける外部に表はれた事情であつた。そこで今少しく樂屋を覗いて見やう。加

◎會報　關西大會の記

賀、竹下、宗得、芝川、榎谷、朝輝六氏の發起で五月廿九日の夕刻から夕陽丘高等女學校にて十八人の會員の打合せ會があつた。そして大會に關して大畧次の如く萬般の打合せがあつた。

六月十九日午後六時より、近松座に於て講演會を開き、六月十八日より廿日迄府立博物場にて陳列會を開くこと。

廣告法としては大阪朝日、大阪毎日兩新聞を主とし、同日一齊に紙上に發表して、貰ふことを運動すること。又ビラ壹千枚の製作と、招待券を京阪神の會員全部各學校及市内知名の士に呈すること。

出品物は市内は六月十七日迄に各自會場へ搬入し、市外地方は加賀氏宅へ聚集すること。

事務は各自分擔し、責任を以て處理すること。

即ち、講演場係の朝輝、竹下、山田三氏、陳列場係の加賀、米谷、石川三氏、接待會食係の加賀氏、會計係の芝川氏、記錄係の榎谷、田口兩氏、記念繪葉書係の宗得氏、記念スタムプ及ビラ係の榎谷氏、通信係の竹下、朝輝兩氏、記念撮影係の宗得氏。

かくて事務は秩序的に合理的に着々と進められたのであつた。

待ちに待つた大會の日は終に來ました。風の強い雲の低い夕でした。ポツリポツリと來かけた雨もすぐ止んでしまつた。まるで高山へでも登つたやうな日和でした。それでも佐野屋橋南詰の近松座の前は開場前から觀衆で往來止めの盛況であつた。一人の會員は嬉しさうに二階の窓から寫眞機を出してこの群衆に向つてピントを合してゐました。樓上では早く來合せた廿二人の會員の會食があつたが、早や頽雪込む聽衆に好きな山岳談を交す暇もなく各會場へ向つた。會場は定刻には早や立錐の餘地も無く、下足の方で調べた所聽衆は二千人を越へて居た。殊に二階の兩側の婦人席が一杯であつた所などを見ると大阪も馬鹿にしたものではなかつた。定刻の六時に開會。開會に先つて記念繪葉書を賣りに來ました。一枚は奥穗高から見た槍ヶ岳一枚は間の岳から見た北岳、殘りの一枚は歐洲アルプスであつた。

開會の辭　　榎谷徹藏氏

滿場の拍手の下に登壇。「大會の發表をなしてからこちらへ、山岳會とは何をする會ですか、團體で山へでも登るんですか、會員になると山登りの經費が會から出るんですか、などゝ諸方から質問が來る」などの諧謔を手始めとして簡單に山岳會の來歷現況につき紹介があつた。

會の目的としては假に精神的方面、即ち科學藝術宗教娛樂、及び物質的方面に分ち得るも、要するに、山を親じ山に登ることによりて心のどん底より生の充實を追求すること。

會員は現在六百人以上。その中東京二五〇人、京阪神一〇〇人、新潟五〇人、横濱四〇人、長野二四人を擧げ、外國山岳會の盛況と比較し、山岳會なき支那印度の振はざる所以に說及ぼされた。

事業としては、刊行物として雜誌(山岳年三回)圖書(高山深谷年一回)個人著述を擧げ、會合としては、講演會と陳列會(東京で毎年春五月、京都では昨年秋、大阪では今回)晩餐會(東京年三回、大阪四十四年九月)を說明せられ、尙將來には、登路の改修、小舍の設立、案內記の刊行の域に達せざるべからざるを說き向後の活動を希望する旨結んで降壇。

山岳と人生　　志賀重昂氏

加賀正太郎氏の紹介あつて登壇。次のやうな講演があつた。

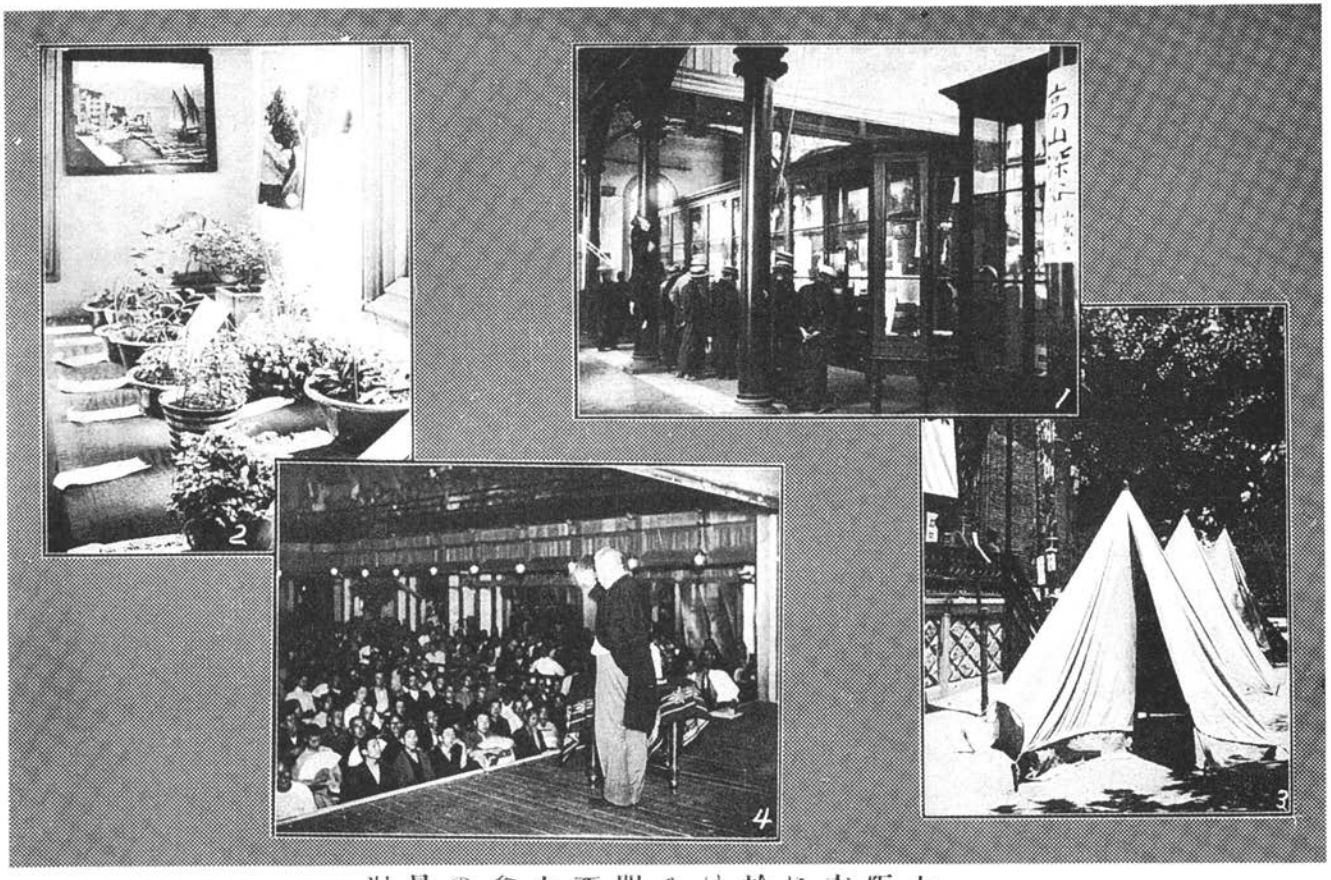
私が敢てこの演壇に登つたのは、白髮の老人で而も體重二十貫以上の者でも山に登り得るといふ實例を示さんがためであります。これは私が月明の夕佐渡の金北山へ登つて大に人に感動を與へ得たことから思ひついたのであります。その後ハワイのハレヤカラ(一萬二千尺)やロッキーのバイクスピーク(一萬四千尺)等にも登りました。ここにはバイクスピーク、デリーニュースとて日々新聞がありました。金の外目の無い米人がこの通りであります。

扨山は高いと謂ふ、高いとは地平線から位置が高いといふばかりではなく立派、高尙、高潔、氣高い等の意味を含んでゐる。英語でも高壓手段をハイ、ハンデッド、ポリシーと謂つて上の方から押へ

つけることを指し、之に反して低い平たいことは平凡を意味してゐる、若し低いことに至りてはベース、マインデッド即ち賤しい心なる語がある。支那に於ても仙人を山の人と書き人間以上の高潔なるものとして尊崇し、又俗人とて低い谷の人と書く。かくの如く東西言葉の上で一致してゐるのが面白いではないか。尤も平原は凡て文明社會が組織された交通運輸盛んに總てのもの、實行さるゝ所であるから勿論賤しいものではない、が國家は知識が平均されて強盛を致すのであるから平原の氣質と山の氣質と相平均するの要がある。山の人の氣質は高尚で獨立心に富み頑固であるのみならず、生活は極めて簡單質素儉約である。近幾で山の人の代表者は丹波人であるが、丹波人は極めて勝氣で獨立心に富んでゐる。丹波人には昔から弓射組と謂ふのがあつて維新の際弓矢を携へて宮門守護を乞へる程であつた。是が西洋で有名なる山國の瑞西人が古へから弓術に熟達して居るのと頗る似てゐる。シルレルの書いたウヰルヘルムテルの弓術譚と我國の那須野宗高の弓術譚とは何れも嘘構だが一方は湖岸に深林繁り仰いで雪の峯を見る瑞西であるし、一方は那須の高原に生ひ立つたから人は之を眞實としてゐるのだ。若しもこれが簿記帳の横にあつたとしたならば誰がまことであるとするか。又歐洲の古き山國サンマリ共和國には流石の大那翁も手を附けなかつた。同じく山國なるリヒテンスタイン公國も、アンドルラ共和國も黑山國も小國乍ら立派に獨立を維持して居る。山の人は出稼ぎする特色がある。

丹波人が京都に出で農家の作男や下婢となるのは瑞西の人が他國に行つて雇兵となり女給仕となると同一轍である。支那の山西省の人も同樣である。山は土地が狹く交通が不便であるから兼併が六ヶしい從つて大地主は少なく財產は大低平均してゐる。以上の如く並べ立てると山の人は非常に豪いやうだが一方には缺點が多い即ち平地人の如く實行的でないから自然に遲鈍である、金が無いから夫れを惜む從つて吝嗇である。選擧などの腐敗してゐるのは常に山國である。

山の人は體格が宜い是は自然の結果で知識や衛



大阪市に於ける關西大會の景況

一、陳列場内　二、陳列場に於ける高山植物　三、陳列場外の登山用テント
四、講演會場に於ける志賀重昂氏と聽衆

生思想から來たのではないから一旦流行病が入り込むと根絶することが至極困難である。又平地の人の結婚の範圍は頗る廣きに反して山の人は極めて狹く近親結婚が多いから一方に立派な人間が居るかと思ふと一方には全村殘らず癩病患者と謂ふ所もある。此の外山國の人は見識なく頑固狹量貪慾で始終コセコセして居るばかりでなく收得の豫想がなくては何事もせぬ短所がある。山と地勢が酷似して居る島の人も同樣の短所がある。日本は矢張り島であるから一般に日本人は愛國心獨立心に富む長所があると共に頑固でコセコセしてゐる等の點も遺憾なく具へてゐる。チエムバレインが日本には大哲學が起り得ぬと謂つたのは一面の眞理を道破してゐる。故に繰返して謂ふ。山岳平原兩地方の長短を平均して始めて立派な國家が出來るのである從て兩地方の交通を繁くせなければならぬ。

と絶えず滿場を哄笑させつゝ說き終られた。話の筋は別に先生の平生の主張と變らぬが、それを先生の口から直接に聞き先生の人格を背景にして味つた所に萌え出づる新綠のやうな新し味と活氣とがあつた。

日本アルプス　　高野鷹藏氏

電燈は消えた。サア幻燈講演と滿場はいきまき渡つた。先づ日本地圖と本州中部の地圖とを寫して日本アルプスの位置を示し、ウエストン氏の小照を出して日本アルプス命名の由來其他を畧說せられて、愈々日本アルプスの實景に移つた。

あゝ、槍ヶ岳が出ました。次にはマッタアホルンが出ました。

あゝ、白馬岳のクレッヴアスが映りました。次には歐洲アルプスのクレッヴアスが映りました。

かくの如く始めの數枚は主として彼我兩アルプスの比較であつた。彼の氷河と我が雪田と、彼のU字谷と我の谿谷と。

ある絶巓附近の攀登と絶巓の先登者が双手を擧げてゐる所があつた。氏は之に對して聊か心理上の說明があつたが自分等にも共鳴する所があつた。日出時の雲海には皆感歎の聲を上げた。雲霧の上騰、暴るゝ前の白馬と暴れた後の眺望と、谿

谷の上流と、下流と、籠渡し、露營、南アルプスの深林、上高地の森林、高山植物の群落、立山のカアル、燒岳の噴煙……高山深谷約五十枚終つてほつと一息した。

高野氏の解說は謂はゞ概念的であつた。自分には時に山の名谿の名が知りたいのがあつた。之に對して後の辻村氏のそれは連續的現實的であつた。勿論兩方とも幻燈畫の性質にもより、又何れも說明の一法ではあるが、又兩氏の性格の表現せられたものではなからうか。

歐洲アルプス　辻村伊助氏

シベリア、露、獨、和、英、蘇、佛を經て瑞西に入られた氏の講演は先づジュネエヴからはじまつた。今氏の講演から氏の旅跡を辿つて見ると、ジュネエヴ湖は冬の霧に眺めもなければシヤモニイへ出でモンブランを仰ぎロオンタアルを溯り瑞西を北へ斜に橫切りインタアラアケンに到りウエンゲンからユングフラウ、ケツテの西面を仰ぎラウテルブルンネンタアルを探り、再びインタアラアケンから登山鐵道でユングフラウの終點に達し計らずも冬尙登山者あるを見俄に準備を調へて同山に登臨、アイスメエアの端を傳つてメヨンヒに登り、一先づ瑞西を打切り伊、佛、西からアフリカの北部の旅行に移られたが、伊太利のコモ湖等を經て再び瑞西に引返へし、そこで落合ふた近藤氏と共にインタアラアケンにて萬般の準備をなし四千米突の高峯を片つ端より極めんものと先づ第一に有名の嶮峯グロッス、シュレック、ホルンへと向はれたのであつた。

雪に埋もれたアルプスの村、絕壁の下に眠れる雪の湖、夕映の雪の峯、ユングフラウの峯、ウエテルホルンの峯、鏡の如き湖上の白鳥、高原の牧牛……と移り移る雄大の景、見知らぬ境にたゞ見とれ入るばかりであつた。寫眞は變り變つて遂にグロッス、シュレック、ホルンにかゝつた。寫眞益々明かに說明愈々詳に、懸崖を攀ぢ氷河を橫切り、クレッヴアスとクレッヴアスとの間のアイスプリッヂを渡り傾斜急なる雪を上り遂に絕巓に達する徑路有樣を一々寫眞によつて指點せられ、我々も寫眞に見える雪上の足跡を踏んで氏に從つ

て登り行くやうに思はれた。

さて下山となつて、氏は岩の一角を省略して直接に脚下の雪を下られたのである。

『その雪を中程まで下ると下の方では更に急傾斜になつてゐる。仕方がないから向ふ側の岩を傳つて下る方が安全であらうとて斜に岩に向つて下りかけた中程で一休みした。ところが誰かがアッと叫んだ。それと同時に我々四人は雪頽れに巻き込まれた。一二回轉々して、そして強い力で杖をもぎ取られたまで覺えてゐるがその後は知らなかつた。

ふと醒めた。そして首を上げた。同時に近藤君も動き出した。直ぐに立ち上つて自分はグルユックリッヒと叫んだ。所が人夫のヘスラアが立ち上り得ずにゲブロッヘンと云ふ。足の骨を折つたのである。登る時に迂回したクレッヴアスも雪と共に通り越した。二人の人夫はそれから大聲を上げて助けを呼び出した。その愚さを說いても止めなかつた。氷の上で夜が明せないからボッボッ歩み出した』

◎會　報　關西大會の記

かくて暮れて小屋へ命からがら達して人事不省になつてゐる最中人に助けられて、湖畔の病院生活で氏の講演は終つた。かく生死の境の出來事を宛も普通の旅行談のやうな調子で說き去られる所に氏の山岳に對する態度が偲ばれる。

あゝかくて盛んな大會も終つた。開會中降つてゐた雨は既に上つてゐて、皆は雨後のリフレッシングな空氣の中を、豐富な印象と羨むべき收穫とを以て家路に着いたのである。

今この記を書了つて頬杖ついて瞑想すると、あれ雪の山が見える。薔薇色をした夕映の雪の山が見える。……あれグロッス、シュレックホルンが見える。小さい雪の斑點迄明かに見える。……かくて自分は今一度あの夜の記憶を辿つて見た。

陳列場雜觀

暑い午後博物場の陳列會を見に行つた。木蔭に辻村さんが憩んで居られた。天幕が三つ四つある。その横に福岡組と書いた大峯登山の旗が立つてゐる。陳列場に入る。澤山な人出で下足の所で

は出る入入る人がヒシ合つてゐた。

右に折れると大月氏の出品で岩鏡等の生品があつた。その傍の標本の中では長之助草が注意を惹いた。窓側の陳列棚には加賀正太郎氏の歐洲土産があつた。美しい色彩の山岳と高山植物の繪葉書を見ると未だ我印刷界の前途遠きを思はざるを得ない。そして數々の鮮明な寫眞が未見の山と雪とを照會して呉れました。マタアホルンの模型が二つあつた。名山丈に足を留めました。辻村伊助氏の出品の中には隨分と慾しいと思はれる書籍案内記類があつた。色刷になつた瑞西の地圖も行屆いたものだ。辻村、近藤兩氏負傷當時檢案のために撮られたレントケン線寫眞の印畫は人々の注意を惹いてゐた。小島烏水氏出品のロッキイ山脈鳥瞰圖、高野鷹藏氏出品のバイエルン產高山植物、山岳會出品の幻燈畫百數十枚、德本峠の穗高藥師峠、上高地森林、地藏岳、白馬岳の寫眞等皆とりどりに面白かつた。大谷光明氏出品の中央亞細亞天山最高峯博克塔、天山々脈中南路より北路に通ずる氷達坂の二つは一寸眞似の出來ぬものである。

茨木猪之吉氏の作品では立山温泉、籠川の谿、上高地、立山雄山澤の雪渓、黒部川、富士山、淺間山、千曲山脈、木曾、丸山晩霞氏作品（小島烏水氏出品）では大町附近、飛驒白川、乘鞍火口湖、高瀬川、白川村古風民家、乘鞍頂上、益田川、モンブラン、蒲田谷、藤島武二氏作（芝川又之助氏出品）のレマン湖、中村清太郎氏作御嶽頂上（今村氏出品）、鹿島槍岳頂上の鳥瞰、石崎光瑤氏作の高原新春、高山植物、御船綱手氏作品のアルプス氷河、ベスヴイアス、インターラアケンのアルプス連山、日本アルプス等、皆命題を聞いただけでも雄大な、壯嚴な、そして又なつかしい風景ならぬはなしである。榎谷氏の水彩畫は大小五十點あつた。アルプス、アンデス、ヒマラヤ等の小畫と、薄明りの山、雪の山の如き大作とを含んでゐる。今目錄が手許にないので詳細を記し難きを遺憾とする。

この外寫眞としては、長谷川如是閑氏出品の白骨、乘鞍、白川、白山の大きなのが二十枚あつた。山岳會出品の數ある書籍の中では矢張ウエストン

氏の日本アルプスが無限の權威を示してゐる。アルバイン、ジヨオナル、ラ、モンターギユ等外國山岳會雜誌が澤山あつたがそれ等に比し我山岳の立派なのに大いに氣を強くした。

登山用具は山岳會、辻村氏、渡部英太郎氏、佐藤順一氏、加賀正太郎氏、神戸徒歩會、田口虎之助、竹下英一、朝輝記太留氏等の出品に係る。ルユックザック、カンジキ、釘靴（ネイルドブーツ）登山服、帽子（近ごろアイスアックス）爲口、飯盒、湯沸し等堅牢實用を主として何等の裝飾もなき所、宛然戰爭の分捕品のやうな氣もせないではないが、之等で武裝して山岳に向ふ時の心持を想ふと武士が戰場に立つ時と同じ程度の勇ましさと雄々しさとが心に浮ぶ。

以上でざつと現在かくある山岳の大體は分つた。日本アルプスは勿論のこと、歐洲アルプスも、ヒマラヤも、アンデスも、ロツキイも、大體の見當がついた。

これからはかくありし山を見んとする。古書類では富士山のオーソリテイー會我部一紅氏の富士山に關する書類百四十點を筆頭として、齋藤菊之助、二階堂保則、石田可村、高頭仁兵衛、石川文彥、永田有翠、別所梅之助諸氏の熱心に蒐集せられた書畫類何れも盛に觀衆の足を止めてゐた。場所柄丈に、大峯、高野山、有馬等近畿地方の山岳に關係のあるものが多かつた。

小島氏出品の針の木峠登路に就てのチエムバレイン教授の書翰を最後として場を出た。まだ澤山な人が場を指してやつて來る。（田口記）

◎會報　各地の山岳會

各地の山岳會

山岳趣味の普及に從ひ、各地に山岳會の開るゝもの多く、各依囑に由り本會より出品及び講演の爲め幹事の派出したるもの左の如し。

○二高山岳會　大正四年五月八日九日仙臺第二高等學校内に陳列會及び講演會を開く司會者及び會員は、第二高等學校學生にして、此日は公開して一般人士の入場を許せり、本會よりは圖書器具を出品し幹事辻村伊助、高野鷹藏の兩名は講演の爲め

◎會報　幹事小島久太氏の渡米　會員逝去

出張せり、會するもの無慮五百名、山岳趣味普及の上よりしても益する所大、二高山岳會幹事諸君の勞を謝するに餘なし。

○慶應義塾山岳會　五月二十九日其發會として講演會を開く、本會よりは登山用具を出品し、幹事小島久太講演せり。

○京都銀行集會所にて會員今村幸男氏主催にて六月二十三日夜山岳幻燈講演開かる、關西大會の爲め下阪中の幹事高野鷹藏及び會員加賀正太郎氏幻燈講演をなせり、會するもの二百名、本會々員及び京都大學、高等學校各教授、銀行家等多大の興味を以て來會せられたり。

○東京三越に於ける「旅行に關する展覽會」に本會より登山用具、雪具、圖書、寫眞等を出品、來會者の注意を惹ける事大なり。

○山梨山岳大會　七月二十五日甲府市相生小學校に開かる、本會よりは同會よりの依囑に由り幹事梅澤親光、高野鷹藏の兩名幻燈器械携帶講演の爲め出張せり、同會は山梨縣下の諸山岳の研究及び登山趣味の涵養に勉めつゝあり、夜七時半より梅澤幹事は「山岳と科學」高野幹事は「日本アルプス概論」なる標題に由りて講演をなせり。

幹事小島久太氏の渡米

本會幹事小島久太氏は、職務上北米合衆國ロスアンゼルス市に轉住されたり、本會の爲め、本誌の爲め努力せらるゝは、從前と何等異りなし、吾人は最近氏によりて、北米の山河を紹介さるゝを樂めり。

會員逝去

△會員農學士田中健太郎氏は、病氣の爲め去る六月相州小田原に客死されたり、謹で哀悼の意を表す。

△會員大槻禎郎氏は六月十八日未明、何人とも知れざる兇刃に斃れたり、氏は短歌界に其名知られたり、本誌に掲載したる短歌及び記文は、其數日前親しく氏の令閨によりて、小島氏の元に齎した

るもの氏の絶筆たり、温厚にして、篤學他に怨恨を受くべしとも覺えず、氏の兇刃に斃れたるは、等しく其因を知るに苦む、死の前僅かに令閨を迎へて相和す、今や夫君と共に賊刃にかゝりて死す、何んすれぞ悲慘なる、吾人は運命の戯れを悲しむ、何を以て大槻氏夫妻の靈を慰めん。

△會員理學士加藤鐵之助氏公命を帶びて南洋占領地に航し、途中病を得て、船中に客死す、噫悲し。

故加藤鐵之助君

加藤君を初めて知つたのは、今から十三年の前明治四十三年の七月、地學協會で磐梯山に登山旅行を試みた時でした。私は友人と二人でしたが、年輩も專門にすべき方面も、同じ樣な向きでしたもので、直ぐ御友達になつてしまひました。此時は磐梯の頂上に上り、猫魔山に登り、檜原湖を渡つて、數日を荒涼たる荒野に送りました。加藤君は丁度高等學校に入つた年でしたか、其時分からハンマーを持つて居ました。隨分宿では騒いだものです。其後は餘り交通もありませんでしたが、其後私も赤門を潜る樣になつて、初めて地質學の教室へ行きました。あの時の加藤君が、机の上に地形圖を擴げて、標本と首引きで、地質圖を作つてる所でした。私の教室は地質學教室の上でしたから、其後はよく會ひました。此れが第二回の會遇でした、其後私等が山岳會を設立する樣になりまして、氏も亦會員となられました。氏の專攻は勿論地質で御座いますが、最近には日本アルプスの氷河問題に就ては、全く他の方々とは違つた考へを持つて居られました。別に公表される機會もありませんでしたが、私等はよく其事を氏から聞て居りました。私は加藤君とは專門も違つて居りましたし氏の議論の正否は判りませんでしたが、篤學な眞面目な學者だと思つてました。何時か折りもあらば、此の日本アルプス觀を、雜誌へ書いて頂きたいと思つて居りましたが、遂に永遠に其機も去つてしまひました。私は日本の學界の爲めにも、加藤君一家の爲めにも、亦日本の山岳界の

◎會報　故加藤鐵之助君

爲めにも、氏の前途には多大の囑望を持して居つたのです。

私が加藤君の病氣を知つたのは、五月の初め一高の旅行部の講演會に行きました時、初めて電報が來たと聞いて驚きました。どう見ても丈夫さうな加藤君が、そんな重態とは思はれませんでした。次で私は悲しむべき報知を受取りました。私は今でも、あの面長な、特徴のある加藤君の顏と、一種懷かしみのある、話し振りは、目をつぶれば見えます。私は永遠に加藤君を記憶したいと思ひます。私達のお友達として、吾が山岳會の前途あるお仲間として。

加藤君は明治十六年五月に東京市神田錦町に生れました。學校は高師附屬小學から中學校を經て、金澤の四高にそれから東京の理科大學地質學科に入られました。學校を了へてから輜重兵第一大隊に一年志願兵となつて、入營しまして大正二年一月には少尉になられました。大學を出ると間もなく高等師範の講師になられ次で大正元年には敎授となられました。

今年四月海軍御用船南海丸に搭じて、占領南洋諸島に派遣されました。途中脚氣の氣味でしたが、遂に腎臟炎となり尿毒症を併發して、トラック島海軍病院で靜養されましたが、病愈重く、遂に回復の望絕えましたので、再び南海丸に移乘して歸航の途中五月十八日船小笠原群島に達した時、病革まりて、遂に歸らぬ旅に立れました。

加藤君は地質學者としては、全く先天的でした。私はよく存じませんが、趣味の點から云ふても尋常一樣の人ではなかつたさうです。藝術の方面は勿論、繪畫、文學、劇一として深い了解を持つて居られないものはありませんでした。衣食の方にも中々垢抜けのした所があつたさうです。眞の江戶つ子として、郡會人の長所を鍾めて居られたのです。そして口數の少いくせに中々警句など、凱切なものが多く、一寸學者肌の人とは思へぬ事があつたさうです。

私は加藤君の死を悲しみ、弔ふ爲めに、記憶を喚び起して見ました。加藤君は再び相見るの機はありませんが、吾々友人の腦裏には、加藤君の姿、

聲、仕事は深く〳〵刻れて永遠に失せません、永遠に加藤君の死を悲しみます。（蝶郎）

會員登山報

△野生は本年一月一日霧島火山の韓國岳に登り當日は寒風濃霧の爲め更に眺望を得ざりしも翌二日更に東霧島に登り此日は一天快晴九州南半の天地を一眸に收めて飽くまで豪快を覺え申候九州にては最も登山容易にしてかつ登り甲斐のある山かと存候（吉岡八二郎）

△四月二日大和吉野郡高原にて

大峯山上ヶ嶽を目指して參り候、吉野子守社前にて「九州の修驗者一行三十一日に吉野より峯傳へに行きしも積雪のために洞辻茶屋までも行き得ず、學生さんなんかとてもあかん」ときめつけられ大いに憤慨して洞川に到り宿の息子を唆のかして案内とし今日本シーズンの先登者と相成候、洞辻附近は尚六尺の積雪あれど既に柔かくなりて夏の登山者如き出でたちにても根氣よく踏み占めば困難にも無之鐘掛岩に登り瞰下すれば大峯の一脈のみ雪を戴く樣に見え候、次は大臺ヶ原、山登りの一年生はまづ近きより始めんと先輩諸氏の齒牙にも掛け給はざる所より歩を進め候、雪中特に新しき道を此度發見して鐘掛岩に登りしは案内者洞川の角谷甚一の功に候（山本宣治）

△十六日　山上岳に登山仕候未だ山上の坊には人無之空家に一夜を過し空腹をかゝへて吉野に翌日皈り候目下積雪三四尺に候七月頃再擧仕る考へにて今回は中止仕候（吉野上市町にて四月十八日大北聰彦）

△四月四日　伊香保より澁川を經て赤城に登り五日鳥居峠を越へて水沼に下り申候、久戀の赤城は四尺餘りの積雪を以て小生を苦しめ申候、靴穿の小生は新坂平より大洞までに雪の中に落込み落込み三時間近くを要せし程に御座候。

濃綠色に凍れる物凄き大沼、雪の中に立つ白樺の林、冬の赤城は何とも云へぬ嚴肅なる眺めに御座候。

新坂平にて案内が道を失し、雪の上の新らしき足跡を辿りて二丁許り左の方に入り、其の誤りしを氣付きて、後戻りせしその足跡こそ彼の二青年が前日前橋より登りて舟ケ澤に迷ひ込み凍死し居りし冥途への道――とは後にて思ひ當り申候。

（四月十三日、北畠和雄）

△七月二十一日　會員河野與一君と共に上野發、二十三日、中村常太郎を案内として大澤野營、二十四日針木峠よりマヤクボの雪渓をよぢて針木岳登攀、平小舍宿泊（當時品衛門登山せず無人にて候ひき）二十五日五色原、二十六日鬼、龍王、淨土をこえて一越野營二十七日雄山大汝より別山野營、二十八日劍岳登山別山野營二十九日五百石に到りて汽車大阪に參り候、明日より小生は大峯山彌山、孔雀岳、大臺原山方面に向ふべく候、（但し吉野鐵道の一行にては無之候）

（伊藤德之助）

△五月六日　東京出發準備の爲十二日迄六日間函館に滯在同月十九日本島西南端たる内保に上陸諸般の準備を整ひ二十一日千島富

◎會　報　會員登山報

士の名ある阿登佐岳（約千二百五十米）に登山漸く測量完成六月十八日下山仕候

其二十九日間の天候は

晴五日　曇一日　霧十一日　雨七日　雪五日

最終降雪は四月三十日

目下は本島一の難山の稱ある單冠山（ヒトカップ）（約千四百米突）の測量中に御座候が山に用なき本島人の事とて誰一人登山せし者無之候先きに明治三十七年我測量部に於て三角點（一等點）撰點の際使用せし人夫は現存し居るも是早一昔を經過せる今日迄其後一回も登山せし事のなきと已に老年に達し居る上登山當時の困難に懲りたる爲めか一人として案内する者無之候。

殊に撰點（明治三十七年）當時の記事に依れる二三貫の荷物だに運搬不可能なりとあり然るに今回の測量には少くも一ヶ月間は幕營を要するを以て其間の糧食其他器械器具材料等を合せば三百貫以上も有之候へば是非別に登山路の探檢を要するを以て去る二十二日ゲヤ驛（擇捉島振別郡）を出發其日は山麓に露營二十三、二十四の兩日は暴風雨の爲空しく滯在（否穴居）二十五日は早朝出發午後二時十七分頂上に攀登茲に漸く目的を達し視通方向點檢の上直ちに下山其日は山腹に露營、翌二十六日は前夜來の强雨小止みもなく降り頻れ共携帶せし糧食は既に盡き（往復三日間の豫定にて一人前米二升副食物としては鹽鮭一尾のみ一行は四人）前日の晝食の如きは僅かに一握りの飯にて空腹を塞ぎたるのみにて其後は絶食し居る有樣故斷然意を決して出發午後二時半に丁寧驛遞（振別郡）に着せし時には空腹と疲勞と安心せしと全身濕れざる所なき爲め一行中殆んど人色のある者なかりき　探檢の結果單冠山ゲヤ驛より登山する事に決定目下移轉中に御座候。

一、當地方は未だに綿入着用

一、驛遞と申は北海道廳より補助を受け旅人宿及人馬繼立を扱ふ所に御座候。

（於千島擇捉島單冠山幕營地紫崎芳太郎）

△小生去る七月十八日夜行にて、翌十九日〇時半富山市に下車、午後七時頃芦崎寺へ着一泊、廿日佐伯平藏同國藏の二人を伴ひ、八里の途を炎熱に苦しみ立山室堂に着、二十一日午前六時頃室堂出發、別山の劍澤の乘越を越えて、劍澤に出で、午後〇時半平藏澤の出合に着、露營、本年は十數年來の大殘雪の由にて、室堂北の窪地へ降りてより劍澤迄全く雪渓の上のみを歩み、僅に乘越上にて少しばかり岩の上を歩みしのみに候、二十二日午前四時半長次郎谷を渉り、午後八時に劍ヶ岳の頂上に達し候、雪渓を終る頃より大霧到り、歸路平藏澤の降口を求めしも、路を失して別山に續く尾根の、一つ後の尾根に迷ひ入り、巉岩の中をへづること一時間半、霧の晴れ間に漸く元の尾根を發見し、平藏澤の降口に辿り着き候處、仲々黑き場所にて、雪壁を降りるか絶壁を降りるかの外無く、絶壁を選み細引繩をたよりに、幾度か休みては漸く雪渓の上に降り、午後〇時少し過に劍澤の夜營地に歸り休養致し、翌廿三日には劍澤を登り、別山に出で候處、山頂の祠の傍に天幕を見出し候、第一高等學校の諸君四名程、人夫五名をつれて、これから劍へ向はるゝ處に候、小生は別山より尾根を雄山に參り、室堂に降つて中食を了り、その足にて立山温泉へ降り、久しぶりにて樂を致し候、廿四日には ザラ峠、五色ヶ原、平小舍を經て、

針木峠寄の南澤の少し上の岩やに泊り、廿五日午後五時半大町へ着致し候、其後二日ほど赤倉温泉にて休み、二十八日夜歸京仕候。

（八月一日冠　松次郎）

△小生十九日白馬登山に北城四谷着廿日登山頂上一泊廿一日杓子岳を經て鑓ヶ岳迄を縦走歸路立壁の絶崖を下り大雪渓を出て四ツ谷に歸着、引續き廿四日中房温泉より燕岳に登り大天井岳を經て二ノ股小屋に一泊廿五日東天井常念を越へ蝶ヶ岳手前の澤より絶悪なる一ノ股に下り無事上高地に着天氣頗る良好に諸方の展望極めて可良なる幸福を得たり。

（柳　直次郎）

△豫定の如く穂高鎗の縦走を試み今更の如くその至難にして危險の多きを感じ候小生の案内人は鎗の肩の雪渓の急坂にて墜落負傷致し候。

（鹿子木員信）

△十八日東京を出で一高の黒木、岩村の兩君と共に中房から槍を經て笠岳まで縦走をやりました、笠ヶ岳はよく知らずに行つたから仲々、手強い山で窮りました、之より富士川下りをやつて歸京致します。

（甲府にて中上川小六郎）

△十五年ぶりにて第二回の登山を企て申し本日一番滊車にて東京をはなれ、一時吉田着中食、驟雨にあひ、虹をながめ、涼を趁ひながら只今七合目迄こぎつけ申し候、六合にて鹿の聲を聞きつゝ一行八人十七歳の姪が最も足弱に候此山上の夏夜小生にとりて忘れ難き一夜に御座候。

（富士山七合目石室にて　島山悌成）

△甲斐駒に登山致し候、七月三十一日六時竹屋出發、正午屏風小屋着、同所一泊、八月一日早朝頂上に登り申候、幸ひの好晴にて、四方一點の雲なく、駒より見ゆる總ての山は、殘りなく望見致され申候。あまりの晴天續きに、山中水乏しく相成頂上下の水雨天なども名のみにて一滴の水も無之、屏風小屋の主人など水に一方ならぬ苦勞を致し居り候。私の連れたる强力、切刀吾一は昨年大槻君を駒より地藏鳳凰に案内せし男にて、小屋の主人と共に同君の噂同君にとりては何よりの追悼會かと存候、最も竹屋にても、亦强力も同君の奇禍は私によつて初めて知りし事に有之候。

（高畠和雄）

△夏になれば山に行くことが、例となりて登山せざれば、どうも氣がすまず、今年も十八日に大町を出て、北アルプスを九日ばかり歩きまはり候、大町を出るときは、會員中村孝二郎氏、一高旅行部針木立山方面に向ふもの五人、及び一高の小倉、森兩氏が東澤をのぼりて、槍の方面に向はるると、それに小生の部合九人、人夫を合して二十五人の大勢にて、大混雜に御座候ひき、今年は會員諸氏のこの方面に向はるるもの頗る多く、人夫等全く山にはじめてのもの多かりしため、遂に大澤のドウ近くにて、石をふみはづして、一人の人夫は足を折り、（小倉氏の人夫）甚だ困り申し候、後でも五色ヶ原で小生の人夫一人よわつてしまい、漸く立山に參る方の人夫を讓り受けて、まに合せたる次第に御座候。

第一日大澤のドウ、第二日南澤のドウ、第三日越中澤乘越、第四日數河乘越より少し藥師に登りたる林の中、第五日太郎兵衛平、第六日上ノ岳、第七日蓮華頂上の少し手前、第八日野口五郎の頂上手前、第九日には人夫は葛の温泉にとどめ、小生のみ大町に歸り申し候。

この間、太郎兵衛平までは、中村氏と一緒にて種々御世話に相成

◎會報　登山用具一式の製作販賣

申候、こゝにて友人が有峰の方より參るを待つため、御わかれ致し候が、又歸途の滝重にて御目にかゝり、東京へは一緒に入りたる次第に候。

越中澤より數河乘越の間、數にて頗る困難致し候、大四又吉が落ちたと云はれて居る山は、四側をカラミたるが、後にて見ればやはり尾根傳ひに參りたる方、樂にはあらざるかと思はれ候。

至る處今年は、雪多く宿泊地には困難無之、且つ一度も雨に會はざりしため、いつもになき樂な旅を致し候。

平の籠の渡しは、今年針金が切れて無之、腰までつかりて徒渉致し候、小生等の參りたるときは、既に水も引きてあまり困難にては無之かりしも、五六日前までは隨分こまりたる由、玉作は申し居り候、近年は、かなりに針木峠を越ゆる人あることなれば、三十圓ばかりの針金代を、絲故あるもの寄附でゝも集めて、籠渡しをかけては如何に御座候や、人夫の手間などは、大町の人夫が寄附致す由、申し居り候、大町對山舘の百瀨慶太郎氏もさうなれば、好都合なりと申し居られ候。

小生の案内を致したるは、吉澤永治と申すものにて、山にはあまり經驗なき由なれど、親切によくつとめくれ大いに愉快に候ひき、も少し經驗をつみて生意氣になることなくば、頁い人夫となることゝ存じ候、五色から蓮華は二回目にて、蓮華より烏帽子へは、今回がはじめての樣申し居り候。

中村氏よりの御話によれば、今年は人夫に手帖を渡しかたがた寫眞を撮らるゝために、信州方面に御旅行なさるやにうけたまはり候、定めし良き寫眞を山岳其他にて拜見致すに近きことゝ今よりたのしみに致し居り候。

不順の氣候切に御自愛願上候

（巽作新六）

登山用具一式の製作販賣

登山用具の製作販賣店なきは、甚だ不便なる事にして、只僅かに外國品を輸入して、用ゐつゝありしも、價の不廉と販賣者のなきは、不便至極にして、本會は夙に此點に留意し、最近運動器具の製作に名ある、東京市本鄉區本鄉五丁目美滿津商店をして、本會監督指揮の下に、登山用具の總てを、製作販賣せしむるに決せり、製作品の內、高級なるものは、本會に於て個々檢査の上、檢査票を附して發賣すべく、目下着々研究中に屬せり。

其第一着手として、アイスアックス、及びリュックサックを發賣せり、何れも瑞西製最良のものに就て研究し、日本人に適する形式となせり、カンジキ、天幕其他追々と研究製作の上、或程度迄の確信を得たる後、發賣すべく、本會は粗製濫造は斷じて許さゝるなり。

其等登山用具の形式、材料は、歐洲にて行るゝものの

に準じ、日本的に淳化せしめんと研究しつゝあり、此等登山用具に就ての事故、又は意見は、本會に報告を得たく、本會は直ちに研究調査の上、製作上の改良を命ずべし、本會の素意は、此等登山用具の粗雑なるを恐れ、其危險なるを憂ひて、一々繁雑なる檢査の方法を取るべきにて、會員及び一般登山家の爲め便利と安全を得んが爲めにして、他意あるにあらず。

幸にして、本會の主旨を諒として、登山用具の改良新案又は新規必要品等に就ては、直接本會に報道得たく本會は此等諸君の滿足を得るに勉むべし。

會員諸君の爲め登山用具の割引

前項記載の通り、本會監督の下に、登山用具一式を美滿津商店にて製作發賣しつゝあり、美滿津商店は右に關して本會會員に限り定價より一割引にて提供すべき由なり、右は本會より會員たる事を證明せられたる時に限るものにして、會員諸君は、往復はがきにて事務所宛申込まるれば直ちに、右割引證返送すべし。

會員濱名、金子兩氏アイスアックスを頒んとす

會員濱名增雄、金子幾久兩氏は、氏の業務の餘暇、會員諸君の爲めアイスアックスを製作して同志に頒んとす、氏等は機械工學專攻の士にして、アイスアックス製作上に專門的知識を傾注して、材料の精選、加工の程度等總て工學的立場よりして製作せんとす、本會は氏等の依囑に依り實際的方面の檢査に從ひ、益々改良完璧に近からしめんとしつゝあり、會員にして、且つ專門的位置よりして製作せらるゝものなれば、品質の良好なるは言を俟ず、同志の士の使用を待つや切なり。

會員名簿配布

例年の如く、本號にも附錄として會員名簿添附、會員にのみ頒布せり、右名簿の異動誤脫は御報知あらん事を希望す。

◎會報　會員諸君の爲め登山用具の割引　會員濱名、金子兩氏アイスアックスを頒んとす　會員名簿配布

校正者　高野憑藏

山岳第九年總目錄（大正三年）

表紙　第一號　平福百穗氏圖案
　　第二號　茨木猪之吉氏圖案
　　第三號　K. S. 生氏圖案

卷頭畵　東京愛宕塔上より望める大井川奥山　木暮理太郎　第一號
　　上高地の夏　辻村伊助　第二號
　　立山谿谷の新雪　石崎光瑤　第三號

タイトルページ　茨木猪之吉　第一、二、三號

挿畵

○甲州烏帽子岳の頂上より南を望む○北岳中腹より仙丈岳を望む○荒川岳より見たる朝の小河内岳○惡澤岳と魚無河内岳の鞍部より北方を望む○小滝川の谿谷より見たる荒川岳○曙光を受けし劍岳と瀧倉岳○小黑部の雪渓及絶崖○小黑部の終點「劍澤の大窓」○立山阿彌陀ヶ原○立山の室堂と別山○淨土山より劍岳を望む○小黑部谷ブナ倉落合の飛瀑○劍岳北方の一角に於ける一行○劍澤露營地　第一號

○梓山の旅舍白木屋○多摩川の上流○梓山村の遠望○三峯山登龍橋○浦上川○冬の嘉門治小屋○溫泉塲附近より穗高山を望む○德本峠下牛番小屋○溫泉塲と燒岳○雪の金剛山表訓寺○長安寺○梅花藻○山梨縣東八代郡金川源より見たる白峯山脈○千社札の數々　第二號

○英國山岳會に關する刷物○暴るゝ前（白馬岳より鑓ヶ岳杓子岳を望む）○日本山岳會開四大會々塲○第七回大會々塲○双六谷高波橋　第三號

地圖

地圖飛驒國雙六谷流域概念圖　第三號

◎第九年總目錄

本欄

	號	頁	同上頁
三峯昇り　梅澤菩甕	一	一	一
黑部方面より劍岳を經て立山に至る記　吉澤庄作	一	九三	九三
鍬岳縱走記　鵜殿正雄	一	一一五	一一五
山に對して　別所梅之助	一	一二二	一二二
耶馬溪を跋渉して裏道より彦山に登る　古家實三	一	一三七	一三七
白馬岳（蓮華溫泉方面）　市村塘	一	一四五	一四五
山地に於けるオートクローム撮影に就て　加藤精一	一	一五三	一五三
秩父の奥山　木暮理太郎	二	一	二三五
豐後の双子火山及び內海の風光　石田義雄	二	三八	二七二
雪の日本アルプス越久　八木是峯	二	四六	二八〇
雪の金剛山　橋本欽四郎	二	五八	二九二
櫟峠山　大平晟	二	六六	三〇〇
妙高の秋色　小野壎進次郎	二	七六	三一〇
鳳凰山彙縱走記　小佐野迢々	二	八六	三二〇
上高地風景保護論　小島烏水	二	九〇	二三四
山吹日記　關口泰	二	九五	三二九
登山者の地質學素養　神保小虎	二	一〇	三四五
秋晴から初冬へ　野尻抱影	三	一	四四七
奈良田のヒロ河內より白峯三山に登る　冠松次郎	三	一三	四五九
野呂川の山と谷　小島烏水	三	三〇	四七六
甲信武國境縱斷　小佐野迢々	三	七八	五二四
雙六谷探檢記　中野善太郎	三	八八	五三四
鍵ヶ岳大黑縱走記　吉澤庄作	三	一〇五	五五一
晩秋の立山　石崎光瑤	三	一二〇	五六六

◎第九年總目錄

飛驒雙六谷　小島烏水　三附錄　一九　六二五

雜錄

○鋸岳につきて（鵜殿）○雪中富士登山（角倉邦彦）○甲府平原地日本北アルプス觀望（小佐野迢々）○「東京より見ゆる山」の補遺（木暮）○再び東京から見える山に就き（中村）机上談山（江豚生吹浪生）○「冬の八ヶ岳」に就て（辻本）○青木湯の移轉（辻本）○雪艇富士登山報告（金井勝三郎）○圖書批評「臺灣山岳景觀」を觀る（蝶郎）　第一號

○佛國山岳會を訪ふ（巴里で辻村伊助）○「白峯三山に就いて」の異議を讀む（高頭式）○間の岳に現出する農鳥に就て（小島）○登山記念の千社札（小島）○八ヶ岳森林の大伐採（小島）○甲斐口碑と傳說（小島）○尾根といふ話（小島）○富士山の豆蒔小僧（小島）○山梨山岳會講演會（青柳白嶺）○茅ヶ岳登山（小佐野迢々）○甲府平原地より見たる槍、常念、後立山の三山脈（小佐野迢々）○登山法私見（山本德三郎）○飛驒高山の年中行事（奥田正雄）○本誌に用ゐたる紙に就て（蝶郎）　第二號

○フレッシュフィールド氏の日本山岳旅行記（一）（小島）○高瀨谷の鐵砲流し（十月十二日百瀨愼太郎）○「甲信武國境縱斷」を讀む（木暮理太郎）○山岳のクラ及びチ子の語原に就て（烏水生）○大井川上流の流量（K生）○「飛驒遺乘合府」を讀む（小島）○本號挿圖「立山谿谷の新雪」解說（石崎光瑤）　第三號

雜報

○淺間と燒岳○嚴寒の御岳登山○蓮華岳の鳴動○河野氏の新植物發見○金剛山視察記　第一號

○諸高山の融雪○妙高山大崩壞○鬱科山の祇園祭○御岳初登山の外人○御岳山開き○淺間記　第二號

○山岳會展覽會○夜の山岳會○各山雪降る○駒ヶ岳道路視察○赤石登山　第三號

會報

○第七回大會の延期○中村清太郎氏の繪畫展覽會○第七回大會開催に就て○會員諸君に乞○會員登山報○希望○會員名簿○新入會者○退會　第一號

第七回大會期日の確定○關西の山岳講演及び陳列會○英國山岳會六月例會○英國山岳會に於ける本會員辻村、近藤二氏招待晩餐會○英國山岳會に於ける本會員近藤氏の講演○飛驒高山の山岳講演會○會員登山報○會員諸君に○新入會員○圖版說明　第二號

○本會幹事の改選○辻村近藤兩氏遭難に就て會員諸君に謝す○會員辻村近藤兩氏の歐洲アルプスに於ける遭難に就て○會員小林浪三郎氏の卒去○第七回大會の記○第七回大會出品目錄○關西大會の記○會員登山報○三高山岳會の近況○會員諸君に○本誌發行の遲れたる言ひわけ○新入會員○退會者○寄贈及交換書目　第三號

附錄

○會員名簿　第一號　別冊

○日本山名錄初稿（三）（四）　第一號　第二號



大正四年九月七日印刷
大正四年九月十日發行

著作權所有

定價金壹圓

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　橫濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

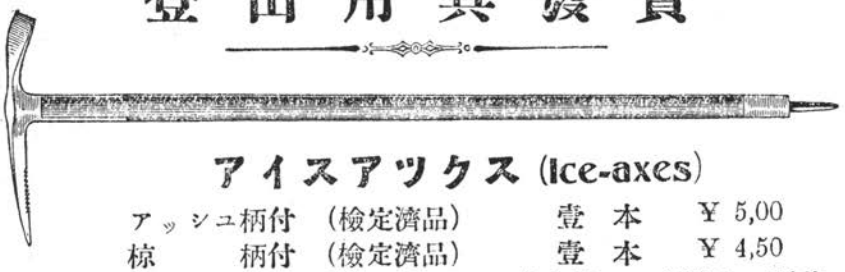
印刷所　橫濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　橫濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話特長百七十一番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

日本山岳會檢定品

登山用具發賣

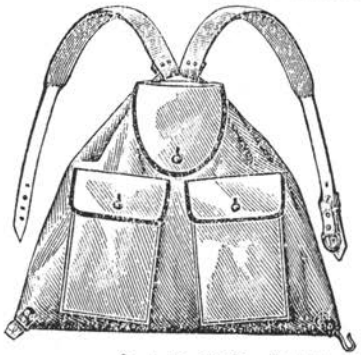


アイスアックス (Ice-axes)

アッシュ柄付	(檢定濟品)	壹本	¥ 5,00
椋　柄付	(檢定濟品)	壹本	¥ 4,50

柄は總て精選せる木材を用ゐ、何れも亞麻仁油にて煮沸し、強靱ならしめたり、長さは御好み次第數種あり。

同用 頭部覆革	壹組	¥ ,50
同用 提ゲ紐	壹本	¥ ,25



リュックサック (Rucksack)

特　製　(檢定濟品) 大、中、小
¥ 5,00—7,00

並　製　大、中、小、號外
¥ 2,50—5,00

何れも防水布製にして特に日本人に適する樣製作せり。



金カンジキ (日本山岳會考案)

雪渓の昇降には最も必要なるものにして日本山岳會の新しき考案に係り、詳細なる事項は「山岳」十年壹號にあり。　一足　¥ 2,25

今般日本山岳會の指揮監督の下に各種登山用具を製作致し候 第一着手として上記の品發賣仕候尙ほ特に日本山岳會々員諸君に限り定價より一割引にて提供致すべく候 (會員證明書御添付を得たく、事務所にて御渡し相成る可く候)

登山用具、スキー用具、運動用具製造元

美滿津商店

東京市本鄕區本鄕五丁目 (大學赤門前)

電話 下谷 八四五　振替口座東京七六〇